
神奇世界のシンフォニア

上川 勲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神奇世界のシンフォニア

【Nコード】

N7282H

【作者名】

上川 勲

【あらすじ】

魔術師の家系に生まれた真道翼は、魔力の源たる存在ともいえる『ソーサリー・クリスタル』を集めていた。だが少年は気づいていなかった。自身が魔の水晶に導かれるように、混沌とした世界に足を踏み入れていこうとしていることに。少年はその果てに何を望み、そして得るのか……。——戦う者の想いが交差するバトルファンタジーノベル。 9月30日、水曜日更新、第一部完結しました。

プロローグ

時刻は午後十一時。

空は暗黒。そこに恒星の輝きが散りばめられていた。

月は淡い白色を帯びており、月下には町が照らされていた。中心街はネオンの明かりが眩しく、空の儚い輝きなど完全に無視している。

中心街から東には住宅地が広がっていた。時刻が時刻ということもあってか、民家の明かりはまばらで、月明かりと点々と設置されている電灯が行き交う人がいない道路を照らしていた。

その住宅地の中に、子供たちの遊び場として造られた公園がある。名は、まらいこうえん魔来公園。

広いグラウンドにブランコ、滑り台、鉄棒といった、どここの公園にでもありそうな遊具は一通り揃えられており、入り口近くには冷水機、公園の周りは木々が植えられて、日差しが強いときにはそこで休憩することが出来るようになっていた。

しかし、普段は公園を包んでいるであろう和気横溢わきあふとした空気はそこにはない。時間が時間だという理由もあるのだろうが、近づくだけで肌をピリつかせる鋭さを持った空気が、そこを支配していた。まるで、そこだけ周辺の空間とは遮断されているかのように。

それを決定付けるかのように、公園を囲むように半透明の薄紫色のドーム状の外壁が出現していた。だが、ドームの外からはそれを把握することはできず、内部からしかその外壁を知ることができないようになっていた。

その中には今、影が三つある。

ひとりは少年。

名を、まどうつば真道翼という。

夜闇のような黒の髪、男とも女とも見て取れるような中性的な容姿。格好はラフで、その腰には鞘に収まった剣が携帯されていた。

その少年の隣にいるのは少女だ。

腰まで伸ばされた紅味を帯びた黒髪をリボンひとつで纏められている。少女は白い小袖に緋袴を履いた、巫女装束の身なりをしていた。

その片手には少女の身の丈ほどのあるかと思われる弓が握られており、少女の瞳は眼前のモノに向けられていた。

そして、少年と少女に対峙するように向かい側にいるのは漆黒の物体だ。

形状は狼のものが、狼にしては大きすぎる。熊より一回りほど大きな狼をしたモノだった。まるで影を凝固してつくられたかのように、暗黒色をしている。

目と思われる部分だけ血のような緋色に染まっており、それは刃物のように鋭い光をギラつかせ、グルルル……と低く唸り、眼前の人間二人を見据えていた。

刹那、漆黒のモノが動いた。

野獣の咆哮とともに、繰り出されるのは突進。弾丸の如き速さだ。しかし、少年と少女はそれを見切り、左右に散ることで身をかわした。

「緋睡^{ひすい}ッ！」

翼が叫ぶと、緋睡と呼ばれた少女はひとつ返事ではい、と答える。緋睡は弓を構え、片手を虚空に掲げる。するとそこに光が収束し、やがてそれが矢の形状になった。

魔力と呼ばれる、森羅万象の力を利用したものだ。それを自身で構成、構築できる術を扱う者は限られており、魔術師と呼ばれる人たちが扱う権利を有している。

そんな彼女の眼光は凜とした輝きを帯びていた。その視線の先には突進を失敗し、大きくスライディングした漆黒のモノが存在している。

それに向かつて緋睡は、召喚した矢を狙撃した。

それは閃光。一筋の光のような速さで漆黒の狼の、脇腹と思われる場所を穿った。

直後、響くのは苦悶の咆哮。

大気を低く震わす叫び声を上げ、漆黒の狼は緋睡へとその紅い瞳を向ける。

瞳を帯びるのは殺気。

貫かれた場所からは血は流出せず、代わりにそこから向こう側の景色が見ることができるようになっていた。

苦痛をお前にも体感させてやろう。そんな言葉が、その漆黒の狼は瞳に宿らせていた。

しかし緋睡は臆することはない。かかってくるならかかってこい、とばかりの凜然としたさまを崩さない。

やがて狼は、そんな尻込みしない少女に飛び掛ろうとする……が、それは阻止された。

「はああああああ——！！——」

気合の咆哮とともに狼に繰り出されたのは、剣での一閃。

それはまさに閃光の如き速さ。その速さをもって翼は狼の手足を胴体から切断した。

直後、喉がねじ切れんばかりに叫喚し、漆黒の狼は地面に転がる。手足をすべて落とされた様はさしずめダルマである。

四肢を失い、仰向けになってもがき苦しむ黒狼。

その喉下に剣先を突き立てようと、翼は跳躍する。

重力加速をつけ、確実に喉に突き立てようとする……、

「——えッ!？」

が、それは叶わなかった。

黒狼の四肢が、急激な速度で再生していた。

バカな、と翼は思う。おそらく緋睡も思っていることだろう。

再生の速度は一瞬のように感じられるほどに速く、やがて完治した。

黒狼の紅くギラついた瞳は空にいる少年の姿を捉え、二足で直立する。さしずめ人狼、といったところだろうか。

人狼は片手で翼の剣を制止させた。その手には、先ほどまではなかった爪と思われる黒く鋭利なものによって。

「くッ——！」

翼はとっさに引き抜こうとする……が、抜けない。爪が歯噛み合っており、下手に抜こうとすると刀身がへし折れてしまう危険があった。

力は一人前つてところか、と翼は内心で人狼に毒づく。

やむを得ず、翼は剣を一度放置しようと柄から手を放そうとする……が、寸前にそこから強引に弾き飛ばされた。黒狼のなぎ払いを腹に受けたためだ。

骨が軋み、身体の中の空気が強引に外へと吐き出される。翼の身体は半ば地面に叩きつけられるように飛ばされ、地面を転がった。反撃を予測していなかったため、受身もろくに取れずに、衝撃をまともに受けることになった翼。苦悶の叫び声も上げる暇もなく、翼は身をくの字に曲げ、そのまま動かなくなる。気を失ったのだ。

「よくもッ——！」

兄が倒れたのを見、緋睡はとつさに矢を発射した。
三連撃。空気を穿つ音が連続で空気を響かせる。

しかしそれらは、敵のなぎ払いひとつですべて捌かれる結果となった。再生し、強くなっていることは一目瞭然だ。痛い目を遭わされた憤怒からきたものであろう。

人狼が迫ってくる。

動きは四足で走っていたときよりも遅い。だが、歩幅が広いので結果的に人並以上には速くなっている。

加速をつけつつ、人狼は拳を眼下にいる少女に叩きつけた。

緋睡はとつさに横に逸れる……が、さらに次の攻撃が来る。

振り下ろした拳をそのまま横に払ったのだ。

紙一重の避け方だったため、二撃目を避けることができない。

そう判断した緋睡は、とつさに袖から紙切れを取り出す。——札だ。

その札には『護』と書かれており、それを攻撃の軌道上に展開した。

直後、発生するのは防壁。ガラスのような透明感をもった、敵から身を守るための壁だ。

人狼の拳が札に衝突した。

瞬間、目を凝らさないと見えなかった半透明の障壁が、轟音とともにはつきりと姿を現した。干渉された部分を中心に、虹色が波紋として広がる。

障壁を挟んだ側から、緋睡は召喚した矢を弓に携え、弦を限界まで引く。

鋭利な矢尻を人狼の額に的を絞り……矢をぶっ放した。瞬刻、緋睡は障壁を解除し、その場を飛び退く。

結果、人狼の拳は地面を叩き、緋睡の放った矢は彼の額を穿った。衝撃で人狼の頭部は吹き飛び、夜空の宙を高く舞う。満月のような……というには、あまりにも血生臭い。

頭を失った巨体は、拳を地面にめり込ませながら砂上の楼閣のようにその場に崩れ落ちた。あいかわらず傷つけられた断面から、血の類が流れ出てくる気配はない。

吹き飛ばされた頭は、地面を転がった後、溶けていこうとしていた。氷が水となり、干乾びた大地に滲み込む……そんな形容が正しい。溶け出した頭部は、そのままその場から退場した。

「終わったのでしょうか……」

誰に言うこともなく口にする緋睡。しかし、その期待は脆くも崩れ去った。

首なしの巨体が拳を地面から抜き、むっくりと起き上がったのだ。

「——ッ!？」

とっさに巨体から離れようとするが、すでに遅い。巨人の手が起き上がりついでに、緋睡の両腕もろとも胴体を引っ掴んだのだ。その拍子に、緋睡は己の得物を落としてしまう。

やがて仁王立ちで足場を固めた後、地面に溶けたはずの頭部が首の断面から生えてきた。

完全復活。

駄目か、と緋睡は辛酸を嘗めたような表情をする。斃すにはやはり、相手の急所を衝いたほうが確実のようだ。

緋睡は人狼の左胸を凝視する。そこからはわずかに白光が生じていた。そこに人狼の致命所があるのだ。

矢で射れば一発で終わる、ということが緋睡にはわかっているが、生憎と弓は手元になかった。袖の中に札が忍ばせてあるが、剛力で握られているため、身動きが全く取れない。

攻撃の術を一切奪われ、緋睡は人狼に敵意の視線を向ける程度しかできなかった。

そんな少女を嘲笑っているように、グルルと喉を鳴らす漆黒の人狼。そのまま獣人は、少女を握っている手に万力を込める。

ミシリと全身の骨が軋むのを感じ、緋睡は苦痛に顔を顰めた。殺すなら一思いにやってほしい、と思う。じわじわと、骨の髄まで痛めつけながら殺すのは、性根が腐っているやつのことだ。反撃する余地をすべて失っている緋睡には、思うだけで何もできず、死を覚悟するしかなかった。

だが次の瞬間、ヒュツと虚空を鋭く断する音がしたかと思うと、緋睡は自分の身体が落ちていく感覚を味わった。

見れば、自分を握っている巨手が、人狼の肩から切断されていることが確認できた。

いったい誰が、と思考する必要もない。
翼だ。

翼が目を覚まし、真っ先に見た光景は、自分の妹が握りつぶされそうになっているところだ。

それを見て、翼はほとんど脊髄反射的に行動を起こしていた。

その行動とはすなわち、緋睡を人狼の手から解放させることだ。

そのために翼は、肩から敵の腕を斬り落とした。

幸いというべきか、敵は緋睡にのみ意識がいていたために、難なくこなすことができた。

ドスンと緋睡が尻もちをつき、力を無くした手から抜け出し、軽く尻を擦った。

次に翼は、川の水が流れるような動作で剣の切っ先を人狼の左胸目掛けて放った。

肉体と先端に魔力を宿らせることで、身体能力の向上および破壊

力の増大をし、

「はああああああ——！！！」

気合いに満ちた声とともに、翼は急所を刺し穿った。

剣先に押されて出てきたのか、人狼の身体から丸い透明の結晶が転がり落ちた。

直後、人狼は絶叫を轟かせた。

今までの苦痛の叫びとは比にならない、断末魔。

人狼の命として機能していた結晶が肉体から出たためだ。人間で例えるのなら、心臓を抜かれたのと同じである。

それを亡失したため、人狼の身体は散り様として、アイスのように溶けていき始めた。

終わった、と安堵の気持ちで二人を満たしていく。

しばらく敵の最期を眺めていた翼。やがてその姿が雲散霧消したことを確認すると、周辺に張っていたドーム状の障壁の解除を始めた。

かくぜつ せかい
隔絶世界——通称『ぜっかい絶界』と呼ばれる、任意の周囲の通常空間を現実から完全に隔離する術を、先ほどまでこの少年は使用していたのだ。

それを張る理由は、先ほどのような常人離れした出来事を、他人に見せないようにするためである。

その際のとばっちりとして、建築物等が絶界内で破壊されたとしても、現実空間に影響を与えることがない。ゆえに、大暴れしても証拠隠滅が可能なので、翼たちのような人間は戦う前に必ずといっていいほど使用する。ただし、その中で戦っていた人たちの傷は、残ったままであるため、万が一、絶界内で人が死ぬようなことがあれば、二度と生き返ることはない。

やがて翼は、公園から絶界を完全に切り除いたとき、緋睡が話しかけてきた。

「兄上。助けてもらったことには感謝しますが、復活が遅すぎます。実の妹が苦しむ前に目を覚ましてください」

開口一番の妹の言葉。

無茶なことを注文するなあ、と翼は思う。気を失っていたのだから、その間、現実がどうなっているのなんて知ることができるはずがないというのに。

「それと、わたくしが落下しているときに受け止めてくだされば、直良なおしだったんですけど。もう少し気を使ってください」

「……おまえ、それが助けてくれた兄に対する言葉か？」

「初めに申しましたでしょう？　ありがたい、と」

「その後に逆説が入ってたから、全然感謝の言葉とは思えなかったよ、僕は」

「贅沢ですね、兄上は」

やれやれ、といった面持ちで言った後すうつと深呼吸し、

「ありがとうございます兄上感謝しますそれはもうものすごく」

一息で、棒読みで、感情を込めることなく緋睡は謝礼を述べた。これではないほうがずっとましである。

「……もついいよ。期待した僕が馬鹿だった」

普通に謝礼するということができないのだろうか、と翼は妹に内心で毒を吐いた。ついでに腸はらわたがグツグツと煮えかえってくる。

落ち着け僕……、仲間を助けるのは当然じゃないか。その当然のことを僕はただで、当然である以上、感謝されないという事態

があっても不思議ではないじゃないか。

そう翼は自己を納得させようとする……が、

「……利己心とは、哀れですね」

緋睡が余計なひと言を呟いたために、翼は臨界点を突破した。

「おまえなあ……もう少しその無愛想を直したらどうだ？」

「兄上こそ、おとなげ大人気ないことに激昂しないほうがよろしいかと」

鉄仮面の無表情顔で言われ、翼は怒りが三割増する。

確かに緋睡の言うとおりなのだが、流れを考えるとどうにも納得できないところがあるというものだ。

「この無愛想女！」

「女男」

「鉄仮面！」

「やかん男」

「……やかん？」

謎の単語が現れ、翼はそれを反芻はんすうしてしまった。

「熱くなれば抗うことなく沸騰しますから」

つまり感情的、とでも言いたいのだろう。例えばうまいのかどうかわからない。

「……誰がいったいそうさせていると思っているのさ……」
「あなたです」

と、翼を指差す緋睡。ここまで来るともはや怒る気も無くなるというもので、はぁ、とため息を漏らして、話を打ち切ることにした。

「ため息とは……兄上も苦勞人ですね」

本気で言っているのかこの野郎、と思わずにはいられない翼。だがその反面、もういいや、と割り切っていたので、緋睡に怒号を浴びせるのは止め、お目当ての物を探し始める。

翼が探しているのは、あの白くて丸い結晶だ。それを集めることを翼と緋睡は目的としているのだが……、

「兄上、見つかりましたか？」

冷水機に軽くもたれかかって、緋睡は抑揚のない口調で訊く。

「だったらおまえも探してよ。たく……」

愚痴を零しながらも、翼は結晶を探し続ける。

だが、どこを探しても見つからない。転がっているであろう付近を探しても、それと思われるものが見つからないのだ。

おかしいなあ、と翼が首を傾げたとき、

「はぁ——はっはっはっはっ！！」

夜の静寂を突き破らんとする、盛大な高笑いが響き渡った。その声は女性のものだ。

「この高笑いは……」

心当たりがあるのか、翼の顔付きがゲツとでも言いたそうなもの

に変化する。緋睡も高笑いを聞き、実に不快だとばかりに眉を潜めた。

翼と緋睡は目を合わせた後、声を頼りにその主へと視線をやると、その人物は公園に取り付けられている街灯の上に佇んでいた。

そこにいたのはひとりの少女だ。腰まで伸ばした黒髪を二つに分かれており、凜とした眉と瞳、端正な顔立ちをしている。体つきも出るところは出、引き締まるべきところは引き締まるといったプロポーションもとれており、翼たちと比べると、年上のような雰囲気醸し出していた。

黒髪の少女の背には長い棒のようなものが担がれているが、白い布で覆われているため、それが何なのかははっきりと判別できない。少女の手には翼が探していた例の水晶が握られていた。

「せ……先輩！」

「天真！ どういうつもりですか！」

翼はどうしているのさ、とばかりに驚いて見せ、緋睡は目的の物を横取りされてたいそう立腹の面持ちだった。

緋睡の怒髪天衝かんばかりの問いに、黒髪の少女——神藤天真しんどう てんまは意地悪に口元を綻ほころばせた。渡す気は毛頭ないようだ。

「先輩、いつからいたんですか？」

一応、翼は訊いてみる。

「そうだな……。だいたい、我が親愛なる後輩、真道翼がバケモノに止めを刺すところからいたぞ。ちなみにこれは、翼と巫女が言い争っているときに頂戴したものだ」

これ、と言って天真は水晶を持った手を掲げ、それを振ってみせ

る。とことん馬鹿にされ、翼たちは憤りがわき立ってくるのを感じていた。

「それではさらばだ！ 我が親愛なる後輩プラス巫女よ！」

はあ—— はっはっはっはっはっ！ と最後に盛大な悪役高笑いをしながら、天真はその場から悠然と立ち去った。二人の怒りなど気にした様子もないまま。

住宅の屋根の上をテンポよく跳びながら逃げる背に向かって、返してくれ、と声を飛ばしたところで、駄目だ、という返事がやってくることは、翼は今までの天真との付き合いでわかっていた。天真は『おまえの物はおれの物。おれの物もおれの物』の精神の持ち主なため、一度奪略されたら二度と戻ってこないことは確定事項だった。

翼は落胆する。散々苦勞した揚句、第三者に出し抜かれるとは…… つめが甘いと言わざるを得ない。

天真の姿はもうなかった。逃げ足が恐ろしく尊敬してしまうほどに速い。

先輩のバカヤロー！ と叫びたかったが、現在の時刻は深夜の0時を回ろうとしている。叫べば迷惑になること間違いない。ただでさえ、先ほどの悪役高笑いで周辺に住んでいる人々は迷惑がっている上に、ムカツ腹を立てているはずだ。現にいくつかの民家から、先ほどまでなかったはずの明かりが、カーテン越しにポツポツと漏れていた。

「緋睡、帰ろうか」

人間、時には諦めが肝心。

そう思った翼は、緋睡に帰宅を促すが、妹の表情は曇っていた。どうやら根に持ったらしい。

この様子じゃ動かない、と悟った翼は、緋睡の首根っこを掴んで、ずるずると引きずりながら帰路に着くことにした。

第1章 - 1 闇夜の襲撃者

カーテンの隙間から、清々しい朝の光が差し込み、それが眠っている翼の顔に当たっていた。

そんな刺激もあり、少年は重たい瞼を開かせた。霧がかつた意識を覚醒させようとするものの、寝不足なのか、翼は大あくびをひとつする。

日付は四月二日、時刻は六時半を回っている。翼の年齢は十六歳、高校二年、そして平日ということもあり今日は学校がある。

翼としては二度寝したい気分だったが、すれば遅刻決定なので、しぶしぶと布団の中からいもむしのように這い出ることにした。

住宅街から東に向かったところに山があるのだが、そこに翼の自宅はある。

大小でいうのなら、真道宅は誰に聞いても満場一致で大のほうを選ぶだろう。それほどまでに大きい……というか広いのだ。

家を囲う壁は人の背丈よりも高く、二メートルほどあり、よじ登ろうとすることを躊躇ってしまうほどの無言の威圧感があった。

それに見合うだけの大きな門からは、家は見えず、ただ鬱蒼とした緑豊かな木々が茂っており、初めて見た人は、本当に人が住んでいるのか、とすら思わせてしまうことだろう。

玄関から家まで続いているのは獣道。それに従って進んでいくと、真道宅を拝見することができる。

真道宅は、一言で言えば古風な家だ。

二階はなく、長い棟が連なっており、それらを縁側で行き来する。

ちょっとしたアパートになりそうなほどに、部屋数もあり、大半の部屋は手付かずの状態だ。

さらに池付きの中庭があり、広大な裏庭があるのだが、裏庭は全く手入れされていない。広さのためであろうか、手入れされているのは主な住み場である民家とその周辺のみだ。

翼の部屋と、家族の団欒場所である居間とはそれぞれ棟の端と端に位置しており、行き来するだけで苦労する。

おはよう、と朝の挨拶をしながら翼は居間の引き戸をガラガラと開けると、

「あらあゝ、ツバサちゃん。おはようございます」

のんびりとした女性の挨拶が返ってきた。

緋色がかった黒髪を腰まで自然に下ろし、優しげな母性溢れる雰
囲気を漂わせている女性の名は、真道雅。まどうみやび翼の母親である。

二十歳です、といえは十分に通じそうなほどに若さを保っており、翼も母親の年齢がはつきりとわからないことがある。というのも、雅が歳を訊く度にコロコロと変えるためである。見た目でわからない以上、本人に訊くしかないのだが、これでは意味がないというものだった。

「母さん。そういえば歳いくつなの？」

「ピッチピチの二十歳よ」

これである。実際にそれで通じるかもしれないが、翼の歳を考えるとあり得ない年齢である。真道家の不思議のひとつであった。

父親は知っているのだろうが、尋ねても母親と同様に誤魔化されて終わりになっている。どうも二人つるんで楽しんでいるとしか思えない。

真道家は、父親が魔術師で母親が一般人であり、そんな二人のも

とで翼と緋睡は生まれていた。

そのため父親には幼いころから魔術師に関連する事柄を教えられ、翼の剣術や緋睡の弓術といったものも父親譲りだ。

ちなみにその父親は海外で働いており、帰ってくるのは年に数えるほどしかなく、現在、家にはいなかった。

真相を聞くのを止め、翼は食卓の席につき、あらかじめ朝食として用意されていた食パンをかじり、牛乳を飲む。その隣には緋睡が着席していた。あいかわらず巫女服である。

「そういえば、昨日のソーサリー・クリスタル探しは、うまくいったの？」

思い出したように、雅が翼と緋睡に尋ねると、緋睡がいいえ、と首を左右に振り、

「駄目でした。兄上があまりにもふがいないがために」

「ちょ……！ なに僕ひとりのせいにしてるのさ！ 危うくやられそうだったくせにッ！」

ピクリと緋睡の眉が歪む。もともと表情の変化が緋睡は微々たるものなので、その変化を読み取ることは難しく、翼は気づかないまま発言を続ける。

「だいたい、あれは途中で先輩がやってきて横取りしたんじゃないか。責めるなら先輩にしてよ、緋睡」

一通り言葉を並べ終えた翼は、ふうと一息つき、食パンを食べるのを再開した。

「……そうですね。ですが、やられそうになったのはお互い様では

ありませんか？ 兄上。的に吹っ飛ばされて気絶していた真道翼殿」

プチッと何かが頭の中で切れたような気がした翼。

明らかに嫌味が入った緋睡の発言。さらに追い打ちをかけてくる。

「あのままわたくしが何も手を打っていなければ、兄上は今頃お星様だったでしょうね」

「……悪かったよ」

失言があつたことを詫びる翼だったが、緋睡は態度を崩さない。

「でしたら、言うべき言葉があるでしょう？」

「……ごめんなさい」

翼にしてはぶっきらぼう気味な口調だった。

「感謝の意味が込められていません。もう一度」

それをおまえが言うか、と翼は食ってかかりたい気分になる。自分のことを省みて言え、と反論のひとつを言いたくなるが、ここで言葉にしてしまうと火に油を注ぐのと同じだろう。無意味に体力気力ともに減少させる行為は、極力控えたいのだ。

「……すみません」

沸騰せんとする気持ちを抑え、翼はそう口にした。

それで満足したのか、緋睡は、まあよろしいでしょう、と一言。

翼は、食べかけのジャム付きの食パンを、そのむっとり顔に叩きつけてやりたい衝動に駆られていたが、理性で抑制する。

もっとも、そんな事をした日には、その日が命日となるだろうが

……。

朝食を食べ終え、歯を磨き、制服に着替えると、翼は緋睡と一緒に家を出た。

なお、翼は高校指定の制服なのだが、緋睡は例のごとく巫女服だった。

なぜここまでその服装にこだわるのか、翼はよく知らない。本人が言うには、いつ敵がやってきても即座に対応できるようにするため、というのが理由らしい。が、どうにもおかしいというものだ。

当然、高校でそんな格好はご法度なのだが、緋睡が教師たちに暗示をかけて、それを免れている。もっとも、生徒たちには暗示がかかっていないため、緋睡の格好を不思議に思う人もいるのだが、教師が口を出していないからという理由で黙認されていた。

舗装されている坂を下り進むと、住宅地が広がる。

時刻は七時半ということもあり、人影はそんなにない。せいぜい、ペットの散歩をしている人や、翼たちと同じ学生の姿が点々と見えるだけだ。

住宅地を進んでいくと、昨日戦闘があつた公園へとたどり着く。

戦いが起きた場所とは思えないほどに、今はとても閑散としていた。

「……兄上がドジを踏んだから……」

そんな妹のしぶとい愚痴が鼓膜を響かせるが、翼は無視した。あまり根に持ちすぎるというのは問題がある。

翼たちが昨日、公園に来て、あの化け物と戦っていた理由は、あるものを手に入れるためだった。

名をソーサリー・クリスタルと言うそれは、どこから現れ、どれだけあるのか全く謎の代物だ。

大きさは小石程度のものからテニスボールほどの大きさ……探せばもっと大きなものもあるのかもしれないが、翼が見てきたのはせいぜいそれくらいが限界だった。

その水晶には不思議な力が備わっており、それを手にして悪巧みを考えようとしている輩もそう少なくない……ということを、翼と緋睡は父親から教えられていた。

そして父親が、そんな輩にソーサリー・クリスタルを渡さないようにしてくれ、と頼んだために、翼と緋睡は夜な夜な水晶探しをしているのだ。

……もつとも、そんなものは大義名分であり、実際は興味があり、見た目としても綺麗だからという理由で翼たちは探しているのだが、しかし、ソーサリー・クリスタルは何らかの衝撃が原因で発動することがあり、それが昨日の一件というわけだ。

どのように発動するのは全く不明で、未知のブラックボックスといったところである。

発動した場合は当然、それを止める必要があり、幸い翼たちにはその止めるための力や術を備え持っていた。

翼と緋睡は魔術師である。森羅万象の力である魔力を自由に操る術をもった者たちのことを、総称してそう言う。

魔術師の存在は今の時代、ただのファンタジーの材料にしかなくておらず、存在を信じている者は皆無に等しい。信じている者はせいぜい、自分が魔術師だという人間くらいである。

そしてその魔術師こそが、ソーサリー・クリスタルの力の暴発を力づくで制止できる存在のひとつだ。ひとつだ、というのも世の中には、魔力とは違う気と呼ばれる自身の内に蓄えられている『気』と呼ばれる力を扱う輩もあり、その者たちもソーサリー・クリスタルを制止できる力を持っているからだ。

傍目からは全く同じに見えるかもしれないが、魔術は自然の力を

体内に取り込み、それを自分なりに扱いやすい力に変えて扱うのに
対し、気術は体内の力を引き出し、それを自分なり扱いやすい力に
変化させて扱う。……要は、外からの力か、内からの力か、という
違いがあり、そのために別々のものとされている。

「人って、分けることが好きだよね」

独り言を呟く翼。

隣にいた緋睡が怪訝そうに表情を曇らせていた。大丈夫でしょう
か、色々な意味で、とでも言いたげだ。余計な御世話だと言いたい。
住宅地を西へ突き進むと、中心街にたどり着くことができる。登
校には、ここを直進していかなければならないのだ。

魔来町の中心ということもあり、時刻が早朝にもかかわらず人が
混雑していた。

時には人の流れに逆らいながら、また時には人の流れに乗りなが
ら進むさまは、さしずめ波に乗るサーファーのようだ。

人混みは前に進むにくいから、翼は苦手だった。

それでも、前進しようと足を動かしていると、

「——こんなところに魔術師がいるとはね」

すれ違いざまに、そんな言葉が聞こえた。

即座に翼は、ふと立ち止まって振り返ろうとする。

だが、人の波に押され、立ち止まることは許されず、後ろに振り
返ったのは一瞬だけに終わった。

たったの一瞬。

だがその一瞬に、知らない少年と目が合ったような気がした。

気がした、というだけで偶然という可能性も捨て切れない……否、
むしろ偶然である可能性が高いだろう。

今更追うわけにもいかない。追うにしてもこの人混みだ、見つか

らないだろうし、何より他人だ。今さっき、ただすれ違っただけの赤の他人。重大なことではないし、そこまで気にかける必要はないだろう。

「どうしました？」

「え？ ああ……いや……」

言葉を濁らせる翼。正直、はっきりとしないものを口にするのは性分ではなかった。空耳、ということもあるわけだし。

しかし、緋睡の瞳は徐々に冷たくなっていく。もともと感情があまり宿っていない眼差しは、今では氷のように冷え切ったものとなっていた。完全に疑惑のそれである。

翼は、自分の信念に従って、緋睡の温度のこもっていない眼差しを無視することを決め込んだ。

そのせいで、高校に着くまでの間、会話が全くなくなってしまった。普段から寡黙な緋睡だが、それでもわずかなりとも話してくれるので気分的に楽なのだが、その彼女が全くしゃべらなくなると、えも言われぬプレッシャーが翼を襲い、少年はその間、決して気分がよいとは思えなかった。

第1章 - 2 闇夜の襲撃者

教室に入ったときには八時を経過していた。八時一五分までに登校完了しておけばいいので、教室内の人数はそれほどまでに多くはない。校舎も、早朝練習を行っている吹奏楽部の演奏が聞こえるくらいで、生徒同士の会話が聞こえてくることはない。

翼は机に伏して、時間が来るまで寝ることを決めた。……のだが、残念ながら翼に休む時間なんぞ、与えられないようだった。

「はあ—— はっはっはっはっはっ！！ 我が親愛なる後輩、真道翼よ！ お前が恋い焦がれてやまない絶対的存在、神藤天真様がやってきたぞ——！！」

五月蠅い先輩がやってきた。校内ということもあり、高校指定のセーラー服姿だ。

廊下は走らない、という小学生でも守ろうとする学校の規則を豪快に破り、ドタドタと騒がしい音を立てながら天真が翼の教室にズカズカと入り込んできた。

僅かにいた教室内の生徒は啞然。何事だ、とその顔に書いてある。鏡のような水面に巨石を投じたようなものだ。

その巨石こと天真は、入ってくるや否や、机に伏し、今まさに寝ようとしている翼のもとまで歩んだ。

——僕の平穏は無いですか？

ソーサリー・クリスタルを探してドンパチをしているわけでもないのに、普通の日常を少しは満喫させてほしいものである。

「……それで、何ですか？ 先輩。要件は手短にお願いしますよ」

多少棘のある口調をする翼だが、天真には効いていないようで、

「ふふふ……。翼よ、そんな口のきき方を先輩様にしてもいいのか？ もしいいと言うのなら、おれはお前の嬉し恥ずかしの秘密をばらしてしまうぞ。——例えば、思春期の少年らしく、自室に大量のエロゲーを隠し持って——」

「ないからッ！ なに捏造してるんですかッ！」

「隠すでない隠すでない、翼よ。おれとお前は互いの身体にあるほくろの数を熟知している仲ではないか」

「そんなわけないでしょうがああ——！！」

腹の空気をすべて出さんばかりの翼の叫びは、教室内の空気を振動させる。

叫んで身体の空気が枯渴した翼は、一度大きく深呼吸する。昂たかぶつた精神を鎮静化させるためにも必要な行為だ。

「……それで、何しに来たんですか？ 先輩は」

今度は棘を持たせずに、翼は再び尋ねた。もつとも、どこか疲れたような口調だった。

「いやなに。ちょっとした注意報を知らせに来たんだ」

注意報？ と翼は首を傾げる。どちらかといえば、天真の奇行のほうを注意したいと思っていた。

「……翼よ、何かおれの悪口を考えたな？」

「い、いえッ！ 別に！」

鋭い。

冷汗が一筋、少年の首を伝った。

「それで先輩。注意報って、何ですか？」

天真の疑惑の視線を浴びるのが辛かったので、翼は慌てて本題へと軌道修正させた。このままでは、ありもしない出来事をまた公言しかねない。

天真は腑に落ちない様子だったが、時間もないことを知ったのか、ああわかった、と言って天真は教室の扉前まで移動した。そしてこっちへ来い、と手を招いてくる。どうやら教室にいる人たちに聞かれるとまずい情報のようだ。

翼は席を立ち、招かれるまま天真に近づこうとすると、扉前から廊下へと出た。ついてこい、ということだろう。翼は言われるままにする。

そのままついていくと、やがて屋上に到着した。地上よりも風当たりは強く、ときおり天真の長髪がさらさらと流れる。確かにここならば、邪魔が入ることはなさそうだ。

「それで先輩、話を聞かせてください」

「これを見る」

説明するより見てもらったほうが早い、とばかりに天真はセーラー服の袖を捲り上げる。瞬間、翼は目を驚きで見開いた。

そこから現れたのは包帯だ。二の腕を白い布が巻かれている。白い布はわずかに黒ずんでおり、出血していたことが窺えた。血が滲んでいることからして、傷を負ったのはつい最近だということも推測できる。

しかしどういうことだ、と翼は疑問を抱く。昨日の夜、天真と出会った時はあっけからんとしていた。とてもではないが、怪我を負っているようには見えなかった。

「昨日、帰ろうとしていた時にな。襲撃に遭ったんだよ」

「襲撃？　と言いますと、他の魔術師に、ですか？」

そうだ、と天真は肯定した。

しかし、この魔来町に住みこんでいる魔術師は、確か自分たちと天真くらいだ。だとすると、その魔術師はよそ者ということになる。

「どんな人だったの？」

「ああ。それが……金髪のツインテールをした女だった。歳は、やや幼い感じがしたが……多分、おれやお前と大差変わらんような気がするな」

「他に特徴は？」

「さあな」

肩をくすめ、首を左右に振る天真。あまりに少ない特徴に、翼は肩を落とした。

「仕方がないだろう。絶界も張られることなく不意打ちを受けたのだからな」

「現実空間で？」

それはまたずいぶんと大胆な襲撃者だな、と翼は驚く。自分の存在や戦闘があつたことを知られないようにするために、絶界を展開するというのは。

「ただ、向こうも本気で戦^やり合おうとは思ってなかったようだな。ソーサリー・クリスタルをおれから掠め取ったら、脱兎のごとく逃げ出したぞ」

「——って、盗られたんですか？」

ああ、と別段隠そうとしない天真。

自分が本来手に入れるはずだった目当ての物を先輩に横取りされた拳句、その先輩がまた別の人間に強奪されたという事実、翼はショックを受けずにはいられない。横流しにされたも同然だった。

「酷いですよ先輩！ 僕の物だったはずなのにッ！」

「何を言う？ お前の物はおれの物ではないか」

ここで俺様主義全開の天真に、翼はぐうの音も出なかった。いや、出す気になれなかった。

自分のどこかで、半ばこのような展開になることを予察していて、初めから諦めていたような気がしたからだ。

「まあとにかく、これからソーサリー・クリスタルを探すときは、金髪のツインテールの女に注意したほうがいいぞ。以上だ」

天真が用件をすべて伝え終わると、ちょうど、八時一五分を知らせるチャイムが校内に鳴り響いた。

第1章 - 3 闇夜の襲撃者

授業とは戦いである。情報と誘惑の二つに立ち向かわなければならぬのだから……、というのは翼の自論だ。

教卓の前に教師が立ち、科目に合った情報を延々と時間内ギリギリまで垂れ流す……。翼の耳は左から右へと迫り来る情報を受け流す作業をしながら、睡魔の誘惑を抗っていた。立派な戦いだ。

たいていの生徒は誘惑によって負けることになる。睡魔の蜜よりも甘くてとりとした誘惑に抗えず、机に伏すのである。

午前中の授業だからまだ屍となった人数は少ない。だが午後になると、春の穏やかな陽気と昼食を食べたことによる満腹感で、午前よりも屍が増えることだろう。

時間が経つにつれ、翼も誘惑に負けてしまい、眠っていた。ただし、姿勢を正し、視線の先に教科書の見開きがあるようにだ。教師に眠っているのを悟られないようにするためだろうが、器用である。頭を上下に微動させているさまは、どこか綱渡りをしているやじろべえを思わせる。

やがて授業終了のチャイムが鳴った。なお、先ほどは四時間目だったので、このチャイムで昼休みということになる。

途端、屍と化していた者たちが一斉にむくりと起き上がる。その様子は、終始起きていた者たちにとっては、見ていてやや滑稽に映っていた。

教師は次回の授業内容を予告すると、そそくさと教室から退場する。聞いている生徒が皆無だったためだ。

「昼休みか……」

チャイム音で目を覚ました翼は、あくびをひとつして弁当を机の上に置く。

「あいかわらずだな、おまえは」

先ほどの大欠伸を見ていたのか、そんな感想を漏らした少年がいた。

「ああ……、葉か」

「葉か、じゃないぞ。寝てただろう、おまえ」

青色の髪に怜悯な容姿をした制服姿の少年——樹成葉は、顔を片手で隠して照れるようなしぐさをした。

「まったく、友人として俺は恥ずかしい」

「オーバーだなあ。葉が恥ずかしがることなんてないじゃないか」

葉は容姿にそぐい、生真面目な性格をしている。その上、正義感が強く勉強もできるため人望に厚く、翼も頼りにしている友人なのだが、やや堅物で、融通が利かないところがあるのが玉に瑕だった。

「まったく……。そう言うがな、いずれにしろ、居眠り癖はなおしていたほうがいいぞ」

「そうだよ、ツバサ君。そのうち先生に目をつけられちゃうよ」

二人の会話に割り込み、葉の意見に賛同したのは、茶髪の少女だ。快活そうで可愛い容姿、前髪にアホ毛を立てていた。

「人のこと言える立場か？ 凜子。おまえも授業中寝ているだろうが」

あれ？ そうだったかな、ととぼけてみせる凜子。だが、明ら

かに目線はあさつての方向を向いている。ちなみに凜子は中学一年から、葉は高校に入学してから翼と友達となっていた。

「ねえ、昼食食べないの？」

先ほどから弁当をスタンバイしている翼が二人に尋ねる。

何か言いたそうな様子の葉だったが、割り切ったのか、そそくさと自分の席のイスを引っ張ってきて、翼の机の横に着く。ついでに周りにある手短な机を翼の机につける。凜子も同様の行為をし席に着くと、翼たちの昼食タイムは始まった。

「そつえばさ、ここ最近、学校の裏山に人魂が出てくるって噂、知ってる？」

ある程度昼食を食べたとき、凜子がそんな話題を提示してきた。裏山に人魂が出るなんて噂を聞いたのは初めてだった。学校には七不思議が定番としてあるものなのだが、この学校もその例に漏れていない。七不思議の内容は怖いものから可笑しなものまで多種多様なのだが、その中にも、人魂が出るなんてものは確かなかったはずだ。

「おまえは相変わらずそんなのが好きだな」

「そんなのは何よ、ヨウ君。UFOよ、UFO。言い換えれば未確認飛行物体だよ。面白いじゃない」

馬鹿にされたと感じたのか、凜子がムキになり始めた。

「くだらん。人魂なんてプラズマだプラズマ。もしくはスキンヘッドのおっさんの頭が月光を反射しただけだろう」

「ブーッ！ 夢のない子供ッ！ ヨウ君みたいな人が、子供の夢

をぶち壊し放題するのよッ！ 環境破壊も深刻だけど、夢破壊も同等よッ！ リアリストは夢を壊すことを快感に感じているに違いないよッ！ うんッ！ 絶対にッ！」

「……誰もそこまで言つとらんぞ」

どんどん話を肥大化し、もはや本題が何だったのかが曖昧になりつつあった。

翼は昼食を食べ終わり、葉と凜子のやりとりを対岸の火事のように思いながら観客と化していた。とぼつちりは極力受けたくない。

「いいえッ、絶対にそうだよッ！ リアリストが子供やロマンチストを根絶やしにして没個性社会の礎をいしすえ気づいているに違いないよッ！」

「あんな……。論点がずれていることに気づいているか？ おまえ」

「話を誤魔化さないでよッ！ ヨウ君」

「いや、別に誤魔化したつもりはないが……」

というより、他人の話を聞いていないようである。

「いい？ ヨウ君。この世に無意味なものはなくって、万物はすべて何らかの意味を持って生まれてきているんだよ。そして人の思想は星の数ほどあって、すべてを理解するには永遠という時間を費やしても足りないくらい……。って、何の話をしてたんだっけ？ わたし」

ようやく凜子は正気に戻ったらしい。論点がずれにずれて軌道修正がきかないほどに暴走したため、時すでに遅しという状態だが。

やっと終わった、と胸を撫で下ろす翼と葉。

だけど、確かに気になる話だった。

現れたのは最近だという話だ。誰かが唐突に法螺ほらを吹いて、それ

が広まったと考えるべきか、それとも別の要因と考えるべきかは実際に確かめない限りはわからない。

「凜子、その人魂って誰か見た人いるの？」

参考程度に翼は凜子に訊いた。葉との言い争いで話の論点がずれにずれていたため、凜子はしばらく考えるそぶりを見せた。人魂って何だっけ？ とばかりに。

もともと話を振ったのはそちらなのだから覚えていてほしいなあ、と翼は凜子の物忘れの早さに呆れる。葉も同じようで、ハアと短い溜息を吐いていた。

やがて凜子は思い出したように、ああ、と声を上げる。

「うん。実際に見た人がいるみたいだよ」

「誰だ？ そいつは」

ぶつきら棒に葉は質問をする。その物言いは、初めから答えなんぞ期待していないみたいだ。

すると凜子は、躊躇うことなく葉の質問に答える。

「わたし」

「……はい？」

「は？」

翼と葉は、先ほど聞いた言葉を理解できずにいた。はて、聞き違いでもしたか、とばかりに。

友人の男子二人のそんなりアクションにむっと来た凜子。

なので今度は、人差し指を自分に向けてもう一度同じ言葉を言う。

「わ・た・し」

丁寧に、一文字一文字区切って。

「……凜子。いくら人魂の存在を証明したいからといって、嘘はいかんと思うぞぐふうッ」

呟く葉に、凜子は鳩尾に情け容赦ない裏拳を叩き込んだ。

手加減なしかつ突然の攻撃に、葉はその場でしゃがみこみ、腹を押えてピクピクと悶え苦しむさまを見せる。

同情するなあ、と翼は哀れな友人に心の中で合掌をした。

「凜子。もしよかったら、見たときのことをもつと詳しいことを話してくれないかな？」

悶絶している友人を一時的に尻目に置き、翼は自分のことを優先させることにした。

「そうだね。だいたい夜の十時くらいだったかなあ。バイトの帰りで学校近くを通ったときにね、裏山が光っているのが見えたんだよ。裏山には明かりなんてついていないはずだしおかしいなあ。っと思って裏山に行くと……出たんだよ。なんか人魂の中心に何かあるような感じだったけど……間違いないよッ。あれは人魂ッ。UFOッ。未確認飛行物体だよッ」

後半になると熱が入りはじめ、凜子はやや興奮気味だった。彼女が手短にあった翼の机をドンと叩いたため、周囲の生徒の視線が集中するのを翼は感じた。

このままだとさらにヒートアップしそうだったので翼は、ありがとうと謝礼を言い、この話題は閉めることにした。

直後、午後からの授業を開始を知らせるチャイムが教室のスピー

カーから流れた。

暑すぎずかつ寒すぎないちょうどいい気温で、教室内の睡魔が生徒たちに牙を向いていた中、翼は四時間目と五時間目を過ごした。午前中も寝ていた翼は無論、午後の授業で起きているはずもなく、授業内容なんぞ脳の片隅にも残っていない。

「翼、帰るぞ」

「ツバサ君、帰ろうよ」

五時間目の授業の用意をカバンに詰め込んでいると、葉と凜子がやってきた。凜子も授業中寝ているのに、帰り準備だけは授業中常に起きている葉と並ぶくらいに速い。

カバンの中に荷物を全部詰め終えると、翼は行こうかと言って二人と一緒に教室を後にした。

高校を出、初めのうちは、三人は他愛もない世間話で花を咲かせながら帰路に着いていたのだが、凜子はバイトがあるということと途中で別れ、今は葉と二人で下校している状態だ。

「それでおまえ、凜子の話を信じてるのか？」

ここは中心街。

人混みの中に紛れながら翼と葉は帰宅しているのだが、その際に葉が尋ねてきた質問だ。

何を？ と訊かなくてもわかる。例の人魂のことだということが。

「うん……。まあ、半分半分っていったところかなあ」

「なるほど。つまりは興味半分疑惑半分ということか？」

「まあ、そんなところ」

口先ではこう言っているものの、少し……。どころかかなり気になっ
ていた。

ただの気のせいならそれはそれでいいのだが、もし凜子の言っ
ていたことが本当だとしたら見過ごすわけにはいかない。

もしかしたら、ソーサリー・クリスタルが関連している可能性だ
ってあり、何らかの危害が周囲に及ぶことだってあり得る。

「まあ、おまえがそうだととしても俺は信じないがな。人魂なんて非
現実的な物、俺は認めん」

非現実的な物は存在するかわからないが、非現実的な者なら葉
の隣にすることを、葉は知らない。

へえ、とだけ相槌を打っておく翼。

気づくと、住宅地までやってきていた。

学生の帰り時刻ということもあってか、行き交う人の数が登校の
時より増えているものの、中心街程に人が密集しているわけではな
く、点々という程度のため、帰宅するのに苦はない。

やがて、とある丁字路までやって来ると、

「じゃあな、翼。また明日」

「うん。また明日」

二人は別れの挨拶を交わして、互いに背を向けて正反対の方角へ
と進んでいった。

第1章 - 4 闇夜の襲撃者

夜。

世界が暗闇に染まる時。

墨汁をこぼしたような空に、お情けとばかりに月と星が輝いていた。

時刻も午後十時半を回ろうとしているためか、町の明かりはほとんど消えているものの、中心街だけは、昼間と変わらぬ明かりを放っており、眠る気配はない。ネオンの光で夜闇を掻き消し、人がこれでもかとはかりにあふれている。

そんな中心街を東に進んで行けば、住宅地へとたどり着くことができる。そこは中心街とは打って変わって閑散とした雰囲気を漂わせており、中心街と比べると別世界だ。

白光を放つ街灯が薄暗く道を照らす中、翼と緋睡の先輩——神藤天真は住宅地をうろついていた。動きやすいラフな服装をし、背には昨日も背負っていた棒のような物体があった。相変わらず布に包まれており、その姿は確認できない。

昨日、自分に危害を加えてきたやつを探すために天真はここにやってきたのだ。

おれが後輩から拝借した物をスリみたいな真似して盗りやがって、という思いが彼女の中でグツグツと煮えていた。……もつとも、先にスリのような真似をしたのは天真自身なのだが、本人はそれに気づくことはない。

ソーサリー・クリスタルを奪われたとき、天真は相手の姿を見ていたものの、それは後ろ姿で、顔は一切見ていなかった。

会って、倒すまではいなくなとも、せめて顔くらいはつきりと拝ませてもらおう。

そんな思いを胸に、天真は周囲の気配を探りながら夜の住宅街を闊歩する。水を打ったような静寂のため、自分の足音がよく響いた。

やがて公園の前まで歩いた時、人の気配がこちらに近づいてくるのがわかった。

数は二人。

いずれもややピリついた気配を漂わせているところから推測するに、一般人ではない。

もしかして、と天真は思い、公園に入って滑り台を盾にして身を隠した。そして公園前までやってきたと気配で察すると、顔だけを少しだけ出し、誰なのかを確認しようとする。

やがて、その人物を視認したとき、やはりそうか、と天真は思った。

翼と緋睡だった。兄のほうは腰にひと振りの剣をぶら提げ、緋睡は背に身の丈ほどある弓を担いでいた。

腕時計を見ると、時刻は午後十時半をまわっていた。そんな時間にあの二人が外出しているという理由を、天真はすぐに悟ることができた。

二人が公園前を通過しようとする。……が、翼がこちらに振り向いた。

「どうかしましたか？」

「いやあ……気のせいかな？ 何かいるような気がしてさ」

こちらの気配に気づいたのか、翼はボソリとそのようなことを言っていた。なかなか鋭い。

気づかれないように天真は普段から身を護るために常時纏っている紙の厚さ程度の魔力を解除していたのだが、翼には通用しなかったということだろうか。

緋睡は兄のそんな言葉で、公園を外から見渡した……が、

「気のせいでしょう。それよりも早く学校の裏山に行きましょう、兄上」

妹のほうは気づく様子を見せなかった。そのためか翼は特に疑うようなこともなく、そうだね、と頷きを見せ、翼は公園を完全に通過した。

天真の口は……緩んでいた。少なくとも、見つからなくてよかった、といった安堵の笑みではない。どちらかといえばいい事を聞いた、とばかりに、ちよっかいをかける気満々の小悪魔的……を通り越して悪魔の笑みである。

滑り台の影から抜け出し、天真は呟く。

「翼アンド巫女よ。先に待っているぞ」

自分のことをそっちのけにし、天真は不敵な笑みを浮かべて、学校の裏山に先回りすることを決めた。

楽しいことを最優先。それが天真の生き方である。

――

学校の裏山の頂上。そこに翼と緋睡はいた。

頂上には樹齢が三ケタはあるだろうと思われる幹の太い大樹があった。

腕時計を見ると、時刻は午後一時になっていた。この時間になると中心街以外の区域に明かりは点々としか見当たらない。町の中心だけが昼夜を問わず映えていた。

裏山には明かりの類は一切なく、夜の闇を存分に五感で味わうことができる。

ここまで翼たちが来た理由はただひとつ。ソーサリー・クリスタル探しだ。

凜子の話によると、最近この辺りに人魂が出るということだ。それがソーサリー・クリスタルが原因であることが十分に考えられるため、調べる必要があった。緋睡にも、あらかたのことは説明してある。もっとも、あの藍色の髪の少年のことは話していなかったが、今は関係ないことだ。

頂上に登るまでの道筋には、少なくとも人魂らしきものはなかった。照明のひとつもないため、光の類があればすぐにわかるはずだろうから、見落としたという可能性はない。

時刻を見ても、凜子が人魂を見たと言っていた時間帯ゆえに、時間がズレたとも考えられない。ランダムで姿を現すというのなら話は別だが。

「手分けして探そう、緋睡。分かれてやったほうが探せる範囲も広くなるし」

そうですね、と緋睡は翼の意見に同意した。

それじゃあ、ということで翼と緋睡は集合時間を決めてから各々散った。

だが、二人は気づいていなかった。

二人の行動を監視している人影に――。

翼は道なき道を探索していた。

木々がもともと深緑をしていたため、夜になると暗闇が一層強調されており、数メートル先の光景が見えづらい。月明かりが梢の葉

と葉の間を通過して地面を照らしているものの、心細い印象を受ける。

これだけ闇に支配されているのだから、光が現れた際はすぐに気づくだろう。

そう思つて、翼は少しずつ前進しながら、人魂らしきものを探していた時だった。

パキツと乾いた小枝が割れた音が聞こえた。

自分が踏んだのではないことは距離感でわかる。

緋睡かな、と思つたが、すぐに却下した。彼女なら声をかけてくるだろうからだ。

それに、あまりにもひっそりとし過ぎている。気配を自発的に断とうとしていることを、翼は肌で感じ取っていた。

結果、考えられるものはひとつ。

——誰か別の人間がつけてきたのか。

それも気配の断ち方からして一般人ではない。手練^{てだれ}した、その道を往く人だ。

翼は腰に提げていた剣の鏢に指をかける。カチャツと小さな金属音が鳴り、翼の緊張感を拍車にかけた。

気を張り詰め、周囲を見渡す。視界が悪いが、漠然としたものの形や動きくらいは把握できる。

すると、何かが動いたのを視認した。それは木の後ろに隠れており、大きさからして明らかに人だった。

風が吹き、葉と葉が擦れ合う音が森を充満させる。その際、隠れている者の髪がさらりと流れていた。長髪のところから、相手は女性であろう。

と、ここで翼は何か頭に引っかかった。もしかして、と思いつつも翼はその影に近づく。

その影は逃げようとする気配を見せない。こちらが近づいているとわかつているはずなのに。

「ふふふ……」

突如、それは含み笑いをし始めた。悪に満ちた、そんな笑いをする人物を、翼は一名ほど知っている。

「……先輩、何してるんですか？」

ピタリと翼は、その人物を言った。翼の先輩、神藤天真を。

「はあ—— はっはっはっはっ！！ よくわかったなあ、我が親愛なる後輩、真道翼よッ！」

堂に入った悪役高笑いと同時に、その人物は木の背後から飛び出し、仁王立ちでポーズをとって翼を指差した。その背には白い布に包まれた長い棒のような物体がある。

「……いつからつけていたんですか？」

「つけていたとは失礼だな。ストーカーをしていたのだッ！」

「余計に性質悪いでしょうがッ！ あと、そんなこと大声で言わないでくださいッ！」

はつきりとストーカー行為を宣言した天真に、翼は渾身のツッコミを返した。

「うむ、ストーカーは嫌なのか？ ならば次回は、お前の私室に無断で侵入してやろう」

「余計に駄目じゃないですかッ！」

「ふふふ、冗談だ。………一パーセント程だな」

「残りの九九パーセントは本気ですか！？」

「イエスだ、翼よ」

もはやため息しか出せない翼。どうもこの先輩に、翼は常に振り回されている気がしてならなかった。どこまでが本気なのか、判別がつきにくい。

「……それで、本当は何しに来たんですか？」

「だからお前のストーカーをしに来たのだ」

まだストーカーと言い続けるか、この先輩は。

しかし、一度ツツコミを入れたところをもう一度入れる気にはならなかったため、無視する。

「そうじゃなくて、もっと別の用があつてここに来たんじゃないんですか？」

他の用、と言われ天真はそうだなあ、と腕を組み思考し始める。

まさか本当にストーカー……もとい、自分についてきただけなんだろうか。

「強いて言うなら……お前たちがソーサリー・クリスタルを手に入れようとしているところを、おれが強奪するためにここに来た」

「昨日みたいに盗るのはやめてくださいッ！」

「何を言う。お前の物はおれの物ではないか」

嫌なフレーズだ、とばかり翼は思う。これで自分の物も自分の物、というのだからたまったものじゃない。

「というわけで翼よ。おれを楽させるためにがんばってくれ」

ポンと肩を軽くたたいてくる天真。かんべんしてほしかった。

ソーサリー・クリスタルを見つけ次第手に入れて、奪取されない内に逃げてしまおう。

そう心に堅く誓った翼は、再び搜索を開始しようとしたとき、それは見えた。数十メートル先に、青白い光球がふわふわと浮遊しながら頂上へと登っていつている姿が。

光度はかなりのもので、光球を中心に昼間のように明るくなっていた。凜子が遠目で見たことも納得できる。

しかし、それは人魂ではなかった。光を放っているのはテニスボールほどの大きさの丸い水晶だったからだ。

間違いなく、ソーサリー・クリスタルである。

「見つけた！」

とつさに翼は光球に向けて疾走した。魔力で身体能力を向上させ、常人を超えた速さで光球を捕らえようとする。

すると光球が、翼の動きを読んでいるかのように、突然機敏な動きを見せ、回避した。

くっ、と翼は声を漏らし、とつさに鞘から剣を引き抜いた。

同時に起きたのは斬撃の衝撃波だ。大気を斬り分け、土や落ち葉を吹き飛ばしながらそれは光球に急速接近する。

だがそれも、宙に舞っているティッシューパーのようにひらりと避けた。

そのまま光球は翼の手から逃れるように、山の頂上へと向かっていく。

逃がさない、という思いのままに、翼はその後を追い、少年の後を天真がついていく。翼は捕まえようと必死なさまを見せているが、天真は余裕を崩していない。というより、状況を楽しんでいるかのようにニヤリと口元が緩んでいる。

もともとこの先輩は、翼をからかう……もとい観察するためにここにいるのだ。天真にとって、ソーサリー・クリスタルなど二の次

であり、そもそもソーサリー・クリスタルを集めるのは気まぐれでしかない。わけのわからない水晶探しよりも、翼にちよっかいを掛けることのほうが最優先事項なのだ。翼にとっては非常に迷惑な話である。

だが、そんな天真に今はかまっていられない。標的を発見した以上、手に入れないならならぬ。

翼は可能な限り速く走っているが、光球との距離が縮むことはない。舗装されていない上に、獣道ですらないため足元がひどく不安定なのだ。そのため速度もいつもより遅くなっている。足止めを狙い、数発衝撃波を放ってみるが、風で踊っている木の葉のようにここごとく避けられてしまう。

絶界はすでに展開していた。この追いかけてこが始まる直前に張ったため、騒音が通常空間に漏れることはない。ゆえに存分に暴れることが可能だ。

やがて、薄闇の世界がひらける。瞬間、芝生の海と、大樹が一本ある頂上の風景が広がった。その他には半透明の薄紫色のドーム状に張られている外壁があり、そんな壁一枚隔てて拝んでいるため、月は薄紫に発光していた。

地面が森の中より緩やかになり、翼は一気に光球との距離を詰めようとした。

彼我の距離は二〇メートル程。身体能力を向上させている翼にとっては数秒とかわからない。

光球を剣の間合いに入れ、振り上げていた刀身を一気に下ろした。

——当たるか？

そんな期待がよぎった。

が、光球は機敏に横に逸れ、再び翼から離れようとする。

光球はただ逃げるだけだ。もともと攻撃する術がないのだろう。

その代わりとばかりに、回避能力は一級品であるため、なおのこと面倒である。

「このッ……」

すかさず横殴りに振るうが、それもひょいっと避けられてしまう。なんだか、馬鹿にされているようで翼はイライラし始めていた。

「翼よ。コケにされているようでおれは愉快だぞ」

「あなたは僕に何の恨みがあるんですかぁ!!」

ははは……、と愉しそうな天真に翼は心からの叫びを上げた。この様子では、手助けする気はないのだろう。

まったく食えない先輩だ、と思いながらも、翼はひとりで光球を停止させようと、剣を振るう。

振るうごとに光球は上下左右にひらひらと揺れ、避け続ける。

たいそうご立腹になる翼。まるで風を相手にしているようで手ごたえが感じられない。

苛立ちは募り、次第に振りにブレが生じてくる。

決して翼の剣の腕が低いわけではない。むしろ腕はプロのそれを超え、超人レベルであり、並程度の実力者なら翼に返り討ちにされるほどだ。

回避とはいえ、その能力がすこぶる優れているということになる。くそッ、と翼は辛酸を舐める。ここまで攻撃を避けられコケにされたのは初めてだった。

天真の他人の不幸は蜜の味な顔を背に、翼がそろそろ怒りの最頂点に達そうとしていたとき……、

ヒュッと空気を裂く音が聞こえた。

なんだ？　と思うよりも早く、異変は起きた。

電気がショートしたように、光球が火花を散らしたのだ。

見ると、先ほどまでなかった矢が、光球に突き刺さっていた。そこから閃光を放ち、やがて光が治まり、重力に逆らうことなく落下する。

「まったく……。あまり醜態をさらけ出さないでください、兄上」

振り返るとそこには、呆れと冷たさが入り混じった視線を向けている緋睡がいた。

片手には弓が握られており、天真はつまらなさそうな色を浮かべている。もう少し愉ませてほしかった、とばかりに。

絶対まともな死に方しないな、この人。……いや、させたくない。恨みの視線を先輩に向けながら、翼は思う。

「ありがとう、緋睡」

とりあえず、緋睡に礼を言う翼。正直のところ、あのままだったらいつになれば決着がついていたのかわからなかったからだ。

「別に問題ありません。兄上が間抜け腑抜けであることは、妹であるわたくしが熟知していることです」

「……………悪かったな」

胃から込み上げてくる憤怒を喉元まできたときに翼は飲み込んだ。悪気はないはずだ、と翼は心の中で自分に言い聞かせる。

「悪かったと思うのでしたら今度、あのような無様な姿をさらけ出さないようにして下さいね」

毒をたんまりと吐く緋睡。

翼は眉と口元をひくつかせ、妹の毒吐きに耐える。どうしてこいつはこうなんだ、と思わずにはいられない。

「返事はどうしました？」

「はいはい、わかりました」

「はいは一度にしましょう」

「……はい」

傍目からも一目瞭然なほどに、翼は妹の尻に敷かれていた。無論、翼はいい気をしていない。

しかし、逆らったところで言い負かされることは、家族として暮らしてきていい加減分かっていいる。ならば下手な言い訳は極力せず、はいはいと流して話を早く終わらせるほうがよっぽど利口だ……というのが翼の学んだ処世術だった。

緋睡をあしらってから、翼はソーサリー・クリスタルを手に入れようと、水晶の落下地点まで歩んでいく……が、

「……あれ？」

「どうしました？」

「いや、水晶がなくなってるんだ」

「そんなはずありません。確かにその辺りに落ちていたはずでしょう？ 節穴になっているのではありませんか？ 兄上の目は」

「うるさいッ！ そう思うならおまえもこっち来て探すのを手伝え……」

と言い終えた直後、思い当たる節があることに気づいた。

まさか……。

「はあ—— はっはっはっはっはっ！！」

思うや否や、清々しいばかりの高笑いが聞こえてきた。どうやら勘は外れていなかったようだ。

声の聞こえるほうへと視線をやると、そこには大樹をバックに、天真が仁王立ちで右手を天に高らかに上げていた。

その手にはソーサリー・クリスタルが握られている。どうやら先ほど言いあっていた間に盗ったようだ。一度ならず二度までも同じ手で横奪されるとは、まったくもって間抜けとしか言いようがない。

「卑怯ですよッ！ 天真！」

緋睡の朱色の瞳が天真を射抜くものの、意地悪な先輩は含み笑いをして挑発してきた。

普段はほとんど感情が宿ることのない緋睡だが、今回ばかりは怒りで目を鋭くさせていた。割れたガラスの破片のような鋭さだ。

「ほしいなら力づくで取ってみるがいいッ！！」

悪戯な笑みを浮かべて、翼たちをさらに挑発する天真。

だが、その発言が終わったすぐ後に、変化は起きた。

「——ならそうさせてもらおうとするよ」

聞きなれない声。

刹那、水晶を持っている天真の手目掛けて、氷の礫が飛んできた。その速さは緋睡が射る矢とほぼ同じ。

天真も冗談で言っただけなのだろう。突然の攻撃に対処しきれず、水晶を持っていた右手に氷の塊が直撃し、水晶を地に落とした。ぶつけられた場所は手首で、そこからは赤い血が滴っており、激痛で無傷である左手で押さえていた。

「——ッ、誰だ！」

攻撃がしてきた方向へ振り返り、怒号を発する天真。

翼と緋睡も、各々の武器を構え、そちらへ視線をやると、そこには少年がひとり、佇んでいた。

歳はおそらく翼と大差変わらないであろうことが見た目と体形でわかる。ダークブルーの髪と瞳、燕尾の藍色マントを羽織^{はお}っており、目はどこことなく不敵な余裕に満ちているように鋭く、口元はそれに準じて緩んでいた。

少年の腰には左右に一刀ずつ短剣が提げられており、それを見ただけでも一般人ではないことがわかる。

あと、今の状況が穏やかでないことも……。

「どうしたのさ？ きみが『ほしいなら力づくで取ってみるがいい』って言ってたからそうさせてもらおうと行動しただけだよ？ そんな怒りを向けられる筋合いはないと思うけどなあ」

「こちらの質問に答える。誰だ？」

先ほどまでの悪ふざけのノリが天真から消えていた。天真の声質は若干低くなっており、相手を脅そうとしていることがわかる。

「そんな脅迫しなくても答えてあげるよ。せつかちだねえ、きみは」

少年は翼と緋睡など眼中にないように、天真にだけ視線を向けている。やや翼にはそれが不快に思いつながらも、静観を保つことにした。緋睡も同じ意見を持っているようで、動こうとはしない。

「ぼくはアルフォート。きみと同じ、魔術師だよ」

きみ、というのは天真のことを指しているのだらう。『きみたちでないとここから、翼たちの存在は、ダークブルーの髪の少年——アルフォートの眼中にはないことがはっきりとした。』

アルフォートは指で天真の足元を示し、

「それ、大人しく渡しなよ」

天真の足元には、血に濡れたソーサリー・クリスタルが転がっていた。

「嫌だと言ったらどうするつもりだ？」

「きみが言ったとおり、力づくで奪うまでさ。……けど、きみだって痛い目をしたくないだろ？ だからさっさとそこからどきなよ。もしくはそれを投げ渡しな」

やや挑発めいた口調で話すアルフォート。これが並の実力者なら即座に喰って掛かっているところだろう。

だが天真は、そのような愚かな真似を実行しようとはしなかった。勝負事は、挑発に乗ったものが大抵敗北の道を歩むことを知っているからだ。

翼は、天真のこういうところは尊敬できた。人間、挑発に乗らないでおこうと思っただけでも、なかなか実行できないものなのだ。

「さあ、渡してよ」

「断る。他をあたれ。これはおれのだ」

天真は即答した。迷いが初めからない者のみができることだ。

そう、と短く頷きを見せるアルフォート。初めから期待などしていなかったかばかりに。

——……というか先輩、それは僕たちのソーサリー・クリスタルなんだけど……。

翼の虚しい思いは天真とアルフォートには届かない。

「なら……力づくでいかせてもらおうか」

発言が終わると同時、アルフォートは腰に提げていた短剣を抜き、天真に突撃した。

第1章 - 5 闇夜の襲撃者

戦いは唐突に始まった。

羽織っていたマントを棚引かせながら距離を詰めてくるのは黒ずんだ青の物体。

月明かりに照らされ、彼の獲物である短剣だけが鋭い白銀の光を光らせていた。

だが今度は、天真は焦らなかった。最初の不意打ちの一撃の時とは、心構えが違った。

天真は背に担いでいた白い布に包んだ棒のような物体を盾にし、初撃を受け止めた。

ギン、と殺意に満ちた金属音が奏でられる。

「さすがに二度目の不意打ちは効かないか……」

「それが通じるのはおよそ三流だけだ」

言い捨て、天真は姿を見せていない得物を前に押し、アルフォートを弾き飛ばした。

……否、弾き飛ばしたのではない。アルフォートが自ら、天真の押し出しを利用して背後に飛んだのだ。

それにより、天真が予想していた以上に彼我の距離が広まった。だがかまわない。

近距離でなければ、こちらにとって有利だと、天真は考えていたからである。

「久しぶりのドンパチだし、全力を出すとするか……」

呟き、天真は白い布を解き、自身の得物を露わにさせた。

槍だ。突き刺す為の穂、断ち切る為の斧、さらに斧の反対側に鉤

状のピックを併せ持っているとところからハルバードと呼ばれる形状のものだ。

全長は二メートルほどあり、それを器用に頭上で数回回転させてから、穂先を敵へと向けて構えを取った。

両者が武器を構え、その場を支配するのは、張り詰めた、息をすることさえ躊躇してしまいそうなほどの静寂だ。

翼と緋睡はその様子を静観していた。踏み入る隙がないのだ。

木々のざわめきが、そよ風に揺れて発生する。これから始まるうとしている事に恐れをなしているかのように。

ざわめきが治まった瞬間、天真は動いた。

芝生を蹴り、反動で前進する。

その速さは戦風^{せんふう}。戦いを自ら望まんとしている一陣の風だ。

一気に距離を詰め、天真は槍を横殴りに振るった。

斧頭での一閃。

アルフォートはそれを受け止めようとはせずに、跳躍し、そのまま天真の背後を取った。

ちっ、と舌打ちひとつ。

敵の残像を斬り、その時に余った力を使い、そのまま後ろへと振るった。

今度は受け止めたアルフォート。着地の際一時的に足を固めてしまったため、回避できなかったのだ。

そのまま力の押し合いへと移行する天真とアルフォート。

双剣と槍の斧刃が交差している場所がギリギリと金属の軋み音を上げ、両者は互いに睨み合う。

先ほどの攻撃に対処できたのか、と天真は正直驚いていた。たいていの相手は、対処しきれずに弾き飛ばされるなりするものなのだが……。やはり舐めてかからなくて正解だったようだ。

「驚いたよ。まさかあのタイミングで攻撃が来るなんて思っていなかった」

「白旗でも揚げたらどうだ？　今ならおれの足の裏を舐めるだけで赦してやる」

「冗談言わないでもらいたいなあ。それはこちらの台詞だよ」

狂気に、アルフォートは口元を歪ませた。

——まずいッ。

本能がそれを知らせた。首の後ろがチリチリとし、足が意識せずに敵から退避した。

《出でよッ、氷雪の礫ッ！》

残響するアルフォートの声。

同時に口から発せられる詠唱の言葉。

詠唱魔術だ。

「——ッ」

天真は即座に、自分も詠唱魔術を発動する準備をする……が、すでに遅い。

《——アイス・バレット！！》

アルフォート頭上の周囲の空間が歪み、そこから氷の弾丸が発射された。

数は三発。

音速と思えるほどの速度で、天真にテニスボール大の雹ひょうが特攻をしかけに来た。

「先輩ッ！」

「天真ッ！」

後輩二人の自分の名を叫ぶ声が天真の耳に届く。
即座に詠唱をキャンセルし、天真は迫り来る弾丸を捌くことにする。

一発目は、横に跳び退くことで避けた。顔面を狙っていたようで、風切り音が鼓膜を振動させた。

残る二発は、一発目の後を追って直進したものの、その後進路を変え、背後から天真へと襲撃する。

背後から迫る殺気を感じし、天真はタイミングをはかつてその場を回避した……直後、もといいた場所に一発が炸裂した。

爆音。芝生と土は宙に舞い、地面が引つpegされた。

——残り一発……。

思い、天真は氷の弾丸を処理しようと、土煙が舞っているところを見る……が、

「忘れてもらっちゃ困るねえ！」

「——ッ！」

来た！

別段天真はアルフォートの存在を忘れていたわけではない。氷弾をすばやく処理してから相手にしようと順序づけていたため無視していたただけだ。

背後から地面すれすれまで体勢を低くし迫るアルフォート。

前方からは土煙の中からこちらの身体に風穴を開けようと氷の弾丸が特攻を仕掛けてくる。

迷うことなく天真は、唯一の回避方向である横に跳び退いた。

氷弾とアルフォートが正面衝突するか？ ……と思ったが、甘かった。

少年と氷弾の高さが違ったのだ。氷弾は体勢を低くしているアルフォートの頭上を通過し、曲がって天真へと再び直進してきた。

「くそッ！」

しつこい攻撃だ、と天真は舌を打ち、その後すぐに突進してきた氷弾を槍の長い柄で受け止めた。どこかに当ててもしなければずっと追いかけて続けるだろうからだ。

直撃し、手が痺れ、衝撃で数メートル地面を滑る。

その後には続くのはアルフォート。

攻撃が迫る。天真は先ほどの一撃で足が地面にめり込んでおり、抜こうとするものならば回避にワンテンポ遅れてしまうことを自覚していた。

アルフォートの顔が足元に見えた。その手には鋭利に光る短剣。逆袈裟に斬るつもりだ。

もはや避けることができない。ワンテンポなんて時間すら与えられないのだ。

「消えなよ」

短い言葉と同時に、天真は自分の視界が紅に染まったことを視認した。夜から夕方に時間が遡ったようだった。

天真は、自分の身体を見た。

右脇腹から左胸にかけて、口のように裂けた傷があり、そこから鮮血が迸っていた。

今、見ているのは自分の血だ。

自覚した瞬間、両膝を無意識のうちに地面に着いた。後に続くのは激痛。身体が焼かれんとするほどの。

「……ッ……」

苦痛に天真は言葉を出すことさえ躊躇ってしまふ。痛みに耐える

べく、唾を飲み、齒を強く食い締める。

「ちよつと急所が逸れたかな？ もう少し深く斬り込むべきだったねえ」

殺意。

とつさに天真は転がるようにその場を退くと、銀光がもいた場所を断ち斬った。

「へえ。まだ動けるんだ。……と言つても、それだけのようだけど」

可笑しい、とばかりにアルフォートの口元は嗤いを取っていた。実に不快だ。その顔に穂先を突貫させてやりたい。

天真とアルフォートの間は五メートルほど離れている。が、そんな幅などほんの時間稼ぎにしかない。

「安心してよ。次はちゃんと逝かせてあげるから。きみも早く楽になりたいだろ？」

狂喜とも狂気とも取れる表情をし、少年は血に濡れた双剣を手に、ゆっくりと天真に歩み寄る。

すでに勝利を得たような表情。だがそれは刹那の内に消え失せた。悦に入っていたアルフォートの顔が緊に締めまり、短剣を虚空に振るう。

バチ、と電気がショートしたような音。

見れば、短剣が一本の矢を地面に打ち落としていた。

後、その場からアルフォートが残像と化したかと思うと、銀閃が虚空を裂いた。

誰だつたかなど、考えるまでもなかった。

翼だ。

第1章 - 6 闇夜の襲撃者

翼は眼前十メートル程先にいる敵を凝視していた。

その瞳は刃のように鋭く危険な光を宿っており、眉は怒りで引き締まっている。

両の手で握っているのは刃渡り九十センチほどのロングソードと呼ばれる型の剣だ。無駄な装飾がなく、ただ武器としても機能のみに重きを置いた長剣の先端を、アルフォートに向けている。

翼のはるか後ろには後衛として緋睡が弓に矢を番^{つが}えて、翼と同様にアルフォートに標的を合わせていた。

「ああ、そういえばいたねえ。きみたちも。てつきりギャラリーだと思つて無視してたんだけど……違つたんだ」

初めから眼中になかった、とばかりの挑発的な言葉を放つアルフォート。

だが、翼たちには動じない。目の前で先輩を痛めつけられて、怒りが頂点に達していたためだ。

手を出すな、というようなことを当の本人から言われていたが、仲間が殺されるのを傍観していられるほど、翼たちは冷酷ではない。

「アルフォート……とか言つたね？ これ以上先輩を傷つけるつもりなら、僕たちが相手だ」

翼の声は低く、ドスの利いたものだ。普段の翼からは想像がつかない迫力を、彼は今醸し出していた。

「『僕たち』か……。ひとりの相手に二人とはねえ。卑怯つて言葉知つてるかい？」

翼は眉一つ動かさない。

ただ瞳で語っていた。戦うのか、否かを。

「まあ、別に戦うのはいいけどねえ。相手が二人でも」

ただ、とアルフォートの言葉は続いた。

「……二人で向かってこれるのならね」
「……？」

どういう意味だ、と頭で考えるよりも早く、

「——！！」

気配がそれを察知し、翼は反射的に痛みで蹲っている天真を担いで、その場を跳び退いた。

直後、斬撃の衝撃波が地面を抉っていった。

方向は右から。

とつさに翼はそちらへと視線をやると、そこからひとりの男が、森から姿を現した。

シルバーグレーの髪色。何か強い意志を秘めたような切れ目をし、深海の海のように蒼い瞳のうちの右目は、前髪で隠されている。

年齢は二十歳ほどであろうと、端麗に整った精悍な容姿でおおよその見当がつけることができ、服装はいたって質素な色で統一されていた。

その腰には刀身が収まっていない鞘がぶら提がっており、中身は今、彼の片手に握られている。

「やあ、ヴァルファムルク。こんなところまでどうしたんだい？」

ヴァルフアムルクと呼ばれたその青年は、翼たちなど目もくれずにアルフォートへと視線をやった。

「それはこちらの台詞だアルフォート。いつまでこのような場所で油を売っているつもりだ」

「そんなつもりはないさ。ただ、ソーサリー・クリスタルをもらうためにね、こうやってあいつらと睨み合ってるんだよ」

ヴァルフアムルクは無言でとある場所まで歩み寄って行き、そこで何かを拾い、それをアルフォートに見せた。

彼が手にしたもの。

それは天真が落としていたソーサリー・クリスタルだった。

「これで任務は達成だ。戻るぞ」

「ええ。あいつらはどうするつもりだい？」

アルフォートが翼たちへ人差し指を向け、業剣がその先を見た。

冷徹な、見るものすべてを震え上がらせるような冷え切った気配を、視線に宿して翼たちへ放っていた。

翼の額に冷たい汗が浮かんだ。

アルフォートとは違う何かを、この青年は持っている。

それを、視覚を通じて感じ取れたのだ。

「放っておけ。クイーンズのやつのような障害にはならんだろう」

クイーンズ？

翼はその単語に覚えがあった。

世界のどこかに、魔術師たちだけの国が存在しており、その国の

名前が確かクイーンズであったことを。

翼はそのことを、魔術師である父親を通じて口頭で聞いたことがあった。もっとも、どこにあるのかは知らないのだが……。

父親が言うには、空間の位相をズラして、本来の空間とは別の空間に創られている国らしい。言ってしまうえば絶界の大規模版という話らしいのだが、いずれにしても行ったことがない翼にとつてはあまり興味の湧くことのない話だった。

だが、ヴァルフアムルクの口振りからすると、その魔術師の国が二人と一枚噛んでいるようだ。

などと思っていると、ヴァルフアムルクが言葉を向けてくる。

「お前たち。これに懲りたなら、二度とわたしたちの邪魔をしないでらおう」

邪魔って、そっちが邪魔してきたんじゃないか。

そう反論したい翼だったが、先ほどから発せられているヴァルフアムルクからの気迫で、それが押し止められる。

その代わりとばかり、敵意を宿した瞳でアルフォートとヴァルフアムルクを睨みつけていると、

「筋違いですね。そちらが先に邪魔をしてきたものではありませんか」

沈黙を保ってきていたはずの緋睡が口を開いた。ほとんど翼が思っていたことを、妹の口から代弁されて出てきたと言ってもいい。

静かなふりをして、言うことははっきりと口にする緋睡。その性格は物事を良いほうに転がることがあるが、悪いほうに転がることもある。

今回の場合は後者に転がった。

「だが、最終的に水晶を手に入れたのはわたし達だ。お前も裏世界^{いしせい}

側の人間なら分かっているであろう。——手に入れた者勝ちだと」

緋睡は眉を潜ませる。

それはヴァルフアムルクの言った道理を知っている上で、それでも納得できていないような仕草だった。

「兄上。悔しくないのですか？」

その問いに翼は肯定だった。

自分たちが苦勞してようやく手に入れることができると思うや否や、今の状況だ。

取り戻したい、と思うが、目の前にいる二人の実力は並のそれとは明らかに別格だ。

二人が放っている雰囲気でわかる。

下手をしたら殺される、ということが。

だが……、

「……ヴァルフアムルク、とか言ったね？ その道理がわかってるのなら、この道理も知っているよね？ ——手に入らないものは力づくで奪う、ってことを」

裏の世界とは弱肉強食。

ライオンがほかの獣を狩って喰らうように、蟻が生き物の死骸を喰らうように、人間が家畜を喰らうように……喰らわれる側にその意思がなくても、捕食する側が拒否権を強制的に撤収させる。

それはソーサリー・クリスタルの奪い合いとて同じだった。

「ならどうするつもりだ？ わたしたちと戦うか？」

低く、冷たく、落ち着いた声が夜の空間に響く。

ちらつ、と翼は自身の先輩へと目をやると、天真は気を失っていた。だが、出血多量による意識混濁ではないことはわかる。アルフォートにつけられた傷からは血はもう出ておらず、瘡蓋^{かさぶた}になっているからだ。

魔力で新陳代謝を急激に促進させているのだ。それに伴って眠くなるのだが、ちよつとした傷なら新陳代謝を促進させてもそれほど眠たくならない。だが、天真の傷は致命傷には至らなかったとはいえそれなりに大きな傷の部類に入るため、天真はそれに抗うことなく眠っているのだ。

先輩は大丈夫だろう、と判断する。

頭数は二人対二人ということで揃っている。いざ戦えば単純に実力勝負となるだろう。

——先輩を負かした相手に勝てるのか？

天真の実力は、今まで腐れ縁みたいになりながらも一緒にいたので翼にはわかるのだが、およそ自分たちと互角か、それ以上だ。以下ということはないと、断言できる。

ひとりを二人で一緒に叩けば勝てるかもしれない……が、それはおよそ叶わない願いというものだろう。

「さあ、どうする？」

追い詰めるように、ヴァルフアムルクは問いかけをした。

青年の隣にいるアルフォートは余裕だとはかりに口元を緩ませている。実に不快な笑みだ。

翼は緋睡に目を合わせ、アイコンタクトを取ると、彼女はコクリと頷いた。その眉は緊に締まっている。

——なら、迷うことはないか。

腹を括るべきだ。

思い、翼は答える。

しかしそれは言葉ではない。

いつの間にか片手で持っていた剣の先を、敵二人に向けることで、返答をした。

「……そうか」

数秒の間を置き、ヴァルフアムルクは剣の柄を握り直し、翼に刀身のような目を向けた。

「いつまでも名乗らないのは失礼だから、名乗らせてもらおう。――我が名はヴァルフアムルク」

ヴァルフアムルクは次に視線で、お前の名は？ と問うてきた。

「真道翼だ」

短く、必要最小限の答えを返した。

「真道……」

姓を反復し、承知した、と首を縦に振るヴァルフアムルク。

「そういえば、きみの名前も聞いてなかったねえ？ こっちだけが名乗ってそっちが答えないって不公平だとは思わないかい？」

思い出したように、アルフォートは緋睡に尋ねる。遠回しに、名前を教える、と言っているのだということは了然だ。

「真道緋睡です。天真の仇、^{かたき}取らせてもらいます」

「ふふ、怖いなあ。でも悪いけど、ぼくがきみの首、取らせてもらうからね」

最初から勝ち誇ったような台詞に、緋睡はピクリと眉を微動させた。

「……緋睡」

「わかっています」

挑発に乗るな、と諭しを入れようとしたのが理解したのか、緋睡は頷いた。

「さて、始めようか」

アルフォートのその一声。

その瞬間に戦いの火蓋が切られた。

深夜零時。

恒星と月の明かりが下界をわずかに照らす中、その者はいた。

その者は駆けていた。二つの金色の尻尾を宙に躍らせながら。

背には身の丈はあるかと思われる金属の塊と比喻するにふさわしいものを担いであり、重量はその巨体から想像するに、三ケタはあるだろう。

その巨体をその者は難なく、何のぎこちなさもなく背負っている。

別段、その者が筋骨隆々と言うわけではない。

むしろ華奢だ。抱きしめれば折れてしまいそうなほどに。

その華奢さも相俟^{あいま}って、なおのこと背負っているものが大きく見

える。

しかしそのか弱いとも思える身体からは、凜とした雰囲気が発せられていた。

生半可な覚悟で近づけば痛い目を見るような、痺れるような気迫。その者は駆けてていた。

目指す場所は、高校の裏山――。

第1章 - 7 闇夜の襲撃者

緋睡は森の中を疾走していた。

周囲の気配に気を配り、殺気がどこからきてもいいように気を張り詰める。

——来たッ！

緋睡は即座に木陰に身を屈め潜めると、直後に耳を塞ぎなくなるような衝突音が鳴り響いた。

氷弾。

その特攻を受けた木は緋睡の頭上すれすれの宙を吹っ飛び、その軌道上にある木々を数本なぎ倒して停止した。

木が吹っ飛んだ後、緋睡は氷弾が飛んできた方向へ一本の矢を放った。

音速の疾さで暗闇の中に消えていき、やがて身近な木に当たったのか、木をへし折る音が聞こえてきた。

その音を背に、緋睡は再び駆け出す。

敵と距離を取るために。

遠距離から矢で射るために。

「どこまで逃げるつもりだい？」

漆黒の風景の中から、アルフォートの悦に入り気味の声が聞こえてきた。

どこにいいのかわからない。相手が攻撃してくる直前を読んで、回避して、それからの後手を狙っていくしかない。

こちらは地面に積もっている小枝や木の葉を踏みつけているため、ある程度足音が鳴っているのだが、向こうはほとんど聞こえてこない。

場所をそんなに動いていないのか、それともよほど慎重にこちら

に接近しているのかはわからない。だが、いずれにしても不利にな
っていることは確かだった。

なぜなら、

——向こうはこちらがどこにいるのか、足音で分かっているはず
……。

先手を打たれたのは失敗だった、と緋睡は自分の行いの愚かさを
嘆いた。

しかし、相手はそんな時間すらも満足には与えてはくれない。

再び氷弾が飛んでくる気配を察知したためだ。

緋睡は走りを止め、暗闇の中を凝視する。弓を使う者だからか、
緋睡は視力が良い上、夜目も良かった。そのスキルを生かして、敵
の攻撃がどこからくるのかいち早く視認しようとする。

薄らと、何かが見えた。

野球ボール程度の大きさの物体が。

それだけ見れば十分だった。

緋睡は再び手短な木の陰に隠れると、迫ってきていた氷弾は木を
弾き飛ばした。

氷の飛沫と薄い霧を散らす中、緋睡は見た。

深淵の闇中、動く人影を。

——逃がしませんッ！

思いは一瞬後、行動へと変わった。

袖の中に隠し持っていた札を取り出す。その札には『焰』と書か
れており、それを召喚した矢の先端に取り付けた。

その後、その影目掛けて緋睡は射る。

風を裂き、疾風の如き勢いで前進する。

——当たるでしょうか？

その結果は思った瞬間にやってきた。

爆発音。そして紅の色だ。

大気を震わし、周囲に燃え上がる赤を残して矢は消滅した。

夕焼けの太陽のような明かりの中、肝心の人はそこにはない。ど

うやら避けたようだ。

「ふふ……。夜だというのにずいぶんと明るくなったねえ。おかげでちょこまかと逃げていたやつのはつきりと拝むことができたわけだけど」

声より早く、緋睡はそちらへと振り向いていた。
そこには、

「アルフォート……」

忌むべき仇がいた。

呼ばれると、ダークブルーの髪の少年は、意地悪く犬歯を見せ、嗤いを見せてきた。

「やれやれ、自然破壊だねえ。こんなに木を燃やして……。焼畑農業でもするつもりかい？」

「……そうですね。ですがそのためにはもう少し肥料がほしいですね。——人の死体とか」

「ふふ、怖いねえ。怖い怖い。出来もしないことを平気で言っのねえ」

おどけるアルフォート。ちっともそのようには思っていないようだった。

「ならこれから試して差し上げますよ」

「へえ。そいつは楽しみだねえ。死体はきみかな？」

「貴方ですよ」

「へえ。そう」

頷くと同時、アルフォートが間合いを詰めてきた。
時間は一瞬。

瞬きをする程度の中に、アルフォートは緋睡を短剣の攻撃範囲内に収めた。

バックステップで距離を取るためにはすでに遅すぎる。

とつさに腰に提^さげていた小太刀を引き抜き、それを防御に回した。
キン、と齒切れの良い金属音。

凶器が交わり、両者の顔が近づく。

「やれるものならやってみなよ」

それは緋睡に対する挑戦だった。

その後、緋睡を押しつけるようにしてアルフォートはバックステップをして距離を取り、

「無理だろうけどねッ！」

再び近接してきた。

緋睡は迫り来る斬撃を読み、片っ端から受け止める。

攻撃は嵐のごとく。僅かでも手を休めれば自分の血を見ることになる。

五合、六合……と、とてつもない速さで短剣と小太刀が交じり合う。時間にして三秒と経っていない。

緋睡は徐々にだが押されていた。もともと近接戦闘は生業^{なりわい}としていないのだ。やり慣れているアルフォートと何度も交えていれば実力は歴然としてくる。

小袖、緋袴に裂傷が走る。敵の斬撃が届いてきているのだ。

何とかして距離を取らなければ、確実に押し負かされてしまう。

だが、緋睡がバックステップして距離を稼^{かせ}ごうとしてもアルフォートは吸い付いたように離れることはない。このまま押し切るつも

りだ。

銀閃は蛇のよう。前方からさまざまな角度から放たれてくる斬撃はさしずめそのように感じられた。

だが決して太刀筋が荒いわけではない。型を整えた上ですべて放ってきているのだ。

剣術の腕はプロの上を往くだろう。もしかしたら、自身の兄よりもすごいかもしれない、と緋睡は思った。

だが、すぐにその考えを却下する。負け腰の思考をすることは、負け犬のやることだ。

——勝ちを取りにいけます。

敗北思考を止め、勝ちを手に入れようと切に願った。

だが、そんな想いをせせら笑うかのようにアルフォートの猛功は途切れることはない。

どうにかして止めなければならぬ、と思うものの、敵の太刀筋を捌くだけで手いっぱいだった。

「はああああ——！！」

気合いの咆哮とともに、アルフォートから繰り出される一段と強烈な横薙ぎ。

それを得物で受け止めた緋睡。だが、受け止めた際の衝撃で数歩仰け反ってしまった。

好機、とばかりに追い打ちを叩き込んでくるアルフォート。

「くッ」

苦虫を噛み潰したような顔になりながらも、アルフォートの太刀筋を読み、斬撃を免れる。

直後、左脇腹に鈍い痛みが走った。

なに？ と疑問を持った時にはすでに遅い。

緋睡は数メートル低空を飛び、背から地面にスライディングをし、飛ぶ軌道上にあった木で後頭部を強打した。

背に焼けつくような痛みを感じ、脳が揺さぶられているような感覚の中、緋睡は自分が蹴撃しゅうげきされのだと悟った。

目眩を覚えながらも緋睡はすぐに立ち上がるうとする。

すると緋睡の鼻先に銀光を放つものが突き付けられた。

無論、短剣の切っ先である。

立ち上がるうとする動作を強制的に停止させられ、緋睡はまず、自分に向けられている鋭利な刃物の先端を凝視し、次に忌々しく見上げた。

「チエックメイトのようだねえ」

未だ燃え盛る紅が暗闇を明るくしているので、アルフォートの表情が嫌なほどよく見ることができた。

嗤い。

他人を嘲る、狂気的笑みだ。

「さて、どう殺してほしい？　一思い？　じわじわ？　どっちだい？」

緋睡は無言。

自分を見下し、快楽に浸っているアルフォートを、敵意ある眼差しでただ睨みつける。

敵に屈する真似を決して取ろうとしない緋睡。それは矜持きょうじから為せる業なのだろう。

やがてアルフォートは、緋睡の真意がわかったように、そう、と小さく呟いた。

「……なら、死になよ——」

冷たい宣告とともに、
緋睡に凶剣が迫った――。

第1章 - 8 闇夜の襲撃者

絶界の壁が紫色をしているため、月は白光ではなく、紫光を高校の裏山に注がせていた。

その山頂。樹齢百年を裕に越しているであろう大樹が一本、緑の絨毯に植えられている中、黒髪の少年と灰金色の髪の青年が向かい合っていた。

二人の間に和やかな空気はない。あるのは、触れれば切れてしまうような、鋭さをもった雰囲気だ。

翼は銀灰髪の青年——ヴァルフアムルクを睥睨^{へいげい}し、機を窺う。身体の正中線にピタリと構えられた刀身は揺らぐことなく、ただ毅然と敵に威を放っていた。

ヴァルフアムルクは剣を構え、同様に翼を睨んでいる。冷たい、だがその奥に強い信念を秘めた目……。

剣は片手で握られていた。腕一本で十分だ、と言わんばかりに。

翼の背後には、天真が木に背を預け、瞼を閉じている。動く気配は、相変わらずない。

——先輩の仇を取ってみせる。

もつとも、今敵対している相手は直接的な仇ではないのだが、アルフォートと何らかの繋がりがあるのは確かなため、無関係というわけではない。

夜風が吹く。

春もまだ始まったばかりということもあり、肌を伝うのは冷えた風だ。

芝生が波立ち、木々の梢がざわざわと揺れる。

緋睡は先ほど、森へと駆けて行ったアルフォートを追いかけて、ここにはいない。ゆえに援護は期待できないと考えたほうがいいだろう。

「真道翼。お前はなぜソーサリー・クリスタルを収集している？」

突然、ヴァルフアムルクがそのようなことを質問してきた。

「なぜって……それは……水晶が悪用されるのを防ぐためだ」

「なぜそのような真似をする？ お前がそこまでする意味が、わたしにはわからない」

指摘され、翼はそういえばそうだと、思う。

自分はいつたいなぜ水晶を探しているのだろう、と。

命の危機に苛まれながらも。

だけど今はそれを深くは考えないようにした。

今は、これから起こる戦いに意識を集中しておくべきだ。

「それは僕も同じだ。貴方がなぜ、ここまでして水晶を取ろうとするのか、僕にはわからない」

確かに、とヴァルフアムルクは納得の様を見せた。

「だが、人は他人を理解することはできない生き物だ。そう考えると、わからないのも頷けるだろう」

「……僕はそうは思わない」

そうか、と頷くヴァルフアムルク。

その後続いたのは逆説だ。

「だが、お前の抱いているその思念は幻想に過ぎん。他人が理解できた、と思うのなら、それは理解できた気になっているだけだ。人と人との間には、常に深淵が存在している」

「……だけど、何度も会って、交流したら、その溝を埋めていくこ

とができるはずだ」

甘いな、とヴァルフアムルクは翼の意見を一刀両断した。

「この世には、決して埋まることのない溝があることを知れ」

その後、風が止み、それが戦闘開始の合図となった。

先に動いたのはヴァルフアムルク。

神速をもつて、十メートルほどあった翼との距離を瞬きをする間にゼロにした。

その後、繰り出されるのは上段からの振り下ろし。

大気の圧力が感じていないかのように、その一撃は素早い。

——速いッ！

全身に氷水が血液の代わりに流れているような錯覚を感じながらも、翼はその剣撃を受け止めた。

火花が散り、刃が軋み合う。

ジリ、と踏ん張っていた土を滑らせる。

重い。

巨石を棒一本で受け止めた所業を成し遂げたように感じられた。

「初撃は防いだか……」

吐く息とともに出された言葉。口調は淡々としていて人間味に欠けている。

しばらく鏖迫り合いを行っていたが、青年は突然、大股一步分程の間合いを取った。

刹那、ヴァルフアムルクは下段に得物を構え、再び迫り来た。

下段からの逆袈裟斬り。

攻撃は左脇腹からだ。

もともとそれほど距離が離れていなかったので、攻撃にかかった

時間は三秒も経っていない。

翼はその二撃目も受け止めた。

ふ、とヴァルフアムルクは息を吐く。まるで余興はこれくらいにしておこう、とばかりに。

「耐え切れるか？ わたしの攻撃に」

その発言と同時に、小手試しは終わった。ただの二撃をもって。

再び、ヴァルフアムルクが距離を取る。だが今度は、先ほどのような小距離ではない。大きくバックステップして、距離が初期の状態に戻った。

そのとき翼は気づいた。

ヴァルフアムルクが、片手で剣の柄を握っていることに。

戦う前から全く変わっていないことに。

だとすると、先ほどの一撃二撃は片手で繰り出していたことになる。

額に汗が浮かぶ。

嫌な汗だ。本能が危険を察知しているというシグナルだった。

しかし、それ以上は弱気を見せない。翼の眼光は絶えず敵を射抜いており、闘気に満ちていた。

ヴァルフアムルクはゆっくりとした動作で、剣を両手で持ち直した。

割れたガラス片のように鋭い瞳が、翼を視界に捉えている。

「——行くぞ」

刹那、ヴァルフアムルクは動いた。

疾走。

それはまさに、一陣の風。

距離が詰まるのはごく一瞬。瞬きをする時間だ。

ヴァルフアムルクはまず、下段からの振り上げを行ってきた。とつさに後ろにステップを踏み、翼は回避する。

視界に銀の弧が映り、自身の前髪が数本持つていかれたことを知る。

その仕返しとばかりに、翼は下段からの一旋を繰り出した。

——当たるか？

「甘い」

翼の思いは、その一言とともにやってきた一撃によって粉碎された。

上段まで振り上げた剣をヴァルフアムルクはとつさに持ち直し、一気に振り下ろすことで翼の旋刃せんじんを叩き落としたのだ。

結果、翼の刀身は本来行くはずだった軌道を逸れ、地面に先端を埋もらせる。

すぐに体勢を立ち直そうとする翼だったが、ヴァルフアムルクはすかさず横一文字に振りにかかった。

危険を察知し、翼がバックステップすることによって剣を抜いたのと、ヴァルフアムルクの一閃が翼の身体に走るのは同時。

腹に漢字の一を斬りつけられた翼は、紅を流星の尻尾のようにしながら、ヴァルフアムルクと距離を取った。

激痛。

腹が熱せられた鉄板で焼かれているように疼き、翼は苦悶に顔を歪めた。

傷を押さえて、少しでも止血をしたい、と思う翼だが、敵はそれを許すはずがない。

開いていた距離も一瞬とも取れる時間で詰められ、再び攻撃が襲ってきた。

斬と貫の猛撃。

それは、速くて重い。

ヴァルフアムルクの剣の種類は翼のものと全く同じロングソードだ。ゆえに武器の性能には左右されていない。

だとしたら結論はただひとつ。

純粹に実力差が出ているのだ。速さも、太刀筋も、放たれる闘気も、すべて相手のほうが格上だと、翼は悟った。

——それでも……負けるわけには……。

いけない、と翼は思った。

思う間にも、頬、肩、腕、胸、脇……と裂傷が走る。

幸いというべきか、腹の痛みのほうが優っているようで、傷つけられた際に痛みは感じていなかった。

——なんとかしないと……。

その思いに反して、翼の身体は鈍重になっていた。真綿で首を絞められているように、徐々に徐々にと。

——なんとかしないと……。

思った時、脇腹に傷が入った。

ヴァルフアムルクが突きをし、翼が紙一重で避けようとした結果だ。

傷は思ったより深く入ったようで、翼は苦痛に口と眉を歪ませる。身体からは絶えず血が衣服を伝って、地面に滴を垂らしていた。

それは緑の地面に、ところどころ紅の斑点が付いている。それは死を臭わせ、決して気のいいものではない。

——なんとかしないと……。

視界がグラついて来た。

血を流し過ぎたのだ。魔力での新陳代謝促進の効果よりも、傷つけられる速さが凌駕しているために。

なんとかしないといけない、と思う一方、敵はそれを叶えまいと剣撃を繰り出す。

その剣撃で傷つき、身体が鈍くなり、より一層攻撃を受けやすくなる。

——なんとかしないと……。

何度も、翼は思う。

刹那、ヴァルフアムルクから横殴りの一撃がやってきた。とつさに翼は護りを取る。が、踏ん張りの足が利かなかったため、刀身と刀身がぶつかり、翼は吹っ飛ばされてしまった。

十メートル近く地面を転がり、地面に両膝を着く翼。

息は乱れ、右手で剣を握り、左手で傷口を押え、立ち上がる。

止めの絶好の機会だというのに、ヴァルフアムルクは向かってこない。

油断か、それとも余裕か。

おそらく後者だろう。

こちらは傷だらけだというのに、ヴァルフアムルクは掠り傷ひとつついていないのだから。

ヴァルフアムルクは顔色ひとつ変えていない。鉄の仮面を被っているように、表情は無だ。

「諦めたらどうだ」

淡々とした口調で、ヴァルフアムルクは言葉を放った。

翼は首を左右に振る。口の中に血の味が充満していて気持ち悪く、極力言葉を発しなくなかったために取ったりアクションだった。

「……なぜ……お前は諦めない」

静かに放たれた問いかけ。

口の中が気持ち悪く、極力言葉を紡ぎたくない翼だったが、

「諦めたら……全てが終わるからだよ……」

不思議と、そのような言葉を発していた。

相手が答えを待っていたような気がしたからかもしれない。

「諦めたら全てが終わる、か……」

ヴァルフアムルクは翼の言葉を反復し、しばらくの間を置いてから、そうか、と頷いた。

やがて、ヴァルフアムルクは剣を構えた。どうやら、会話はこれで終わりのようだ。

翼は先ほどの会話の間、傷を癒すのに専念していたが、掠り傷程度を直すだけで手一杯だった。腹の傷は少しだけ塞ぐことができているが、塞いでいない部分からは今もなお血が流れている。

翼は今や、立つのが手一杯だった。防御はかろうじてできるかもしれないが、自ら攻撃を仕掛ける体力は残っていない。

「ここまで立つことができた褒美だ。一瞬で楽にしてやろう」

ヴァルフアムルクは宣告した。

翼の敗北宣言を。

翼の死の宣告を。

——なんとかしないと……。

これで何度目だろうか、そう思うのは。翼は数えていないのである由もない。

だが、思ったところでどうすることもできないことは、翼自身が知っていた。

これから来るであろう敵の攻撃を、ただ忌まわしく見据えているしかないだろう。

ヴァルフアムルクは剣先を翼に向け、

「終わりだ」

驀進^{ばくしん}してきた。

苦渋の面容をし、翼は見てくれだけの剣の構えを取ったまま、敵の姿を睨みつけていた。

鋭利な、刃先が、心臓を、穿とうとする……。
そのとき、

「——ッ！」

不意にヴァルフアムルクは進路を変えた。

翼に急速接近していた彼は、直角に跳び退いたのだ。翼から見れば右側に跳んだことになる。

なに？ と翼が思う暇はない。

左側から影が飛び出し、それがヴァルフアムルクのもといた場所で銀の弧を描いたからだ。

銀の弧は、見れば大剣から繰り出されたもの。

その大剣の持ち主は、少女だった。

身長はおよそ百六十センチ……否、それ以下と思われる。

少女は、腰より下に伸びた長い金髪を二つのリボンで括り、ツインテールをしていた。

丸くて大きい碧眼と、細い輪郭から顔立ちはやや幼い印象を受けるが、少女から発せられている凜然とした空気が幼さを帳消しにしている。さらに、月光に照らされている肌は白く、北国の雪を連想させた。

体格はとにかく小柄だった。

華奢とも言い換えられるその体格からは想像がつかないほど巨大な剣を、彼女は平然と構えている。

誰だろう？ と疑問符が浮かぶ翼だったが、高校で天真に言われたことを思い出した。

『金髪のツインテールの女に気をつけたほうがいいぞ』

先輩は確かに、そう言っていた。

——ということは、この子が先輩からソーサリー・クリスタルを

奪ったのか。

最悪だ、と背骨が氷柱になったような感覚を受ける。

もし目の前の彼女が先輩の言っていた人だとしたら、自分の身もただでは済まない。

ましてや翼は今、傷だらけで攻撃する体力が残っていないのだ。彼女と戦いになってしまえば最後、確実に自分は殺されてしまう。危機感を募らせる翼。

だが見ると、少女の狙いは自分ではないことに、翼は気づいた。ツインテールの少女の視線は、ヴァルフアムルクに向けられている。それに準じて少女の得物の切っ先も彼に向けられていた。

どういうことだ？ と翼は疑問に思ったが、考えられる節はひとつしかない。

——あの二人は敵同士なのか？

語尾が疑問だが、目の前の光景を見れば、ほとんど断定的なものだとわかる。

そこまで推測したところで、視界の薄れが一層ひどくなり始めた。血を流し過ぎたのだ。

気合で意識を現世に維持させようとするが、それに反して闇が濃くなっていく。

霧のように思考も霞み、翼はやがて気を失った。

第1章 - 9 闇夜の襲撃者

金髪のツインテール少女は、先ほどまでヴァルフアムルクと戦っていたのである。少年が気を失い、地に伏したのを横目で確認した。死んではないだろう。おそらく、代謝能力を促進させたことで寝ただけだ、と少女は解釈した。

互いに放っているのは敵意の視線。それも、息の根を止めようとする殺意が込められているものだ。

敵には傷ひとつついていないことを、少女は視認する。どうやら少年はヴァルフアムルクに一太刀も浴びせることができなかったようである。

だが、それも仕方がない、と思う。

少女は何度か、目の前の青年と何度か対面し、実際戦ったことがあった。

もっとも、戦った回数はたった一度で、時間にして五分とやりあっていたなかったのだが、そのとき自分は、一撃も相手に与えることができなかった。

そのとき、対する自分は相手から何太刀か浴びせられたことを、少女は思い出した。致命傷は受けなかったものの、あのまま続ければ負けていただろうと。

今こうして対面しているこの時も、少女は内心冷や汗ものだと感じていた。もし戦いになれば、自分は勝てるだろうか、と。

最初の不意打ちも気づかれ、そしてかわされた。あの一撃で仕留めるしか方法がなかったにもかかわらず。

卑怯だと言われるかもしれないが、命をかけ戦いにおいては、そのような手段を使わなければならないのだ。そうしなければ、自分が殺されてしまうかもしれないから。

——向こうもそれに気づいているはず……。

冷や汗を一筋、額から垂らす。

そのときだ。

ヴァルフアムルクが、剣を鞘に収めたのは。

「……どういふつもりですか？」

澄みきった、それでいて凜々しさを匂わせる声で、ツインテールの少女は訊いた。

青年は、別に、と前置きし、

「興が殺がれた。だから退くまでだ。それに……」

と言った後、周囲の空を見渡す。

少女もつられて空へと視線をやると、先ほどまでやや紫がかったいた夜空が、ただの黒になっていた。

絶界が解けたのだ。

術者である少年が気を失ったからであろう。

絶界がない状態で戦闘を繰り広げれば、一般人に自分たちの存在を知らせることになってしまう。

それでも、もう一度構築し直せばいいだけのことだが、それを彼がしないということは、

——眼中にない、ということ……。

腹立たしい、と思う少女だが、その憤りは胸の内になってしまう。

自分と彼は、蟻と巨象との差がある、だから駄目だ、と。

ヴァルフアムルクは踵を返し、少女に背を向ける。

「アルフォートはどうした？ 相手をしたのだろうか？」

去り際に、青年は少女に問うた。

数秒の間を置いて、

「……とつくに逃げましたよ。貴方と一緒にの理由で。貴方たちは余程気まぐれな集団のようですね」

最後の少女の皮肉に、ヴァルフアムルクは口元をわずかに緩め、そうだな、と否定しなかった。

「次はどうなるか、わからないぞ。何せわたしたちは『気まぐれ』だからな」

不敵な笑みを浮かべた横顔を少女に見せ、ヴァルフアムルクは森の闇へと姿を消そうとする。

その際、

「また会おう。ミント・フェルトラント」

「——ッ!？」

どうして自分の名前を？

金髪のツインテールの少女——ミント・フェルトラントは驚きに様相を変化させた。

名乗った覚えはない。

それなのに、どうして彼が私の名前を？

気づけば青年の姿はもうそこにはなかった。森の闇に溶け込み、青年の存在自体が闇だったように。今、追いかけたところすでにどこかに行ってしまったているだろう。

逃がしてしまった、という自分への不甲斐無さと、これでよかった、という安心感、そして、どうしてヴァルフアムルクが自分の名前を知っているのか、という疑問感が少女の心を混沌と支配した。でも、

「これで……よかったということにしよう」

自分に言い聞かせるように呟くミント。

どうせ今は倒せないんだ。だったら黙って見過ごすしかない。無駄死にをしたい、というなら話は別だけど……。

ふとミントは、先ほど気を失った少年と、木にもたれて瞼を閉じている少女へと視線を落とす。

少女のほうは、傷から血は出ていないようだ。傷が深かったことは見ただけでわかるので、瘡蓋になった程度だろう。

ふと、どこかで会ったような気が……、とミントは少女を見てそんな思いが引つ掛かり、記憶を遡ると、

「昨日私が水晶を横取りした人だ……」

あのとき、ミントは通り魔のようにすれ違いざまの一瞬で致命傷にならない程度の傷を与え、怯んだところをソーサリー・クリスタルを奪い、そのまま逃走した。

その際、僅かの間だけ彼女の顔を見ていたので、ミントはその顔と今目前で気を失っている少女の顔が一致することがわかった。

今、目を覚ましたら間違いなく突っかって来るだろう。

お願いだから今は目を覚まさないで、私がここを離れるまでの間は、とミントは心の中で祈った。

次に少年のほうは、まだ新しい傷から血が流れていた。が、古傷は瘡蓋になったのか、気が流れている様子はない。……もつとも、怪我が怪我なので、しばらくは眠ったままだろうが。

ここに来る時に助けた巫女服の少女は、アルフォートと戦って疲弊していたものの、外傷は目の前の二人ほどなかったように思える。

——あの子がもうじき助けに来るはず。

そう思い、立ち去ろうとすると、月の光に反射して、自身の存在を証明しているものが芝生に落ちていることに気づいた。

先ほどヴァルファムルクがいた場所に、それはあった。

拾い上げると、それは自分が模索しているもの——ソーサリー・クリスタルだった。

少年たちのものなのだろう、と察しがつけるのは容易だった。

ミントは水晶を眺め、次に気絶している少年を見る。

しばらくミントは悩むが、それを自分の懐にしまうことにした。

「……ごめんね。悪いけど、私には成し遂げないといけないことがあるから」

他人の物を奪うという罪悪感から、そんな台詞を口から漏らし、ミントはその場から立ち去った。

緋睡が頂上にやってきたのは、その一分後のことである。

第2章 - 1 魔導国からの来訪者

そこは黒の空間。夜の闇をも凌駕する、深淵の漆黒だ。

正方形の空間、その四角に柱が一本ずつ立てられ、壁には明かりがついていない燭台^{しよくだい}、そして部屋の中央の床には紅く光を発する大樹の絵が描かれていた。

そこには今、二人の人間がいる。

ひとりには銀灰色の髪をした青年——ヴァルフアムルクだ。

そしてもう一人は、金髪のセミショートの髪型の少年だ。

瑠璃色の丸い瞳に中性的な容姿をし、白に服装を統一しているその少年は、ヴァルフアムルクの報告に耳を傾けていた。

ときおり眠たそうに瞼を数秒閉じたり、首を上下にコックリコックリ動かしたりと、報告を真面目に聞くような素振りではないのだが、ヴァルフアムルクは律義に腹を立たせることもなく淡々と言うべきことを片っ端から言葉として吐き出す。

やがて、報告が終わると、

「なるほど。クイーンズの妨害が入って、その場は退避した、とそういうわけですね」

ああ、と青年は簡潔に返答した。

そのことに、金髪の少年は怒るかと思ったが、

「まあ、時が来るまで面倒事は控えておかないといけませんからねえ、キミのした行為は正しいと言えるでしょう」

と、特に咎めるようなことはしなかった。

そのことにヴァルフアムルクは、驚くようなさまを見せない。こうなるだろう、とあらかじめ推定していたからだ。

自分たちの存在は、極力表沙汰にならないようにしなければなら
ない。

時が来るまでは……。

「……だが、いいのか？ 水晶は。多分やつらに渡ったと思うが」
「別にいいさ。こっちはもう少しで完成するのですから。向こうも
こっちが仕掛けることに何らかの対策をしてくると思いますが、ど
間に合うか間に合わないかは五分五分でしょうね。偽りとはいえ、
神の雷を振るうには、膨大なエネルギーを必要とするし、それだけ
のエネルギーを調達しようと、連中が必死な様子から想像するに……」

「エネルギーがまだ足りない、ということか」

「ご名答、と金髪の少年は拍手をパチパチと鳴らす。ひとりだけの
拍手は、褒められている、というよりも侮辱されているような感じ
がある。

実際、金髪の少年は敬語で話しているが、口調は他人をからかっ
ているようなおどけたものだ。

「ま、そういうわけだから、余裕ですよ。いざとなったらキミたち
がいますし」

「どうだろうな、とヴァルフアムルクは内心半信半疑だった。そこ
まで余裕でいられる理由が、青年には見出せないのだ。

だとしても、ただのハツタリとも思えないところから察するに、
やはり金髪の少年が見せている余裕は本物なのだろう。

そうだとしたら、どうしてそこまで余裕でいられる？ まるで、
あらかじめ結果を知っているかのよう。

「どうしました？ ボクのことをじっと見て」

「……いや、別に」

数秒の間を置いて言うヴァルファムルク。
すると、何を思ったのか金髪の少年は、

「ダメですよ？　ボクにはそんな趣味はないのですから」

戯言。

口元が意地悪くニヤついているところから察するに、こちらをからかっているのだろっ、と容易に想像がついた。

「一生言っているがいい」

普段より一段ほど低い声で、ヴァルファムルクは言葉を吐き捨てた。

「冗談ですよ冗談。クールな人ほど、からかい甲斐がありますしねえ。つい、ね」

やはりからかっていたのか、と自分の予想が当たり、心の中で吐息を漏らす。

いい加減、目の前の少年と話すのに疲れを感じてきたヴァルファムルクは、

「わたしはもう行くぞ。タブリスにも報告しなければならんでな」
「大変ですね、キミって」

「お前がわたしに頼んだことであろっ。忘れたとは言わせんぞ」

「ああ、そうでしたね。御苦労様」

もう少し気を引き締める、ということができないのだろうか。

ヴァルフアムルクは何かものを言いたげに口元をわずかに動かしたが、嘆息し、踵を返した。

闇から光へと意識が浮上することを覚醒という。

翼は今、それに入った。

鉛のように重く感じる瞼を薄らと開けると、カーテンの隙間から差し込んでいる朝の光が入り、眩しさのあまり翼はつい瞼を閉じる。だが、そのおかげで霧^{もや}がかっていた脳がはつきりとし、翼は上半身を起こした。

その際、痛ッ、という言葉が口から漏れた。

身体が軋む。数多の針が全身を突いているような痛み。

その痛みとともに回想されるのは、昨日の戦いだ。

ソーサリー・クリスタルを目前にして、敵が襲来。その敵は先輩を倒し、自分がその仇を取ろうとしたら、ヴァルフアムルクと名乗る者が現れ、そして……、

「僕は負けた……」

完敗だった。

ただの一撃すらも与えることができず、対する自分は大きな的のように敵の攻撃を当たりまくっていた。

そしてさらなる乱入者が現れた。金髪の、ツインテールをした、女の子。

そこまでで、翼の記憶は途切れている。気を失ったのだから当然だ。

そつえば、誰が自分を運んだんだろうか、と一通りの記憶の整

理ができた後、ふと翼は思ったが、今は気にしないことにした。

目覚まし時計を見ると、針は十二時半を指していた。外は明るいので、昼の十二時半だということがわかる。

完全に学校サボっちゃったなあ。

でも、それも仕方がないこととして割り切る。

軋む身体に鞭打ち、ベッドから抜け出す翼。

とにかくお腹が減った。居間に行けば何かあるだろう。

そう思い、翼は自分の部屋を後にした。

居間に行くと、そこには母親の雅がソファに座ってテレビを見ていた。

「あらあゝ、ツバサちゃん。起きたの〜」

うん、と翼は頷き、

「お母さん、昼ご飯ある？」

「あるわよあゝ。カップラーメンだけど〜。食器棚の上にあるわ〜」

カップラーメンか……、と思いながらも、翼は文句を言わずにそれを食べることにした。

棚の上から適当なカップ麺を取り、お湯を入れ、三分待つ。

三分の空白を、翼は思考して埋めることにした。

緋睡の姿が見えない。ということは学校に行ったということなのだろう。

怪我はしなかったのだろうか、と兄である以上、妹のことが心配

になった。緋睡は何かあっても顔にはほとんど出さないことを、翼は知っている。

頑固というか、意地っ張りというか……。それが彼女のいいところであり、欠点であった。

——やせ我慢してなければいいけど……。

まあそのときは、無理やりにも兄である自分が休ませなければならぬ。

次に思うのは、天真だ。

あの人は大丈夫だったのだろうか。

死んでも死ななさそうな人だが、やはり心配である。

「大丈夫かなあ」

自然と、言葉が漏れた。

「うむ。大丈夫だぞ。安心したまえ」

隣から何か麺を啜る音が聞こえる。

「そうだよな。あの先輩だし、核兵器の直撃受けても平気そうだなね」

「どうだろうな。核兵器は少々難しいと思うぞ」

「そうかなあ。あの先輩ならクレーターの中心で高笑いしてそうだけど」

「少なくとも愛は叫ばないだろうな」

「そりゃそうでしょ……………」

何気ない動作で横を見る。
するとそこには、

「ふふふ……。我が親愛なる後輩、真道翼よ。後輩のおれに対する印象が聞けて、先輩は猛烈にうれしいぞ」

ニヤリと口元を歪ませている黒の長髪の少女がそこにはいた。
思考停止。

翼はとっさのハプニングでフリーズし、解消するための再起動に入る。

それに要した時間は十秒。

「せ……」

自分が作っていたカップ麺を啜っている少女を見て、

「せんぱiiiiiiiiiii!？」

驚愕に翼は叫んだ。

天真は麺を食らいながら、よっ、と挨拶をする。

「どうしてここに!?　っていつからいたんですかあ!！」
「いつからって、おまえがテーブルについてから三秒後にだ。何か物思いに耽っていたようだったから放置していた。ついでにおまえの昼食を頂くことにした」

ついでが明らかに不要だ。

「ってというか学校はどうしたんです?」
「サボった」

堂々と即答する天真。

翼は呆れて吐息をついた。

「あらあゝ。先輩ちゃん、来てたの？」

天真の存在にようやく気づいた雅は、やや的外れな台詞を口にした。

本来は翼のようなアクションをするほうが正しいのだろうか、この母親はどうやら違うようである。空き巣が入ってきたとしても「あらあらあゝ。お客さんですか？」とか言って接待しそうである。

天真は、ご無沙汰してさせてもらっているぞ、と片手を軽く振って、雅に挨拶をする。

「……っていうか、僕のラーメンツ！ どうして食べてるんですかあ！」

「昼抜きでここに来たからな。腹が減っていたのだ」

「だからって人のもの食べないで下さいよ！」

「おまえの物はおれの物、おれの物もおれの物」

最低だ、この先輩。

その言葉を平然と言ったのける豪胆振りはそうそう真似できるものではない。

見れば、天真の食べているカップ麺はすでに汁だけになっていた。天真はそれを翼に差し出し、

「これをやろう。慈悲深いだろう？」

「……無慈悲な上に容赦無さ過ぎだと、僕は思いますね」

翼は諦め、新たなカップ麺を取りに、台所に向かうことにした。

第2章 - 2 魔導国からの来訪者

「翼よ。茶と菓子を持ってきたまえ」

ここは翼の部屋だ。

何処いすこよりわき出た天真は、翼から略奪した昼食を取ると、翼の部屋で待っているぞ、と言って居間を出た。

放っておくと何をしでかすかわかったものではないので、当然のごとく昼食を即行で食べ終わると、翼は自室へ直行した。

自室の扉を開けて、最初に天真が翼に向って言った言葉が前述した通りのものだ。

「……どれだけ遠慮がないんですか、貴女は……」

呆れ口調の翼。

自分の部屋を乗っ取られ、挙句に居直り強盗のようなことを言われれば、そのような反応をするのも仕方がない。

「やれやれ。せっかく人がおまえを家まで運んでやったというのに、もてなしがないとは……」

はあ、とわざとらしい嘆息を漏らす天真。

こっちが嘆息したいよ、と思う反面、

「……あれ？ 先輩が僕を運んでくれたんですか？」

訊くと天真は、そうだ、と肯定した。
でも、確かあの時……、

「先輩、あのとき気絶してたじゃないですか」

「ああ。巫女に揺さぶられて起こされたんだ。迷惑な話だったが、そのときには傷がある程度ふさがっていたしな。身体は多少疼いたが問題ない程度だったし、だから巫女と共同でおまえを家まで運んだんだ。感謝したまえ」

最後の一言がなければ、多少の感謝を心からできただろうね、と翼は恩着せがましい先輩に呆れの念を増加させる。

「そういうわけで茶と菓子、持ってきたまえ」

助けてもらった故に文句も言えないことを知らされた翼は、しぶしぶと台所へ引き返した。

「……ご飯食べた後にお菓子食べると太りますよ」

「何か言ったか？」

小声で言ったのにもかかわらず翼が何か言ったことに気づいたようだった。

恐るべし地獄耳……。

そのデビルズイヤーに恐れをなしたから、というわけでもないが、翼は答えることにした。

「別に」

……数分後、翼は茶と菓子、それと急須きゅうすを盆に乗せて自室に戻った。

盆の上には湯飲みが二つ、ということで自分の分もとりあえず持ってきている。

折り畳み式の円テーブルを組み立て、その上に盆を乗せた。

「いや、すまないな。わざわざ茶と菓子を用意してくれて。やはりおまえは最高の後輩だ」

最高の後輩。言われれば嬉しいことなのだろうが、翼はあまり喜ぶ気にはならなかった。

それに茶と菓子を用意してくれてすまない、と天真は言うが、もとそう仕向けたのは彼女自身である。

はあ、と翼は本日天真と会ってから増える溜息回数をさらに増加させ、自分の湯飲みに口をつけて、気分を紛らわせる。

「……それで先輩。本当に何しに来たんですか？」

「あの怪我だったし、どうせ休むだろうと思っていたのでな、後輩のおちよくり……ゴフゴフ……後輩の見舞いだ」

とつさに言い直したが、遅すぎる。翼は先輩の本音をしかと聞かせてもらった。

どうせそんなことだろうと思ったよ、と翼の中ではどこか諦めにも近い感情が湧いた。

「それじゃあ、食べ終わったらとつと帰って下さいね」

「あまりにも素っ気なさ過ぎるぞ、翼よ」

昨日受けた外傷はほとんど治癒できているものの、身体がまだ重く感じていた翼は早いところ横になりたいと思っていた。

少なくとも、傍若無人な先輩を相手にしてストレス解消ができるわけがない。むしろ増加する。

「昨日の疲れがまだ取れていないからですよ。それにわからないことがあるし、それについても調べるなり考えるなりしないと駄目だ

し……」

「なんだ？ その調べたいことって」

え〜と、と翼はしばらくの間を置き、

「昨日襲ってきた連中のこととか、クイーンズのこととか……」

連中、という言葉に天真は怪訝に眉をひそめた。

「どうしたんですか？」

「いや、敵はあのアルフォートとか言うやつだけじゃなかったのか？」

訊かれ、翼はハツとする。

天真は気を失っていたので、後からやってきたヴァルフアムルクの存在を知らないのだ。

なので翼は、ヴァルフアムルクのことを、天真に簡潔に説明をした。

彼がものすごい剣術の使い手だということ、自分はそんな彼に窮地にまで立たされたということ。

「するとお前を傷だらけにしたやつはアルフォートじゃなかったのか」

そういうことです、と翼は頷く。どうやら天真の中では、アルフォートに負けたことになっていたようだ。ヴァルフアムルクのことを知らなかったのだから当然である。

その際、ついではかりに翼はもうひとつの事項を言い忘れていたことを思い出した。

「そういえば、先輩が襲われたって言ってた金髪のツインテールの女の子にも会いましたよ」

ピクリと、茶を啜っていた天真の眉が不快に動く。

まあ、問答無用で不意打ちを受けた拳句、ソーサリー・クリスタルを奪われたのだから当然である。

もっとも、あれは翼のものだったのだが。

「あつたのか？ そいつに」

「うん。だけどその子、僕が負けそうになっていたときに助けくれましたよ。気を失う前に見たんですけど、なんか女の子とヴァルフアムルク、睨み合っているようでしたし」

結果的に助けられた、という図になっただけかもしれないが、翼は自分の思ったことを言葉にした。

「どういうことだ？ 金髪女とあいつらは敵対しているってことか？」

「多分、そうじゃないんですかね？ もし仲間だとしたら僕たち、あの場で殺されてますよ」

それもそうだ、と天真は認めたくないが認めるしかない、といった面持ちで肯定した。

敗北したのがよほど悔しいのだろう。ましてや金髪のツインテールの少女に闇討やみうちに遭ったその翌日に起きたことである。二日連続二連敗という結果が、天真を内心で憤らせていた。

それを察している翼はどうしたんですか、とは問わない。愚問だ、と考えたからだ。

湯飲みの中が、いつの間にか空になっていたので、翼は急須で茶を追加する。

とそのとき、さらに思い出したことがあった。

「ああ、そういえば……ヴァルフアムルクが確かクイーンズとか言っていましたよ」

あの頃には天真は気を失っていたはずなので、このことは知らないはずだ。

すると案の定知らなかったのか、

「クイーンズ？ …… っというと、あの魔術師のみで成り立っている国のことか？」

おそらく、と翼は答えた。

「これは僕の仮説ですが……あの金髪の女の子って、クイーンズの人じゃないかと思うんですよ」

「……なぜそう思う？」

「どういうわけか彼ら、クイーンズを厄介者のように思っていたような節があつたんです。その厄介者が目の前に現れたとなれば、そう簡単に戦おうとは思わないでしょう？」

翼の意見に、天真は目を閉じ、顎に手を当て、やや考える素振りを見せる。

やがて、そうかもしれないな、と同意が漏れた。

「確かにお前の言う通りかもしれないな、翼」

「はい。ですからクイーンズに行けば、何かわかるかもしれないと、僕は思っているんですけど……」

「肝心の場所が分からないな」

そう。場所が分からないのだ。

別空間にあるという話だが、その空間に入るための方法すらわからない。

何らかの空間転移系の魔術を使わなければならないのだろうか、と翼は考えるが、そんな魔術は生憎と使えない。

事の行き詰り様に、翼と天真は同時に大きな吐息をした。そうでもないと言ってられなかったのだ。

そもそも、どうしてあの三人はこの町にやって来ているのかも気になっていた。

それについてはいくつかの憶測が翼の中に浮かんでいた。

ひとつ目は、彼女を追って彼らが来たか。

二つ目はその逆で、彼らを追って彼女が来たか。

三つ目は、偶然。

——まあ、偶然っぽいけど……。

と、翼は三つ選択肢を考えた割には一番普通なものを選んだ。いずれにしろ、あの三人のうち誰かひとりを問いただせば分かることだ。

「……まあ、向こうの居場所が分からない以上、おれたちは後手に回るしかないってことだ」

と言いながら、天真は腰を上げ、立ち上がった。

どうやら帰るつもりようだ。

「送って行きましょうか？」

何気なく、翼は気を使った言葉を言った。

するとほんの一瞬、天真の顔が驚きの色に染まったように感じられた。

それをしっかりと確認する間もなく、天真は背を向け、部屋の引

き戸を開け、

「ああ、助かる」

と答えた。

気のせいかな、わずかに見えた先輩の横顔は、口元を緩めていたように翼は感じた。

第2章 - 3 魔導国からの来訪者

中心街を南にも住宅地は広がっている。

もつとも、住居は中心街から近いところしかできておらず、規模でいうなら南地区の半分ほどだ。他は開発途中のために灰色の大地が広がっている。

そこに工事に必要なトラックやクレーン車、それに鉄筋等が置かれている。

そこを少し奥へと進むと、天真の家はあった。

「なんというか、いつ来てもすごいすよね。先輩の家って」
「何を言う。おまえの家だって負けてはおらんだろう」

そんな会話をしている翼と天真。その二人の前には高さ五メートルはあるであろう巨大な金属製の門扉が臨場していた。

その門と同じ高さの壁が天真の家を囲っている。

門から垣間見ることができる敷地は案の定広く、西洋の屋敷をイメージさせる。

敷地内は全体的に白で統一されており、清純さが感じられ、さらに門から屋敷まで続く道を中心に、噴水や木々がシンメトリーとなっていた。

翼の家が和風で古風な寝殿造しんでんじょうだとすると、天真の家は洋風で新風な豪邸だ。どちらにしても、すごいには変わりはないが。

ここまでの豪邸が建つというのも、天真の父親が、世界を又に掛けている大企業の社長だからである。主にIT産業を中心に活動しているらしく、次点におもちゃ産業もしているが、基本的に何でもやっている会社である。

天真はポケットからカードを取り出すと、それを門の横に取り付けられていた磁気読み取り機のようなものに通すと、金属がすれる

ような音を立てながら重く大きな鉄門が両側に開いた。

「じゃあな、翼。せいぜい襲われないように帰りたまえ」

それは貴女もでしょうが、と言ってやろうと考えたが、痛い目を見そうだったので止めた。

なので翼は、

「余計なお世話ですよ」

と、月並みの別れの挨拶をした。

それもそうだな、と天真は特に気にすることなく、やがて翼に背を向けて屋敷へと走って行った。片手を肩くらいの高さまで上げ、また明日、とばかりに振って。

振り向きもしないその背に向かって、翼も同様に手を振って応じた。

やがて、その場を立ち去ろうとしたときだ。

「ん？」

ほんの一瞬、視界の最端に何か一度会った人を見たような気がし、翼はそちらへと振り向く。

誰もいなかった。……が、人ひとり入れるくらいの細い道があることに気づいた。

天真はもう屋敷内に入ったようで、門からは見えない。だからといって、気のせいかもしれないので呼び鈴を鳴らすのも気が引ける。しばらくそこに立ち往生する翼。

行くか、否か……。

考えた後、翼は駆けだした。

細道へと。

気のせいかもしれない。だが、そうじゃないかもしれない。

そう思った時、何もしないで後悔するよりも、して後悔したほうがずっといい。そのほうが自分にけじめをつけることができるからだ。

だから翼は細道に行くことを選んだ。

細道は狭い上にジグザクになっており、動きにくいことこの上なかったが、ある程度まで進むと、それはいた。

角に隠れ、翼はそれを……否、そいつを見る。

翼の眼前、息を潜めて見るその先には、ひとりの少女がいた。腰まで伸びたロングヘアを、ツインテールにしている少女が。

間違いなく、昨日翼を助け、ヴァルフアムルクと対峙した少女だった。

少女は何か背負っているが、布に包まれており何なのか判別できない。

——どうしてこんなところを？

歩きたければ表通りを行けばいいのに、と翼は思う。このような人目が余りつかない、住宅と住宅の間にかろうじて存在しているような、こんな細道ではなく。

少女が角を曲がる度に、翼はワントempo遅れて後を追ひ、どこまで行くのかを調べようとする。

ふと、少女が歩むのを止めた。

反射的に翼は角からわずかに出していた顔を引っ込めた。

——気づかれた？

肝が冷える感覚が翼に襲う。

「……誰か、そこにいるよね？」

——気づかれたッ。

疑問が確信に変わった。

「おとなしく出てきて。さもないと……」

ジャキツ、と何かを抜く音が聞こえた。
剣ではない。

もつと巨大な、重量のあるものだ。

あの背に担いでいたものだろう、と翼は察する。

——おとなしく出てこないと、痛い目を見るってことか……。

相手は先輩を襲った人間だ。

同時に、自分を救ってくれた人間でもある。

善人と捉えるべきなのか……。

悪人と捉えるべきなのか……。

肌がピリつく。少女から放たれている敵意によって。

考える猶予の時間はさほどない。悠長に思考を巡らせていれば、間違いなく襲いかかって来る。

——……賭けに出るか……。

翼は覚悟を決めて、角に隠れるのを止め、面と少女と向き合った。得物は生憎と持ち合わせていない。ゆえに戦いになれば苦戦を強いられることは確実だ。最悪、死ぬ……。

それでも出てきたのは、翼はこの少女が悪い人間だとは思えなかったからだ。もしそうなら、あのとき自分を助ける必要なんてなかったはずだから。

少女は翼を見ると、顔色を呆気に変えた。二度も会うとは思っていないかったのだろう。

だがそれもすぐに、緊張に表情を引き締めた。

少女は、やはりというべきか得物を両手で構えており、翼にやや鋭い視線を向けていた。

「……君、だったんだ。私の後をつけていたのは」

そっだよ、と翼は特に声にドスを利かせることなく答えた。

次に、翼は問いをする。

「君の名前は？」

「……どうして、名乗らないといけないの？」

不思議そうに……というか、半ば警戒しているようで、少女は得物を下げようとはしない。

それもそつだ、と翼は思った。
なので、

「それは……昨日、助けてもらったからさ、命の恩人の名前を知りたいなあゝって……思って、ね……」

しどろもどろに翼は言葉を連ねる。

そんな少年の様に、少女は怪訝な顔をして小首を傾げたものの、

「……ミント。ミント・フェルトラント」

と、名乗った。

長い金髪、澄んだ碧眼、やや幼い印象を与える端正な容姿……。それでいて凜とした雰囲気醸し出している少女——ミント・フェルトラントは、簡潔に答えると、

「貴方は？」

「え？ ……ああ。僕は、真道翼っていうんだ」

真道翼、とミントは翼の名前を小声で反芻した。

「……それで、どうして君は私の後をつけていたの？」

持つて当然の疑問だった。

翼もその質問をされるのをあらかじめ推測していたのだが、答えが用意できていなかった。

訊きたいことはある。だが、今訊いても答えてくれるかどうかわからない。

ましてや相手はこちらに対して警戒しているため、その可能性は高い。

「それは……え〜っと……」

言うか言つまいか、声をくぐもらせる。

するとミントは、得物である大剣の切っ先を翼につきつけた。

威嚇。もしくは、早く答えろという意思の表れ。

このままでは確実に戦いになってしまう。それは極力避けなければならぬと感じた。

「ち、違うよ！ 僕は別に、君と戦うためにつけていたんじゃないんだ！ 本当だよ！」

「だったらどうして？」

「それは……」

と再び言葉を濁らせるが、ミントの様子を見ていたら、もはや選択肢などないということを感じ知らされる。

万が一戦いになれば、武器を持っていない以上不利であるし、翼としても本意ではなかった。

なので、覚悟を決める。結果がどうなるうと。

「……実は、君に訊きたいことがあって、それでその機を窺っていたんだ」

「訊きたいこと？」

首を傾げるミントに、翼はうん、と頷きを入れた。
するとミントがじっと、何か考えに没頭し始める。答えるかどうか、悩んでいるのだろう。

しばらくの沈黙。

住宅の屋根でほとんど一日中影になっている細道は、どこことなくぐもった空気が漂っていた。

やがてミントは、大剣を両手持ちから片手に持ち直し、翼に背を向けた。そのまま前進する。

答える気はない……というよりは、ついて来い、と言っているような気がして、翼はその後を追うことにした。

入り組んだ細道を行き続けると、やがて視界が開けた。

「ここは……」

開発地だ。

広大な荒野が続き、点々と工事用具が置かれている。

そこをさらにミントは前に進むので、翼も黙ってついていく。

開発地を歩いて五分。ミントはトラックやブルドーザー、クレーン車が置かれた工事現場の一時的な駐車場のようなところで停止した。

周りがそれらで囲まれているところで、ミントはようやく足を止めた。

周囲に人はいない。気配もない。どうやら完全に二人だけのものである。

「……それで、訊きたいことって何かな？」

振り返り、ミントは翼にそう言った。あいかわらず片手に大剣が握られているが、質問に答える意思はあるようである。

だから翼は、問いを放った。

「実は一昨日、僕の先輩が金髪のツインテールの女の子に襲われたって言ってたんだけど……それって、君なのか？」

質問され、やや躊躇の様子のミントだったが、やがて答えた。

「そうだよ。昨日、君の近くで気を失っていた人のことでしょ？」

うん、と翼は答え、そして確信した。

やはりこの子が先輩を襲ったやつなのだと。

「君の仲間なの？ あの人って」

うん、と翼は肯定する。

仲間……というか、半ば自分が尻にしかれ気味だけど、と翼は内心で自嘲した。

「その……ごめんね。仲間の人を傷つけちゃって……」

そう言って、ミントは頭を下げたことに、翼は驚きを隠せなかった。

形式だけではなく、どうやら心から本当にそう思っているようだ、彼女の真摯な様子から感じ取れる。

翼としてはそれで十分だったので、

「いやあ……その……謝ってくれるのなら別にいいよ」

と言葉を返すしかなかった。……もつとも、天真はどうなのかわからなかったが。

それで少し安心したのか、そう、よかった、とミントは胸を撫で下ろした。

「君は、優しい人なんだね」

「え？」

淡い笑みを浮かべ、褒められた翼は狼狽した。

あまりに予想外の出来事だったのだ。

「あ……いや。そんなことはないというか……その……」

後頭部を掻き、視線を明後日の方角へ向けながら翼はしどろもどろに言葉を紡ぐ。

そんな翼の姿を見て、ふふつ、と無邪気な笑みを漏らすミント。

表情の変化は微々たるものだが、先ほどの鋭利な雰囲気や嘘のようだ、と翼は思った。

だがそれも、次にはやや眉尻を下げ、どこか辛辣な表情へと変わった。

「私としても本意じゃないよ。極力、あいつらとは関係のない人には危害を加えないようにしている」

「あいつら？」

と口にしたとき、翼はアルフォートとヴァルファムルクのことを思い出した。

「君、あいつらのこと知ってるの？」

思わず翼は疑問を投げた。

うん、とミントは頷き、

「詳しいことは私たちにもわからない。ただ昨日会ったアルフォー
トやヴァルファムルクは、自分たちのことを『使者』アンゲリオンと言っている」

『使者』。そんな言葉、聞いたことがなかった。

しかし、先ほど翼はある点が引つ掛かった。

「ねえ。さっき『私たち』って言ってたけど、他に仲間がいるの？」

「うん。君は気づいているかもしれないけど、私はクイーンズの魔
術師なんだ」

やっぱりそうだったのか、と翼は自分の予測が当たっていたこと
を密かにうれしく思った。

さらにミントの話は続く。

「私はクイーンズの国王様からソーサリー・クリスタルを集めるよ
うに命じられて、それで探してるんだ」

「……国王様？ 君って、クイーンズの王様と何か関係があるの？」

「うん。まあ……そんな感じ」

へえ、と翼は感嘆の声。

そのことに多少の興味があつたが、深くは聞かないことにした。

初対面の人に、プライベートのことまで聞く必要はないし、何より
失礼だ、と思ったからだ。

なのでその件は棚に上げ、次へと移る。

「それで、どうしてソーサリー・クリスタルを集めているの？」

クイーンズの国王様がどんな人物像なのかは知らないが、国を統
べている者からの直属の命令だ。そのことから、よほどの事情があ

るということを、翼は何となく感じ取っていた。

ミントは言うか否か悩んでいるようで、瞼を閉じ、顔をやや俯かせている。

時間にして十秒ほど経過して、ミントは顔を上げた。

「——大いなる災いが、起きようとしているから、それを止めるために必要なんだ」

同時、放たれた言葉はそのような内容のものだ。

「大いなる災い？」

翼がその単語を繰り返すと、ミントは、うん、と首肯した。

大いなる災い。

それがいったい何のことなのかはわからないが、少なくともアルフォートやヴァルファムルクが関連していることは確実であろう。

「……よかったら、教えてくれないかな？」

「それは……」

『大いなる災い』がいったい何なのかを問いただそうとすると、ミントは言葉を詰まらせた。

「……ごめん。それは私の独断では決められないことだから……」

「そっか……」

三秒ほどの間を置いて返された言葉に、翼は仕方ないとばかりに首を縦に振った。

所詮は赤の他人。知り合ったのもつい先ほどだ。そんな人間に——から十まで教えるわけにはいかないのだろう。

「じめんね」

もう一度、鎌首をもたげるミント。

「別に謝る必要はないよ。僕の勝手な頼みだったんだから」
「そう言ってもらえると助かるよ」

安堵の色を浮かべるミント。

どこことなくクールで、それでいて女の子らしさがあるその様は、とても魅力的だ。

——って、何考えてるんだろ、僕……。

あまりにも失礼だ。初対面の異性に、平然とその人を評価するなんて……。

「……何？」

キョトンとした様子で、ミントは翼に質問した。

どうやら自分は先ほだから、ミントのことを見ていたようだ。じっと見られて、気にならないはずがない。

「あ……。いや、その……なんでも、ないよ？」

「……どうして最後が疑問形なの？」

「い、いや！ 意味はないよ？」

戦闘時はそれほどでもないのだが、会話においてのつつさのハプニング事項には弱い翼。

しどろもどろな翼に、ミントは頭の中にクエスチョンマークが浮かんでいる様子で、今ひとつ腑に落ちていない様子だった。

「そ、そういえば、君はどうしてこんなところに来たの？」

追い詰められて、翼はなんでもいいから別の話題に転換させようとする。

すると、

「そ、それは……」

今度はミントが言葉を濁らせた。

どうやら言うわけにはいかないようだ。

ただ、

「……ここで、しないといけないことがあるから」

とだけ答えた。

もしかして自分は今、その邪魔をしているんじゃないだろうか、という不安に駆られる翼。

するだけの質問はした。今できる範囲の疑問を彼女にぶつけ、あの程度の答えを得た。

得た以上、ここにもう用がない。故に、翼が不安に思うのも無理はなかった。

「それじゃあ僕、そろそろ戻ることにするよ。質問に答えてくれてありがとう」

謝礼を述べ、翼は回れ右をしてその場を立ち去ろうとする。そのときだった。

「——ッ！」

怖気。

脊髓の中を空洞にして、その中に冷水を注ぎ込んだような悪寒が翼を襲った。

ミントも、先ほどのような安堵の表情から、緊張に顔を強張らせ、周囲を見渡していた。

そんな二人の様子などお構いなしに、次に周囲の景色が一変した。蒼穹の空が、薄紫色に染まった。

空だけでない。大地も、見渡す限りにある重機、建機も、本来の色にプラス薄紫がなされていた。

——絶界ッ!?

それは、襲撃者の来訪を意味していた。

「はいはい。そんなに気張らなくていいよ、お二人さん」

軽薄な男の声が聞こえてきた。

それだけで、位置を特定するには十分だった。

翼とミントは自然と横に並ぶようになり、襲撃者を視界へ捉えるクレイン車の影から、のこのことそいつは現れた。

エメラルドのような緑の長髪に、それと同様の色をした鷹のような切れ目、美青年と呼ばれるであろう端正な容姿、白いシャツの上から上着を羽織った百八十センチはあるであろう長身の男は、二人の反応に調子を崩すことなく、さらに発言をする。

「ハロ、真道翼にミント・フェルトラント。御機嫌はどうだ？」

どういうわけか、その男は自分たちの名前を知っていた。

そんな男に、翼はただ一言。

「最悪だね」

ありのまま、思ったことを言った。
ミントも翼の意見に同意の頷きをする。

「くっはああ——！ そいつは残念だ！ ……だけど、もっと
最悪になるかもしれないぜ」

だろうね、と翼は思う。

無駄話をするために、わざわざ絶界を展開するはずがないのだから。

緑髪の男は、翼とミントをブイサインで二人同時に指差し、

「なんとお！ お前さんたちを抹殺せよのご命令があつて、俺様
はやつてきたのデスヨ！ ワーワーワー、ヒューヒューヒュー、ド
ンドンドーン！」

ついでにパフパフパフ、と口で楽器のものまねをしてみせる。

当然ながら翼とミントは無反応だ。絶対零度より冷めた、それで
いて敵意を宿らせた視線を緑髪の青年にひたすらに向ける。

視線を眼前に向けたまま、翼は隣にいるミントに小声で問うた。

「……あいつのこと、知ってる？」

「いや。私も初めて会ったからわからない。だけど……」

その先は言われずとも分かっている。

油断はしないほうがいい、ということが。

「なんだよ、お前ら。さつきからダンマリ決め込んでやってよ。俺
様チヨー寂し〜」

このまま寂しく思つて退散してくればいいのに、と思うがさす

がにそううまくはいかないことはわかっている。

なので翼は、駄目で元々の覚悟で、

「単刀直入に聞く。——お前は何者だ？」

「俺様か？ 俺様はなあ、殺人をこよなく愛している天才槍術使い、ゲイル様だよ！」

自らシリアルキラーを称する緑髪の青年——ゲイルは、長髪をなびかせながら、堂々とそう名乗った。ついでに白い歯をキラリと見せる。

ふざけたやつだ。

だが、下手に突っかかって行くのはあまりにも危険だ。なにせ翼は得物を持ち合わせていないのだから。

しかしそれは相手も同じだった。

自称、天才槍術使いの彼は、肝心の槍を持ち合わせていない。戦う気がない、というわけではないことは、自分たちを抹殺するという発言でわかることだ。

……否、それ以上に不可解なところがある。

なぜ自分が命を狙われなければならないのか、だ。

相手は渾名を持っていた。だとしたら、あの二人と何らかの関係がある可能性がある。

もつとも、ゲイルは二人のことを一切公言していないのであくまで可能性なのだが。

すると突然、ゲイルはチツチツチ、と一指し指を立て、左右に振る。

「翼ちゃん。俺様が武器を持っていないとでも思っているんだろ
うが……違っただなあ〜それが」

翼の考えを読んだかのように、ゲイルはふてぶてしい笑みを浮か

べながら発言をした。

「それを今から証明してやるよ」

そう言つと、ゲイルは片手を、虚空を掴むように手の平を丸める。槍を片手で持てばそうなるであらう、というような空洞が出来上がる。

不意に、そこから閃光が迸った。その閃光は何かを模るように広がっていく。

召喚法だ。緋睡のような、魔力で練つて作ったものではない、異空間を保管スペースとして、そこから取り出す術だ。

雷光のようなものを発しながら、それはやがてゲイルの片手に収まった。

すなわち、青年の得物である槍が。

槍は天真の使用しているハルバードの形状のものだ。

「それじゃいくぜえ！ お二人さんッ！」

直後、戦いが開始された。

第2章 - 4 魔導国からの来訪者

ミントはとつさに大剣を構え、前に出た。

そのことにより、翼はミントの背後に隠れるような状況となった。得物を持っていない以上、明らかに少年には不利だとわかってい
るからだ。

「そーらよッ！」

繰り出される上からの振り下ろし。それをミントは、地面ごと掬すく
い上げるように大剣を振り上げた。

ブォンと大気を揺るがす音。

刹那、金属音と火の花が咲いた。

花は人々に癒しを与えず、命の散り様を模しているよう。

鏢迫り合い。

そこからミントは、相手の斧刃を弾き、懷に飛び込んだ。

「お——ッ？」

短く声を発し、ゲイルは後方へと身を弾かせる。

ミントはさらに前進しようとする身を屈ませると、槍の穂先が眼前に
迫って来ていた。

疾さは陣風の如く。

とつさにミントは横に跳ぶ。前方へのエネルギーが急に变化した
ため脚が軋みを上げるが、大事な。すかさず次の行動へと移る。

大剣を構え、身を低くさせ、敵に向かって疾走した。

だがゲイルも次手へと行動を移らせていた。

突きで硬直していた槍を、ミントが殺傷範囲に入るなり、

「おらよッ!!」

薙ぐ。

一文字に銀の残像が走り、土煙が舞う。

ミントはそれを、跳躍して避けた。

ゲイルの身長の二倍をいったであろう大跳躍。

空中で身を翻し、ミントはゲイルの背後を取った。

すかさず反撃に移る。

大剣を下段に、背を見せているゲイルを斬り上げた――、

「え――ッ!？」

つもりだった。

斬りつけた直後、驚愕の声を上げるミント。

ゲイルの身体が雲散霧消したのだ。血を流すこともなく。

――幻影!

そういえば、とミントは思う。

斬りつけた際、肉を断つのは違う感覚を得ていたことに。

それはまるで、厚い大気層に刃を通したように。

「残念でした。本物はこちらです!」

背後からおどけた声。

驚きと困惑で身を一瞬強張らせたミント。

振り向いたところでもう遅い、と悟った。

一瞬とはいえ、硬直してしまった代償は大きい。

せめて被害を最小限に抑えようと、ミントは前方に跳んだ。

斬撃ならば、背を掠るだろう。

突きだった場合は、当たりどころによっては死ぬ。

いずれにしても傷を負うことになるが、明らかに前者のほうがマ

シだった。

なのでその期待を込めての行動だったが……。
後ろで音が聞こえた。

衝突と破碎の入り混じった音。

それが連続で三回。

思わずミントが振り返ってみると、そこには白い霧がわずかにあり、そこに辛酸を舐めたような顔をしたゲイルがいた。

彼の周囲には、陽の明かりを受け、ガラスのように光っているものがあつた。

氷だ。

—— いったい誰が……？

そう思ったミントだったが、すぐに思い出す。この絶界の中には、もうひとり自分くらい年齢の少年がいたことを。

ゲイルはミントに視線を向けず、その少年へと向けている。少年

—— 真道翼に。

宿っているのは敵意と殺意、そして蛇蝎だかつも含まれていた。

水を差されたことに対する相手への憎悪心が、ゲイルを吼えさせた。

「邪魔すんじゃねえよ！ 武器持ってねえ小僧はギャラリーになつてりゃいいんだよ！ そしてとばっちりを受けて死ぬッ！！」

翼は無言、突っ立って、ただゲイルの言葉に耳を傾けている……、不意に、翼の姿が消えた。

…… 否、違う。高速で移動したため、消えたように見えただけだ。それに唐突な出来事だった、ということもある。

完全に虚を衝かれた様子のゲイルが、少年が自身の懐に入ったことを把握するのに三秒。

「しまッ——！」

た、を言い終える前に、ゲイルは翼によって吹っ飛ばされた。掌をゲイルの腹に押し当てると同時に、魔力を爆発させて威力を高めたのだ。

「……得物ならあるよ。自分の身体という武器がね」
「この餓鬼ッ……」

出会った当時の軽薄な態度はそこにはない。

代わりに、口から血を滴らせ、怒りと憎悪を滲ませている青年の姿があった。

地に跪ひざまずいていたゲイルは立ち上がると、槍を構え直し、

「ぶっ殺してやるッ……！」

感情を表にさらけ出し、突進する。

狙いは翼。格闘術が得物だとしても、彼は装備の類を一切していない。魔力で身体を護れるのにも限度がある。

とつさにゲイルと翼の間に割り込み、ミントは大剣を振るった。ゲイルの突きは羽虫のように叩き落とされ、しかし即時に次の行動に移る。

斧刃での一旋。

方向は左から。

対するミントも、大剣を右から薙いだ。

直撃。

大気を震わすは直撃の際の振動と甲高い音色だ。

二人は地面に足をめり込ませ、粉塵を撒き散らす。

「邪魔すんじゃないよッ！ そんなに死に急ぎてえのか！」

「死ぬ気なんてないよ。私はただ、貴方の相手をしてあげているだ

け」

「心配しなくとも、小僧をぶつ殺した後に相手をしてやるよ！」

互いに互いを押すのは同時。その力を利用して両者は距離を開かせた。

離れていても感じ取ることができるゲイルの負の感情。

先ほどは翼の不意打ちで運よく一撃叩き込むことができたが、二度は通じない。

彼は負の感情を撒き散らしながらも、周囲の危険がないか肌で感じ取ろうとしている。そのことから明らかに戦闘慣れしていることがわかる。

翼の叩き込んだあの一撃で致命傷を与えられなかったのはかなり辛いところだ。彼も全身全霊を込めたのだろうが、敵にはさほど効いていない。口元から血を滴らせているところから、内臓に多少の損傷があるだろうが、威力の大部分は彼が常時纏っている魔力の障壁によって殺ぎ落とされてしまったためだ。

——もう一度……チャンスが来たら……。

敵を確実に攻撃できるチャンスが出来てくれれば、今度こそは確実に……。

だが、そのチャンスはもはや自分でつくるしかなかった。天の恵みを期待しているくらいなら、自分で相手の隙をつくったほうがよほど効率がいいし、なにより確実だ。

ミントの背後には翼がいる。

格闘の構えを取っているが、槍の間合いには敵わない以上、戦えばミント以上に苦戦させられることは火を見るよりも明らかだ。ならば、とミントは思う。

私で決着をつけてみせよう、と。

麗らかな陽の元、凍てつくような沈黙が戦場を包む。

先ほどまで激昂していたゲイルも、殺意を滲ませた眼差しをそのままに、口を開かせようとはしない。ただ、その機を待つ。

突撃するその機会を。

そよ風が吹き、表面の土が宙に舞う。まるで巻き添えを喰らわぬように、いち早くその場から退散するかのごとく。

風が止む。

直後、動いた。

両者は息を詰めるのを止め、各々の得物を振り上げて、衝突しようとする――。

そのとき、翼は気づいた。

自分たち以外の、新たな気配を。

それは猛然とこちらに迫って来ているのを。

悪寒。

戦慄。

殺気。

それらが渾然一体となって高速をもって接近してきている。

翼は知っている。

この感覚。

全身が凍てつき、氷と化すような感覚を。

翼はつい最近味わっていた。

故にわかる。

これは……、

「ミントッ！ 避けてッ！！」

少女の名を叫び、警告したのと、それが現れるのは同時。

ミントが翼の言葉を聞き終えたときには、彼女の身体は進行方向

に対して真横に吹っ飛ばされていた。

それはまるでトラックに撥ねられたよう。

紅の軌跡を残しながら、ミントは宙を舞い、地面を転がる。

停止したときには、ミントは動く気配を見せなかった。電池切れを起こしたおもちゃのように。

ゲイルも停止していた。突然のことに目を大きく見開いていたが、やがて自分の獲物を吹っ飛ばした相手が誰なのか把握すると、獲物を取られた恨みからか、憎らし気にそいつの名前を言った。

「水さすような真似をすんなよ。ヴァルフアムルクさんよお」

ヴァルフアムルクが、自分を完敗に追いやった青年が現れた。

第2章 - 5 魔導国からの来訪者

シルバークレーの髪と、深蒼の瞳をしているヴァルファムルクは、先ほど付着した血糊を、刀身を振るって落とした。

先ほど同胞が何か言っていたような気がした。

確か、水をさすなとか、そう言った内容だった。

「時間がかかり過ぎだ。それでタブリスが手こずっているかもしれないから様子を見てこい、と言われたのでやって来たまでだ」

「あの餓鬼か……。いらんことをしてくれるぜ。こんなやつらなんか俺様ひとりで十分だっつーの」

軽口を叩くゲイルの口元を、ヴァルファムルクはジトツとした目で見る。

「……一発受けたやつが言っても説得力がないな」

「ッ、うるせえ！ あの小僧の不意打ちがなけりゃ無傷だったつーの！」

小僧、と聞いて、ヴァルファムルクは先ほどからこちらに敵意の視線を向けている少年を見た。

見て、思い出すまでにさほど時間はかからなかった。記憶がまだ新しい、ということもある。

まぎれもなく、昨日戦った相手だった。

名前は確か……。真道翼と言ってたな。

見たところ、傷は全快しているようである。

見事だ、とヴァルファムルクは敵ながら感心した。どうやら並よりはできるようだな、と。

だが、彼の者は一切の得物を持っていない。

召喚法はおそらく使えないのだろう。使えるのならば、牽制として武器を見せつけければいいのだから。

武器を持っていない相手を弄り殺す趣味はないのだが、と思うヴアルファムルク。

しかし、これも任務だ、と割り切り、剣を握り直す。

「悪いな、真道翼。運がなかったと思って諦めるがいい」

「……そんな簡単に、諦められるものか！」

もつともだ。

だが、

「実力がなければ所詮は戯言として片づけるまでだ」

そう言い、翼の息の根を止めようと距離を詰めようとしたとき、

「……う……」

ピクリとミントが動いた。

殺した、と思っていたが、どうやらまだ生きていたようだ。

——やはりあの程度では死なないか……。

まるでまだ生きていることを、あらかじめわかっていたかのように思い、ヴアルファムルクは標的を翼からミントへと変える。ひとりひとり確実に倒すのが彼のやり方だった。

一歩一歩、歩み寄る。

それは言うなれば死のカウントダウン。

一歩刻むごとに、ミントの死が明瞭なものへとなっていく。

だが、距離がおよそ十メートルに差し掛かった時、視界にイレギュラーが入り込んできた。

イレギュラーとは誰なのか、言うまでもない。

武器なしで自分には向かおうとする無謀な少年に、ヴァルフアムルクは言った。

「……邪魔をするな、真道翼」

翼はミントの盾となるように、彼女の前に立っていた。

瞳は闘志で燃え滾っており、折れないということを態度で示す。無論、武器はない。唯一呼べるものは己の肉体くらいだが、それでもガントレットの類を装着していない以上、鋭利な刃物には到底敵うものではない。

目の前にはゲイルとヴァルフアムルク。両者共に強敵だ。それとやはりゲイルは、ヴァルフアムルクと関係があつたんだな、と今更ながら確信を得た。

その内のヴァルフアムルクは別格だ。

実際に翼は昨日剣を交え、その結果は悲惨なものだった。惨敗、と呼ぶに相応しい。

そんな敵ともう一度自分は向かい合っている。それも今度は武器なしで、だ。自殺行為も甚^{はなは}だしい。

それにプラスひとり。決して並の実力ではない敵がいる。

本来なら腰を砕かせて、這いつくばりながらも逃げることだろう。逃げたところで、両者の力量の差を知っていれば、誰も咎めはしない。

しかし、翼は逃げようとはしない。
それどころか、ひとりの少女を庇^{かば}い、拳句に対峙している。
彼にそうさせる理由はただひとつ。

「……なぜ、退かない。必死で逃げれば、今からでも命が助かるだろうに」

憐れみ。^{あわ}

翼の取った行動に対して、ただその色に染めているヴァルフアムルク。

そんなヴァルフアムルクの面^{つら}に、翼は言葉をぶつけた。

「——意地だ」

それはあまりにも短く、簡潔。

目の前で苦しんでいる人がいるなら助けるべきだという、男としての意地ではない、人としての意地だった。

「それが滑稽だと思うのなら笑えばいい。たとえ笑われても、僕は絶対に曲げる気はないから」

それが翼の信念。己を確立させるための道だ。

「ヒヤッハッハ……！ こいつはとんでもねえお人好しだぜえ！」

笑止、とばかりにゲイルは嘲け笑う。そんなのは所詮幻想でしかない、とばかりに。

だがそれとは反対に、ヴァルフアムルクは笑みひとつ漏らしていない。口元すら緩んでいなかった。

深淵の蒼い瞳がただ、獲物を見定めようとしているかのように、鋭く光っていた。

そのことにより感じる威圧、息詰まり。深海の底に沈められたような錯覚を受ける。

「……ふっ」

短く息を吐くと、ヴァルフアムルクは剣を鞘に収めた。
それどころか、得物をしまった後、引き返そうと背を向けた。

「おいッ！ どういうつもりだ！」

我慢できないとばかりに、ゲイルが同胞に吼えた。

「引き返すぞ」

「はあ！？ 何言つてんだ！ 俺様とおめえがいればあいつらなんて簡単に殺せるじゃねーかッ！」

「ならお前ひとりでやるがいい。わたしは見てこい、と言われただけだ。お前の手助けをしろ、とは命じられていない」

「屁理屈言つてんじゃねえぞ！」

「屁理屈ではない。事実を述べているだけだ」

今にも喰つて掛からんとしているゲイルに、ヴァルフアムルクは顔色ひとつ変えずに淡々と言葉を返していた。

翼も信じられなかった。

悔しいことだが、確かにゲイルの言つたとおり、二人がかりで戦いを挑まれば、自分たちは間違いなく敗北するからだ。

目の前に獲物がいるというのに、それを無視する……。信じられない。

チッ、と舌打ちを吐き捨てるゲイル。

「だったらもういいッ！ 俺様ひとりでやらせてもらうからなッ！ おめえは背後で縮こまって見ているか、尻尾巻いて逃げるかしてろッ！」

仲間に暴言を吐き散らし、ゲイルはハルバードを構え、切っ先を翼に向ける。

どうやら本気でやるつもりのようなだ。

翼は体勢を低くし、体術の構えを取った。

「くくつ。そんな構え取ったって無駄だぜえ？ 俺様の武器は槍。リーチでは圧倒的に俺様のほうが有利だ」

卑下した笑いを浮かべるゲイル。

悔しいが、確かにそのとおりだ。

得物を使われる前に懐に入れば勝機はあるだろうが、得物をひとつも持たずにそれをやれるかどうかは絶望的だった。

「あばよ！ 真道翼！ 戒名くらいは俺様がイカしたやつ考えといてやるよ！ だから——」

ゲイルの体勢が低くなり、

「——死にやがれ！」

弾けた。

鉄砲玉のように急速接近してくるゲイル。

翼は脇に逸れようと考えたが、そうした場合、攻撃がミントを直撃することになる。後方に退いても同様だ。

翼の選択肢は二つ。

その場に止まるか。

前進するか。

——よしッ。

決断までにかかった時間は一瞬にも満たなかった。

あらかじめ答えが用意されていたかのように、翼はその己が命令

に従う。

前進。

大地を蹴り飛ばし、反動で翼は高速で突っ走った。

否。跳んだ、という表現のほうが正しい。

姿勢は地面すれすれまで低くさせ、一気に懷に飛び込もうとする。しかし、ゲイルは読んでいたようだ。

槍は上段でも中段でもなく、下段に構えられていた。

穂先は地面を向き、斧刃は翼を向いている。

掬い上げるつもりだ。

それを知ったとき、翼は刹那の間に決断を下す。

「死ねえええええ——！！！」

咆哮と同時に、槍の頭が掬い上げられる。

狙いは腹部。上半身と下半身を分断しようと、それは襲いかかってくる。

——思ったとおりだ。

予測が的中し、翼は行動に移った。

迫りくる斧刃。その刃を翼は両手で、掴んだ。

手の平に刃が喰い込む。

そのとき、脚のバネを弾かせた。

槍の速度に合わせるようにして、跳躍。

槍が振り上げられたと同時に、翼は斧刃から手を放し、宙で身をひと捻りし、ゲイルの背後に回り込んだ。

すかさず、その無防備な背に向けて、全身全霊の一撃を、

「はあああああああ——！！！」

叩き込んだ。

部位は左胸。

拳に魔力を乗せ、直撃と同時に内部にまで傷を負わせる破壊力ある一撃だ。

「——ッ!？」

肺が圧迫され、声を上げることすらもできないゲイルは、宙を一〇メートル程吹っ飛び、軌道上にあったトラックの側部に激突した。衝撃でトラックは傾き倒れ、それをバツクにゲイルは膝を地に着かせる。

翼は両手から血を滴らせながら、その様を眺めた。

「……っの糞餓鬼が……! やってくれたなあ……ッ」

血反吐を出しながら、ゲイルは忌々しげに翼を睨みつけた。視線だけで虫を殺せそうだ。

「ゲイル。やつらをあまり舐めてかからないほうがいい。死ぬことになるぞ」

「うるせえッ! 戦う気がないやつは口出しすんじゃないよッ!」

一切手出しせず、観客と化しているヴァルフアムルクに、ゲイルは罵倒する。

「そうはいかん。今戦力を欠くことだけは避けないといけないからな。忘れたか、ゲイル。我らが成し得ようとしている最終の目的を。目の前の勝利だけを気にしては、決してそれには達することができんぞ」

その言葉に、ゲイルはしばらく抵抗するようにヴァルフアムルクに睨みを利かせていたが、やがて舌打ちをひとつし、

「へいへい、わかったよ。ここは退けばいいんだろ？」

わかればいい、とばかりにヴァルフアムルクは頷き、次に翼を見た。

戦いが終わったことは、先ほどの二人のやり取りでわかっているものの、やはりあのヴァルフアムルクからは、言い表すことのできない何かがあるように翼は圧力を感じた。

「真道翼。退くのなら今のうちだ。これ以上踏み込むつもりなら、命はない」

「命はないって、さっき僕を殺す気でいたじゃないか！」

「生憎だが、ゲイルは本気を出していない。あくまで今回は小手調べ程度に相手をしただけのこと。次は覚悟しておくべきだ」

「ヴァルフアムルク。しゃべりが過ぎるんじゃないか？」

「確かに。そのとおりかもしれない」

自分の行いを恥じるように、ヴァルフアムルクは頷く。

その仲間のようにはゲイルは何か言いたそうにしていたが止め、槍の柄先を地面に着ける。

すると二人の足元に幾何学模様が刻まれた円陣——魔法陣が展開した。

「真道翼。もう一度言おう。逃げるのなら、今のうちだ」

発言と同時に、魔法陣が眩い白光を発した。

思わず翼は目を瞑る。

夜でもないのに周囲は眩く照らされ、やがてそれが治まる。

ゆつくりと翼が目を開けると、そこには二人の姿はなくなっていた。

周囲を見渡すと、先ほどまであった薄紫色の半透明のドームもな

くなっていた。

「……空間転移か……」

己が認知している空間に行き来できる魔術——《空間^{ムーブ}転移》。移動距離によって消費する魔力の量は比例し、そこそこ高難度の魔術である。ちなみに翼は使えない。

それを使って二人は離脱したのだ。

残ったのは両手に傷を負った翼と、地に伏して気を失っているミントの二人。

ミントの姿を見て、どうしようか、などと思う。まさかこのまま放っておくわけにもいくまい。

気づけば、陽は傾き始めていた……。

第2章 - 6 魔導国からの来訪者

そこは白亜の空間だった。

壁と床、それに柱に至ってまですべてが白で、清らかさや清純さより、無のイメージのほうが強く感じる。

在り過ぎる白は逆に人を不安にさせるものなのだ、とヴァルフアムルクは思った。

思いつつヴァルフアムルクは、見た目が自分より年下の少年に、話をしていた。

彼の名前はタブリス。ヴァルフアムルクやアルフォート、それにゲイルを束ねている少年である。

ヴァルフアムルクは、ゲイルと例の二人の対戦の報告をしているところだ。

途中、乱入してしまったが。

だが、それもやむをえなかったことだった。

理由はひとつ。あのまま戦っていたら、ゲイルは危険だった。なまじやつらに油断していたのでなおさらだ。あのとき横槍を入れなければ、痛い目を見ていただろう。最悪、死んでいた。そう思うほど、あのときの少女の内に秘めていたものが強大に感じられた。

そして真道翼のこと。

今回ヴァルフアムルクは戦わなかったものの、ゲイルとの一戦を見れば、明らかに強くなっているように感じられた。不意打ちを受けて一発、そして真正面から対峙してからの一発と、油断していたとはいえ、ゲイルに二発も叩き込むことができたのだから。

力量の差が歴然の相手と戦うことで、実力が急速に伸びているのだろう。……もっとも、強くなった理由はそれだけではないと思っているが。

それに目つきもよかった。それは初めて対峙した時から思っていたことだが、それは決して偶然ではなかったのだな、と今回の件で

はつきりとした。

——意志が彼を強くしているのだろうな。

そうヴァルフアムルクは考える。

タブリスは、ときおりうんうんと頷きながらヴァルフアムルクの話を聞いていた。その表情は柔和で、それが変化するようなことはない。まるで笑顔の仮面を被っているように、その色は消えることはない。

やがて、一通り話し終えたと、

「ふふ……。なるほどねえ。彼がゲイルに傷を負わしたのか……。大したものだね」

と、どこか翼に期待しているような感想を漏らした。

ちなみに、ゲイルはここにはいない。格下に二発も入れられて腹が立っており、気分転換にどこか出かけているのだ。

「……どうしたんだい？ 何か言いたそうだけど」

「いや……。楽しそうだな、と思っただけだ」

「うん、楽しいよ。彼が成長してくれているみたいだしね」

彼、とは翼のことだとすぐにわかった。タブリスはどうも、真道を『使者』^{しづなたし}を使ってどこか試しているような節があるな、とヴァルフアムルクは思う。

理由は分らない。だが、何か裏があるのだろうな、ということくらいは察することができる。

なので、思い切ってヴァルフアムルクは訊く。

「何が目的だ？」

「別に、たいそうなことじゃないさ。ただ、うまくいけば利を得ることが出来るよ」

彼次第だけどね、と後に付け足した。

それだけでヴァルフアムルクは、ある程度把握することができた。少年が何をしようとしているのか。

「……正気か？」

変わらず、淡々とした口調で尋ねる。

どうやらキミもわかったようだね、と一言前置きしてから、

「正気だとも。ただ……そうするためにはある程度把握しておく必要があるだろう？ だからキミたちを使っているのさ」

「お前自身が行けばいいだろう」

いいや、と首を左右に振るタブリス。

「ボクはここを離れるわけにはいかないからねえ。手足となる人が必要なのさ」

「それがわたしたち『使者』というわけか」

そう、と今度は首肯した。

「まあとにかくお疲れさん。これ以上は下手に行動を取るな、て言われているからね、しばらくの間は休憩できるよ」

それは、もう少しで計画が実行されるということの意味していた。もう少しで始まるから外部から妙ないざござは持ってくるな、ということなのだろう。慎重にこしたことはないので、ヴァルフアムルクは賛成だった。

「ただ、こちらの邪魔をされちゃ困るしね、計画がほとんど実行段階に入ったら、クイーンズに妨害を仕掛けるよ」

念には念を、ということか。

確かに、もう少しで計画が実行できる、というところで外から妨害が入れば計画はすべて水泡と化す。妨害してくる相手がわかって
いる以上、先手を打つべきだ。

ただ、

「今は、そのときではないな」

「まあね。しばらく先になりそうかな。と言っても……せいぜい一
二週間だけどね」

柔和な笑みが、いつの間にか不敵な笑みへとかわっていることに、
ヴァルフアムルクは気づいた。

そして思う。

もう少しで、世界は動き始めると――。

夜の七時。

星と月が漆黒の海に浮かぶ時だ。

場所は真道宅。和と古がほどよく調和している家だ。

時間が時間のため、翼と緋睡と雅は居間に集まり、夕食を取って
いる。……のだが、どうも母親を除いた二人はギクシャクしていた。
その原因のひとつに、緋睡がたいそうご立腹であることが挙げら
れる。

というのも、自身の兄が女を家に連れ込んだからである。それも

気を失った女の子を。

警察に電話でもしてやろうか、と考えたが、真道家に泥を塗るような真似はよそうと思い、踏み止まった。兄の顔にいくら泥を塗っても構わないとは思ったが……。

おまけにその女の子は、昨日自分が危機に瀕していたときに助けてくれた人だった。

助けてくれたことには感謝するが、こんなことになるのなら話は別である。

兄に変な虫が付かないように、誠心誠意努力しているというのに、肝心の兄は……。

緋睡の中で憤りが蓄積され、箸を握る力が強くなり、ミシリと妙な音を立てた。

隣に座っている翼はビクリと肩を震わせ、そして一見何事もなかったかのように食事を再開する。動揺していることは疑いようもない事実のようである。

「……あのさ、緋睡。そろそろ機嫌を直したらどう？」

「何のことでしょうか。わたくしは別に機嫌を損ねてなどいません」

さらりと天の邪鬼な言葉を連ねる緋睡。

「そもそも兄上は、何かわたくしに対して後ろめたく感じるようなことをしたのですか？」

追い打ちをかけるように、もう一声発した。

翼は肩をすぼめ、

「……いえ、別にありません」

蚊の鳴くような声で言い、夕食を食べる。

そんな二人の様子を微笑ましく眺める雅。もはや兄妹の一種のコミュニケーションだと思っているらしい。

確かにそういうときもあるが、今回ばかりは違った。

どという経緯があったのかは知らないが、気絶した少女を自宅に運んでくるなど言語道断、愚の骨頂というものだ。

気を失っているのをいいことに、兄が何らかの強行をするために連れて来たのだとしたら……。

そう考えると、緋睡の心は荒涼するというものだった。

「……ごちそうさま」

夕食を食べ終えた翼が席を立ち、台所に行って食器を片づける。そしてそのまま居間を出ようとしたので、

「どこに行くつもりですか？ 兄上」

「え？ いや……ミントのところだけど……」

ミントが、兄が持ち込んできた女の子のことだということがすぐにわかった。

「何しに行くのですか？」

「いや何しに行くって……様子を见に行くんだよ。文句ある？」
「あります」

本来はありません、と答えるべきなのだろうが、緋睡はそんな常識どこ吹く風といった感じで首を縦に振った。

翼も予想外だったらしく、あるんだ……、と呟いて引き戸を開けたまま停止している。

その間に残っていた夕食を胃の中に素早く投入し、片づけをした後、

「それでは行きましょうか、兄上」

「……ついて来るつもり？」

もちろん、と緋睡は肯定すると、翼はやれやれと嘆息を漏らした。

第2章 - 7 魔導国からの来訪者

どういうわけかは知らないが、緋睡は怒っている。

戦闘で鍛え上げられている感覚が、それを訴えていた。

ミントが眠っている部屋まで行く間、翼はその理由がいったい何なのか、首を傾げずにはいらなかった。

どうして緋睡は怒っているんだ？

人を助けたことには異論はないだろうに。褒められることはあれど、咎められる筋合いはないはずだ。

当の緋睡はというと、翼の後ろをカルガモの子供みたいについている。その顔は相変わらずの無表情だが、わずかに不快に瞳を光らせているような気がして、翼としては一刻も早く解放されたい気分である。

そのため足取りも速くなっていたため、ミントがいる部屋までさほど時間がかからなかった。

部屋の前までやって来ると、翼は引き戸をガラリと開けた。

六畳ほどの畳が敷き詰められている和室には、普段ほとんど使っていないせいか畳の独特の匂いが立ち込めていた。

窓もあるが障子で閉じられており、外の月明かりがわずかに差し込まれていた。

さすがにそれだけでは暗いので、部屋に入るなり、明かりをつけた。他には押入れがあり、中には布団が一式だけあったのだが、今、その布団は役目を果たしている。

ちなみにそれ以外の物はない。もともとあまり使わない部屋故である。部屋自体を物置として使おうとも考えられるが、そもそもそんなに荷物があるわけでもないの、完全な空き部屋としてあったわけだ。

そんな部屋の真ん中に、押し入れにあった布団一式が敷かれており、そこにミントはいた。

彼女は今もなお眠っている。クウクウと小さな寝息を立てて、静かに。

翼は彼女の頭の横に正座する。緋睡も引き戸を閉め、兄のそれに倣って、眠っているミントの顔を見下ろしていた。

「……起きませんね」

「まあね。でも、致命傷は免れているはずだから、目を覚ますと思うんだけど……」

致命傷、と聞いて緋睡は眉を潜ませる。

そういえば、戦闘の一件をまだ話していなかった。

何せ帰ってきたのは午後六時頃で、ミントを適当な空き部屋に寝かせておこうとしているところに雅とバツリ出くわして、事情を説明せざるを得なかった。そのとき、緋睡は傍にいなかったために、事情を知らない。

幸い、雅はわかってくれたようで、そのとき用意してくれたのはこの空き部屋だった。

ミントがいることを緋睡が知ったのは、翼が部屋に布団を敷いて、ミントをそこに寝かしていたその時で、それを見た緋睡が熟したトマトのように顔を真っ赤にしていたのを、翼は覚えている。

本来ならばそこで説明するべきなのだが、緋睡がその後、捲し立ててきたので弁護の暇がなく、ただただ妹の言葉を聞き続けていた。そしてようやく治まったときに、翼が弁護もとい事の成り行きを説明しようとしたときには、夕食時だったわけだ。

——ああ、だから怒っているのかな？

そうだ。そうに違いない、と翼は確定付け、訝しい表情いぶかをしている妹に、今度こそ事の成り行きを説明した。

緋睡は初め、疑わし気な様子だったが、翼の言葉に誠意があることを感じ取ったのか、

「……わかりました。要は、昨日の連中の襲撃でこうなったと、そういうわけですね」

そういうこと、と翼は肯定。

すると、手の平を返したように緋睡の機嫌が元に戻ったようで、先ほどまで常時発していた嫌なネガティブオーラのようなものを感じなくなった。

「ですがその話ですと、その……『使者』という輩は、兄上も狙っているようですね」

そう。彼らはどういうわけか、自分も狙っているのだ。

初めて出会ったのは先日のこと。確かに戦いはしたが完全敗北だった故に、自分の存在が脅威と感じて襲いかかってきたわけではないだろう。

悔しいことだが、言ってしまうえば彼らにとって、自分は取るに足らない相手、眼中にも映らないような存在のはずである。

「兄上、何か心当たりでもありますか？」

「ないに決まってるじゃないか。あいつらに会ったのは昨日が初めてなのに」

ですよ、と緋睡は頷く。

そして、はてどうしたものか、と二人が考えていたとき、小さな呻き声が聞こえた。——ミントだ。

彼女は、瞼を重たそうに開け、虚ろな瞳を天井に向けていた。

「目が覚めたようだね」

翼の声に反応するように、ミントは少年に首を傾けた。

意識がまだはつきりと覚めていないようで、しばらく翼の顔をぼんやりと見つめていたミントだが、やがて完全に覚醒したのか、驚いた様子で翼を見、掛け布団の中に顔を半分ほど隠した。

頬が若干紅い気がするが、どうしてだろうか、と翼はやや首を傾げた。

その疑問を察し、答えを知らない様子の兄に緋睡は、

「寝ているところを異性に見られたら恥ずかしがるのは当然でしょう」

と諭した。

言われてみればそうかもしれない、と今更ながら翼は納得する。

「まったく、兄上は女心に疎いうとですから。顔は女性っぽいのに……」
「緋睡。前者も後者も認めるけど、人が気にしていることを言うな」
「事実ですから」

とキツパリ言い切る緋睡に、翼は吐息。

「あの……ここはどこなの？」

調子を取り戻したミントが、布団から顔を出し、翼に尋ねた。

「僕の家だよ。まさかあのまま放っておくわけにもいかないし、運んで来たんだ」

運ぶ以外にもっと物の言い方がないのでしょうか、という意味を含んだ緋睡の視線が辛い。

正しくは背負って来た、である。

両手に傷を負っていた翼はまず、魔力で自己代謝能力を急激に上

昇させ、五分余りでそれを塞いだ。

そのため身体が一時的に重くなり、眠気も襲ってきたが、我慢できないほどではないので、その後ミントを背負って、自宅まで歩いてきたのだ。

中心街を歩くときは、衆人環視が辛かったなあ、としみじみと思う。

「ありがとう。わざわざこんなことしてくれて」

「いいんだよ、別に。困っている人がいたら助けるのが人情だよ」

「女心がわからない人が人情を説きますか……」

「嘆息混じりにそんなこと言うな」

好きで分らないんじゃない、と後に翼は付け加えた。

するとミントが、可笑しそうにふふ、と笑みを漏らした。

「……何でしょうか？」

翼が問おうとしていた矢先、緋睡に先を越された。

「いやその、ごめんね。愉快な人たちだなんて思ってたさ」

「……兄上のせいでこう言われていますよ」

「いやいやいや！ 何、責任全部僕に押しつけてるのさ！」

「事実ですから」

サラリと何のためらいもなく言っただけの緋睡。そういえば、数分前に同じ台詞を聞いたなあ、と何気なく思う。

そんな様子を口元に微笑を浮かべながら見ているミント。

そんな少女の様子が視界に入っただけ、翼はこれ以上、緋睡と言いつつのを止めた。

そのせいかその後、しばらくの間静寂が訪れた。先ほどまで陽気

な雰囲気包み込んでいたので、温度差は激しい。

「……あの。君にお願いしたいことがあるんだけど……いいかな？」

静けさを破ったのは、ミントのそんな一声だった。

とつさに翼が反応する。

「いいけど……どうしたの？」

「本当はその……迷惑かな、と思っていたんだけど……」
「是非、話してくれないかな？」

躊躇いの様を見せていたミントだったが、翼のその一言で、うん、とミントは了解した。

「私と一緒にクイーンズに来てほしいんだ」

言われ、翼は驚きに顔色を変える。まさか自分が行くとは思ってもいなかったからだ。

さらにミントの言葉は続く。

「急なのは分かっているよ。だけど、君もやつらに狙われている以上、詳しい話を向こうで聞いてほしいんだ」

「君から話を聞いちゃ駄目なのかい？」

「……ごめん。私から言う権限はないから」

それだけ言っつて、ミントは若干俯き、翼から視線を逸らした。
唐突だな、と翼は思う。

しかし同時に、自分がいったい何に巻き込まれているのか知るチャンスだとも考える。

何も知らないまま殺されるか、

知らされて戦いに臨むか、
思考し、しばらくの間を持って翼は決心する。

「わかった」

それはつまり、承諾の返事であった。
それを聞きミントは顔を上げ、緋睡は声を上げる。

「兄上！ 本気ですか？」

「本気だよ。クイーンズに行こうが行くまいが、僕が狙われている
ことに変わりはないんだし。何より、今何が起きているのか分かる
チャンスだしね」

翼の決意に揺らぎはない。一度決めたら、それが間違っていると
指摘されない限り、前進し続けるのが彼のモットーだ。

「……でしたら、わたくしも行きます」

え？ と翼とミントは声を出す。
ポカンとしている二人にかまわず、緋睡は言葉を連ねた。

「兄上だけでは不安極まりありません。妹として当然の選択です。
——かまいませんね？」

両者にそう尋ねる緋睡。その瞳はやや睨みが利いており、頼むと
いうより脅迫染みていた。

緋睡の気迫に押されたミントは額に汗を浮かべながら、うん、わ
かったよ、と承諾を入れた。

「緋睡。何をそんなにムキになってるんだ？」

「別にムキになどなっておりません。先ほど申し上げました通り、兄上があまりにも心配だからついに行くまでです」

熱を入れて返答する緋睡。そこにはえも言わせぬ迫力があり、翼はそれ以上ものを発することができなかった。

「それで。いつにする？ ミント」

「えーっと……。翼たちの年齢だと、確か学校というのがあるんだよね？」

「クイーンズにはないの？」

さりげなく感じた疑問に、ミントはうん、と答えた。

「十三歳くらいになると、基本的に親の職業を手伝うか、別の店で働くかするんだよ」

へえ、と翼は感嘆の声。

学校がないのは羨ましいが、そんな若輩で働くのも面倒なことだ。

「それじゃあ、学校もあるし、それなりの準備もあるだろうから、明後日出発でいいかな？」

明後日、といえば土曜日だ。学校も何もないのでちょうどいい日である。

「うん。かまわないよ。緋睡もいいよね？」

兄の問いに妹は、はい、と言葉を返した。

「というわけだから、問題ないよ」

穏やかに告げる翼。

それに釣られてか、ミントはどこか安堵した表情を浮かべた。その後、ミントは掛け布団をどかし、立ち上がろうとしたので、

「どこに行くの？」

「どこって、出て行くんだよ。ある程度回復したみたいだしね」

だが、言葉とは裏腹に立ち上がろうとしている拳動はぎこちないものを感じた。

身体の節々が疼くのだろう。相当強く弾き飛ばされていたことを、翼は思い出す。その上奇襲だったため、受け身もろくに取れていないはずだ。

——無理をしているはずだ。

だから翼は、ミントを制止しようと、声をかけた。

「あのさ、よかったら今日と明日と、泊まって言ったらどう？」

「兄上ッ！」

緋睡が抗議の声を出す、翼はおかまいなしだ。母親の雅には、事情を説明すれば了解が下りることだろう。

ミントは呆気に取りられた様子で、翼を眺めている。

とてもではないが、彼女から言葉が出てきそうになかったので、翼はさらに言葉を続けた。

「だって、身体のほうが、まだ完全に治っていないでしょ？ 動きがどこか鈍いというか、見ていて違和感を感じるし」

「そんなことは——」

ない、と言おうとしたところを、翼は自らの言葉で制した。

「それに、互いに近くにいたら、いざというとき対処しやすいじゃない。あいつらが襲撃してきてもさ」

「それは……そうかもしれないけど……」

うるたえるミント。その気持ちはわからなくもない。

それがわかっていて、翼はこれ以上の強制はしなかった。あまり強引過ぎては、彼女に迷惑だ。なにより、緋睡の視線がやけに痛かった。

どうしてだろうな、とつくづく翼は小首を傾ける。これも女心とやらが関係しているのだろうか。

などと考えているうちに、ミントが決めたようで、口を動かした。

「……それじゃあ、君の言葉に甘えさせてもらっていいかな？」

無論、翼は許諾した。

不満顔の緋睡を無視して。

第3章 - 1 魔導国——クイーンズ——

四月五日、土曜日。

場所は、魔来町の南地区に広がる荒れ地広がる開発地だ。

そこには四人の人影がある。男がひとり、残りは女だ。

ひとりの少女の後を、残りの三人がついているといった感じた。

さしずめ、カルガモの行進、といったところか。

土曜日ということもあつてか、それとも開発計画がまだ開始されていないのか、人は彼ら以外にいない。

そして彼らは各々、一風変わったものを携帯していた。

先頭に行く金髪のツインテールの少女は布に包んだ身の丈ほどもある巨大な物体を背負い、紅味がかつた黒髪をリボンひとつで束ねている少女は片手に弓、黒髪の少年は腰のベルトに剣の鞘を、そして黒の長髪の少女はツインテールの少女と同じようにして長い棒のようなものを担いでいる。

「……はあ」

つい溜息を翼は漏らした。

原因は、黒の長髪の少女——天真のせいだ。

本来、彼女はついてくる人の枠に入っていなかったのだが、昨日学校に行ったときに言ってしまったのだ。

「どうした、我が親愛なる後輩、真道翼よ。いきなり嘆息などして」
「……いえ」

まあ、来てしまったものはしょうがない。

くれぐれも破天荒な行いは控えてほしいとばかり願うばかりだ。

ちなみにここに来るまでの間、互いの自己紹介はすでに済ませて

いたため、それ以降、ただただ沈黙が続いた。

だだっ広い荒野を歩くことしばらく、翼たちは周囲にトラック等が駐車している場所にたどり着いた。

二日前、ゲイルとヴァルフアムルクが戦いを挑んできたところだった。

横転していたトラックは昨日工事の人がやってきたのになくなっていたものの、地面が裂かれた跡などといった戦いの爪痕が残っていた。

ここで何をするのだろう、と翼が疑問に思っていたとき、ミントが絶界を展開した。ただし、直径五十メートルほどの、比較的小規模なものだ。二日前に張られたものはその十倍ほどの規模はあった。おそらくゲイルの仕業だとは思うが、どういう思惑があつてそれほどの大規模な絶界を張ったのかは不明である。

単に、自分はこれだけの規模の絶界が張れるんだ、という自慢がしたかっただけなのかもしれないが。

絶界を展開したミントは、次に何か唱え始めた。

どうやら詠唱魔術のようだということが、翼はわかった。ただ、何を言っているのかはわからなかったが。

すると、ミントの足元を中心に半径五メートル程の魔法陣が出現した。

「みんな、乗って」

ミントの声に、一行は従う。

すると、魔法陣が白光に輝き出した。輝きは徐々に増し、やがて視界が白一色に染まった。

不思議なことに、眩しいとは感じなかった。

やがて、視界が白一色から元に戻ったとき、翼は眼前の風景に仰天した。

先ほどまでの殺風景な荒野が一転、そこには芝生が広がっていた。

近くには湖。向こうが霞んで見えるほどの広大な。

そしてその湖と緑に覆われた岸部を囲むように、深緑を茂らせている木々が群生している。

ミントを除く一行が、しばらくの間、呆と周囲を見渡した。

初めてやって来た新地に、心が高鳴る。

吸い込む空気は都会の穢れたものとは明らかに違う。肺の隅々まで清涼な空気がいきわたる。おいしい空気とはこういうのをいうのだろう。

湖の水も透き通っており、底に生えている水草や小魚が泳いでいる様が見えるくらいだ。

空は生クリームのような白い雲がのどかに泳いでおり、太陽の陽は暑く感じず、実に心地よい。

異空間にある世界だという話だが、どうやら基本的なところは自分たちが暮らしている世界と大差変わらないようだ、と翼は感じた。

「みんな、ついて来て」

初めてやって来たという感動もほどほどに、翼たちはミントの後についていく。

群生している木々の先、丘のような小高い場所に、それはあった。魔術師の魔術師による魔術師のための国、クイーンズが。

地面はアスファルトではなく、褐色のレンガが敷き詰められた形で舗装されており、建物もレンガ造りのものが多い。さらに街道には一定間隔でガス灯と思われるものが取り付けられていた。

街道を行き交う人は翼が予測していたよりも多かった。街道の道幅が狭いから、という理由もあるからかもしれない。

行き交う人にぶつからないようにしながら、翼たちは奥へ奥へと前進する。

そうして行くことしばらく、丘の頂上付近まで辿り着いた。

丘の頂上に、クイーンズを統治している国王がいる城が佇んでいる。

た。

例に漏れずレンガ造りであることは、見ただけでわかる。城を頑丈であろう城壁が囲んでおり、外からでは城の二階三階辺りから上くらいしか見ることができない。

そして城の上層部には、なにやら巨大な砲身らしきものがニョッキリと生えていた。

目視でおよそ十メートルはあるだろう。いずれにしても巨大であることに変わりはない。

入口である門前には鎧で身を防護している兵士が二人おり、翼一行がこちらにやってくると思われるや否や、

「止まれ！」

と、制止がかかった。

すると、ミントが翼たちより一歩前に出た。

「ミント様。こいつらは？」

ミント様？

そのフリーズに疑問符が浮かび上がる一行。

「お客さんです。通してもかまわないですよ」

恭しくミントがそう言うと、兵士は、わかりました、と一礼して、翼たちに対しての警戒を解いた。

「お勤め御苦労様」

中に入り際、ミントは二人の兵士に敬いの言葉を捧げ、翼たちはそんな少女の後に続いた。

「なあ。ミントって何者なんだ？ あっさり通してくれたぞ」
「いや、僕に聞かれても知りませんよ」

小声で尋ねて来る天真に、翼はそのような返答したできない。
でも確かミントは、クイーンズの国王様から頼まれてソーサリー・クリスタルを探しているのだ。それなりにすごい称号とか階級とか持ち合わせているのかもしれないな、と思う。

門を抜けると城の出入り口に向かってレンガが道として敷き詰められており、道から逸れた場所は芝生と一定間隔に木が植えられていた。緑がなければさぞかし殺風景な雰囲気になることだろう。

「悪いけど、ここで待っていてくれないかな？ これから国王様に君たちのことを報告しに行くから」

翼が一行の代表として、うん、と頷くと、ミントはそそくさと城の中へと入っていった。

「じゃ、おれはそこらへんぶらつかせてもらうとするか」
「わたくしも散策をして参ります」

天真と緋睡はそう言つと、各々に散つていった。

ポツンとひとり残された翼。

やることがとくにないので、自分もどこか散歩しようか、と思つた時、

「それにしても珍しいな。ミント様が客人を連れてくるなんて」
「ああ、まったくだ。普段あまり他人と関わろうとしないからな、あの人は」

と見張りの兵士二人が話しているのを聞き、翼はその二人に近づいた。

「あの……。そんなに珍しいんですか？」

突然割り込んできた翼に、二人はやや驚いた様子だったが、すぐに平常を取り戻し、

「ああ、珍しいことだ。あの方はなかなか他人と接しようとはしないからな。別に人付き合いが嫌いなわけではないようなんだが、どうも苦手らしくてな。……と言っても、話しかけられたら受け答えをするし、必要な挨拶はするけどな」

そうそう、ともうひとりの兵士が相槌を打ち、

「だから普段はひとりでいるなあ。他人と一緒にいるときなんて滅多にないぜ」

「孤高って雰囲気があるよな」

「そうそう。女の子なんだけど、ああいうところって憧れるなあ、オレ」

その意見は翼も同意だった。

見た目はどこか幼いような印象を受けるが、彼女から発せられている鋭利で精悍な雰囲気せいかんは、真似しようとしてもそうそうできるものではない。だからこそ、ああいうところは憧れを抱いてしまう。

「ねえ。そういえばミントって、そんなにすごい人なんですか？」

「……？　なんだ？　本人から聞いていないのか？　オマエ」

問われ、翼は肯定した。

すごい人かもしれない、とあらかじめ感じていればとうの昔に本人から訊いている。

すると兵士は、あゝ、と声を出し、

「……そうか。まだ完全には信用してないんだな。あの方は」

「……？ まだ完全に信用してないって？」

ん？ ああ、と兵士は頷き、

「そりゃ、自分のことをあの方は話してないんだろ？ なら、まだ完全には信用してないってことになるだろ？」

確かに、ミントから自分のことを話してもらったことがない。出会ってから日が浅いということもあるが、名前と出身地くらいしか分かっていない状況である。仮にもひとつ屋根の下に数日暮したのだから、もう少し何かがわかっていてもいいんじゃないかと思う。

もちろん、自分のことに関して全部教えてくれ、とまでは言わないけど。

「……そうかもしれませんね」

なんだか嫌に気が落ち込む翼。

なぜかは知らないが、両肩に鉛でも乗せられているような感じになる。

「まあそれでも、あの方がオマエたちをここまで連れて来たんだ。それなりには信用しているんだろうな」

「まあそう気落ちするなつて！ 城に仕えて五年くらいになるオレだって、あまりあの方のことは知らないんだからよ」

気休めになるのかならないのか、よくわからない言葉をかけてくる兵士。

「……それで、ミントってどうすごい人なのか教えてくれませんか？」

気を持ち直し、再び問う翼だったが、

「翼！」

と自分と呼ぶ声によって中断された。

振り向くと、ミントがこちらに向かつて走ってきている。背にあればだけ大きな剣を担いで、よくそんなことできるなあ、と感心した。魔力の気配も感じないので、素でやってのけていることがわかる。見た目からは想像がつかないほどに怪力……もとい力持ちのようだがさすがに戦闘中は、ゲイル戦を見る限り、魔力で肉体強化をしているたようだが。

駆けつけ、会話できる距離まで近づくと、乱れていた息を整え、

「さっき、国王様と話をしてきたら、応接間まで連れてこい、とのことだから、後について来てくれるかな？」

うん、と答え、翼は散らばっていた天真と緋睡を徴集した。

緋睡はすぐに戻って来たのだが、天真のほうは早くも何か騒動を起こしたようで、見回りをしていたであろう兵士と口論していた。

「放っておきましょう」

と緋睡が無情に言い放つが、そういうわけにもいかない。後々に悪い噂が立ってしまう。

溜息ひとつし、翼は天真のところまで近づき、彼女と言い争っている兵士に平謝りする。

するとそんな翼に同情の念を抱いたのか、兵士はおずおずと引き下がり、自分の仕事に戻った。

第3章 - 2 魔導国——クイーンズ——

「情けないな、我が親愛なる後輩、真道翼よ。頭をペコペコ上下させて」

「……誰のせいでああしたんだと思ってるんですか？」

「うむ。翼がおれより先に問題を起こしていたとは……意外とトラブルメーカーだな、おまえは。よって頭を下げたのはおまえの責任だ」

無茶苦茶な事実歪曲をした天真。

「貴女のせいですってッ!!」

「あまり騒がないでください、兄上。廊下に響きます」

つつけんどんな緋睡の言葉。もう少し兄に対する^{いたわ}労りがあってもいいのではないだろうか。だが妹の言うことは事実なので、翼はしぶながらそれ以上、先輩と言い争うのを止めた。

城の中は太陽がまだ高いところにあるということもあつて、陽が差し込んでいて明るい。そのため、廊下に等間隔で燭台が設置されていたが、火が灯っていなかった。

廊下を行き来する人は、城を警備する人や侍女であり、移動しながらその人たちに軽く礼をする。すると向こうも同様の行為をした。中にはやや怪訝な視線を翼たちに向ける者もいたが、その中にミントがいることを知ると、そそくさと礼をした。

そういう人たちの挙動を見て、どうやらミントが実はすごい人なのかもしれない、という予測が徐々に確定付けられていた。

やがて、ひと際大きな扉の前で、ミントは停止する。

扉を、ミントは軽くノックをする。

すると見た目通りの重い音を立てながら、扉がゆっくりと両側に

開いた。

まず目に入ったのは、長く紅いカーペットだ。見るからに高級感を醸し出しているそれは、部屋の出入り口から一直線に敷かれており、到着点には椅子があった。ごつてりと装飾された、はつきりいつて座りにくそうな高級感漂う椅子だ。

そこには今、ひとりの男性がどっかりと座っていた。

ワックスが何か付けているような、尖がった金髪。目つきは良し悪しで決めるなら悪いほうで、ギラリとした輝きをしている。さらに、服装はだらしく胸元辺りを開かせており、真夏のビーチで健康に焼けたような褐色肌と鍛えられた筋骨隆々の身体がそこから見えていた。

そしてその隣には側近と思われる男が立っていた。

セミショートの白髪、穏やかさがにじみ出ている容姿。淡青色のローブを着、右手には先端に無色透明の水晶玉のようなものがはめ込まれている杖を持っているという、世間で流布されているような魔術師の典型的な恰好をしていた。

「国王様、先ほど申し上げました三人を連れて参りました」

椅子に深々と腰を下ろしている男に、ミントは深々と頭を下げ、慇懃に言葉を並べる。

国王様！？ この人が？

啞然をもつて、翼は口を開かせる。緋睡も目をキョトンとさせており、唯一天真だけがほう、と違ったりアクションをした。言っっては悪いが、国ひとつを統一している人物とは到底思えない。むしろ、世界中に蔓延^{はびこ}っている暴走族を束ねているように思えてしまう。

「おう。御苦労さん、ミント」

左手で頬杖をつき、右手をひらひらと振り、ミントを労^{ねぎ}う国王。

翼が抱いている王様像が、豪快な音を立てて崩れていく。

隣で穏やかな表情をして立っている側近の人のほうがよほど上に立つ者らしいように思える。本人には悪いが。

すると、そんな翼の視線に気づいた国王は、翼を指差し、

「おまえ、オレを不良の王者のようだって思っただろ」

凶星だったため、翼はビクリと肩を動かした。

「失礼なやつだなあ、おまえ。オレは愛国者だぜ？ 不良のような真似はしねえって。安心しろ」

……なんだろう。誰かに似ている。

その誰かに、翼はつい視線をやると、

「なんだ？ 翼よ。おれがあいつに似ているとでも言いたいのか？」

ずばり指摘され、翼は再びビクリと肩を動かした。

「失礼なやつだ、後輩は。おれは常にオンリーワンを目指している存在だぞ。ゆえに世界におれという存在は二人としないのだ」

……やっぱり似ている。

そう思った翼だが、ここは頷いておくことにした。

「王様。そろそろ本題へと移ったほうがよろしいかと」

「わかったよ、シャル」

翼と天真のやり取りを見学していた国王は、シャルとかいう側近に促された。

「それじゃ、小僧と小娘ども。まずはかるく自己紹介をさせてもらうぞ。もうわかってると思うが、オレがこの国を統べている王であるガルディオスだ。ちなみに先代の国王と女王はもういないから、この国はオレの独壇場になっているから、オレのやりたい放題だ」

独裁者の言いそうな台詞である。……いや、すでにもう独裁者ではないのか、という疑いが生じてくる。

「んで？ おまえらは？」

自分は終わった、とばかりに尋ねてきたので、翼たちは順に自己紹介を済ませた。といっても、名前を言っただけなのだが。

なので国王——ガルディオスの感想は、

「つまらん自己紹介だな」

というものだった。自己紹介に面白さを要求されても困るな、と思う。

その後、まあいい、とガルディオスは本題へと移った。

「さてと……おまえらの話はミントからダイジェストである程度聞いている。その上で、オレはおまえらに頼みたいことがあるんだが……」

一息。

「まず、訊きたいことがあるのなら遠慮なく言え。ミントからだいは聞いているだろうが、それでもわからんことはあるだろうし

な」

なるほど、と翼は悟った。

要するに、おまえたちの知りたい情報を教えてやるから、代わりにオレの要求に従え、ということなのだろう。

だが、要求がいつたい何なのかはつきりしてもらわないと、こちらとしても質問ができない。その頼みとやらが無理難題であった場合、取り返しがつかないからだ。

「あの……、王様。先に王様の頼みたいことというのを言ってくれませんか？」

「どうしてだ？」

と問いをした直後、翼の考えを察したのか、ははあ、と声を発した。

「安心しろ。別にオレの頼みというのは絶対にやれってわけじゃねえから。おまえたちが良いと言ったらそれはそれでオレとしちゃ万々歳だし、嫌だと言ったら仕方ねえなっでことで諦めるからよ」

ですが……、と翼は渋ってしまう。ギブアンドテイクの精神が翼にはあるのだ。

そんな様子の翼に、ガルディオスは軽い調子で手首をヒラヒラさせる。

「気にすんなって。気軽に質問してみろよ。王様の歳いくつ、とか、クイーンズはだいたい通常空間のどこらへんにあるんだ、とか、ミントのスリーサイズを教えてください、とかな」

「国王様ッ！」

ミントが顔をトマトのように紅潮させながら、声を荒げて抗議した。

「冗談だって、冗談」

と、ガルディオスはハッハッハッ、と哄笑した。国王としての威厳が皆無と言ってもいい。どこにでもいそくなおっさんみたいである。

翼の中の国王のイメージがさらに粉微塵に碎かれ、目の前の国王に対して、敬う気持ちが薄れつつあった。

「まあ、とにかく。質問のひとつしてみろよ。だいたいは答えられると思うからよ」

口調が軽い国王のため、信用が今ひとつできない翼。だが、物は試しという言葉があるので、一応問いを放つことにした。

「それじゃあ訊きますけど、『大いなる災い』って何ですか？」

すると、ガルディオスの顔が曇った。先ほどまで豪放磊落な雰囲気が一転したことに気づくことはそう難くないことだった。

隣にいた側近のシャルと呼ばれていた人の穏やかだった顔も、どこか深刻そうな表情になっている。

天真には、そこまでのことはまだ話していなかったたので、彼女は翼へ視線をやって小首を傾げていた。

ミントの表情も緊張に締まっており、ノーリアクションなのは真道兄妹くらいだった。何も知らないのだから当然の反応ではあるのだが、如何せん場の雰囲気全体的に重くなっているので浮いてしまっていた。

「……いきなりそれが……」

呟き、ガルディオスは両手を組み、瞳を閉じる。

「翼……とか言ったな。おまえ、『ゴスペル』や『使者』^{アンジェリオン}、それと『福音従者』^{セラフイム}をミントから教えられてるか？」

へ？ とつい間の抜けた声を出してしまう。

『使者』のことは聞いたが、『ゴスペル』や『福音従者』なんて単語は初めて聞いたからだ。

「えっと……『使者』のことはミントから聞きましたけど……他の二つは……」

「聞いていないと、そういうわけだな？」

素直に頷き、肯定する。

ガルディオスは、うゝむ、と顎に手を当てて唸る。顔は思案の色に染まっている。

「そうだなあ……。わかりやすく説明するためにも、まずは『ゴスペル』のことから話すことにするが……かまわんな？」

はい、と翼は一同の代表として返事をした。

やがて、一息の間を置いた後、ガルディオスは語りはじめた。

「『ゴスペル』は、言ってしまうえば世界の裏側で暗躍している組織の名前だ。規模はわからんが、オレが予測するに相当大きいと考えられるな。その上、戦闘能力も^{こそ}挙って高い。組織を束ねているやつがいることはまず間違いないが、『使者』と『福音従者』を自分の

手足として活動をしているから、誰なのかわからん。まあ、あとわかるとすれば、『福音従者』のほうか『使者』よりも階級が上ってことくらいか……と、こんな感じでいいか？」

はい、と翼は頷いた。他の一行も理解できたようで、各々の納得のリアクションを取っている。

だが正直な話、そんな組織がいるなんてこと、翼は全く知らなかった。

世界の水面下で活動をしている組織『ゴスペル』。とんでもないやつらであることは想像がつく。

「あの……。王様はどうしてそんなやつらのことを知っているのですか？」

話を聞いている内に、浮上してきた疑点。それを翼は口にした。

「……実は半年前に、自分は『ゴスペル』の『福音従者』だ、と名乗る野郎がこの城にやってきてな。そいつが城の警備をすべてすり抜けて、オレの前に姿を現しやがった。そのときにクイーンズに宣戦布告してきたんだよ。唐突にな。その際に、ついではかりに向こうが勝手にベラベラとさっきオレが言ったようなことをしゃべってたんだよ」

「どうしてそんなことを？」

「さあな。ハンデのつもりなのかもしれねえなあ。オレたちは何も知らないから、情けのつもりでしゃべったとしか考えられん。………つたく、ムカつくやつだぜ」

苦々しくガルディオスは言葉を吐く。

不審者をまんまと侵入させ、拳句そいつが敵を名乗る輩なのだからそう思つのも無理はない。

「それ以来、こっちを試しているのか、度々やつらの手先が襲撃してきたりしてな。時には『使者』のやつも一緒に襲ってきたりする。オレが知っているのはヴァルフアムルクとかいうやつだったが、ミントの報告を聞くと、もう二人ほど追加されたみたいだな」

アルフォートとゲイルのことだな、と翼は容易に察しがついた。圧倒的な戦闘力を持っている『使者』。

まだ会ったことのない、その上に行く実力者であろう『福音従者』。

そしてそれらを束ねる組織の総帥。

ほかにも戦闘員はいるだろうが、能力はそれなりにあるだろう。

「……もしかして、『大いなる災い』って、クイーンズが……？」

言葉が出てくるが、それは途中で止まってしまう。

それに、こうして問うものの、翼はある程度わかっていた。

しばらくの間を置いて、案の定というべきか、ガルディオスは翼が考えていた言葉と同じものを発した。

ああ、そうだと。

その後にはさらに言葉が続いていた。

「そいつらに対抗するための兵器を起動させるために、ソーサリー・クリスタルが必要なんだ。それも膨大な量のな」

兵器と聞いて、翼は窓から飛び出していた砲身のことを頭に浮かんだ。

それを翼が訊くと、ガルディオスは、

「ああ。おまえの思っている通り、あれがやつらに対抗するための

兵器だ。トルハンマーとかいう代物でな、使ったことは一度もない。少なくとも、オレのこれまでの人生であれをぶっ放した光景を見たことがない」

だが、と逆説が入る。

「先代の国王……まあつまり、オレの親父が言うには、国ひとつくらいは灰燼かいじんにできるほどの破壊力があるんだとさ」

現代兵器でいうところの核爆弾のようだな、と翼は思った。

それだけの破壊力が出せる兵器なら、莫大な量の水晶が必要なのも頷けるといふものだった。

ソーサリー・クリスタルが持っている未知の力。それをエネルギー源にしようと考えているのだろう。

「それで、おまえらに頼みたいことは……まあ、察しがついているかも知れんが、言わせてもらう」

数秒の間を置き、

「オレたちに協力してくれないか？」

協力。

その単語が意味しているのはつまり、一緒に『ゴスペル』と戦ってくれ、ということだ。

未知の組織。どれだけの規模があるのかすらわからない謎の組織と。

重苦しい空気が、場を満たす。

翼は周囲をチラッと視線だけで確認する。

壁際に国王の護衛の兵士がずらりと並んでおり、その者たちの視

線がこちらに集中しているのがわかる。それらの視線は期待と興味に満ちていた。

ミントの眼差し、もそれと同じ色に染まっている。

間違った判断は決して許されない。

天真、緋睡に視線を向けるが、二人もどうするか悩んでいるようで思案の色に顔を染めていた。

そんな翼一行の様子を見ていたガルディオスは、ふう、と息を吐く。

「……まあ、さすがに今すぐに返答をくれとは言わん。仲間と相談して、明日にはおまえたちの答えを聞かせてくれ」

そんな国王の一言で、その場は一旦お開きとなった。

第3章 - 3 魔導国——クイーンズ——

翼と緋睡と天真は、昼食を取らせてもらってから、ガルディオスが用意してくれた部屋の一室に集まっている。

部屋は個室で、人ひとりが住むには十分すぎるスペースがある。座っただけで沈むほどのふかふかのベッド、それにクローゼットやテーブルセットにベランダまである。

ベランダからはクイーンズが一望できるようになっており、景色は最高の一言だ。

一同が集まっているのは翼の部屋だ。一通り各々自分に割り当てられた部屋に入った後、何となく翼の部屋に集まってきたのだ。

「……で？ どうする、翼よ」

それが天真の第一声だ。

椅子があるのにそこに座らず、わざわざ綿菓子のようにふわふわした布団に腰を掛けている。気持ちは分からなくもないが、やめてほしいなあ、と翼は思った。

「どうするって……王様の頼み事ですよね？」

「他にどんなものがある？」

「ごもつともの天真の発言。」

「やれやれ。兄上はとことんバカですね。今の状況でそれ以外に何が考えられるというのですか？」

緋睡も一言多い便乗をしてきた。
ただ一度の失言でこの体^{てい}たらく。翼は実に心が痛んだ。

「わかってたつて！ 何もそんなに言わなくても……」

ふん、と緋睡と天真は疑いの眼差しで翼を見ていたが、やがて天真は、ふふ、と息を吐き、

「それで、本当にどうするつもりだ？ おまえは」

「え？ えっと……その……、正直、僕は手伝いたいと思っています」

「だけど、何か引つかかっているっていうことか？」

「いや、その……。なんというか……、ちゃんと全うできるかな、
て思つて……」

ブツ切りに言葉を並べる翼に、天真は確かに、と納得の様子を見せる。

やるからには成し遂げたい、というのが翼の考えだった。そして成し遂げるためには、それ相応の実力が必要だ。

——僕には実力がない。

やつらと……、『使者』と渡り合える実力が。それはヴァルファムルクと戦闘をしてわかったことだ。

はつきりいつて、協力したところで足手まといになるのがオチではないか、というのが正直な思いであった。

これは、国ひとつの運命がかかっている戦い。ガルディオスの依頼とはつまり、その戦いに参加してくれ、ということだ。

「国ひとつを背負つて戦うなんて……」

できない。

できるわけがない、と思う。

自分だけで精一杯だというのに、国ひとつという幾千万もの人の

命を背負って戦うことなどできるわけがなかった。あまりにも重責だ。

「……先輩はどうなんですか？ 王様の頼みを受けるつもりですか？」

そうだなあ、と天真は呟き、

「……まあ、おれの考えはもう決まっているんだが……おまえ次第だな」

「……？ どういうことですか？」

「つまり、おまえに選択を任せるってことだ。受けるのも、断るのもな」

あまりにもさざりと言った天真。その軽い口調とは裏腹に、迫られている選択はあまりにも重い。

他力本願もいいところだ、と思わざるを得ない。

考えを決めているとは言っても、最終的に他人に選択肢を与えるようでは、決めていないのと同じである。

「緋睡は？」

次に、自身の妹に意見を聞く。

「わたくしは……引き受けたいと、思っています」

だが、言葉は絞り出すような、とぎれとぎれのものだった。

言っていることは、おそらく本望だろう。だが、緋睡は不安なのだ。自分と同じで。

「飯に受けたとして……ちゃんと僕たち、成し遂げることができるかな？」

不安を、言葉にする。

水を打ったような沈黙。三人そろっても、不安や恐れは拭いきれない、ということだろう。

やがて、重苦しい静寂を天真は破った。

「……何事も、やってみなければわからないのではないか？」

諭すような問いかけは翼に向けられていた。

「そうだろう？ ああだこうだと言ったところで、物事は常にやらなければ、あらゆる考えはすべて机上の空論だとは思わないか？ おれはそう思う」

翼は黙して天真の言葉を聞いていた。

やってみなければわからない。

そうだ。何事もやらなければ結果なんぞわからないのだ。だけど……、

「だけど、やつらと僕たちの实力は……」

雲泥の差、月とスッポン、提灯ちようちんに釣鐘だ。

「確かに、おれたちとあいつらの实力を考えると、あいつらのほうが強いだろうな。……ならば、今からでも鍛えればいい。鍛えて、鍛えて、強くなって……最終的にあいつらを負かせるほどの实力を身につければいい」

天真の言つ通りだ。

今から修業をすれば、やつらと渡り合えるかもしれない。

短時間で実力がつくかどうかは眉唾ものだが、やってみなければわからないのだ。

やらずに後悔するか、やって後悔するか。

それを考えれば、答えはすぐに出る。

「……先輩、緋睡。その……僕、王様の依頼を引き受けようと思うんだけど……いいかな？」

今まで胸の内に渦巻いていた思いを、言葉とした。

すると、その言葉を待っていたとばかりに、天真は不敵に口元を緩ませた。

「もちろんだ。おれもそう思っていたところだからな」

「わたくしんです。確かに、今のわたくしたちではやつらに敵いませんけど、天真の言うとおり、やつらが来るまでの間に、修行すればいいことなのですから」

緋睡も、普段の無表情に他の色を付加させて、言葉を連ねた。

二人の言葉に陰りはなく、本心からそう言っているものだということが、翼にはわかった。

そして自分の決意も、揺らぐことのない確固たるものだということだということも。

「シャル」。紅茶プリーズ」

そこは国王の部屋。

そこにあるロッキングチェアに腰かけて、前後にギコつかせながらクイーンズの国王——ガルディオスは側近であるシャルロット、通称シャルに頼んだ。

見た目が青年風のシャルロットは、わかりました、と言って、紅茶をコップに垂れ、ガルディオスに渡した。

「おいおい。これ安モンのティーバックじゃねえか」

「贅沢言わないでください。少しは質素を心掛けてもらわないと、下々の者の良い模範となりませんからね」

「……へいへい、わかったよ」

渋りながらも、ガルディオスはシャルロットの意見に従い、安物の紅茶を飲む。

だがガルディオスは、紅茶の味がわかるほど通ではないので、高級品だろうと安物だろうと特に問題はない。

紅茶を一服しているガルディオス。

「味なんてわからないでしょう？ アナタのことですから」

「うっせえッ！ それとオレと二人っきりのときは敬語はやめろッ！ 怖気がする」

「それでしたらこれからも敬語で話させてもらいます、ガルディオス国王殿」

からかうシャルロットに、ガルディオスはハア、と溜め息をひとつ。

表面上は真面目につくろっているシャルロットなのだが、腹はどす黒く染まっているのだ。

この事実を長年共にしているガルディオスしか知らず、そのこと

を他人に話す気も起きていない。シャルロットは人望が厚く、言ったところで嘘だと思われるからだ。それに、言うほどのことでもないだろうし、と思っっているからでもある。

「それで、どうしたのですか？」

「なにがだ？」

紅茶をズズズ……、と音を立てながら囁いていたガルディオスが訊き返した。

「とばけても無駄ですよ。何か考えていたでしょう」

指摘され、ガルディオスは顔を驚きに変化させた。……が、すぐに緊張に顔を締めた。

「……聡いな、シャル。さすがは昔からの親友ってわけか」

「嫌でもわかりますよ。何十年も付き合えば」

そうだな、と納得する。

「ミントはどうしている？」

「どこかに出かけましたよ。おそらく、あの湖の岸部でしょうね」

「あそこは静かな上に、周囲に人が住んでいないから、修行してても迷惑にならないしな」

答えつつ、視線は親友ではなく、窓から見えるクイーンズへと移っていた。

見える景色は、普段と変わらない至って平和なものだ。事件らしい事件は一年を通して滅多になく、ここまで平穏な国があるのも珍しい。

「……その平和が、無くなるうとしているんだよね……」

誰に言うことなく、呟くガルディオス。

いつかはわからないが、近いうちにやってくるのが確実なクインズの消滅。

『ゴスペル』からやってきた使者が、確かにそう言った。

戯言などではない。その少年の言葉には実感が込められていたからだ。言えば必ずそうなる……そんな感じにさせるものが宿っていた。

現に、何度か襲撃も受けている。雑魚クラスの者から、幹部クラスの者まで。いずれも何とか退けているものの、いつまで続くかわからない。

そのために助力が必要だと、感じていた。

次にミントが戻って来たときに、助力となりそうな者を探すように命じようとも決めていた。

そんなときに、あの三人は現れたのだ。

手間が省けた上に、思いもよらない幸運だった。

ガルディオスにとって、翼たちの存在は、偶然が生み出した奇跡の結晶なのだ。ミントが連れてきた以上、実力はある程度保証されているのも同然とも考えている。

その奇跡の結晶足り得る少年少女は今、自分の頼みを受け入れるか否かを決めている最中だろう。

はつきりいって、断られても仕方がないと思っている。国ひとつの存亡がかかった戦いに、好んで参戦する者などいないだろう。荷が重過ぎるから。

だけど願望としては、協力してほしいと感じていた。

「……協力、してくれるだろうか……」

己の望みを口にする。

どうにもならないことを、言葉として出した。

「わかりませんね」

わかり切っていることを、シャルロットは相槌として打った。

「オレは……この国を護りたいと思っている。ガキの頃から今に至るまで、ずっと暮らしてきたこの国を……」

だが、とガルディオスは逆接を入れた。

「護りたいからと言ってなりふり構わないのは、単に往生際が悪いだけなのかもしれねえな……」

シャルロットは無言だった。

掛けるべき言葉が見つからないのか、それとも、彼も自分と同じことを心のどこかで思っているのか……。

「だからと言って、あいつらの力を借りなけりゃ、この国は滅んじまう」

シャルロットに向けてではなく、自分に言い聞かせるガルディオス。

追い詰められていた。

真綿が首をじりじりと絞め上がっていくような、気味の悪い感覚。

「……どうしたら、いいんだろうな……」

応接間での軽い雰囲気は完全になりを潜めていた。今の彼を見れ

ば、翼たちも国王だと認めてくれることだろう。

「仮にあいつらが協力してくれたとしても、もう二度と引き返せなくなるだろうよ……」

虚ろにガルディオスは言葉を並べる。

「……自分の往生際が悪いせいで、翼君たちを巻き込もうとしていることに後悔しているのですたら、彼らが協力してくれたときに、精一杯、後ろから支えてあげてはどうですか？」

「シャル……」

「引き返せない道なのでしたら、まっすぐに進めばいいのです。そして、そんな自分の道に巻き込まれている人たちがいるなら、その人たちを巻き込む代わりに支えてあげればいいのです。ワタシはそう思います」

柔らかな、優しい顔をしてシャルロットはそう言った。

そんなシャルロットの言葉を聞いて、ガルディオスは少しの間驚いた表情をしたが、しばらくすると口元から犬歯を見せていた。

「そうだな……」

短く、簡潔に、そして決意したようにガルディオスはそう言った。
だった。

自分が護るべき、クイーンズを眺めながら――。

第3章 - 4 魔導国——クイーンズ——

国王からの依頼を引き受けることを決意した翼は、湖の岸部まで行こうとしていた。

あの自然をもう一度堪能したかったし、周囲に人も住んでいないため、修行にも専念できると思ったためだ。

城を出、街を下り、群生している木々を抜けると、初めて来たときと変わらない景色が、目の前に広がっていた……、

「ん？」

……ように見えたが、そこにはすでに先客がいたことに気づいた。金髪のツインテールの少女が。

ミントだ。

ミントは湖でひとり大剣を振るっている。

翼は周囲を見渡すが、自分とミントを除いて人はいなかった。ただ、空気を震わす音と、少女の短い声が静寂を破るように響いている。

流麗に、一部の隙なく、自身の身の丈ほどもある得物を、ひたすらに素振りをしている様は、さしずめ剣舞をしているかのよう。

そんな少女の様子を、翼は木陰に隠れて見ていた。

呼吸することさえも躊躇ワルキューレわれてしまうほどに、どこまでも壮烈で美しいその様は、まるで戦女神のようだった。

やがて終わったのか、ミントは剣を素振りするのを止め、ふう、と一息ついていた。

そこにパチパチと賞賛の拍手を送ることにした翼。

「すごいね、ミント」

突然出てきたせい、ミントは若干びっくりしたようだったが、相手が翼だと知ってほっとした。

「君……、見てたの？」

見られて恥ずかしく思っているらしく、ミントは頬をやや朱に染めた。

その様子を見て、翼は罪悪感を感じたものの、正直に、うん、と答えた。

「いつもあんな感じなの？」

「うん。毎日ここで素振りや立ち回りの練習をしているんだ」

へえ、と翼は感嘆の声。

実のところ、翼は練習や訓練といったものをほとんど試しなかった。せいぜい、父親が帰ってきたときに手合わせするくらいだ。特に最近では実戦オンリーで、練習などという面倒なことは一切していない。

だけど、今回ばかりはさすがにそうも言ってられないのも事実だ。

「……ねえ、ミント。もしよかったらでいいんだけど、僕と手合わせしてくれないかな？」

「いいけど……どうして？」

「実はその……実戦練習がしたいんだ」

本望を言ったが、ミントは、どうしてまたいきなりそんなことを言いたげな顔色になっていた。その反応は当然といえる。

なので翼は、自身の心境を語ることにした。

「三日前、僕がヴァルファムルクと戦ったこと……知っているよね

「？」

コクリと頷くミント。

「あるとき、僕はまったく歯が立たなかった。巨象が蟻を踏み潰すかのように、完敗した……」

あのときのことを思い出してか、悔しさが表に滲み始めていた。

「一昨日会ったときもそうだ。僕はあいつを相手に何もすることができなかった。ゲイルを退かせたのもほとんど奇跡だ。その気になれば、向こうは僕を殺せたはずなのに……」

完全に、舐められた……。

そのことが、翼は屈辱的だった。死ぬのは嫌だが、あの二人の行為によって、自分の戦士としての心が抉られた。

それは耐え難いものだった。心臓を貫かれ、その傷口をいじられるくらいに。

ミントは黙って聞く中、さらに翼の言葉は続く。

「ヴァルフアムルクは僕と戦おうとしなかった。それは、あまりにも僕が相手にとって取るに足らない存在だったから、そうしたんだと思う」

その気になれば一瞬だっただろう。あのときの自分は、得物を持ち合わせておらず、抵抗の術は持っていないも同然だったのだから。ゲイルの攻撃の反動を利用して、背後に回ったのもつつさの機転と偶然が重なっただけだ。今、同じことをやれと言われればできないと断言できる。

「だから僕は、鍛えて鍛えて、今よりもずっと強くなりたいんだ。
アングレリオン
『使者』と互角に渡り合えるくらいに」

その言葉を聞き、ミントはハツとしたような表情に変わる。

「……君、もしかして国王様の頼みを引き受けるつもりなの？」

うん、と翼は答えた。

「だからそのために、今よりも強くないといけないんだ。だから……頼めるかな？」

瞳に決意を宿し、真摯に翼は言った。

「……うん。いいよ。私でよかったら、相手をするよ」

「本当？」

「うん。私も、君と同じ気持ちだから」

そう言い、ミントは大剣を両手で持ち、体勢を整える。

——戦う気だ。

先ほどまで素振りをしていたというのに、ろくに休憩も入れずに稽古をしようとしているミント。

自分がミントの立場なら、少し休憩を取るだろう。だから翼も彼女にそう促そうと考えたが、ミントの目を見て、止めた。

ミントの瞳。そこにはひとりの少女ではなく、戦士としての覚悟を決めた光を宿していた。

そんな彼女に休憩しろなんて、要らぬお節介というものだろう。

なので翼も覚悟を決め、鞘から得物を抜刀した。

さすがに殺すところまではいかない。だが、追い詰めるところまではやるつもりだ。それは言わずともミントもわかっていることだ

ろう。

お互い、適度な間合いを取って、向き合う。
そよ風ひとつない森閑^{しんかん}。それはさしずめ、嵐の前の静けさだ。
両者の視線に秘めるは闘気。
それを宿し、互いに睨み合い、そして……、

「——行くよッ」

先に動いたのはミントだ。

地面を蹴り、反動で前へ跳び込んできた。
疾^{はや}い。

速度は風の如し。

そして上段に構えられた大剣が、振り下ろされた。

超重量の塊が襲いかかる。

翼はそれを受け止めた。

同時、激突音が響き、足首辺りまでが地面にめり込んだ。

骨が琴の弦のように振動している感覚が翼を襲う。

くっ、と歯を食いしぼり、翼は耐える。

それを見て、ミントは大剣を構え直し、即座に横殴りに振るった。
直撃を受け止めれば身体がもたない。

そう判断した翼は、二撃目をミントの脇を通り抜けるようにして
回避した。

そのまま振り向きざまに、翼は一閃。

銀の軌跡が陽に照らされ、鋭く光る。

刹那、キーンツと快音が響いた。

——受け止められた！？

どうやらミントは、大剣を振るう反動を利用して、そのまま打ち
付けたようだ。反動の力もあってか、威力が相殺し切れず、翼は弾
き飛ばされた。

宙を飛ぶ翼だったが、すぐに地に足をつけ、体勢を取り直す。

そこにすかさずミントが迫った。

疲れなど微塵も感じさせない、鋭さをもった速さ。

迫り際にきた一撃を、翼は受け流す。

さらに一撃。

もう一撃。

嵐のように次々と迫るミントの猛攻。

翼はそれを捌くことに専念する。下手に攻撃を仕掛ければ、手痛い目に遭うことは確実だからだ。

だが護りに専念するあまり、ジリジリと背後に退かされていく。

——強い……ッ。

剣を何度も合わせ、翼はそう感受した。

あれだけの大きさと質量をもった物体を軽々しく振るい、疲れを一切表に出さないミントに、尊敬の念を覚えてしまう。

やがて、背に何かが当たった。

木だ。

端まで追い詰められたことを知った翼。もはや退こうにも退けなくなってしまうた。

「はあああああ——！！」

ミントの斬撃が迫って来た。

背後にはもう退けない。

なので翼は、ギリギリまで引き付けて、横に逸れた。

「——ッ」

やや驚きに顔色を染めたミントの斬撃は、そのまま木を縦に両断した。

もしあれを受けていたら、と思うと、翼は背筋が冷たくなるのを感じる。

——殺すつもりはないんだ、殺す気は……。

さっきのだって、きつと寸で止めるはずだったんだよ、多分……、と自分を言い聞かせ、無防備となっているミントに刃を振り下ろす。そのとき、翼の身体が打撃音とともに吹っ飛ばされ、その先にあった木の幹に背を強く打ち付けた。

とつさのミントの機転による蹴撃が、翼の腹に直撃したのだ。振り上げた体勢だったため、懐がそのとき、完全にがら空きだったため、翼は回避することができなかったのだ。

腹部に痛みを感じながら、翼は立ち上がるうとするが、その首筋に鋭く光るものが当てられた。

大剣の刀身だ。

見上げると、そこには、

「私の勝ちでいいよね？」

やや勝ち誇ったような微笑を浮かべた、ミントの姿があった。

「……そのようだね」

少年が負けを認めると、ミントはスッと得物を引いた。

同時、緊張の糸が切れた翼は、木に背を預けてドサリと座る。そして、ふう、と息を吐いた。

「強いね。僕、ずっと押されっ放しだったよ」

「そんなことないよ。背後に回られたとき、内心、冷や汗ものだったし……」

言いつつ、ミントは隣に座ってきた。先ほどの戦士っぷりはどこへやら、そこにはひとりの少女の姿があった。

「そうかなあ？」

自信なさ気に言う翼に、ミントはうん、と返事をして太鼓判を押した。

そこで、会話が途切れる。

するとその間を補うように、風で木々の梢が揺れ、音を奏でる。台風が過ぎ去った後のような、のどかで穏やかな時間。

「……ねえ。君はどうして、国王様の頼みをきこうと思ったの？」

ふと、そんな質問をしてきた。

そういえば、まだ言ってなかった。ミントだけでなく、王様にもだけど、依頼を引き受けるという思いは、もはや変わらないだろう。

なので翼は、

「……困っている人を見過ごせないから、かな」

と言った。

「それだけの理由で？」

「いや……。もちろん、自分が狙われているってこともあるよ。だけど、この国が危険な目に遭おうとしていることを知らされて、見なかった、知らなかったってふりは、僕にはできない」

「……すごいね、君は」

柔らかな笑みを浮かべるミント。

「そうかな？」

「うん、すごいよ。たいていの人は、思っただけでも行動できないこ

とのほうが多いし、場合によってはやろうとしていたものと逆の行動をすることもあるし。それは勇気だと思っよ」

「勇気……」。

今まで、そんなこと考えてもみなかった翼。

だからだろうか。翼はそれを指摘されて、どことなく恥ずかしくなった。

勇気が恥ずかしいわけではない。他人に褒められたことが、純粹にうれしく感じたのだ。

……だけど、

「……その勇気を貫くために、僕はがんばらないといけない。強くなつて……意志を貫き通すために」

翼の決意に溢れた言葉。

「私も、強くなるよ。君と同じように」

後に続き、ミントも同意する。

とここで、翼はあることに気づいた。

「あの……もしかしたら、名前で呼んでくれないかな？」

「え？」

「なんというか……さっきからミント、僕のこと『君』って言うてるでしょ？ これからは仲間なんだし、名前で呼び合おうよ。そのほうがその……なんというか……仲間っばいし」

と、自分でもイマイチよくわからない理由を述べる翼。

ミントはポカンと呆氣に取られたように、口を半開きになっている。説明が下手だったため、そんなリアクションを取るのは当然だと

言える。

だけど次にミントは、他の反応を見せた。
クスツと笑ったのだ。

それは嘲りのものではないことはすぐにわかった。

確かにそうだね、という台詞の代わりに出たと取れる笑いである。
やがて彼女はスツと立ち上がり、

「うん、わかった。これからよろしくね、……………翼」

翼に手を差しのべた。

少女の手を、翼は立ち上がり、

「こちらこそよろしく、ミント」

握手を交わした。

第4章 - 1 夕刻の邂逅

ミントは目の前の少年の手を、しかと握り締めた。
どこまでも暖かく、清らかに思えるその手を。

ガルディオスやシャルロット以外の、初めての仲間。
自分と同じ年くらいの仲間。

ミントは自然と穏やかな微笑みを浮かべていた。
うれしくて。

ただうれしくて。

自分に、普通に接してくれる人ができて。

本当に、

——うれしい。

自分が求めていたもの。

自分が探していたもの。

手に入らないだろうと思っていたもの。

それが、手に入った。

「……ありがとう」

蚊の鳴くような小さな声で、ミントは呟いた。

「……？ 何か言った？」

「ううん。何も」

キョトンとする翼だったが、やがて、ならいいんだけど……、と
それ以上追及してこなかった。

その後、翼とミントは一緒に稽古を再開した。

ただし、初めのような実戦的なものではなく、素振りや相手の攻撃の回避や防御といった、基礎的な訓練である。

それをやってミントは思ったのだが、翼はどうやら我流のようだった。

型にはまっていない分、動きがやや荒っぽいのだ。本人は、本屋で売っているようなハウツー本を基にして我流を磨いたのだろうが、如何せん雑である。

なので、師と呼べる人間がいなかったのか、ということを探ねると、

「父さんが剣を扱えるから、たまに教えてもらっただけど、基本的には自分流でやってるよ」

とのことであつた。

「翼のお父さんって、剣術得意なの？」

「多分、得意だと思うけど……どうだろう？ 稽古をつけてもらう度に思うんだけど……父さん、本気を出していないような感じなんだ」

「もしかして、お父さんも我流なの？」

「それは僕もわからないんだ。どこの剣術って訊いても、いつも煙に巻かれてさ……」

ということは、どこの剣術とも我流ともわからないものを見て、目の前の少年は自身の剣術を育んできているということになる。

なんというか……、

——すごい……。

そんな環境下であれだけの剣術ができるということは、もしかしたらすごいことなのかもしれない。

考えてみれば、動きはやや雑なところがあるものの、全体的な動きを見れば決して悪いものではないのだ。鍛え上げれば間違いなく上達することだろう。

——私も、負けてられないね。

思い、ミントと翼の時は稽古で過ぎていく。

やがて翼が、今日はこれくらいにしよう、ということでお開きにするようになった。

稽古が終了した後の心はどこか清々しい。今まではそんなこと思わなかったのに、これも仲間と一緒に特訓しているからだろつか、と思う。

「それじゃ、城に帰ろうか。ミント」

「もう少しだけしてから帰るから、先に行つていいよ」

彼に負けられないな、という思いがあるからかもしれない。本当は一緒に帰りたかったが、もう少し特訓することを決めた。

わかったよ、と翼は了解し、帰り際に、あまり根を詰めすぎないように、というようなことを言つて去つていった。

心配してくれる人がいるというのは、うれしいことである。

翼の姿が完全に見えなくなり、ミントが特訓を再開しようと、視線を動かしたとき、

「——ッ!？」

絶句した。

距離にしておよそ二十メートル程先のところに、本来いるはずのない者がいたからである。

ミントの視界に入っている者……、シルバーグレーの髪、深い闇のような蒼の鋭い瞳をした青年は、紛れもない、

「ヴァルフアムルク……!」

見間違ひようもない、そこにいるのは確かに彼の者だった。

精悍な容姿と雰囲気をつ提げて、ヴァルフアムルクはミントの前に現れた。

翼はすでに城への帰路に着いてしまっているの、ここにはいない。仲間がいないことが、ミントを不安にさせた。

「……どうして、ここに……」

それと、いつからいたのだろうか。自分がここに来る前からずっといた、と言われても、この男ならばやってのけてそうだ。

「そんな問いに意味はあるのか？」

バツサリと、切り捨てるヴァルフアムルク。

もつともな言い分だった。そんなこと聞いたところで、時間稼ぎぐらいにしかない。

ミントは大剣をしかと構え、相手を睨め付ける。敵意を宿したその瞳は、揺らがせることなく。

そんなミントの様子を、剣も構えずにじっと見つめるヴァルフアムルク。まるで相手の心の底を透視しようとしているかのよう。やがて、一言。

「……お前は、憶えていないのだな」

「え？」

青年の言葉に、ミントは心音が一段、高鳴った。

何故かはわからない。だが、確かにそうだったのだ。

それを自覚すると、心音は高鳴ったどころか、徐々に間隔が狭まっていく。何か知られたくもない秘密を他人に知られた、とばかりに、心臓が鼓動を奏でる。

それを悟られないように、表情を緊張で締めていると、

「……どうやら無意識の内に、気づいているようだな」
「何のこと？」

つつけんどん気味にミントは返した。

「……まあいい。いずれお前は、選択を迫られることになるだろう」

選択？

選択とはいったい何のことなんだろう。

思い、ミントが声を掛けようとしたときには、ヴァルフアムルクの姿はなくなっていた。

まるで白昼夢でも見ていたような錯覚に陥るミントだったが、高鳴っている鼓動が先ほどのはすべて現実だということを証明していた。

——いったい何しに来たんだろう。

ただ会いに来た、としか思えない。

真相を確かめるにしても、答える当人はすでにいない。

気づけば、陽が沈もうとしていた……。

第4章 - 2 夕刻の邂逅

翼は城に戻るべく、街中を突き進んでいた。

街が小高い丘となっており、城はその頂上にあるため、ひたすらに登ればたどり着くことができる。

しかも、城までの道はメインストリートで繋がっており、その街道を一直線に進めばいいだけなので、迷うことは絶対ない。

だからというわけでもないが、翼は主街道から逸れた道を散歩することにした。

剣術の修行もしなければならぬのだが、初めての異世界異国ということなので、少なからずクイーンズに興味があったのだ。

メインストリートから逸れると、道幅がだいぶ狭い。人が横に五人ほど並べば塞がるくらいだ。さらに一定間隔で街路灯が取り付けられているのでよけいに狭く感じる。

しかし、行き来する人が少ないため、交通に不便することはなく、移動しながら周囲を見渡し、場合によっては店の中に入り、見学をした。

メインストリートには、翼たちの世界でいうところのデパートが立ち並んでいたが、ここには老舗のような佇まいの店が多い。

中には武器屋や防具屋といった店もあり、RPGのようだと、翼は少し感動を覚え、武器屋に入った。

翼は、せっかくだし武器を買おうかな、と考えたが、お金の通貨がわからない上に、そもそも持ち合わせていないので却下した。そもそも、どの武器も、値札を見ればゼロが最低でも六以上付いていたので、買ったものではない。しかも文字が読めないので、どんな武器なのかも、形状で判断するしかなかった。

そういえば、文字や通貨はわからないのに、現地の人が話している言葉はちゃんと聞きとれているということに、今更ながら気づいた。魔術の一種が作用しているのかもしれない。

便利なため、不思議に思っても理屈なんてわからなくてもよかった。

次に防具屋に入ったが、ここも先ほどの店と同じく、値段が実に高いということだけがわかった。

ガントレットくらいはほしいなあ、と実のところ翼は常々思っているのだが、それでさえゼロが六つほど並んだ後に、一以上の数字が添えられている。なので見るだけで店を出た。

その他の大半はどうやら民家のように、店らしい店は目に付かない。せいぜい占い屋があるくらいだ。

陽も沈み始めたようなのでそろそろ城へ戻ろうと、翼は踵を返し、正面を向く。

するとそこには、藍色の髪少年が、こちらを見ていた。

「やあ、また会えたね」

柔らかな少年の声に、翼は首を傾げる。

どこかであっただろうか、と過去の記憶を回想してみるが、どうにも思い出せなかった。

そんな様子の翼に、少年は少し残念そうな色を浮かべながらも、それも仕方ないかといった感じになり、

「キミが憶えていないのも無理はないさ。ボクが一方的に憶えているだけだからね」

そのとき、もしかして、と翼はある時のことを思い出した。

それは雑踏の中、突如として聞こえてきた少年の声のことだ。

あのとき、人ごみの中ということもあって、声の主は視認できなかったが、あのときの主が目の前少年なのだろうか。

そう思うと、彼の声がなんとなく聞き覚えがあるもののように感じられた。

……いや、そんなことは今は置いておこう。
そんなことより、少年がここににいるということは、彼も魔術師だ
ということを確認している。

「……この国の人だったんだ、君」

つい、とばかりにそんな言葉が口から出てきた。
それに、「へえ、憶えていてくれたんだ」と少年はやや驚くと、

「いや、違うよ」

翼の疑問に、少年は短い言葉で否定した。
その後、少年の言葉は続いた。

「ボクはただ、近い将来消える運命にあるこの国を見学していただ
けさ」

「——ッ！」

どうしてそのことを……。

思うや否や、翼は反射的に藍色の少年と間合いを置く。もともと
開いていた互いの距離が、さらに遠のいた。

そんな翼の行動を不思議そうに見つめる少年だったが、

「……ああ。そういえば、まだ言ってなかったね」

と、思い出したように手をポンとついた。
少年は物騒な言葉を言った割には、平常を保っていた。だが、そ
れが余計に不気味に思える。

サラリと消えるなどと物騒なことを言っただけの少年に、翼は間

違いなくえも言われぬ畏怖を感じていた。
そんな翼に気にすることなく藍色の髪の少年は、勝手に自己紹介をした。

「ボクは『福音従者^{セラフイム}』のひとり、タブリス。以後、お見知り置きを」

絶句。

翼は驚愕に目を見開いた。とてもではないが、動揺が隠し切れていなかった。

——こいつが……『福音従者』！？

『ゴスペル』の精鋭のひとり。

クイーンズを滅しようとしている組織のひとり。

自分たちの敵。

翼は即座に絶界を張った。ほとんど反射的に。

そして剣を抜き、切っ先を藍色の髪の少年——タブリスへと向けた。

「ずいぶんと血気盛んだね、キミって。もう少し大人しい性格かと思ってたんだけどねえ」

鋭く、敵意が宿った剣先を向けられても、タブリスは動じる素振りを見せない。口調も相も変わらずだ。

超然とした態度を崩さないタブリスに、翼は尋ねる。
最も訊くべきものを。

「どうしてクイーンズを消そうとする？」

「そうだねえ……。言ってしまうえば、ある計画を実行に移すためさ。そのためには、クイーンズが邪魔なんだよ」

「……どうして……？ それに、計画って一体何のことだ！」

翼は叫び、タブリスに言葉をぶつける。少年の眉は険によって吊り上げられ、ひとりの憎むべき敵を凝視する。

しかしタブリスは、そんな翼の鬼気迫る気迫など感じていないとばかりに涼しげな調子を正そうとはせず、

「今はわからなくてもいい。いずれわかることだしね」

と、答えになっていない返答をした。

それだけ言うと、タブリスは不意に指をパチンと鳴らす。

すると、少年の足元に魔法陣が出現し、それが光を発し始める。

「実のところ、キミに訊きたいことがあるんだけど、今日は退くことにするよ。キミも昂ぶっているようだしね。……まあ、近いうちにまた会えるさ。キミが死んでいなければね」

言うだけ言って、タブリスの身体は光に包まれ、やがてその場から消尽した。空間転移だ。

しばらく、翼は茫然とその場に突っ立っていた。

絶界が、そんな主人に呼応するかのように、ただひたすらに展開し続けていた。

第4章 - 3 夕刻の邂逅

天を闇が支配している。

夜だ。

時刻は現在、午後十時を回っている。

翼は夕食や入浴を済ませ、自室のベランダで夜風に当たっていた。

『福音従者^{セラフイム}』に会ったことを、翼は自室にいたガルディオスに報告し、またそのときついでに、王様の依頼を引き受けることを伝えた。

後者の知らせにガルディオスはたいそう嬉しそうな表情をしていたが、前者の知らせには顔を深く曇らせた。

敵が土足で踏み込んできたのだから、その気持ちは翼にはわかった。

やがて翼に、

「そうか……。ま、今日はゆっくり休め。身体を休ませねーと、いざというときに動けんからな」

と言って、話は終了となった。

追憶に耽っていたとき、ふと扉がトントンとノックされた。

「入っていいよ」

振り向きもせず、翼はノックをした主に許可を出した。

扉が開き、そして閉じる音が聞こえる。中に人が入ってきたことは気配でわかった。その気配が嫌なものでなかつたため、翼はまだ振り向くことはしない。

「翼、起きてたんだ」

部屋に入ってきた客人の声。

それを聞き、翼はそこでようやく振り返ると、そこにはミントが、遠慮気味にいた。

こんな夜中に何の用だろう、と思っている翼にかまわず、ツインテールの少女は少年に近づき、横に並んだ。

「何してたの？」

「別にたいしたことじゃないよ。なんとなく、景色を眺めていただけ」

言い、翼はミントから外の景色へと視線を移す。

空には煌めく数多の星に淡い白光を下界に照らす月。

地上には、中世風の西洋の建物が建て並んでいる。明かりは点々としかなく、どうやら就寝の時間帯のようだ。

魔来町とはえらい違いだった。彼の町で、眼下に広がるような光景を拝むためには、停電でもしない限り無理であろう。クイーンズとは違い、魔来町は決して眠ることはないのだから。

「……私、今日ヴァルファムルクに会ったんだ」

突然ミントが、話を切り出した。

そしてその話は予想外なことだったため、翼は最初、彼女が何を言ったのか理解できなかった。

だが、五秒も経たない内に、それがどれほど重大なことなのかを理解でき、

「大丈夫だった？ どこか怪我をしたとか……」

「ううん。そんなことはなかったよ。ただ……変なことを言っていたけど」

変なこと？ と翼は疑問に思った。

「お前は憶えていないのか、とか……そんなことを言っただよ」
「……？ ミントはヴァルフアムルクのことについて何か知ってるの？」

「知らないよ。敵だということくらいしか。だから変なことを言ってるなって思っただよ」

物分かりの悪い翼に、ミントはやや怒ったような口調になっていた。

なるほど、確かにその通りだ。

翼はひとり、彼女の言っただことに納得する。

「……？ ヴァルフアムルクのその言いようだと、彼はミントのことについて何か知っている、ということなのだろうか。」
「それも、本人も知らない何かを……。」
気づくと、ミントの表情が怒から悲に変わっていた。

「……でも正直私、不安なんだ。自分のことについて他人が知っていて、自分が知らないってものがあることが……」

不安。

ミントの言葉からは、そんな負の感情が滲んでいた。
翼にもその気持ちは分かる。

目に見えない、漠然とした何か良くないものが、自分にあるかもしれないという不安。

不明瞭なもののため、どこに自分という矛先を向ければいいのかわからず、鬱憤や悲哀が蓄積されていく辛さは、実に堪えがたいものである。

翼は辛辣そうなミントの顔を見て、チクリと心臓が針で突かれる

ような感覚を覚えた。

彼女の痛みが、翼にも訴えているような気がした。
誰かが悲しみ苦しんでいる姿を見るのは、決して良いものではない。
い。

そんな人を見る度に笑ってほしいと、切に思う。
だから……、

「……知らなければ知らなくて、別にいいと思うよ」

翼は、辛そうなミントに、そう言葉を掛けた。

「君が憶えていなくて、思い出したくないと思うのなら、僕は知らなくていいと思う」

「でも……」

反論しようとするミントを、翼は言葉を続けることで制止させる。

「無理して、辛いことを思い出そうとする必要はないよ。たとえば思い出せないものがあつたとしても、君は君なんだから。だから……自分自身を大切にしなよ」

翼は、自分の考えを次々と言葉にする。

わかってくれるだろうか。

慰めになるだろうか。

もとに戻ってくれるだろうか。

疑問が放つ言葉に比例するように浮かび上がるが、言ってしまった以上はもはや引き下がれない。

翼はミントの反応を待つ。

夜風が吹き、感傷気味のミントの頬を撫でた。

「……そう、かもしれない」

小さな声で、ミントは臍氣おぼろけに言った。
さらに翼は、彼女の背を押すように言葉を連ねる。

「万が一、もし君がそのことを思い出して、それで苦しむことがあるのなら、僕が……いや、僕たちがいることを忘れないでほしい。大したことはできないかもしれないけど、君を支えてあげたいと、そう思っているから」

緋睡と天真はどう思っているかわからないが、仲間なのでそう思ってくれていることだろう。

「……そうだね。今の私には、翼たちがいる」

うん、と翼は肯定する。

「君には仲間がいるよ。仲間というのは、支え合うためにいるんだから、頼ってほしい」

翼のそんな言葉を聞き、ミントは表情を悲から喜に変えた。

淡い笑みを浮かべ、その笑みは、先ほどまでの鬱憤としていた雰囲気を浄化しているようだった。

月と星は、立ち戻った彼女を称賛するかのように、煌めきを放っている。

淡い白光に照らされる中、自分を励ましてくれた少年に、ミントは感謝を述べた。

「ありがとう、翼」

ただっ広い白の空間に、四人の人影があつた。

『天使リオン 使者』三人と、『福音従者』ひとりだ。

「……んで、何か用かい？ タブリスさんよ。俺様、ダラダラしててすごく忙しかつただけだよ。」

両手を後頭部に回し、いかにもダルそうな口調で言葉を放つ、緑の長髪の青年。

「それは暇というのだ、ゲイル」

そんな彼を諷めるのは、シルバーグレーの髪をし、腰に一振りの剣を提げている銀色の髪の青年——ヴァルフアムルクだ。

指摘されゲイルは、ケツ、と純白の床に唾を吐く。

んなこたあ言われなくともわかつてるっつーのツ、という台詞の代わりであろつ。

そんな二人のやり取りをニヤニヤと意地悪く眺めているのは、ダークブルーの髪をし、双剣を腰のベルトに鞘に納めて引っ下げているアルフォートだ。

もっとやってよ、とアルフォートの瞳は語っている。他人が厄介事に絡まれている姿を見るのが、何よりの楽しみなのである。

「……さて、そろそろ話をしても構わないかい？」

ゲイルとヴァルフアムルクの一触即発気味な様子を見て、仲裁代わりに言葉を紡ぐのは、『福音従者』の位に座くわいざしている、藍色の髪

をした少年——タブリスだ。

彼ら三人の上司である彼がそう言うのと、ヴァルフアムルクは即座に、ゲイルはしぶしぶながら仲間割れの雰囲気解いた。

うんうん、と満足そうに頷くタブリス。

一方アルフォートは、つまんないの、とばかりにチエツと言葉を漏らした。

その挙動にゲイルは苛立ちを覚えたのか、

「……てめえ、若くして死にてえか？」

「別に」。きみこそ、そんなに怒ってばつかだと、高血圧で寿命が縮んじゃうかもよ？」

この野郎……、と怒りを噛み殺した声を出すゲイル。怒りの矛先がヴァルフアムルクからアルフォートへと向けられていた。

タブリスはハア、と吐息をした。どうしてこう、ゲイルはけんかつ早いのだろう、と。

タブリスはチラリとヴァルフアムルクへと視線をやる。すると彼もこちらを見ていた。彼は二人のやり取りを見て、普段は無表情なその顔が、面倒臭そうなものに変わっていた。早くアルフォートとゲイルを止めると目で語っていた。

「キミたち、そろそろ止めてくれないかな？　いつまで経っても本題に移れないからさ」

タブリスの一声で、ゲイルはアルフォートに向かってケツ、と毒付きをした。

アルフォートは意に介した様子もなく、ニヤリとした笑みを顔にこびり付けていた。

それでとりあえず収まったのを確認すると、タブリスは本題に移ることにした。これ以上長引かせるわけにもいかない、と感じたか

らだ。

「キミたちを呼んだのは他でもない。――単刀直入に言えば、仕事さ」

仕事、と聞いてゲイルの不機嫌面が明るくなっていく。

別に彼は元来、仕事好き、というわけではない。単に戦いや、人を殺すことが大がつくほど好きなのだ。

もっとも、この時点ではまだ人殺しをしろとはタブリスは言っていないわけであり、ゲイルが勝手に思い込んでいるだけなのだ。

「……して、仕事の主な内容はなんだ？」

「決まってるじゃねーか、ヴァルフアムルク！ 殺しだよ！ ひ・と・こ・ろ・し！ ヒヤハハハハ……、腕が鳴るぜえ！」

そうなのか、とヴァルフアムルクはアイコンタクトで訊いてきた。うーん、とタブリスは唸り、

「……まあ、別に殺さなくてもいいんだけど」

それを聞き、ゲイルの狂喜乱舞っぷりは停止した。

「ああ！？ そりやどういことだよッ！ 俺様は人殺しが存分にしたいから『ゴスペル』に入ったっつーのに……！」

「話を聞け。まだ話している途中だぞ」

今にも喰ってかかる猛獣のようなゲイルだったが、ヴァルフアムルクのそんな言葉によって止められた。

「そうそう。まだ話は途中さ」

と襲い掛かられないための事前措置として前置きする。

すると案の定、ゲイルは暴れるのを止めタブリスに、早く言え、
という意味の含まれた視線を向けた。

「キミたちにやってもらいたいののは、クイーンズの城に保管されて
いるソーサリー・クリスタルを奪うこと」

「……ケツ、殺しじゃねーのかよ」

つまらなさそうに、毒を吐くゲイル。

「まあ、話は最後まで聞きなよ。実はボク、クイーンズにちよつと
した下見をしたんだけど……そのときに真道翼と出会ったのさ」

ピクリと、ゲイルのみならず、アルフォートも眉を動かす。唯一
ノリアクションなのはヴァルフアムルクだけだ。

「キミたちがソーサリー・クリスタルを奪おうとすれば、必ずあの
人たちはそれを妨害してくるだろう」

だから、と接続詞を入れ、

「——邪魔するやつがいれば、キミたちの好きにするがいいよ」

直後、ゲイルはヒヤッホウ、と歓喜の言葉を上げた。

「よっしゃあ！ 殺すぜ！ 殺して殺して殺しつくすぜえ！」

殺しにとり憑かれたようなゲイルのさま。彼のことだ。無関係な
人まで殺すかもしれない、と思うタブリスだが、そのことを咎める

気はなかった。

どうせクイーンズが滅びるとき、そこにいる人々も一緒に消滅するんだ。ならば、遅い早いの違いだけだと、そう思ったためだ。

アルフォートも、ゲイルほどではないが一層深い笑みを浮かべていた。これから起こることが愉しみでしかたない、と言わんばかりに。

唯一、ヴァルフアムルクだけは、無表情だった。腕組みをし、ただこちらの次の言葉を待っている。

タブリスは、狂喜で騒いでいるゲイルを制止させ、

「作戦開始の決行は……」

と、日時を口にする――。

第5章 - 1 強襲

翼たちがクイーンズに来てから、かれこれ一週間が経過した。

その一週間、翼たちは来るべき戦いに備えて、朝から晩まで戦闘技術を磨くことに専念していた。

城の中庭か、湖の岸部で修業は行われ、場所はその日の気分で決められる。ちなみに今日は湖の岸部だ。

各々の練習だけでは限界が来るであろうということから、時々模擬戦をいつもの練習メニューに追加していた。

模擬戦とはいえ限りなく実戦に近い形で行うため、戦闘の技術は回数を増すごとに確実に成長していることが実感できた。

そんな中、翼はふと学校のことが気になり、それを一行に話したところ、どうやら天真が根回しをして、どれだけ休んでも単位に一切影響がなくなっている状態だということを知った。

どんな手段を用いたのかは、翼は聞かなかった。ろくでもない方法に違いない。学校の教師一同に、心の中で土下座して謝った。

やがて時刻は夕方になり、今日はこれまでにしようということでも各々解散し、夕食を食べるべく食堂に行った。

食堂には翼たち以外にも人が当然ながらおり、その人たちに紛れながら、一行は夕食を済ませている最中である。夕食のメニューは全員、ミート味のスパゲッティだ。

「このところ『ゴスペル』の連中、姿を見せませんね」

一同が食事をしているとき、ふと緋睡がそのようなことを言った。ああ、言われてみればそうだな、と天真は今頃になって気づいた、といった面持ちで首肯する。

確かに、一週間という時間が流れているにもかかわらず、翼はタブリスに会って以来、『ゴスペル』の人間とバツタリ会っていないか

った。

天真と緋睡も同じで、ミントはタブリスに会った同じ時期に、ヴァルフアムルクと出会っているが、それっきりだ。

無論、翼はこの一週間に、タブリスのことをメンバーの全員に話した。

外見的特徴や、彼が『福音従者』のひとりだということも。

案の定、一行は驚愕した。そして新たな敵の登場に、話した後は一層修行にも熱が入った。

「……嵐の前の静けさかもしれないな」

「先輩、嫌なこと言わないでくださいよ」

とはいえ、翼は天真のそんな意見に内心では同意していた。

あれだけ妨害してきたのだから、必ず何か仕掛けてくるはずだ。

そう思うと、自然と気が引き締まる翼。これも修業の成果だろうか。

「いずれにせよ、用心していたほうが身のためですね。やつらのこ

とですから、いつ襲撃してきてもおかしくないでしょうし」

「今この瞬間とかな」

「……先輩、嫌な予測ばかり言うのはワザとですね？」

「ふふふ……。さすが我が親愛なる後輩、真道翼。ご名答だ」

正直、正解してもあまりうれしくない。

嫌なことから気を紛らわそうと、翼はパスタを啜る。

ふとそのとき、ミントの様子が目に映った。

「どうしたの？ ミント」

「え……？」

翼はそう訊いたのも、ミントが眉をやや歪ませ、片手で軽く頭を押さえていたからだ。

「頭痛？」

「……うん。そんなところだよ。なんか、調子悪くて……」

確かに言われてみれば、顔色もやや悪い。

修行のやり過ぎで身体を壊したのだろうか、と翼。

思えば、ここ一週間、朝から夕方までほとんどぶっ続けて鍛錬をしていた。オーバーな物言いをすれば、血反吐を出しても立ち上がれ、といった感じだ。

ミントはもとの性格が生真面目なためか、自分たちよりはるかにがんばっていたように、翼には見えていた。翼も、そんなミントの後を追うように鍛錬を積んでいたものだ。

そのため、体調を悪くしてもおかしくなかった。

「疲れているのかもしれないよ。毎日、根を詰めていたわけだし」

諭すような翼に、ミントは、そうかな？ と訊いた。

それに答えたのは天真だ。

「確かに。あれだけ集中的にトレーニングしたからな。身体を壊してもおかしくないだろう」

「ほら。先輩もこう言っているしさ、そうなんだよ」

「今日のところは休まれてはどうですか？ ミント」

天真、翼、緋睡に休養を勧められるミント。

初めは乗り気の様子ではなかったミントだったが、やがて、

「……うん。それじゃあ、そうさせてもらっことにするよ。いざと

いうとき、足を引っ張るのは嫌だし」

ミントは席を立ち、半分ほど残っている残飯を食器洗いのカウンターまで持っていった。本当に調子が悪いようだ。

そしてそのまま、遠くから翼たちに一礼し、ミントは食堂を去った。

「……大丈夫かなあ、ミント……」

彼女の後姿を見つめながら、ボソリと言葉を漏らす翼。

そして視線を元に戻すと、そこには、ふふふ……、と含み笑いをしている天真の姿が映った。

「……な、なんですか？ 先輩」

「いやなに。ずいぶんとミントのことを心配しているのだな、と思っ
つてな」

「そりゃそうですよ。仲間なんですから」

「仲間、ねえ……」

天真の表情が徐々に意地悪いものになっていく。小悪魔、と言えば少しは可愛げがあるのかもしれないが、もはやそれを超越して悪魔や邪神のような笑みだった。

「果たしてそれだけかな、翼よ」

からかう天真に、翼は、

「それだけですッ。何考えているのかわかりませんが、本当にそれだけなんですッ」

「必死なところが怪しいな」

「まったくです」

いつの間にか緋睡も会話に入り込んできた。そんな妹の視線は実に冷ややかである。

「それじゃあッ！ 二人は心配じゃないんですか？ ミントのこと！」

「そりゃ心配だとも。ただ……」

と、そこまで言い、天真は翼に邪神の笑みを向けた。

どうやら、敢えてその先を言う気はないようだ。

女二人から発せられる重圧のようなものに、翼は実に息をするのさえ辛く感じていた。

どうしてこんな目に遭わないといけないのさ、とやるせない気持ちでいっぱいだ。

「……御馳走さま」

翼はわずかに残っていたパスタを口に放り込み、食器類を片付けにカウンターまで行き、その後、食堂を出ようとする。

「どこに行くつもりだ？」

叫び、遠くから質問してくる天真。

こちらでも叫んで答えようと考えたが、周囲に人がいるため気が引け、仕方なく近くまで歩み寄り、

「ミントのところですよ。心配ですから様子を見に行こうと思いついて」

「なるほど。それで油断したミントをベッドで押し倒すと、そうい

うわけだな」

「どうしてそうなるんですかあ!!」

「……兄上、不潔です」

「いやいやいや! 誰もしないってッ! そんなこと!」

「必死なところが怪しいな」

天真の言葉に、緋睡は、はい、と同意を見せる。

このままこの二人につき合っていると、余計に面倒なことになりかねない。

そう翼は悟り、その場を一秒でも早くとばかりに退却した。天真の茶茶と、緋睡のバッシングを背に受けながら。

ミントはひとり、椅子に座って外の景色を眺めていた。

ベランダの扉を開いているため、ときおり夜風が室内に入り、涼しくさせる。

呆然と風景を見ながら、ミントは思考を動かしていた。

食事中に起きた頭痛。

あれは、今に始まったことではなかった。

ずっと昔から慢性的に続いているもので、痛みは実にまちまちだ。小石が軽く頭に当たった程度のものから、バットで叩かれたと感じるほどに強烈なものまである。

痛みがまちまちなためか、一日に起きる回数も完全にランダムだった。まったく何の音沙汰なし、というときもあれば、血管が鼓動しているみたいに一定間隔で痛むときがある。

何年も経っているものなので、いい加減慣れてもおかしくないと思っのだが、慣れることはなかった。

痛みなんぞに慣れることなんて、そう滅多にあるものではない。
痛みは痛みだ。苦痛以外の何物でもない。苦痛に慣れることなんて、誰もなりたくないものだ。

翼たちと行動を共にしてからも、ミントは彼らに内緒にしていた。
下手な迷惑をかけたくなかったためだ。

だけど今回、それがバレてしまった。今まで平然としてきたが、
先ほど襲ってきた頭痛は表情や行動に出してしまうほど、実に堪え難いものだった。

まるで頭の中で蛇がのたうっているような、気味が悪く、それでいて激痛がともなう……そんな頭痛。

今は治まっている。先ほどまで苦痛を味わっていた分、夜風に当たり、景色を眺めることで、ミントはリラックスしようとしていた。
ふと、トントンと扉が叩かれた。

「……誰？」

「僕だよ。入っていい？」

翼だ。

「うん。いいよ」

何の用だろうと思い、ミントは彼にそう促した。

同時、扉が開かれ、翼が室内に入って来た。

中性的で、普段は穏やかさを滲みだしているその顔は、ミントを見るなり、ほつとどこか安堵したものへと変わった。

「どうしたの？ 翼」

「いや。さっき、ミントが辛そうに頭を押さえていたから、今の君を見て安心したんだ」

心の底からそう思っているような声の翼。

ミントは顔が紅潮していくのがわかった。自分のことをここまで心配してくれる人がいて、どことなく嬉しく感じたからだ。

とっさに翼から顔を逸らす、月の白光がそんな彼女の頬を照らす。

「ミント、顔が赤いよ？ ……まさか熱があるとか？」

「ち、違うよッ？ ただ、暑いなって思っ……」

言うものの、無理があると感じていたミント。

なぜなら気温は二十度ほど。もともとが暑くもなければ寒くもない気温の上、夜風が涼しいため、むしろ冷えるくらいである。

本来なら疑われて当然なのだが、

「そうなんだ」

サッパリと、翼は納得した。裏があるわけでもなく、本当にそう思っているようである。

——これを鈍感と言っのかなあ。

しかしその鈍感のおかげで助かった。いったい何が助かったのかは、彼女にもわからなかったが……。

「それで、本当に大丈夫？」

念を押すように、翼が頭痛の程度を尋ねてきた。

「うん、平気だよ。部屋に戻って休憩したら、自然と治ったから」
「そう。ならいいんだ」

心配してくれるのはありがたかったが、そこまで気に掛けてくれ

るとかえって罪悪感のようなものを覚えてしまう。別に悪くないのに……。

「……ごめんね。頭痛なんかで心配させたりして」

「いや、いいんだよ。僕が勝手に心配しているだけなんだから。そのせいで先輩や緋睡にミントの様子を見に行ってくる、て言ったら冷やかされたよ」

まったく、困ったものだよ、というような表情を翼は浮かべた。どう冷やかされたのかは聞かないことにする。

「……っ……」

そのとき、また頭痛がした。血管が一定間隔の間を開けながら躍動しているような痛みだ。

ミントは眉を潜ませる。

「ミント？」

「ごめん……。また頭痛が……。だけど大丈夫だよ。そんなに酷くないから」

堪えられないほどのものではなかったので、そう言っておいた。

翼はそんなミントの様子を見ている。心配している、というのが表情でわかった。

——お人好しだなあ。

ここまで他人に優しく接することができる人も珍しい。たいていの人は見切りをつけて必要以上の優しさは振り撒こうとしない。自身に利がないからだ。

だけど目の前の少年は違う。利など求めておらず、ただそこに困っている人がいれば助けようとしている。利益は彼にとってはない

でなのだろう。

やがて、頭痛が治まった。

「ありがとう。心配してくれて」

「ううん。別に礼をされることじゃないよ」

翼は柔和にサラッと言った。決して謙遜ではない、心の底からの言葉だということが口調からしてわかる。

——どうして、翼はここまで人に優しくできるのだろうか？
自然とそんな疑問が頭に浮かぶ。

「……ねえ、翼。君はどうして……そんなに——」

と、翼に問おうとしたときだ。

ドゴオ、という轟音が鳴り響き、部屋が揺れた。

……否、部屋だけではない。城全体が揺れたのだ。

「なに！？」

轟音の発生源は庭。

「行ってみよう！ ミント」

少年に言われるまでもなく、ミントは得物を持って少年とともに自室を出た。

第5章 - 2 強襲

城壁には風穴が開けられていた。まるで、巨大な槌で打撃されたかのよう。

轟音が響くと同時に、近くにいた見張りの兵士がその一点に集まった。各々、何事か何事か、とガヤガヤと騒いでいるが、ただ事ではないことは確かだということはわかっていた。

未だ土煙が晴れない中、そこから三人ばかりの人間が現れた。

「ヒヤッハハハハハ……！！」
『アンゲリオン使者』ゲイル様のご登場だぜえ！」

「同じく、アルフォート参上！……てね」

エメラルド色の長髪の青年と、ダークブルーの髪の少年が、半ばふざけながら自分たちのことをそう名乗った。

残りのシルバーグレーの髪の青年だけは何も言わず、ただ黙して兵士たちを一瞥していた。

まるで実力の程を見極めるように。

「さてさて、さっそくで悪いんですが城の兵士諸君——」

ゲイルと名乗った青年は、槍をクルクルと片手で回しながら、

「——死んでくれや」

兵士たちは一瞬、何を言われたかわからなかった。

——銀閃が宙を踊った。

すると、サッカーボールが高く宙を舞った。

数は無数にある。数えきれない。

その直後、雨が降った。色をもった、鮮やかな雨。

……しかし、その認識は間違っていた。

ゴロリと重力によって落ちてきたサッカーボールは人間の頭部だった。

雨も紅く、独特の鉄の臭いを周囲にばらまいていることから血だということがわかった。

彼ら三人に一番近い人間たちの首が一斉に飛んだのだ。

すべてはあの銀の弧が舞った直後。

「いやあゝ。最高だぜ」

快感、とばかりに殺人鬼は口元を狂喜に歪ませていた。

ゲイルの槍の斧刃には、ベクトリと血糊がへばり付いており、実に生々しい。

「……ゲイル。あまり殺すなよ」

「固いこと言うなよ、ヴァルファムルク。邪魔するやつはどう扱ってもいいってタブリスが言ってただろうが。だから俺様なりに丁寧に扱ってやってるんだよ」

それ以上、ヴァルファムルクは何も言わなかった。

兵士たちはただ、同志が数秒の間にあっという間に殺された事実

に、驚愕していた。

やがて驚愕の後に彼らに訪れるのは、恐怖。

「……ひっ」

短い悲鳴を上げ、三人を囲んでいた兵士たちは後ずさりを始める。自分たちと相手の力量の違いを、犠牲のもとに見せつけられたためだ。

「……さて、始めようぜ。血吹き、肉裂く、殺戮カーニバル謝肉祭をよお！」

ゲイルの歓喜と取れる声と同時に、その場は騒然となった。

「ヒヤハハハハハ……！ 逃げる逃げる！ 楽しい楽しい人間狩りの始まりだぜえ！」

ゲイルは槍の斧刃に魔力を凝縮し、虚空を振るう。

すると魔力が衝撃波を形成し、それが城の壁に激突した。

パーティーが始まる祝砲とばかりに鳴り響く轟音。

直撃した個所は当然のように粉々に吹き飛び、悲鳴が聞こえた。壁の向こう側にいた人間が巻き込まれたのだ。

ヒヤハツ、と抑えきれずに一層笑みを濃くするゲイル。

無秩序に人を殺傷すること……、それが彼の最大の快樂だった。

他人を貶めるだけでは飽き足らないのだ。

目につく限りの兵士風情を、ゲイルは片っ端から片付ける。

迫って来る勇敢な者は正面から。

逃げ果せおおようとする者は後ろから。

ある者は首を断ち、

ある者は胸を穿ち、

ある者は上と下を真っ二つにし、

絶命させる。

時折周囲を見渡すと、アルフォートも便乗して兵士たちの掃除を行っているのが視界に入った。

ヴァルフアムルクの姿はない。おそらく、ソーサリー・クリスタルを探しに城内に入っていたのだらう。任務を最優先に片付ける主義だということは、ゲイルも知っていた。

ならば、とゲイルは思う。任務はやつに任せて、こちらは存分に愉しませてもらおう、と。

獲物の、

肉を断ち、

骨を砕き、

血潮を吹かせ、

悲鳴を上げさせ、

臓腑をぶちまける。

最高だ。

最高だ。

最高だ最高だ最高だ。

「ヒヤッハハハハハ……！！」

狂喜を響かせるゲイル。

そこに人としての道徳などはなく、ただ殺戮のみが彼を支配していた。

「おらおらどうしたあ！ 止めてみるよ！ この俺様をよお！」

死体を確実に増やしながら、殺人鬼は吼える。

と、そのときだった。

横から放たれる敵意。

それを察知し、ゲイルはそちらへと振り向く。

同時、衝撃波がゲイルに直撃した。

避ける暇もなく、宙を軽く飛ぶ。……が、とつさに体勢を立て直す。

「……ッ。誰だ！」

「誰だ、とはなんだ。止めてみるよと言われたからおれは止めたままでだ」

そこには、黒の長髪の少女が、槍を携え、ゲイルを睨みつけていた。

「おまえがゲイルとかいうやつだな。……なるほど、翼の言っていたのやつだ。殺人鬼然としている」

「誰だおめえ。もしかして、あの小生意気な糞餓鬼のお仲間か？ええ？」

ゲイルはあるとき、翼とかいう少年に一撃入れられたことを根に持っていた。

次会ったときは確実に殺してやる。そう思っているほどに。

黒髪の少女は、ああ、と簡潔に言った。つまりは肯定。

「神藤天真だ。ずいぶんと暴れてくれたな。血生臭いせいで眠れんではないか。おれの大切な就寝時間を削った報いは万死に値するぞ」
「それはすまなかつたなあ。……だけど、心配しなくてもすぐに眠らせてやるよ。眠り過ぎて一生起きなくなるくらいによ！」

その言葉が、戦いの火蓋を切ることとなった。

緋睡の目の前には、ひとりの少年がいた。

双剣を構え、燕尾のマントを羽織った、ダークブルーの髪をした少年。紛れもなくアルフォートだった。

周囲には多数の兵士の亡骸が赤の絨毯を敷いて無造作に倒れていた。緑の芝生で覆われていた庭は、今では気味の悪い紅の色が付加されており、のどかさはない。

騒ぎに気づいて庭へと出たらこの結果だ。

まったく嫌な予感が的中した、というべきか。夕食の会話を思い出す。

しかし今はそのことに嘆くより、目の前の状況を打破することが先決だ。

「やあ、また会ったねえ。緋睡。こんなところでも会えるなんて…

…ぼくときみはずいぶん縁があるようだ」

「ええ。大層無くなってほしい縁があるようですね」

皮肉気に緋睡は言葉を飛ばす。

「ふふ……。きみにとっては、だろ？ ぼくとしてはうれしいよ。こうやってまた殺りあえるのだから」

邪気の込められた笑みをし、アルフォートは双剣を構えるのを、緋睡は見た。

弓を片手に、緋睡は魔力で矢を数本生成する。腰には小太刀が振り。

「さあ、始めようか。第二ラウンドをねッ！」

刹那、二つの影は激突する――。

第5章 - 3 強襲

翼とミントは各々武器を持って、城内を出ようとしていた。現在いる階は五階。翼たちの部屋がその階にあるためだ。

魔力で身体強化をすれば、二階くらいの高さくらいなら飛び降りても無傷で済む。それ以上の階で飛び降りようものなら何らかの身体が軋みが生じるし、七階以上となると怪我してもおかしくない。ましてや十階以上になると死ぬ確率さえ出てくる。

なので二階までいけば後は窓から飛び降りれば時間の短縮にもなる。

ときおり窓から外の景色が垣間見えるときがあるのだが、その際に見えるのは大量の傀儡と本来あるはずのない赤の色だ。

間違いない人が死んでいることがわかる。それも、たくさん。

翼は戸惑いと憤怒の渦中にいた。いきなりの襲撃と、それによってもたらされた災厄のせいだ。

——これ以上は赦さない……！

ろくでもないやつらだということとは知っていたが、ここまでやるとは思っていなかった。なんとも甘い考えをしていた、と半ば後悔の念を覚える。

これ以上後悔を増やさないためにも、翼たちは長い廊下を走り続ける。

やがて、階段までたどり着き、下の階へと駆け下りる。

そして、再び階段を目指し、駆け出した。

この城は、階段がひとつの場所にまとまっていない。だいたい廊下の端にあり、翼たちは一階降りるごとに廊下を端から端まで走らないといけない。どうしてそういう造りになっているのかというと、万が一の襲撃に備えてのことだった。最上階には国王の部屋があり、一か所に階段を造ってしまえば、一気に最上階まで上られてしまうため、分散して造られているのだ。その造りのおかげで、翼とミン

トは無駄な距離を走らされていた。

——こうしている間にも犠牲者が出ているかもしれないのに……！
早く気持ちだが、彼の速度を上昇させる。

そして三階へと繋がっている階段を発見し、転がり落ちるように下りた。

三階。あと一階下りればそこからは窓から外へ飛び出せばいい。
そう思い、廊下を疾走していたときだった。

ドゴオ、という轟音とともに突然、足場が崩れた。

「なッ——！？」

何が起きたか一瞬わからなかった。だが、尻餅を豪快についたときの衝撃によつて、自分は落ちたという実感を与えられた。

二階の床は衝撃を受けても崩れようとはしない。よほど丈夫に造られているようだ。

次にミントの姿を確認しようと、舞い上がる煙の中、目を凝らして周囲を見渡す。

ふと、人影が見えた。

しかしそれは、ミントにしてはあまりにも長身のように感じられた。

「……お前か。真道翼」

背骨が氷柱になったような気がした。

聞き覚えのある声。

自分を完膚なきまでに敗北へと落とした男の声。

「悪いが、今はお前と戦う気はない。大人しく引つ込んでてもらおう」

ヒュッ、と空気を裂く音が聞こえた。

その際の空気の流れによって煙が一瞬晴れ、そのときに翼ははっきりと見た。

シルバークレーの髪をし、長剣を手にしている男の姿を。そして距離を取って、彼を睨みつけているミントの姿を。

「……ヴァルフア、ムルク……ッ」

彼の名を呼んだ瞬間、頭上から何かが落ちてき、足元が崩れさつた。

翼の意識は、闇と瓦礫に埋もれる中、途切れた。

四階の足場をヴァルフアムルクが衝撃波で破壊し、翼を下敷きにしたのを、ミントは見た。

さらにそれが災いして、二階の足場も崩れることになり、翼は瓦礫もろとも一階まで落ちてしまった。

「翼ッ！」

ミントが彼の名を叫ぶ。……が、無論返事はない。煙が治まった後、広がった光景は天と地に開けられた大きな風穴だ。

翼は生きているだろうか、とミントは不安になる。

いくら魔力で身体を護っているとはいっても、瓦礫の下敷きになっている以上、生存は絶望的だ。

「……どうして、こんな……」

「邪魔だったからだ」

きつぱりと、それでいて淡々と述べるヴァルフアムルク。そこに情といったものは存在しない。

ミントは敵意の視線をヴァルフアムルクへと向ける。翼の仇だとはかりに、ミントの瞳には猛る何かがあった。

ヴァルフアムルクはそれを、平然と真正面から受け止める。動じる気配など微塵も感じさせず、彼の豪胆振りがしかと伺うことができた。

「話がある。ミント・フェルトラント」

続いてきたヴァルフアムルクの言葉。

「私はあなたと交わす言葉なんてありません」

ミントはそれを断固として断る。敵とは極力言葉を交わさないのが、彼女にとつての常だ。せいぜい情報を聞き出す程度に問いかけを放ち、答えなければそれまで、という考え方である。

そのとき、頭痛がした。

まただ、とミントは顔を^{しか}顰めるが、今度の頭痛は異常だった。

何か……、内に封印していたものが、外へと飛び出そうとしているような感覚。爆弾の火薬が、衝撃と同時に外装を破壊して外へと拡散しようとしているような、激痛。

「う……ッ」

大剣を落とし、たまらずミントは片膝をつく。敵からの攻撃ではなく、自身の内からの攻撃によって。

金庫の中に閉じ込められた人間が、扉を加減なしに叩いているよ

うな苦痛とともに、目眩まで起き始めた。

景色が湾曲し、泥酔しているよう。

今までにない、痛覚と不快感。

何かが。

なにかが。

ナニカガ。

——何かが……。

出ようと……している……——、

刹那、記憶が爆発した。

そうとしか思えなかった。莫大な量の情報が、爆弾が爆発したような勢いで自分の頭の中に流れ込んでくるのをミントは感じた。

あらゆる情報が波となって押し寄せ、その中にミントは見た。

巨大な、人ひとりが入りそうな透明な円筒の中に、自分が入っているのを。

——なんで？

わからない。

わからないが、それは紛れもなく自分だということだけはわかった。

自分は五、六歳ほどの幼い姿で、裸だった。カエルのホルマリン漬けのように、変な液体の中に入れられて、近くにいる人間の姿を見ていた。

視界の中に、円筒を眺める二人の人影。そしてその背後にひとりの少年の姿があった。

歳は十五、十六歳ほどのその少年は、紛れもなく……、

——ヴァルフアムルク……！？

今より幼い姿だったが、間違いない。シルバークレーの髪と、常に厳しくも何かを秘めた鋭い瞳が、ヴァルフアムルクだということを証明している。

自分を、二人の人間が眺めている。

ひとりは金髪のセミショート少年。見た感じ、後ろにいるヴァルフアムルクと同じくらいの年齢だと思われる。

もうひとりは、知的そうな眼鏡をかけた白髪の、顔立ちから厳格な雰囲気漂わせている男だ。こちらは三十代くらいだと思われる。二人の服装は白を基調にした軍服みたいなものを着ており、何か話し合っていた。

ガラス越しだが、その内容ははっきりと聞きとることができる。その中に、聞こえた。

「失敗ですねえ。これは」

金髪のセミショート少年が、残念そうに言った。
白髪の男は淡々とした面持ちで頷く。

「だな。身体機能に問題はないはずだが、ラミエルではないからなやがり、いくら我々でも、死者を完全に蘇らせることはできないよ
うだ」

「でも、今回も代わりはできるみたいです。能力も多分受け継いでいるはずだし」

「だが、失敗作は失敗作だ。失敗作に価値などない」

「開発者なのに、冷たいですねえ」

言葉は憐れみだが、口調からはそのような様子を微塵も感じさせない。

「それでどうするのですか？ これ」

「廃棄処分だ。適当な戦地にでも放り込むか、『アンゲリオン使者』に始末させる」

そう言うと、白髪の男は踵を返し、その場から去っていく。もう興味はない、とばかりに。

残った金髪の少年は、近くにあった機械を操作し、円筒を開かせた。

得体のしれない液体とともに、裸同然の彼女の身体が地面に流れ出てきた。

「そういうわけで、頼みますよ。ヴァルファムルク」

ポンと、肩を叩き、金髪の少年も部屋を後にした。残ったのは自分とヴァルファムルクだけになった。

何か彼に言いたかったが、過去を見ているために何も言えない。ただの主観的な観客となっていた。

ヴァルファムルクは地面に倒れているこちらを見下ろしていた。冷たい、絶対零度の眼光……。

スラリと、腰に掛けていた鞘から刀身を抜いた。それを流れるような動作で、上段に構える。

自分は逃げない。……否、逃げられない。過去のため、自分はただ見ているだけだ。

おそらくその当時の自分には、これから何が起きるかわかっていなかったのだろう、と思う。そうでなければ、呆然としているはずがない。

やがて、刃が振り下ろされる………かと思われた。

しかし、何秒経っても凶刃が迫る様子はない。

ヴァルファムルクが、剣を振り上げたまま、こちらを見、硬直し

ていた。

瞳の色は相変わらずだったが、そこにはどこことなく同情のようなものが宿っているよう。

しばらくし、やがてヴァルフアムルクは剣を収めた。

――殺すのを止めた？

どうして？ と疑問が浮かぶが、相手は過去の幻のため、答えることはない。

今よりも華奢なミントの身体をヴァルフアムルクは抱え、何処へと足を歩ませた。

――場面は変わる。

湖の岸部。

空は闇一色であることから夜だということが分かる。

そこに、幼いミントと少年姿のヴァルフアムルクはいた。

先ほどとは違い、幼女のミントは服を着ていた。

当時のヴァルフアムルクの服なのだろう。おかげでぶかぶかだ。

幼女は少年を不安げな顔で見上げる。

「わたしが去った後、あの丘に創られた国を目指して歩け。そうすれば、お前は死ぬことはないだろう」

それだけ言うと、少年は踵を返した。

なぜだろうか。その背はどこか、名残惜しそうに思える。

何か負い目があり、それから必死に目をそむけようとしているよう。

「まって……！」

幼い自分は去ろうとする少年の背に触れようと、走ろうとする。
そのとき、闇を裂く一条の稲妻が、ミントを襲った。
鼓膜をつんざかんばかりの轟音とともに、幼女は倒れる。何が起きたのか、わからない様子で。

視界がぼやける。気を失おうとしているのだ。
だが、当時の自分にもそれなりの根性というものが備わっていたのか、必死に現実に自分を存続させようとする。

「甘いな、ヴァルフアムルク。殺せないなら戦場にも捨てると、俺は言っただけだ」

聞き覚えのある声。確か……眼鏡を掛けた白髪の男だ。

ヴァルフアムルクは何も言わない。……否、言えないのだろう。命令を破ったも同然なのだから、言い分けなどできるはずがない。

「まあいい。こうして俺が直々に失敗作を破壊してやったからな。
——行くぞ、ヴァルフアムルク。クイーンズにいつまでもいたくはないからな」

吐き捨てるように言い、白髪の男はヴァルフアムルクを連れ、その場から空間転移で去っていった。

——そこで、ミントの記憶は途切れている。

「……………」

どのくらい時間が経っているのか、ミントにはわからなかった。体感時間的には一時間ほどに思えたが、周囲の雰囲気から察するに数秒しか経過していなかったことがわかる。

「……………思い出したか」

呆然とした様子のミントに、ヴァルフアムルクは静かに訊く。
この前、湖の岸部でヴァルフアムルクは言った。
憶えていないのか、と。

それはつまり、あの記憶を指していたのだ。
なぜ今までこのことを憶えていなかったのか……。それはおそらく、あの稲妻のショックのためだろう。

あれのためで、今まで何食わぬ顔でこの国にすることができていた。

だが……、

——思い出した……………。

実に嫌な記憶。

できれば一生思い出したくないもの。

金庫にでもしまつて、厳重に封印しておきたかったもの。

それを……………思い出してしまった。

——私が……………敵側の人間、だったなんて……………。

「……………嘘……………」

信じたくない。

しんじたくない。

シンジタクナイ。

「……嘘……ッ」

自分が敵で、討つべき相手だったということ。

「……嘘ッ……！」

受け入れたく、ない。

「嘘ではない」

儚い望みを、ヴァルフアムルクは一刀両断する。

「お前は、死んだラミエルを蘇らせる際に生み出された、『ゴスペル』が造り出した人間だ」

はつきりと、断言された。

自分の存在を。

気づけば、両の膝を地面に着け、放心していた。

心は浮遊し、そのまま天にでも逝ってしまおう……。

「お前に残された道を提示してやろう。——ひとつは、負い目を背負いながら、仲間^{わたしたち}を討つか。——もうひとつは、わたしたちのもとへ戻り、仲間^{やつら}を討つかだ。……いや、もうひとつあるな。わたしたちのもとに戻り、仲間^{やつら}に討たれるか、だ。今まで騙^{あざむ}いていた報いとしてな」

彼の提示した選択肢は、あまりにも非情で、それでいてミントにそれしかないのだ、ということを実感させた。

ヴァルフアムルクの瞳は、選べ、と命令している。

——選べ、なんて……。

ミントには選択肢が与えられて、それでいて与えられていないも同然だった。

彼女の選択肢は、彼に提示された直後から、すでに決められていた。

そして……。

第5章 - 4 強襲

生理的に受け付けの悪い赤のカーペットの上を、二つの流影が疾走していた。

天真とゲイルだ。

互いの得物は槍。形は変幻自在の戦いが可能なハルバード。得物が全く同じである以上、勝敗を決するのは純粹に実力がものを言わせる。

ときおり二人は駆けながら、得物を交差させる。

させる度に、火の花と金属の軋み合う音が鳴り響き、それらは互いの闘気を鼓舞させる。

「ひゃっははッ！ やるじゃねーかつ！ 氣にいったぜえ！ 神藤天真さんよお！」

舌落とすぞ、と天真はゲイルの顔目掛けて突きを放つ。

それはまるで閃光の如き。

ゲイルはとつさに首を傾け、回避した。

そこからさらに、斧刃でそのよくしゃべる首を落とそうと――、一閃。

だがそこには、彼の首はなかった。

視線を即座に落とすと、そこにはゲイルの下卑た狂喜が、

「おらよお！」

斬り上げ、凶刃が衣服を裂いた。

だが、それだけだ。皮膚には到達していない。

とつさのバックステップで避けたためだ。

回避し、再び前進。

ゲイルは攻撃の反動で硬直している。

時間にしておそらく一瞬程。

それでもかまわない。

戦いにおいて一瞬とは、命を削り合うための最前線なのだから。敵目掛けて、再びの突き。

「くッ……」

声を噛み殺し、ゲイルは硬直を解き、槍を振り下ろした。

そこに業はない。純粹に渾身の力を入れたのだ。

激突。

衝撃で周囲の芝生と血と死体が吹き飛ばされ、小クレーターが誕生する。

その中で、二人は間髪入れずに戦う。

天真は主に突きを重点的に入れた攻撃を。

ゲイルは主に斬撃を重点的に入れた攻撃を。

互いに、華麗なステップを踏み、流れるような攻撃を飛ばす。

火花は夜の闇を少しでも明るくさせようとばかりに、ぶつかり合う度に周囲に花弁を散らす。

その中で、天真は聞いた。

ボソボソと、何かが……。

《——落ちよ、疾風の鎚^{つち}。かの者を砕け》

詠唱魔術。

槍での攻撃を交えながら、ゲイルは詠唱を唱えていた。

——まずいッ。

折を見て天真は弾けるように後方へ退いた。
同時、

《——ウインド・スレッジ!!》

ゲイルが叫んだ。

直後、地響きを持つて先ほどまで天真がいた場所にクレーターが出来上がった。

超圧縮された大気の塊が落ちたのだ。

風であるため、視認するのは至極難しい。色も形もないため、風系の詠唱魔術は使用されると厄介なものが多いのだ。

あれが直撃していたらと思うと、冷汗が一筋ばかり垂れてくる。骨は碎かれ、内臓はグチャグチャに潰され、口からは豪快に吐血することだろう。

しかしマイナス方面に物事を考えても仕方がない。今は敵を討つことだけに意識を集中する。

「へえ〜。やるじゃん、本当に。バレねえように小声で詠唱してたんだけどなあ」

実に残念そうに後ろ頭を掻くゲイル。

「見くびるな。おれはそんなに柔^{やわ}ではない。それなりに鍛えているからな」

「そいつはご苦労なこった。どうせ無駄になるけどな」

あつそ、と天真は軽く流した。そしてここで、質疑をした。

「おまえたちの目的はなんだ？　ずいぶんと派手な真似をして……性質^{たち}の悪すぎる嫌がらせか？」

「嫌がらせつつーか、俺様とアルフォートは単にストレス解消にこの城の兵を皆殺しにしているだけ。まあ、ヴァルフアムルクのやつはソーサリー・クリスタルを盗み出すっていう任務を、今頃達成し

ているだろうよ」

「なに!？」

城に蓄えられているソーサリー・クリスタルが、やつらの目的だとわかった天真は驚愕する。

どうにかして他のやつらに知らせないと、と思うが、それを読んだのか、

「おっと！ 今更他のやつらに伝えようとしても無駄だぜ？ 俺様が邪魔するし、何よりもう手遅れだろうしなあ！ ヒヤッハッ！」

耳障りな嘲笑。

ギリツと歯ぎしりする天真。こうなったら、誰かが行ってくれていることを望むしかない。

「まあ、俺様たちは俺様たちで、愉しもうじゃねえか！」

紅と蒼が飛び交う。

紅は炎。すべてを焼き尽くす業火。

蒼は氷。触れるものを凍て付かす氷塊。

紅を繰り出すは緋睡。

蒼を繰り出すはアルフォート。

紅と蒼がぶつかり合い、周囲を白い霧で満たさんとする。

時間が経過するにつれ、視界が悪くなり、悪くなるとその場から二つの影が流れる。

移動になると銀の色が追加され、金属音とともに朱色も添加され

る。

「前はもう少しでばくの勝ちだったけど、邪魔が入ったからねえ。今回は完全に勝ちをもらいにいかせてもらおうよ。ウォーミングアップも済んだことだしねえ！」

「たくさんの兵士を殺すことがウォーミングアップですか……。ずいぶんと性根が腐っているようですね、アルフォート」

「褒め言葉にしか聞こえないよッ！」

緋睡の皮肉をアルフォートは、嘲笑ひとつで跳ね飛ばす。そこに罪の意識は皆無だ。

緋睡は弓を扱ったために、アルフォートから距離を取ろうとするが、離れない。

前回の戦いで遠距離戦主力だということを知られたのだろう。こちらが離れても、離れた分を詰めてくる。

——賭けてみましょうか……。

相手の攻撃を捌きながら、緋睡は決意した。

《炎よ。咎人を猛追し、灰燼と化せ》

敵の攻撃を捌きながらの詠唱魔術。修行した結果、身につけた業だ。気づかれないように、小さな声で詠唱をする。

詠唱に意識を分散させる分、注意力が散漫になる上に、扱えるかどうかわからなかったので使用を控えていた緋睡。だが、こうでもしないと相手との距離を放すことは無理だと判断した。

捌き切れなかったアルフォートの斬撃が身体を裂く。だがいずれも致命傷を逸れたものだ。受ければ明らかにただでは済まない攻撃だけを、小太刀で弾いているためだ。

魔術を発動させるだけに十分な魔力を体内で練り、

《——バースト・フレア!!》

発動させる。

そこでアルフォートが初めて気づき、視線が緋睡から上空へと移る。

見上げたのは空が急に明るくなったからであらう。

当然である。はるか上空から、直径が二メートルほどの炎弾が垂直落下してきているのだから。

それに目移りしたところを、緋睡は渾身の力で小太刀で斬りかかった。

「……くうッ」

面倒だ、とばかりに二刀の剣で受け止めるアルフォート。その衝撃で彼は地面に軌跡を残しながら後方に大きくスライドした。

その後、アルフォートはその場から横に跳び退く。

同時、地を轟かす爆音が夜天に響き渡った。

炎弾は着地とともに大輪の花を咲かせ、周囲にあった芝生や死体を吹き飛ばすか、焼き尽くした。

闇が支配していた戦場は、一転して朱色の光が満ちる。芝生を糧としてそれは勢いを増し、二人を囲う。

死体が焼けたせいで、周囲には硫黄臭と、それ以外の不快な悪臭が鼻を突いた

それにかまわず、緋睡は弓を構え、矢を番^{つが}える。距離が離れた今がチャンスだ。

炎を纏った矢が、狙いを定めて放たれる。

紅が風を穿ち、直進。

速さは疾風。

周囲の酸素を取り込み、燃えながらそれは敵を貫こうと牙を向く。

「甘いね！」

アルフォートは二刀の剣に魔力を宿し、虚空を一閃、二閃した。すると刃の軌跡が冷気を伴った衝撃波となり、迫る矢を宙で爆散させた。

残る二発目はそのまま緋睡へと猛追する。

それをとつさに小太刀を抜く際に、一振りして雲散霧消させた。手が衝撃で蠕動^{ぜんどう}するが、直撃するよりはマシだ。

「やるねえ。どうやら前よりは成長しているようだ」

「当然です。おまえが高みから見下している間に、わたくしは日々特訓していたのですから」

「それはご苦労だねえ。足掻いてくれないと、こちらとしても殺しがいが無いというものだからねえ」

減らず口をなくそうとしないアルフォート。

そろそろ黙らせてやりたい、と思う矢先、

「……そろそろかな」

と呟いた。

「何がそろそろなのですか」

訊くとアルフォートは、そういえばまだ言ってなかった、というような表情をし、

「いやなに。ぼくたちがここに来たのは、別に兵士たちを殺すためじゃなくてねえ、……いや、まあ確かに愉しみとしてはあったんだけどね」

早く話せと、緋睡は眼を付け、脅す。
その脅迫をフツ、と一笑して返すと、

「ぼくたちの狙いは、この城に集められているソーサリー・クリスタルを奪うこと。ツールハンマーを起動できないようにするためにね。ヴァルフアムルクがなんとかしてくれているはずだろうねえ、今頃」

「な……ッ!？」

しまった、と緋睡は思った。
完全に時間稼ぎされてしまった、と。

同時刻、天真もゲイルにそのことを聞かされて驚いているのだが、彼女にそのことはわからない。

「まあ、きみが気にすることじゃないよ。もう、手遅れだろうしねッ」

呆然としてしていた緋睡に、アルフォートが襲いかかった。

第5章 - 5 強襲

全身が悲鳴を上げている。

縦横から圧迫され、身体のあちこちからは身が焼けんばかりの激痛がした。

視界は真っ暗。

どこが上なのか下なのか、それすらも曖昧になるほどの、漆黒。痛む身体を鼓舞させて動こうとすると、パラッとどこかの一角が崩れそうな音がする。

しかし、全身が軋む。

頭の中が自転しているように目が回る感覚すらしていた。

加えて全方向からの圧迫が強烈だ。

魔力で身体を防護しているから辛^{かる}うじてもっているという具合だ。魔力を解けば瓦礫たちにプレスされることは間違いない。押し花ならぬ押し人間なんてなりたくないし、他者も見たいとは思わない。意識を失いかけながらも、翼はわずかな瓦礫と瓦礫の隙間を見つけては、身体をくねらせ、外に出ようとする。その度にパラパラと今にも崩れそうな音がどこからともなくする。

このままではこの瓦礫が墓石になると踏んだ翼は、おもむろに自分の眼前にある瓦礫を力の限り押した。

ガラリと、一角が崩れ、光が見えた。

夜の光だが、それでも瓦礫の中よりはずっと明るい。

幸運なことに、翼が埋もれていた場所は、比較的浅いところだったようだ。

翼は身体を無理やりこじらせ、くねらせ、必死に出ることだけに気を集中させる。

く……、と声が漏れる。先ほどまでは声を出すことさえもできなかったというのに、それだけ余裕ができたということだろうか。

動くごとに全身に電気と熱が走った感覚を受け、身体が苦痛を訴

える。

頭が常時シャッフルされているように、目が回る。それでも、必死に出ることだけを考える。

「くっ……こつの……おお……つつ……！」

歯を食いしばり、翼はガラリという音とともに外に脱出できた。立ち上がる力も、踏ん張る力もないため、瓦礫の山をゴロゴロと転がり、平坦な廊下で停止する。

翼の身体はボロボロだ。ボロ雑巾、といっても差支えないくらいに。

着ている衣服はもちろんのこと、全身に大小の傷があり、ポタポタと血を滴らせている。

先ほどまで暗闇だったからよくわからなかったが、視界が霞む。霧がかかっているように、あるいは壊れかけのテレビのように、視界がブラつく。

手や腕は大丈夫のようだが、足の骨が折れているようだ。どつりで立てないわけだ、と翼は思う。

「……そうだ……。ミン、トは……」

言葉に出すのも疲れるというのに、ついとばかりに翼は言う。

「ミントも瓦礫の中か？」と思うが、それはない。なぜならあのとき、ヴァルフアムルクと対峙しているミントの姿を見かけたからだ。まさか……、と翼の脳裏に嫌な予感が駆け巡った。

「……ミントッ……！」

喉奥で血が粘つくが、翼は彼女の名を叫んだ。可能な限り、必死で。

コツ、コツ、と足音が聞こえ始めた。
数は二人分。

地面に這いつくばる格好の翼は、首を持ち上げ、正面を見る。
揺れる視界。そこに、翼は確かに見た。

悠然とこちらを見下ろして佇むヴァルファムルクと、その後ろに、

「……ミン、ト……」

今にも泣きそうな、仲間の姿を。

「……生きていたのか」

半ば驚きの色を交えた口調のヴァルファムルク。しかしその形相は仮面を被っているように変化がない。

「……ミントに……なにを……した……」

「何もしていない。ただ、決断してもらっただけだ」

決断？ と今にも消えてしまいそうな意識の中で思った。

どういう意味だ、と問いたたたかたが、口は動いても息がハアハアと漏れるだけ。意識を保つために、必死に脳に酸素を供給するだけで精一杯の状態となっていた。

しかし、翼のそんな質問を察したのか、ヴァルファムルクは答える。

「わたしたちの仲間になる決断をだ」

……。

思考が、止まった。

息をすることさえも忘れてしまったよう。

目は驚きに見開き、隠れるようにしてヴァルフアムルクの背後にいる少女に、翼は視線がいく。

「……ミン、ト……？」

どうして？ という疑問が、それには含まれていた。

全身の痛みは衝撃でどこかに飛んでいったかのようなのだ。

ただ、それでも身体は限界を感じているため動かすことができず、彼女に歩み寄ることができない。

ミントは翼に歩み寄ろうともしない。まるで、もう近づいてはいけないみたいに……。

近づいては、自分が保てなくなるかのように……。

しばらくの間。その間、外からは剣戟をし合う音や、爆音や衝撃音が聞こえてくる。

身体に蓄えられている疲労も相俟あいまって一秒が非常に長く感じられる中、

「……ごめん、なさい……」

消え入るような声で、確かにミントはそう詫びた。

それが何を意味しているのか、翼はわからなかった。しかし、深層意識では理解したのか、現実を拒絶しようと、翼の視界は闇で埋めようとする……。

「……そ……んな……」

それは蚊の鳴くような声。

声にならない声で、翼は口を動かし、現実から意識を断絶させた。

第6章 - 1 少年の覚悟、少女の迷い

目が覚めると、そこはベッドの中だった。

虚ろな意識を、人工の明かりが目覚めさせようとする。

そのまま翼は呆然と上半身だけ起こそうとすると、全身に過剰な電気が走った。加えて、ポキポキと痛々しく鳴る身体の節々。

痛ッ、と短い悲鳴を上げ、激痛で意識が完全に晴れた。実に嫌な目覚まし時計だ。

——……どうして、こんなところに？

いるのだらうと、翼は思考開始。意識は晴れても、昨日の記憶がどうにもぼやけている感じがしていた。

そのせいだろうか、初めは考えたところで何も思い浮かばなかった。が、時間が経つにつれ、不意に場面が想起された。

フラッシュバックされる過去。

突然の『アングレリオン使者』の襲撃。

外から聞こえる阿鼻叫喚の叫び。

ヴァルフアムルクとの対峙。

瓦礫に埋もれた記憶。

そして……、

「……ミント……」

金髪のツインテールの少女の名を、翼は呟く。

夢であってほしい。

幻であってほしい。

そう思うが、全身に駆け巡る激痛が、あれは現実だと訴える。

非情な現実。

認めたくない現実。

目を背けたい現実。

だが……起きた現実だ。

どれだけ否定しても決して変わらない無情な現実……。

ヴァルフアムルクは、ミントが自分たちの仲間になる決断をした、
というようなことを言った。

それが真か否かをミントに訊けば、彼女は確かにこう言った。

ごめんなさい、と。

それはすなわち肯定。

否定しようのない事実だということを翼に教えた。そのとき翼は、
ショックと身体の疲労と傷で気を失ったのだ。

それだけの破壊力が、あの言葉にはあった。

「……ミント……」

どうして？　と思う。

どうして、あいつらの仲間になったのだろうか、と。

何かあったのだろうか。

何か、そうしなければならぬ理由が……。

そのとき、扉が軽く叩かれ、翼の許可なく人が二人ほど入ってきた。

天真と緋睡だ。

二人は身体のところどころに負傷した痕を包帯で覆っていたが、
概ね翼と比べればマシなほうだ。

「起きましたか、兄上」

「やれやれ、心配したぞ。連中がずらかった後、城内を見に行った
ら、おまえが血まみれで倒れていたのだからな」

とりあえずは一安心だ、と二人は胸を撫で下ろす。

「……あの、ミントが……」

翼が口を開くと、天真が手で制止させた。

それ以上はおまえの口からは言うなと、暗黙で語っているかのよう
うに。

「……わかつている。おまえの言いたいことはな」

天真の台詞に、緋睡が首肯する。

つまりは、二人も見ってしまったのだ。ミントがヴァルフアムルク
に連れられて行くところを。

「すみません。わたくしたち、一步も動きませんでした」

珍しい緋睡の詫び。

天真の表情も、辛辣なものとなっていた。

違う、と翼は直感した。

動かなかったのではない。動けなかったのだ。

ヴァルフアムルクから発せられる圧倒的な威圧感。全快の状態で
彼と対峙しても全身がやつから発せられる凄みでピリつくというの
に、負傷した状態で彼に立ち向かうのははっきりいって無謀、自殺
行為というものだ。

先輩と妹に傷を与えた人物を、翼はある程度予測できる。並の実
力者では、彼女らを負傷させるなど滅多にないだろうからだ。

だとすれば、相手は並の実力ではない、上級者。

双剣を扱うダークブルーの髪の少年と、槍を使用するエメラルド
色の長髪の青年が、翼の頭をよぎった。

「二人のせいじゃないよ。……仕方が、なかったんだ……」

運が悪かった。

相手が悪かった。

思い、自分を必死に肯定しようとする翼。だが、心がそれを拒絶する。

それらを認めてはいけないと、心が叫ぶ。

三人はしばらく、無言のままだった。

重苦しい、できることならば味わいたくない空気。しかし、無理もないことだったため、誰もそれを咎めることはしない。

そのとき、気まずい静寂を破るように、二回のノックの後、扉が開かれた。

セミシヨートの白髪と、穏やかさが滲み出ている容姿——シャルロットだ。

「皆さん、ここにおられましたか。王様がお呼びです。応接間に来るようにと言うことですが……」

三人をそれぞれ見渡して、

「……どうやら、ずいぶんと憔悴しているようですね」「大丈夫です……。すぐに行きますので」

おせじにも大丈夫じゃない気落ちした様子 of 翼。

しかし、彼の心情を察してか、シャルロットは、わかりました、と言。そのまま部屋を退室した。彼なりの配慮なのだろう。

しばらく無言の時間が経過し、やがて天真が、

「……行こう。ここでも何とも変わらない」

そうですね、と緋睡は首肯。

翼も首を縦に振り、ベッドから出ようとする。身体が軋むが、昨日よりはだいぶマシだ。

ベッドから出るとき、何気なく翼は外を見る。

空が灰色に染まっていた。

降りそうだな、と翼は思い、仲間たちと一緒に部屋を後にした。

途中でシャルロットに合流し、一行は応接間に向かった。

出向く際、ヴァルフアムルクによって破壊された跡が残っており、翼は改めて彼と自分の実力を思い知らされたような気がした。

やがて応接間にたどり着き、中に入ると、玉座にはすでにガルディオスが座していた。

「よう。来たか、待ってたぞ」

相変わらずの軽い口調で翼たちを迎えるガルディオス。そんな国王の隣まで、シャルロットは歩み寄る。側近であるシャルロットは、主の隣こそが居場所なのだ。

壁際には兵士が並んで立っている。……が、どこともなく雰囲気重い。昨日の事件で、城に兵士の半数がやつらによって殺されたということを、ここまで来る際、天真や緋睡、それにシャルロットから聞いていた。

思い出してみれば、廊下を警備している兵士の人数が明らかに少なかった。

それだけではない。やつらによってソーサリー・クリスタルが奪われたことも、シャルロットから教えられた。どうやら考えている以上に被害は甚大だと、翼は気をさらに重くさせる。

「呼ばれた理由はおおよそ理解しているだろうが、あえて言わせて

もらう。——城に保管されていたソーサリー・クリスタルが、『ゴスペル』の連中によって盗まれた」

ここに来る際、聞かされたものだった。

心のどこかで、そうじゃないでほしい、と希望的観測をしていたが、それはガルディオスの台詞によって木端微塵に碎かれた。

「それだけじゃない。ミントのやつも、連中に連れていかれた」

事実が、重く容赦なく押し掛かる。

重圧で潰されてしまいそうになりながらも、翼は耐える。

「現在、必死に国民からソーサリー・クリスタルを持っているようなら提供するよう呼び掛けているんだが……正直、集まりは今ひとつだ。後少しで連中が本格的に襲撃してこようとしているのに、非常にまずい状況になっている」

「……？ ああ、後少しって、どういうことですか？」

「ん？ ……ああ、そーいや言っただけだったか」

翼の素朴な疑問に、ガルディオスは眉間辺りを指でポリポリと掻いた後、言った。

「今夜零時に、『大いなる災い』が降りかかる」

これに翼たちだけでなく、壁際にいた兵士たちもどよどよとざわめき出した。言った本人と、シャルロットだけは平静を保っている。しばらくうるさかったが、ガルディオスが静かにしろ、と制することになった。

「……誰から聞いたんですか？」

恐る恐る翼は尋ねた。

「ヴァルフアムルクとかいうやつにだ。ソーサリー・クリスタル奪うついでにか、オレの部屋にやってきてな、……正直殺されるかと思っただが、やつがそれだけ言って行きやがった。御丁寧に、オレが部屋から出られないように扉をぶっ壊した拳句、結界のようなもので閉じ込めてな」

「ワタシもです。まったく、してやられました」

通りであれだけの騒ぎが起きて、王様と側近の姿が見えなかったわけだ、と今更ながら思った。

「そういうわけで、はつきり言っただけ時間がない。金で買えるのなら買いたいくらいだが、生憎とそういうわけにもいかんのだな。ソーサリー・クリスタルを、今から可能な限り見つけ出してくれねえか」
「今からか!？」

さすがの天真も狼狽した。

そう。どう考えてもそれは無理な話だ。今日丸一日使用しても、五つほど探し出せばいいところだ。

ガルディオスも無理だとわかつているのだろう。顔色に、どこか諦めが附加されている。

「……ちなみに、今どれだけ集まっているんですか？」

「おまえたちが来る前に、オレが確認したところ……両手で掬えるくらいの量しかない。初めのうちにはけっこう国民が来てたんだが、今はサッパリだな」

それはつまり、この国にはもうソーサリー・クリスタルはありま

せん、ということなのだろう。

絶対絶命。その言葉が一番よく似合う。

王様が言っているソーサリー・クリスタルは、先ほど彼が言った程度の量では到底足りないのだろう。

もつと……少なくとも、ちよつとした山が出来る程度には集めなければならぬ。数にすることはとてもできないが、途方も無い量が必要だということはわかる。

それだけの量のソーサリー・クリスタルを、たった一日で用意しなければいけない。

——……無理だ。

その二文字が頭を掠める。

そう。無理なのだ。時間的に、どう考えても。

どうにかして打開策を見つけたいが、それすら見つからない。

絶望に室内が包まれる。

憔悴しきつた空気が満ちる中、

「兄上。家で保管しているソーサリー・クリスタルを使えばいいのではないだろうか」

緋睡がふと、思い出したように言った。

「え……？」

翼と天真だけでなく、ガルディオスにシャルロット、それに周囲にいる兵士たちの視線が緋睡に注がれる。

静寂。それは思考の時間であつた。

翼は頭をフルで動かし、

「……そうか。それがあつたッ！」

思わず、翼は歓喜した。

灯台下暗しとはこのことだ。家にソーサリー・クリスタルを保管していることをすっかり忘れてしまっていた。

「本当にあるのか？」

ガルディオスがポカンとした様子で訊いた。どうにも半信半疑な様子である。

「はい。家に今まで保管していたソーサリー・クリスタルがあるはずです」

「おれも後輩ほどではないだろうが、持っているぞ。全部後輩から横取りしたものだけだな」

どこか誇らしげに、天真はそう口にした。横取りしている事実を褒められたものではないが。

……というか、自覚あったんだ、と翼は内心で呟いた。

「……どうやら、なんとかかなりそうだな」

はい、と翼が一行の代表として答える。

先ほどまでの陰惨な雰囲気がいっしか消えていた。代わりに希望で満ちている。

「でも、僕たちが住んでいる世界にはどうやって行けば……」

問題はそれだ。

なぜなら、クイーンズまで連れて来てくれたミントは、ここにはいないのだから。

「それなら心配しなくてもいいぞ。——シャル」

呼ばれ、はい、と返事をしたシャルロット。その返事は、全部言われなくてもわかっています、というニュアンスが含まれていた。

「こいつがおまえらの住んでいる世界に連れてってくれる。他のやつらにやらせてもいいんだが、こいつなら一番安全だ」

安全、という単語が気がかりだったが、気にしないことにする。とりあえず、これでソーサリー・クリスタルが足りないなんて事態は回避できるわけだ。

後は……、と翼は思ったとき、ガルディオスはさて、と前置きした。

その後の言葉は容易に想像がついており、

「残りはミントのことなんだが……」

と、実際に国王は想像通りの話題を提示した。

「助けに行きます」

即座に、きつぱりと、翼はそう言った。

その選択に迷いはない。

何もわからないまま別れるなんて、納得できなかった。

ミントとちゃんと話がしたい。

どうしてやつらについて行ったのか。

そうしなければならぬ理由が、果たしてあったのか。

それが知りたいから……、

「必ず、連れ戻したいんです」

決意に充ち溢れた翼の言葉。

そこに揺らぐものは存在しない。

彼女を助けるためなら、例え火の中水の中、敵の本拠地にだって乗り込んでいつてやる、と言わんばかりの気迫が込められていた。

それを感じ取ったのか、ガルディオスは、

「……わかった」

承諾の返事をした。

進む者を止める気はしない。ましてや、咎める素振りも見せない。前に行きたいのなら行け、とばかりに。

しかしそれは、決して突き放したものではない。どこに進もうと信じている、と暗に語っているものだ。

「みんなも、それでいいよね？」

念のため翼は、緋睡と天真に訊いた。

「兄上、それは愚問というものですよ。仲間が敵の手中にいとわかって以上、わたくしたちは救わねばなりません」

淡々とした、相変わらずの口調だが、そこには確かに、ミントに対する思いやりがあった。

「同感だな。何があるうとも、首に縄つけてでも連れ戻そうではないか。なあ、後輩」

ニカツと歯を見せる天真。さっぱりと言ったその言葉には、躊躇いというものはなかった。

彼女ならば、本気でそうしてでも連れ戻すだろう。
絆の強さを、翼はひしひしと身を感じた。

「それじゃあ早速で悪いが、自宅にあるっていうソーサリー・クリスタルを今から取りに行ってくれ」

一通り済んだ折を見て、ガルディオスはそう指示を出した。
翼たちは、はい、とひとつ返事で従い、応接間を出て行った。

第6章 - 2 少年の覚悟、少女の迷い

広大な白が、ミントの視界を満たしていた。

周囲はただ清純な、何の濁りもない色で統一されており、壁際に太い柱が並んでいる。

そこには彼女のほかに、二人ばかりの男がいる。——タブリスとヴァルフアムルクだ。

「ようこそ、『ゴスペル』へ。歓迎するよ、ミント・フェルトラン」

恭しく、タブリスは金髪少女に頭を下げる。どうも、名前はタブリスというらしいということが、彼の口から明らかにされた。

ミントは、こちらこそよろしく、と頭を下げる気が起きなかった。これでよかったんだ、と自分を肯定しようとする心と、どうして仲間を裏切ったんだ、という苛まれの心が、ミントの中で二分している。

「まあ、あまり肩肘張らずにリラックスしてよ。もともとボクたちの仲間なわけだしさ、単に元の鞘に戻っただけって考えればいいだけでしょ？」

どうやら彼も、自分がラミエルとかいう人を蘇生する際に誕生したことを知っているようだ。

だが、組織内で起きたことで、ましてや彼は幹部クラスの人間なのだから知ってて当然だろう、という結論に達する。

いつまでも愛想を振り撒こうとしないミント。代わりに眉尻の下がった、気の落ちた形相を振り撒いていた。

「……まあいいや。ヴァルフアムルク、その子のことよろしく頼むよ。ボクはこれから最終調整に入るからさ」

わかった、とミントの隣にいるヴァルフアムルクは首肯した。それを確認し、タブリスはミントたちに背を向け、その部屋から出て行った。

残されたのはミントとヴァルフアムルクの二人だけ。だだっ広い空間に少人数で取り残されると、言い知れぬ不安が押し寄せてくる。

隣にいる青年は何せ、敵なのだから……。

……否、今は仲間、というべきなのか。自分は翼たちを裏切ったわけなのだから。

——……裏切る……。

胸がチクリとするところではない。その単語が頭を過ぎる毎に、心臓を抉られているような耐え難い苦痛が襲ってくる。

「……翼……」

蚊の鳴くような声で、彼の名を口にする。

彼は最後まで、自分のことを信じてくれたようだった。

信じた上で、ボロボロの身体で自分のことを助けようと、ヴァルフアムルクに敵意を向けていた。

だけど、自分の一言で、彼を強く傷つけてしまった。

目を閉じれば蘇ってくる。

裏切られたと感じていた、彼の愕然とした表情が。

——私はやっぱり、翼たちの敵なんだ……。

仲間を傷つけ、彼らが憎んでいる敵側に自分は今、席を置いている。

……最低だ……。

「……作戦開始まで、まだ十分に時間がある。それまでに決意を固めておくことだ」

ヴァルファムルクはそれだけ言うと、部屋から退散して行った。

気づけば、床に水滴が落ちていた……。

「あらあゝ、ツバサちゃんにヒスイちゃん。おかえりなさい。もう用事はいいの？」

家に帰ってきた翼たちを迎えたのは、母親こと雅^{みやび}だった。相変わらずの間延び口調。変わらなくて何よりだ、と翼は思いながら、

「悪いけど、すぐにまた出かけないといけないんだ」
「あらあゝ、そうなの？」

残念、とばかりに眉尻を下げる雅。

緋睡は家の中に入り、ソーサリー・クリスタルが保管されている部屋まで直行している。

天真もソーサリー・クリスタルを持って来るために自宅に戻っており、シャルロットには、近くにある公園で待機してもらっている。そして翼はというと、もう少し家を留守にするということを、母親に伝える役目を緋睡から与えられていた。

別にしなくても大丈夫だろう、と翼は思っていたのだが、考えてみれば一週間以上も留守にしているわけである。少しは遅くなること

を報告しておくべきだ。

「そんなに大事なことの？　少し休むとか……」

「できることならそうしたいけど……生憎、できないんだ」

「何か、問題でも起きたの？　例えば……大切なものがなくなつた、とか」

ズバリ指摘され、翼は肩をビクリとさせる。

その反応を見て、やっぱりと正解したのが嬉しいのか、微笑みを漏らした。

しかし、そんな母親とは反比例して、翼は落ち込む様を見せる。やはり、辛いものは辛いのだ。一角を衝かれれば、砂上の楼閣のように崩れ落ちるほどに。

そんな息子の肩を、雅は優しくポンと叩き、こう言った。

「ツバサちゃんは、正しいと思ったことをまっすぐに進めばいいと思うわ」

突然だったため、翼は最初ポカンとしていたが、やがてそれが自分に対する慰めの言葉だということを知り、

「……そう、かな？」

そうよお、と雅。

そして、

「だって、真道翼という名前は、真まことの道みちを翼はたくつてなるでしょう？　だからツバサちゃんは、自分の信じる道を、進めばいいと思うわ」

……うまいこと言うなあ。

翼はつい、ふふっ、と笑ってしまう。

しかし、考えてみればそれは当たり前の話ではないか。自分が真しんじている物事を、まっすぐに翼すずむというのは。

自分が認められない物事にそう易々と従えるはずがない。他人が強制しても、それは何ともし難いことである。

確かに社会の中、そうしなければならぬ場合がある。だが、それでも極力、自分でも納得ができるような方向にしていこう、というくらいは考えるし、場合によっては行動に移す。

自分の名前は、ただそれを記しているだけ。

だがそれは、自分の道を踏み外そうとしたときに、自分の名前の意味を考え、踏み止まらせてくれるほどの力はあることだろう。

「……母さん」

「はい？」

「ありがとう。おかげで、心の中にあるもやもやが晴れた気がするよ」

「そう？　なら、よかったわあ」

パアア、と明るく微笑む雅。

これで後、間延びした口調をどうにかしてくれれば最高の母親なのだが……、と翼は思う。

別に悪いわけではないが、忙しいときにこの口調だとイライラさせるを得ない。

「兄上、準備できましたよ」

リュックを背負い、緋睡がやって来た。巫女服でリュックサックは、何とも妙な絵面である。

じゃあ行こう、と翼と緋睡は外出しようとする。

「ツバサちゃん、ヒスイちゃん」

その際、呼び止められ二人は停止して、振り返った。
そんな二人に、雅は言った。

「行つてらっしゃい」

送りの言葉を。

だから翼たちは答える。

「行つて来ます！」

手を振って、明るい笑顔をつけて。

第6章 - 3 少年の覚悟、少女の迷い

時刻は現在、午後の十一時五十分を回っていた。

夜天に恒星は見えず、代わりに灰色の厚い雲が絨毯のように空一面に敷かれている。雨はこういうわけか降ってきていなかった。

暗雲立ち込める中、『ゴスペル』に対抗するべく、トールハンマーの起動準備に、現在取りかかっている。

トールハンマーは砲身だけで十メートルあり、全長はその倍の二十メートルもある巨大な大砲である。

その巨体は見る者を圧巻させるに十分で、手入れをされていたのか、その全身はメタリックに輝いている。

動力源は数えることが億劫になりそうなほどのソーサリー・クリスタル。水晶の未知の力を、砲口からぶっ放すというものだ。

威力はガルディオス曰く、国ひとつは一発で火の海にできるらしい。もっとも、国王自身、親からそう伝えられただけで、実際に扱ったところは一度も見ていないという。

さらにこの兵器の厄介なところは、一発分のエネルギーを溜めるのに、およそ十二時間もかかるらしい。

午後八時からエネルギーをチャージし始めたので、一発分溜め終わる頃には日付が変わっている。

「本当に大丈夫なのか？ やつらは確か、零時にやってくるのだろう？ もっとも、どうやって来るのかは知らないが」

天真が、目の前にある巨体を眺めながら、隣にいるガルディオスに愚痴を零す。

天真に言わせてみれば、トールハンマーを果たして使う必要性が本当にあるのか、疑わしい限りだった。

なので天真は、それをガルディオスに訊いてみると、

「クイーンズを滅ぼしにかかるんだからな。それなりのデカブツを連中は用意しているのだろうと思って、これを使うことにしたんだよ」

「じゃあ、万が一そうでなかったらどうするつもりだ？」

「そのときは、威嚇射撃で空にでもぶっ放そうや。オレたちにはこれだけ強力な兵器があるんだぞってな」

ハッハッハ、と笑うガルディオス。

本当にこの国王は大丈夫なのか、と天真は訝しんだ。

呑気に高笑いなんぞしている暇ではないぞ、とでも言ってやりたい。

天真は自分のことをちゃっかり棚に上げていた。

「ところでよ、翼と緋睡はどこに行ってたんだ？」

「さあ。多分、庭ではないのか？」

と言い、天真はふとガルディオスの視線が気になった。

どこか意地悪な笑みを浮かべたその表情。

「……なんだ？」

「いや。ちよっかい出しにいかないんだなって思ったんだよ」

「……おまえ、性格悪いな」

国王に向かって『おまえ』呼ばわり。拳句に自分のことをポイポイと棚に上げるその剛胆振り。到底真似できるものではあるまい。

「兄妹、思うところがあるだろうから、放っているだけだ」
「ほう〜」

笑みの他に、さらに目を細めるという行為がガルディオスに追加された。

それに耐えきれなくなった天真は、悪魔の笑みを浮かべ、

「……王様。おれに喧嘩を売るとはいい度胸だなあ……」

ふふふ……、とついでとばかりに含み笑いを垂れ流す。

「おまえこそ、国王様に向かって敬語のひとつも使わねえとはい度胸じゃねえか」

ふふふ……、とガルディオスも負けじと含み笑いを開始する。

邪悪に口元を歪ませ、含み笑いを垂れ流ししているその光景は、決して他の者たちを寄せ付けようとはしない。皆、今の二人に近づくとは危険だと、本能で感じ取っているのだ。

そうしている間にも、周りの者たちは天真とガルディオスを避けながら作業を続行する。

二人が邪悪のオーラにまみれながら睨み合っている姿を、距離を離してシャルロットがご満悦に眺めていた。

翼と緋睡は庭にいた。

昨日惨劇が起きたそこは、今ではすっかり綺麗になっており、今では死体ひとつ転がっていない。

ガルディオスが言うには、亡くなった兵士は、クイーンズの離れ

にある墓地で弔ったらしい。少しは浮かばれることであらう。

後は、自分たちが彼らの無念を引き継ぐ番だ、と翼は胸に秘める。

「……緋睡。勝てると思う？ この戦い」

「なぜ聞くのですか？」

「いや……。なんとなくだよ」

それ以上緋睡は追及しない。

そうですねえ、と空を仰ぎながら、彼女は考え、

「聞かれたところで結果はわかりませんね。未来予知ができるわけではありませんから」

「……いや、別の的確に当ててくれ、とは言っていないんだからさ。もつところ……自分の願望？ みたいなものを言つてよ」

願望、と聞いて、緋睡は今度は顎に手を当て、思案顔になる。

「……兄上が真面目になること、でしょうかね」

「いや。僕に対しての願望を言うんじゃないって……」

「今回の戦いのことですね。そのくらい、言われなくともわかっていますよ。兄上のように鈍くはありませんので」

「一言余計だぞ！」

とつさにツツコミを入れる翼。

そんな兄に、緋睡は、はあ、と嘆息した。

「もう少し理性で動くということとはできないのですか？ 感情全快で物事を述べられても……ねえ」

やれやれ、とでも言いたげな緋睡。

そんな彼女に、翼は心からの叫びを口にした。

「おまえのせいだろうがあああああ！！」

翼は感情をフルに言葉に込める。

それを緋睡は、ふつ、と鼻笑ひひとつしてはね飛ばした。

この性格。いったい誰に似たのだろうか、と思わずにはいられない。少なくとも翼は、自分には似てないな、と思う。

翼はこれ以上口論するのを止めることにし、

「……それで、どうなのさ？ 今回の戦い」

本題に戻った。

「では兄上はどう思っているのですか？」

「え？ 僕？」

はい、と緋睡は頷き、

「尋ねる以上は、まず兄上の意見が聞きたいですね。名前も、尋ねる側から最初は名乗るものではないですか。それと同じです」

それと同じなのか？ と疑問符が浮かぶが、不思議と納得できたので翼は、そうだなあ、と前置きする。

「そりゃ……やっぱり、勝ちたいよ。勝って、こんな殺伐とした毎日から解放されたい」

それが翼の率直な願いだった。

「緋睡は、そう思わないの？」

「思っていますよ。ですから、こうして戦いに参加するんです。いち早く終わらせるために」

緋睡の瞳には決心が秘められていた。

それを見て、翼はどことなく安心するとともに、彼女を遅^{たくま}しいと思えた。

……そう。もう、迷うことなんて何ひとつない。

ミントを連れ戻し、この戦いを終わらせる。

その決断は、今や不変のものだ。

「……緋睡」

「なんでしょう？」

訊いてきた緋睡に、翼は言った。

「絶対に勝とう」

突然だったためか、緋睡は当初、キョトンとしていたが、やがて自信を秘めた笑みを浮かべ、答えた。

「はい。当然です」

その部屋は薄暗い。

蛍光灯の類はなく、あるのはただ幾重にもあるモニターくらいだ。部屋を照らすのはモニターから放たれる微々たる光くらいで、そ

れがすべて消えれば部屋は暗黒に包まれることになる。

そこにタブリスはいた。

その部屋は兵器を動かすための管理、および制御を担っている管制室、いわば中枢と言える場所だ。

タブリスは、モニターに映っている数字を見る。

時刻は、昨日と今日の境界にして、今日と明日の境界。
零時。

その時をもって、タブリスは宣言する。

「——さあ、始めようか」

第7章 - 1 要塞浮上

「なんだ!？」

何気なく、湖の上空を眺めていた翼の一声だ。

大気が音をもって細かく振動していた。それはゴゴゴ……と地震さいしんが起きているような、震動音。何かに恐れを感じているような、細震音。

肌がピリピリと痺れる。空気が震えているためでもあるが、果たしてそれだけだろうかと少年は疑ってしまう。これから起きようとしている畏怖に、身体が先立って震えているのかもしれない……。

途端、空に亀裂が生じる。

それは突然。震動に耐えきれなくなったガラスのよう。

空間にヒビが生じ、そこから何かが現れようとしている。

ヒビ割れは、それこそガラスが徐々に割れるような音を立てながら、その規模を拡大していく。

やがて、それは現れた。

全体が白のそれは、一言でいえばサッカーボールの形をしていた。ただ、大きさがとにかく巨大だ。

六角形と五角形が組み合わされてできている切頂二十面体の物体は、クイーンズの街が、まるまる収まりそうなほどの巨体を持ち合わせており、強烈な威圧感を周囲に撒き散らしていた。

さらに下部には点々と黒いものが付着しているようだが、それが何なのかは遠目で見る分にはわからない。

ただ、それは一言でいえば巨大で、クイーンズの街と、ほとんど同じ大きさはあることくらいは目測が可能だった。

翼は突如として現れた謎の物体を、ただただ啞然と眺めていた。唐突な出来事に、思考がフリーズしてしまっていた。

それは隣にいた緋睡も同じで、半ば放心していた。

「後輩、巫女ッ！」

しかし、翼たちを呼ぶその声で我に返る。

振り向くと、天真がこちらに向かつて駆けてきているところだった。

「先輩。あれって……」

人差し指を謎の多面体に向けて、やって来た天真に問うた。

「ああ。どうやらそのようだな」

皆まで言わなくても分かる。こんなことをしでかすやつは、これまでの経緯から考えてやつらしいない。

『ゴスペル』だ。

辛酸を舐めたような顔で、天真は湖の上空に浮かんでいるそれを睨んでいたが、それがやがて怪訝なものへと変わった。

翼と緋睡もそれにつられて視線を多面体に映すと、下部から何か黒い筒のようなものが生えてきていた。

やがてその黒い物体に光が凝縮し始めた。

異常なまでの力の凝縮。

肌で感じるができる。

あれは、危険だと。

——瞬間、闇夜を光が両断した。

黒筒と思っていたのは砲口。

そこから真下に向かって、一条の光が穿たれた。

湖面に着弾すると同時、鼓膜を劈くかのような轟音とともに水が盛大にぶちまけられた。まるで水溜りに足を思い切り踏み入れたように。

大気に拡散した水は、雨となるか、あるいは霧となる運命を辿った。

さらに、人々が先ほど起きた出来事を目の当たりにしたのだろう、街が叫喚に包まれていた。

「あれが……やつらの切り札……」

喫驚の言葉を口にする翼。

正直、想像の範疇を超えていた。

おそらく先ほどののは、試しに撃ってみた、といった感じであろう。あるいは、力の差をはつきりと見せしめることで、戦闘意欲を低下させる企みか。

いずれにせよ、翼たちはただ驚愕に目を見開いていた。

「おまえら！　ここにいたのか！」

それが自分たちに宛てられた言葉だとわかり、翼たちは空中要塞から視線を逸らす。

その先にいたのは、ガルディオス国王だった。何か起きたときの備えか、その両脇には甲冑に身を固めている兵士二人がいた。……

どこにいったのか気になるものの、今はそれよりも、

「王様、あれ……」

「わかってる。どうやら襲撃しなすったようだな。全く、もう少しエレガントな登場はできねえのか。そもそも、こっちはまだ半分も

エネルギーチャージができてねえっていうのによ」

皮肉のひとつでも吐くガルディオス。その顔は実に苦々しい。

一発分の砲撃を放つために、一二時間ほどのエネルギーチャージ時間が必要だということを、翼もガルディオスの口から聞かされていた。

しかしわかっていても、やはりというべきか、落胆の気持ちは浮上してくる。

「それでガルディオス。これからどうするつもりでいるのだ？　まさかトルハンマーのエネルギーが溜まるまで何もしない、なんてないよな」

天真がガルディオスに訊く。

すると、当然だ、という答えが返って来た。

その後、

「悪いが、おまえたちに働いてもらうことになるがな」

という言葉が附属されて。

だが、翼たちは気落ちすることなく、むしろ気を張り詰め直したようになった。

初めから自分たちは、そのためにクイーンズにやってきたのだから。

それに何より、翼はミントを助けたかった。その想いは、緋睡や先輩に負けない自信がある。

ミントがいない……。

それを知ると、翼は自然と胸が痛んだ。まるでそこだけが空白になったかのような錯覚。

なぜかはよく知らない。多分、仲間がいなくなったからだろう、

と翼は思う。仲間が傍からいなくなるのは、悲しむべきことだから。そして現に今、自分はその悲しみを精神的な苦痛として味わっている。

だから……、

その痛みを払拭させるためにも……、

——彼女を助ける。

その上で、『ゴスペル』の野望を阻止してみせよう。

本来の目的が逆になっているような気がしなくもないが、翼の中ではクイーンズを救うことと、ミントを助けることはイコールの存在となっていた。

ゆえに問題はない、と翼は考えている。

「それで、僕たちは何をしたらいいですか？」

ああ、とガルディオスはワンテンポ間を置き、

「あの中に突入して、二発目を撃たれるまでの時間を稼いでほしい。もしくは可能なら阻止してほしい」

「突入って……どうやって？」

その問いは、ガルディオスの望みを暗黙で承諾していた。……が、あの中に入りたいのはやまやまだが、相手ははるか上空に浮かんでいる。歩いて行く、というのは無理だ。

「それなら問題ない。シャルが今、飛行艇を準備している」

ああ、だからいないのか、と翼は納得する。
しかし、

「それで行ってくれって……パイロットがいませんよ」

「天真のやつが操縦できるそうだ」

え？ と翼のみならず緋睡も自分たちの先輩へと視線を移す。
真道兄妹の瞳には、本当ですか？ という疑いが込められていた。
そんな二人に、天真はVサインと不敵の笑みを持って答えた。

「問題ない。最高のフライトを楽しませてやろうではないか」

最高。それは底辺に近い最高ですか？ と問いたくなる。

王様は完全に信用しているようなので、今変更はきかなさそう
だ。

チラリと視線を緋睡に移すと、半ば諦めたように、溜息を深く吐い
ている姿を拝むことになった。兄妹そろって、考えていることは同
じようだ。

たとえばようもない不安を胸に、翼は湖岸まで急ぐことにした。

第7章 - 2 要塞浮上

「お待たせしました」

やがて、シャルロットが一行のもとへと駆けてきた。

どうやら飛行艇の準備ができたようだが、どこにもそのような影がなかった。

「あの。飛行艇は？」

「問題ありません。岸部まで行きましたら召喚法で取り出しますので」

なるほど。今は異空間のスペースに保管しているのか、と翼は納得した。

その後、翼は緋睡と天真に向き直る。顔を緊に引き締めて、

「みんな、準備はいい？」

そう、問いかけを放った。

愚問だということはわかっている。今更、そんな事を聞く必要なんぞない、ということは。

それでもやはり、翼は念のために訊いた。

緋睡と天真。その両者は、首を縦に振った。

同時に、何を今更、という呆れた顔をしていた。

やはり訊く必要なんてなかったか、と翼は思い、自身の行いを恥じた。

そして、

「みんな、行こう」

やがて、湖の岸部まで辿り着いた。

先ほどの砲撃のためか、湖に近い芝生が吹き飛んでおり、さらに地面は水で濡れていた。

湖の水量は、先ほど盛大にぶちまけたせいで、明らかに少なくなっていることが分かる。

シャルロットは岸部に着くなり、召喚法を用いて、湖に飛行艇をよび出そうとし始めた。

なぜわざわざこんなところまでやって来て、飛行艇を飛ばそうとするのかというと、城から飛ばせば敵に丸見えだからだ。気づき次第、何らかの武装で撃ち落とされるのがオチであろう。

一方この場所だと、周囲が鬱蒼とした木々で囲まれているため、相手に気づかれにくい。気づかれるとすれば、それは飛ぶときであり、いかにして敵に気づかれずに飛ぶか、ということが重要となる……が、空に隠れる場所なんてあるわけないので、飛んだら一直線に突っ込んでいくしかない。

翼は、はるか上空を陣取っている多角形の物体を眺める。

敵からの攻撃はない。どうやら、先ほどの強烈な砲撃も乱発はできないようで、それなりにエネルギーチャージに時間がかかるみたいだ。

それが唯一の救い。あれだけの破壊力の兵器が、無制限に何度も使用されていれば、反撃のしようなく完全敗北を期していることだろう。

今度は、こちらが反撃をする番だ。

「準備ができましたよ」

ちょうど、シャルロットのそんな声が聞こえてきたので、湖へと視線をやると、そこには見る者を圧倒させるに十分な、大きな身体があった。

全長約一七メートル、高さ五メートル、翼巾二四メートルのその飛行艇は、座席の数から最高六人乗れることがわかる。

「さあ、乗って下さい。やつらに気づかれる前に」

促される前に、天真はすでに操縦席に座っていた。それに続くようにして、翼と緋睡も空いている座席に着席し、備わっていたゴーグルを装着する。

同時、エンジンがかかった。独特のエンジン音が耳に伝わり、これから離陸するんだ、という気持ちを実感させる。

「行くぞッ！」

天真の一声とともに、エンジンが火を噴いた。

後ろに水を盛大にぶちまけ、機体は空を飛ぶために加速をつける。翼は後ろを見ると、シャルロットが手を振って口を開閉していた。何か言っているようだが、シャルロットの姿は徐々に小さくなり、やがて蟻よりも小さくなってしまった。

何だろっ、と翼が思っていると、

「兄上ッ！ 上をッ！」

緋睡が叫んだので、言われたとおりに上を見る。

すると、黒い斑点模様のようなところが、チカチカと紅く点滅しているようだった。

その正体を知るまでに用いた時間は一瞬。

飛行艇の後に、幾重にも水柱が立つ。
砲撃だ。

最初の主砲のほかに、サブの装備があるらしく、それがどうやら黒の斑点に見えるものようだ。

チカチカと点滅しているのは連続で火を吹いている何よりの証拠。
一撃でも受ければ湖の藻屑と化すことだろう。

「先輩ッ！ もっとスピード上げてくださいッ！ 砲撃が来てますッ！」

エンジン音と水柱が立つ音のせいで普通にしゃべれば聞こえないだろうと、いつもの三割増の大声を出した。

「わかっているッ！」

風に流れて、そのような返事が来た。すると、徐々にスピードが上がっていき、機体が浮こうとしている感覚がしてきた。

やがて、浮こうとしていた感覚が、浮いた感覚になった。飛んだのだ。

地面が徐々に小さくなっていく。

生い茂っている木々はさしずめ芝生になったかのよう。

だが、そう思っている間にも、敵の攻撃が止むことはない。

弾丸が無数に赤の軌跡をつくりながら特攻を仕掛けてくる。

当たらぬよう大きな機体を、天真が必死にアクロバットに操作している。

なるほど。本人が操作できると豪語しただけはあった。

機体にかすり傷こそつくものの、針の穴を抜けるような絶妙な操作で、致命傷になりそうな弾丸を的確に避けている。並の操作テクニクでは、とてもではないができそうにもない芸当だ。

いったいどこでこんなもの習ったのやら、と翼は先輩に対して疑

問を抱く。

弾幕をくぐりながら接近すると、やがてハッチのような場所が視認できるようになった。

どうしてハッチが開いているのかはわからない。もともとそういう構造なのか、それとも、誘っているのか……。

いずれにせよ、選択肢はない。天真もそのことを自覚しているのか、そのハッチを指して飛行艇を前進させる。

雨あられと降り注ぐ弾幕を縦横無尽に回避しながら、ハッチに突っ込んだ。

水陸両用のそれは、氷を滑るアイススケーターのように地面を滑り、やがて停止した。

その際、プシュウウ……、とエンジンが白煙を発生させる。だいぶ無理をしたせいで、エンストを起こしてしまったようだ。

機体も、無茶苦茶な動きをしたせいかガタがきているのが素人目でもわかる。予備のパーツとかはあるのだろうか。それ以前に、エンジンが駄目になってしまっているのなら、もう動かないのでは……。

「ずいぶんボロボロになってしまったなあ」

操縦していた本人が、そのようなことを言った。

「あの……。動くんですか？ それ」

「まあ、大丈夫なんじゃないか？ エンジンもオーバーヒートして停止しただけのようだし、冷ませば使えるだろう。ガタがきている部品は……」

と言いながら、天真は貨物スペースを点検する。

「……まあ、必要最小限の部品はちゃんと積まれているから、修理

すれば問題ない」

そうなんだ、と翼だけでなく緋睡も胸を撫で下ろした。

飛行艇がどうにかなることが把握できた三人は、次に自分たちが今いる空間を見渡した。

見渡す限り薄暗い場所。必要最小限の光しかない。周囲にコンテナが積みまれていることから、どうやらここは倉庫のスペースのようだ。

人の気配はない。大量にあるコンテナの影から、人が奇襲をかけてくるような雰囲気は皆無だった。

「……誰もいないようですね」

どうにも腑に落ちない、という様子の緋睡。それは一行全員に言えることだった。

わざわざハッチが解放されていたため、翼たちは入ったら即座に襲撃に遭うと考えていたのだ。言わば翼たちは、侵入したというよりは、おびき寄せられたと考えていた。

罠が張られているだろうと考えた上で、ハッチに突入した彼らにとって、この事態は異常と言えた。

かえって不気味だ、と思いつつ、翼たちに止まることは許されない。

「……みんな」

行こう、と翼が先頭に立ち、歩を進めた。

二発目がいつ射撃されるかわからない以上、一秒でも早く『ゴスペル』の兵器を無力化させなければならぬ。

無力化とはすなわち、頭かしらの討伐、あるいは退却させることである。それを成すために翼たちは前へと進む。暗い、はるか先を見るに

は目を凝らさねばならないほどの倉庫を。

コンテナの中に、何が入っているのか気になったりもしていたが、下手にいじって余計な目に遭いたくないので、思い止めた。

歩き続けると、翼一行は扉前へと行きついた。

彼らが前に立つと、その扉は横にスライドして通路を開かせた。

どうやら暗いのは倉庫だけで、扉が開いた途端、眩いばかりの白光が差し込んできた。

ずっと暗い場所にいたせいか、その明るさに翼は一瞬目を細めた。やがて、目が慣れたことがわかると、翼たちは再び先へと進んだ。ただし、歩きではなく走りで。

先がどうなっているのかわかる以上、慎重に進む必要はない。

白の通路を駆け抜けると、比較的早い時間で次の扉が見えてきた。流れる白をわき目に、翼たちはその扉の奥へと突入し、変わった風景に思わず足を止めた。

そこは、巨大なドーム。

天井は卵の殻の半分を模ったような半球をしており、ただただ広大な空間だ。

ただ、色は相変わらずの白で、ここまで白だと純真潔白よりも、むしろ虚無を思わせる。

直後、首筋にヒヤリと冷たいものをつき付けられたような畏怖が襲った。

とっさに一行は、その場を飛び退く。

刹那、金属を刃物で傷つけるような不快な音とともに、その場所に裂傷が走った。

「あゝあ。先手必勝作戦は大失敗になっちまったなあ。俺様残念」
「いいじゃないか、ゲイル。避けてくれたおかげで、これから愉しい狩りができるんだからさ」

「ヒャッハッ！ それもそうだな」

翼たちは視線を前方へと向けると、二人の人影を発見した。
緑の長髪をした青年と、ダークブルーの髪をした少年。

「ゲイルッ！」

「アルフォートッ！」

天真と緋睡が、各々の名を叫んだ。その後、とっさに得物を取り出し、眼光に敵意を滲ませる。

ゲイルとアルフォートの後ろには先の通路が見え、どうやら彼らはそれを護っているようだ。

ただ、護っているわりには、護るものとの距離が離れ過ぎているが、それは余裕か、あるいは……。

「よおお、天真ちゃんよお。会いたかったぜえ。俺様と互角に渡り合えるやつなんて、そうそういねえからなあ。強者の首を取りたくてうずうずしてんだよ、俺様は」

「おれは会いたくなかったけどな。おまえの殺しに快楽を覚えているその顔を見ると、無性に腹が立つ」

狂気を浸透させ、だらしなくニヤニヤしているゲイルに、天真は言葉で斬った。

「ふふふ……。こんなところで会えるなんて、神様はどうやらぼくかきみの死を望んでいるみたいだねえ」

「でしたらおまえの魂を献上しなさい。きっと地獄に堕としてくれることでしょう」

これから起きることが愉しみで仕方がない、とばかりのアルフォートに、緋睡は皮肉たっぷりの台詞を吐いた。

「翼。おまえは先に行け」

翼の一步前を出、天真はそう指示を促した。

「だけど……」

「時間がないことくらいわかってるだろう。こいつらの足止めはおれたちがしてやる」

おれ『たち』と言われ、はい、と緋睡は頷いた。

「ですから、兄上は先へ行ってください」

翼は迷った。

確かに時間がない。だが、こんなところで仲間を置き去りにすること、し難いことだった。

自分ひとりでも戦力が増えれば、もっと自分たちのほうが有利に戦えるはず……。

そう思っていたから。

「おれたちのことが信用できないか？」

そんな少年の心を見通してか、天真が背をこちらに向けてそう言った。

その問いの裏には、別の意味が込められていた。

こいつらに、おれたちが負けるとでも思っているのか？ 仲間が勝つということが、信用できないか？

翼はそれをすぐに悟った。

天真の、その凜とした口調と、弱みを見せることのない態度で。

「兄上、行ってください」

もう一度、緋睡が促す。彼女にもその口振りと態度に、迷いがなかった。

迷っているのは自分だけか、と翼はその事実に関が熱くなるのを感じた。

そして、

「……うん。頼むよ。二人とも。そして……」

同時、翼が駆けた。

魔力で身体能力を飛躍させ、世界記録を叩き出したオリンピック選手にも負けないほどの速さをもって、翼は疾駆する。

そしてアルフォートとゲイルの傍らを通り抜けて、

「——勝ってッ!」

仲間に、激励の言葉を贈り、通路の奥へと姿を消した。

「……勝って、か……」

ふっ、と天真はつい一笑してしまう。

可笑しいわけではない。ただ、うれしくてだ。

いつ、どんなときでも、応援されることは決して悪くないものだと、感じたから。

ふふ、と自分と同様に笑みを零している巫女装束の少女が目に入った。

どうやら彼女も、自分と同じことを考えているらしい。

そのことに天真は共感を覚え、次に通せん坊をしている男二人に視線を向けた。

「……さて、巫女よ。ここは一度、ひと暴れしようではないか。できるだけ派手にな」

「珍しく意見が合いましたね、天真。後、わたくしのことを巫女と言わなければ、おまえに対するわたくしの評価が一割ほど増していたのですけど」

「はっはっは……。だったらその巫女装束をやめればいいだけのことだ」

「やめたらやめたで、元巫女とか言つつもりでしょう」

「……チッ」

バレてたか、と天真は舌打ち。

緋睡のジトツとした半ば軽蔑が込められたものを向けられていたが、気にせず前方を見る。

そんな天真の行動に、緋睡も切り替えて、本来の敵へと厳しい眼差しを向けた。

「あれ？ もう終わりかい？ きみたちの漫才は」

犬歯を見せ、ニヤニヤしているアルフォートは、そのような戯言を口にしてきた。

「ああ、残念だが終わりだから、見物料を払ってくれないか？」

その戯言に乗る天真。乗ったというよりは、軽く流そうとする作業に近い。

ゲイルは手を左右に振り、

「そいつは無理だなあ。若手の漫才に払う金なんてねえし」

「そうか……。なら、有るもので嫌でも支払ってもらおうか。代金はひとりにつき命一個だぞ」

天真の了見にゲイルは、ああなんだ、と軽々しく言った。大したことない、とばかりに。

「それならすぐにでも用意してやるよ」

とゲイルは、槍を召喚法で取り出し、切っ先をこちらに向けた。刃の金属の光沢が白の光で照らされ、一層の煌めきを帯びている。

「てめえらの心臓を抜き出して、それで払ってやるよッ！」

言葉とともに、ゲイルが戦いの啖呵を切った。

速い。

動きが残像として残るほどに、その速さは目を見張るものがあった。

それはまさに疾風。

その速力をもって、ゲイルは天真に接近し、一文字に槍を振るった。

風を纏い、強化されたその一撃は、衝撃で床を引っぺがし、周囲にばら撒く。

……が、天真はそれを後方に跳び、免れていた。

緋睡も同様に、距離を取って回避したようで、無事だった。

それを確認すると、すかさず攻撃に移らんと、槍を構え、突撃する。

切っ先が捉えようとしているのは、先ほど凶刃を向けてきたゲイル。

やつの左胸を穿とうと、疾速の突きを放った。

「へッ！」

嘲り。

そんなものが当たるものか、とばかりにゲイルは鼻で笑い、再び槍を振るった。

彼の槍が狙うは敵ではなく、敵の得物。

力任せの横殴りで、天真は槍の穂先を逸らされた。

ヒュッ、と空気を裂く音が鳴る。

このっ、とそのまま槍を横に振る――、

「――ッ！」

――おうとしたが、視界にそれは入ってきた。
アルフォート。

ダークブルーの髪の子の両の手には剣が一振りずつ握られていた。

構えは下段。

逆袈裟で斬りつけるつもりだ。

――どうする？

攻撃をゲイルからアルフォートに切り替えるか。

……駄目だ。ゲイルはすでにこちらにハルバードの斧刃をこちらに向けて、今まさに一閃しようとしている。

だからといってこのままゲイルの攻撃を受け止めると、アルフォートから一撃を見舞わされることになる。

一瞬の間にそれだけ考える。

思考を巡らせている間に、両者の凶刃は迫り来ている。

――やむを得んッ……。

天真はそのままゲイルに向けて、槍を振るうことにした。

そして、停止させた。

しかしもう一方のほうはそうはいかない。

来るであろう激痛に、天真は覚悟を固める。

アルフォートの斬撃が、天真を襲う。

「もらった——あッ!？」

寸前、アルフォートが弾き飛ばされた。

紅い、一条の光によって。

視界の端にそれが映ったのだが、それが何なのか、天真には即座に理解した。

「緋睡！ すまない！」

後衛で弓を構えているであろう仲間に、天真は感謝の言葉を捧げた。

間一髪。

そんな切羽詰まった単語が一番しっくりくる。

緋睡の左手には弓、右手には白光を淡く発し続ける魔力で生成した五本の矢が握られていた。

己の得物を両手に持ち、朱色の瞳に敵意を宿したその少女は、数十メートル程先にいる怨敵を睨み据える。先ほど矢で吹っ飛ばした少年を。

先ほどの攻撃を寸で直撃を免れたアルフォートは、片膝を着いた状態から、ゆっくりと体勢を立て直した。

そして、緋睡に鋭利に光る瞳を向けた。

「……ふふ。さっきの痛み、何倍にもして返してあげるよ」

「いりませんよ。わたくしは謙虚ですので、貰うような真似はしませんから。与えることはしますけど」

相変わらずの口減らずをみせる緋睡。そこには、相手に対する侮蔑も込められていた。

そんな軽蔑の言葉を、アルフォートは意に介さない様子で、

「遠慮しなくてもいいよ。ぼくからのプレゼントだよ。最期のね」

「そんな贈り物不要です」

緋睡はつつけんどんに返した。

先ほどから武器と武器が交り合う音が鳴り響いていた。天真とゲイルが討ち合っている音が。

「向こうも、本格的に始まっているみたいだねえ。……まあ、勝つのはぼくたちだろうけど」

「寝言は寝てから言ってもらいましょうか。わたくしたちがおまえ程度の雑魚に、負けるわけがないでしょう」

そう緋睡は豪語した。

……否、彼女自身、豪語だとは思っていない。それが当然だと、心底から感じているから。

それは絶対の自信から来るもの。だけど、だからこそ言った以上は気を引き締めることができる言葉だ。その言葉を実現させるために。

アルフォートの顔から、徐々に表情が消えていく。

「……つまらないな」

一言、ボソリと呟いた。

「つまらないとは、なんででしょう？」

「そのまんまだよ。あからさまにぼくがきみに殺意を絶えず放っているというのに、きみは……」

その先の言葉は、自ずとわかった。

——怯えようと、退こうともしない、ということですか。確かにそのとおりだ、と緋睡は思う。

だけど同時に、今更何を言っているのだろうか、という念を相手に抱かずにはいられない。

よくわかっていない敵に向かって、緋睡は言葉として出した。

「覚悟ができてますからね」

「覚悟？ それは死ぬ覚悟がかい？」

そこだけからかいの口調になった。

しかし緋睡は、首を左右に振って否定する。

「おまえたちを斃^{たお}すという覚悟がです」

ピクリと、アルフォートの眉が不快に歪んだ。

そして、引きつりながら表情が変化していく。怒りへと。

必死に抑えようとしているようだが、理性よりも本能のほうが勝ってしまっているようで抑制できていない。

「……そうかい。そうかいそうかいそうかい！」

感情のまま、承諾の言葉を連呼するアルフォート。

緋睡はそんな彼の様子を侮蔑と憐みの眼差しで見つめる。

やがて、ひとしきり叫ぶと、糸が切れたように落ち着きを取り戻し、

「……わかったよ。そんなにまで言うのなら斃してみなよ」

緋睡は弓を構え、五本の矢の内の一本を番える。

彼の身体を陽炎のように立ち上り、纏わりついている殺気を、いち早く察知したためだ。

双剣を握り直し、

「このぼくをなあああ——！！」

叫合し、猛然と迫って来た。

第7章 - 2 要塞浮上（後書き）

明日更新を休むので、今回は二話同時に更新します。

第8章 - 1 対峙

ひたすらに続く、長い白の廊下を、翼は奔走していた。

長い上に幅が広く、その上天井も高いので、自分が手の平に乗るほどの小人になったかのように。あるいは蟻か……。

だが、ひたすらに駆け続ける中、翼は前に進んでいることだけは自覚できている。

地面が坂になっており、それを上へ上へと進んでいるからだ。この浮遊物体を大きく分けるなら、上層、中層、下層になり、今はさしずめ中層辺りといったところだ。

根拠はないが、それくらい進んだような気がしていた。

走る中、先輩たちは大丈夫だろうか、と翼は気にかかるが、戻る気はない。

今から引き返して、彼女たちと一緒にゲイルとアルフォートの二人を討つことは、彼女たちの侮蔑につながると考えるからだ。

天真は言った。自分たちを信じられないのか、と。

だから振り向かない。

だから引き返さない。

だから前進する。

だから思っている。

彼女たちは、絶対に大丈夫だと。

——……そう。絶対に。

願いを胸に、そしてそれを糧にし、翼は疾走すると、やがて白以外の風景が見えた。

西洋風の装飾がなされた、巨大な扉。

翼はその前で停止する。……否、止まらざるを得なかった。

扉の奥から、えも言われぬ強大な気配を感じたからだ。

先にいるのは強^{したた}かな相手だ、と思い、翼はヴァルフアムルクを連想したが、彼ではない。もっと別の気配だった。

乱れていた呼吸を整えるべく、深呼吸を幾度とし、額に浮かんでいた汗を拭くと、扉に手を掛けた。
すると、重たそうなその大扉は、軽く触れただけで両側に開いていく。

ギギギ……と軋みを上げながら、扉が全開になり、翼は奥へと足を踏み入れた。

広い空間。現在、天真と緋睡がアルフォートとゲイルと戦っているであろうあの空間と酷似していた。

その空間の中、視界に捉えるのは、ひとりの少女と、ひとりの少年——ミントとタブリスだった。

「やあ、よく来たね。真道翼」

藍色の髪の少年は、まずは歓迎の言葉を述べてきた。

なるほど。さっきの気配は彼のものだったのか、と翼は腑に落ちた。確かに、彼の雰囲気は前一度、対面したときにどこか独特なものを感じていた。

ミントはタブリスの前に立たされており、顔を俯かせているため、顔色がどうなっているのかはつきりとわからない。

「……ミントを放せ」

彼に向かって、翼は怒を言葉として発する。

翼の瞳には憤りで燃えていた。

タブリスは動じる気配を見せない。

「放せ、か……」

ふふつ、とタブリスは笑みを零した。

翼の怒りは、火に油を注いだも同然のように膨れ上がる。

「何がおかしい」

怒髪天衝く思いを押し殺し、翼は訊く。感情で話せば、相手の思うがままだ。

冷静を装った翼に、タブリスは、

「いや、勘違いをしているみたいだからさ。哀れだなんて思っただけだよ」

「勘違い？」

そんなもの、している覚えがない。

ミントが目の前のやつらに連れていかれた。その事実には、間違いはない。

「……キミ、この子がボクたちに誘拐された、とか思っているんですよ？」

ああ、と翼は首肯した。

「それが違うと言ったら、どうする？」

「……………え？」

何を、言っているんだ？

タブリスはさらに続ける。

「だから、ボクたちがこの子をさらったんじゃないって言ったらどうするって言ってるのさ、ボクは」

タブリスの笑みが、色濃くなっていく。

翼は無意識のうちに、タブリスからミントへと視線を移動させていた。

俯き、表情の見えない少女に、

「……ミント？　嘘、……だよ、ね……」

自ずと、そんな質問が出てきた。

信じたくない。

信じられない。

認めたくない。

認められない。

有り得ない。

有り得るはずがない。

翼は必死で、今考えている仮説を否定しようとする。

「……嘘、だよね……？」

再び、だだ漏れてくる。

彼女は無言。何も言わない。

そんなミントの代わりに、タブリスが答えた。

「嘘じゃないさ。本当のことだよ」

「……嘘だ」

フツフツとわき上がって来る感情。

それを必死で抑える。

抑えて、ミントに何度も訊く。

「ねえ、ミント。嘘だって言ってよ……。嘘だって、ただ一言言えば、僕は……」

迷わなくていいんだ。

望みにすぎるような気持ちで、翼は言葉を連ねた。そうであってほしくない、という望みに。

翼の切なる問いかけに呼応するように、ミントは俯かせていた顔をゆつくりと上げる。

その表情は、辛さと悲しみで満たされていた。

そして、

「……………ごめん」

それは、蚊の鳴くような幽かな声。消えてしまいそうな儚さを宿した言葉だった。

翼は魂を抜かれたように、啞然とした。

願いは空しく、無情に碎かれ破片となり、翼の胸を抉った。

「……………」

そんな…………、という呟きすらも言葉にならない。ただ、酸欠の金魚のように口をパクつかせ、空気を無意味に吐くだけだった。

「……………嘘だ……………」

再び、そんな言葉が漏れるが、そうではないことが証明されてしまった。本人の口から、はっきりと。

「さて、そんなキミに、ひとつ提案があるんだけど」

と、愕然と悲哀の最中にいる翼に、タブリスは言葉を投げた。
続く文字の羅列は、

「ボクたちの仲間にならないかい？」

というものだった。

は？ と翼は顔から悲哀が消え、驚愕が十割を占めた。

意味がわからない、といった面持ちの翼に、さらにタブリスは言葉が続ける。

「ちょうどいいじゃないか。ミントはボクたち側にいるわけだし、キミもこっちに来れば、何の問題もない。万事解決さ」

それに、とさらに接続詩を付けた。

「ボクは昔からキミに目をつけていたんだよ。あいつと関係がある人だからね」

あいつ、という単語が気になったが、訊く気になれない。驚きが続き過ぎて。

ああそれと、と思い出したようにタブリスはさらに付け加える。

「ゲイルとアルフォートと戦っている子たちのことを心配しているのかもしれないけど、大丈夫さ。あの二人は『使者』アンゲリオンと真っ向から対峙したときに、死ぬ運命が確定してしまっているんだから、今頃死んでいるだろうしね。屍に承諾を得る必要なんてないよ。キミは、キミだけのことを考えていればいい」

翼は、プチッと頭の血管が切れるような音を、聞いた気がした。

仲間を侮蔑され、拳句の果てにやつの頭の中ではすでに屍の存在らしい。

今まで抑えていた思いが、忍耐という名の地層を一気に突き破り、噴火した。

「先輩や緋睡は、あんなやつらに負けたりはしないッ！」

大広間に、翼の怒号が響き渡る。

さらに、追い討ちとばかりに勧誘への返答もした。

「僕はおまえの仲間にはならないッ！　たくさんの人たちを平気で殺そうとするおまえたちの仲間には、絶対にッ！」

ピクリと、ミントの眉が歪んだ。それは、どこか後ろめたさを感じたような仕種……。

一方タブリスは、興ざめしたように口元の笑みを消した。
そう、と承諾の台詞を言い、

「……なら、いいよ。かつての仲間同士、せいぜい殺し合うがいいさ。せいぜい、後悔しながらね」

そう言つて、タブリスは足元に幾何学模様の刻まれた円陣を展開し、その円陣もろとも空間転移で姿を消した。

残ったのは、翼とミント。

ひとり抜けたことにより、場にはなんとも言いがたい空気が漂っていた……が、

「ミント！　僕と一緒に先に行こう！　それで、この事件を解決しようよー！」

口を切つて、翼は自分の思いを少女に訴えた。

ミントは眉を八の字に歪めたまま、さらにそれを濃くした。

「……ごめん」

ミントは詫びを言い、担いでいた大剣を両手で構えた。
あまりに自然な行為に思えたため、翼は一瞬、それが何を意味しているのかわからなかった。

しかし、大剣の切っ先が、紛れもなく自分に向けられていることを理解する。

「……ミン、ト……」

まさか、本当に……？

「ミント……」

少年は彼女の名を、無意識に呼ぶ。

「……ごめん」

少女は彼に、謝罪の台詞を述べる。
そしてミントは、翼に凶刃を向け、

「……私、翼たちと一緒にいけないんだ！」

突撃した。

第8章 - 2 対峙

幾重にも白刃が飛び交っていた。

天真は突きを主力に、

ゲイルは斬撃を主力に、

銀の軌跡が入り乱れる。

それはまさに戦風。

竜巻の渦中にいるかのような、荒れ狂う攻撃だ。

天真はたくみに線の攻撃を回避し、点の攻撃で敵を穿とうとする。しかしゲイルはそれを許さない。的確に軌道を逸らし、自分には一切当たらないようにしていた。

チツ、と舌打ちをせずにはいられない。

戦いが始まってしばらく経つが、互いに確かな傷を負わすことが出来ておらず、持久戦となっていた。

「——ヒャッハッ！ ずいぶんともつじゃねえか！ …… っうおッ
！？」

よく回る舌に風穴開けようと、ゲイルの顔目掛けて瞬^{しゅん}迅を放った。ゲイルは身体を大きく逸らし、そのままバックステップをし、距離を取った。

「危ないねえ。当たったらどうすんだよ」

ちゃらけるゲイルに、天真は言葉を返さない。なにせ、当てる気で放ったのだから。

ゲイルは槍を片手でくると回転させ、天真の様子を窺^{うかが}っていた。その目は細い笑みを顕^{あらわ}わにしていたが、その奥からは、とめどなく殺しの感情が湯水の如く溢れ出ていた。

まったく油断ならない相手だ、と天真は敵ながらゲイルを内心で賞賛した。ろくに実力をつけていなければ、今頃斬り刻まれて、肉塊となっていることだろう。

実に惜しい相手だ。その気になれば名を馳せることが出来るだろうに。

「……ゲイル、おまえはなぜ『ゴスペル』に入った？」

「そんなの簡単な理由だ。好きなだけ殺せるからだよ。殺すだけ殺して、首を取った数だけ賞賛を浴びることが出来る。最高だぜ」

「戦争ではあるまいし、人を殺すだけ殺して誉められるわけがないだろう」

「戦争だよ」

ゲイルは真つ向から天真の言葉を否定した。先ほどまでの軽薄な雰囲気は一転して静まり返り、冷酷のみがそこに残っている。

「この世は戦争だらけじゃねーか。平和になっただけの上辺っ面だけだ。少し深入りすれば、世界は血で溢れかえっている。それをおまえらのような平和ボケしたやつらや、醜い現実を隠蔽しようと、文明をひたすらに進化させて、闇をあたかもないようにしてんだろーが」

口調はあいかわらず軽いが、どこか物々しさが感じられる。

なぜそう思うのか、疑問を生じる天真だったが、ゲイルの続いて出てきた言葉が答えとなっていた。

「俺様はよお、そんな戦渦の中で生まれ育った人間でな。だから自分のやっていることが間違っていると思わねえよ。——人を殺す。それが、当たり前の中で育てられてっからなあ！」

そう言い、ゲイルは体勢を屈め、急速に距離を縮めてきた。

天真目掛け、流れるような動作で下段から斬り上げる。

天真は上から迎え撃ち、周囲に金音を響かせた。

「てめえらはさぞかし甘い蜜のような平和を今まで味わったんだろう？　だつたらもういいじゃねえか。おとなしくここいらで朽ち果てな！　これからは俺様が美酒に酔わせてもらうことにすつからお！」

刃を交差させた向こうからゲイルが言葉を飛ばしてくる。

ゲイルが異常なまでに人殺しに固執するのは、それが当たり前の場合で育つたためなのか、と天真は合点がいった。

ゲイルのそんな気持ちは、どことなく納得できた。できればしたくないが、自分がもしゲイルの立場だつたらどうだろう、と考えたとき、同情せざるを得ない。

生まれが戦争地域で、それを見て、経験して、育つことしかできない状況。

人殺しが絶対的な正義だと信じなければならぬ状況。

幼い頃からそんな考えを植えつけられれば、そう簡単に払拭できるものではない。そしてそんな気持ちは、時間が経過するとともに趣味や快樂になりえるのだ。

ゲイルのように……。

「とつとと斬り刻まれたらどうだあ？　血をしぶかせ、絶叫を轟かし、臓腑を曝け出せよお！」

鏑迫り合いから、斬撃戦へと持ち込まれた。

数多の銀の線が嵐のように荒れ乱れ、天真は弾き、受け流し、受け止める。

しかし、攻撃の乱舞は、少しずつ彼女の身体を斬り裂いていき、

血が水滴のような飛沫を周囲に散らし、背景の無味な白に生々しい紅を添加していく。

今は微々たるダメージだが、それも蓄積されていけば身体が重く感じ、やがて一步も動けなくなってしまう。命をかけた戦いにおいて、ごくわずかな傷も勝敗のわかれとなるのだ。

しかし、それはゲイルとて同じことだった。

敵の攻撃を捌きながら、隙あらば天真は一撃必殺を狙って、一点集中の突きを放っており、それが時折掠っているのだ。

互いの武器は槍。

互いの身体の状態も互角。

勝敗を決めるのは、実力と気力と体力。

それらを駆使した結果、最後まで立っていられた者が勝者となる。――勝ってみせる。

……否、勝たなければならぬ、と天真は思う。

勝って、早くあいつのもとへ急がなければならない。ひとりで先に行かせた後輩のもとに。

「……チッ。とつとと死にやがれッ！ クソ女ア！」

致命傷を与えられず、苛立った声を上げるゲイル。

それに比例して、槍の振るう速度が上がった。

くっ、と天真は歯を食いしばる。ゲイルの猛攻は止まることを知らず、戦風の如き勢いだ。

このままこれ以上打ち合ったらまずいと、天真はタイミングを見計らって背後に大きく飛び退いた。

「ああ？ なんだ？ 急に退きやがって。怖気づいちまったか？」

馬鹿にしたようなゲイルの口調。

「だったらもう少し腰を引かせろよ。ビクビクと、腰を砕けさせて顔を恐怖に染めてくれよ。そうじゃねえと狩りがつまらねえじゃねーか」

ゲイルの発言を聞いて、天真は思う。

こいつをこれ以上、野放しにできない、と。

ゲイルの生い立ちを考えれば、人を殺すのが当たり前というものも納得でき、そして同情もできる。

だが、所詮はそこまでだ。

同情はできても、ゲイルのする行動を承諾、了解することはできない。

自身の快樂、悦に入るために、他人を殺す……。
そんなやつを、赦すわけにはいかない。

「……ゲイル。今の自分から心変わりする気はないか？」
「ねえよ。んなもん」

ゲイルの即答に、そうか、と天真は頷く。

せめて足を洗う気があるのなら、それなりの対処をしようとも考える気になるのだが、ないのならやむを得ない。

これ以上の犠牲を増やさないために……。

「おまえを黄泉に送ってやる」

一方、緋睡とアルフォートは、大広間から飛び出し、先に広がっていた通路を疾駆しながら戦いを繰り広げていた。

二人の影は流れ、銀線と紅線が入り乱れる。

銀はアルフォートから繰り出され、

紅は緋睡から放たれる。

紅い炎を纏った矢が幾重にも放たれ、さしずめ驟雨しゅううのよう。

アルフォートはそれを巧みに回避しながら、緋睡の隙を狙っては接近戦に持ち込もうとする。

近接戦闘でアルフォートに劣っていると、二度の戦いで自覚していた緋睡は、肉迫にくはくすると小太刀で数合交えた後、機を見て再び距離を取るべく移動をするという手段を用いていた。

近づかれては離れ、近づかれては離れの繰り返し。

そんな戦いを繰り返しているせいか、互いに決め手となる一撃を与えることも、また受けてもなかった。

お互いに擦り傷程度は受けているものの、そんなものは魔力で肉体の代謝を引き上げれば一瞬で完治し、痕しか残らない。傷痕も、数日経過すればなくなる。

大したことない、と緋睡は思う反面、あまり長期に戦いを長引かせることができない、とも感じた。

なぜなら、新陳代謝を引き上げる際にも、当然ながら魔力を使い、その際に精神力も消費するからだ。さらに、新陳代謝を無理矢理に引き上げることになっているため、体力もそれなりに削られる。

長期戦になった場合、体力が低いとそれなりに感じている緋睡は、不利になると考えていた。もっとも、体力が低いというのは、翼一行の中だけでの話だが。

それに緋睡は、もともと一対一の戦いには不慣れだった。

主力として扱っている武器が弓矢ということもあり、後陣からの援護を得意としている。

つまり、前衛がいてこそ緋睡の実力は発揮されるのだ。

このようなタイムマン勝負では、全力の力を出そうと努力するだけでも骨が折れる。

——それでも、なさねばなりません。

そう。ここで目の前の相手を止めなければならない。

さもないと、たくさんの被害が発生することになってしまう。それは阻止せねばならない事柄だ。

「さつきからチヨコマカと逃げてばかりだけど、どうしたのかなあ？ やっぱりぼくには勝てないと感じて、無様な背を見せるしかなかったとか？」

侮蔑、屈辱、軽蔑を込めた嗤いを見せながら、挑発をしてくるアルフォート。

同時、氷の弾丸を三発立て続けに射撃してきた。どうやら移動しながら魔術の詠唱をしていたようだ。

空気抵抗を突き破らんとする勢いで急迫してくる凍てつく飛弾を、緋睡は片っ端から炎の征矢^{そや}で撃墜した。

氷は一瞬で水蒸気と化し、周囲にミルク色の霧が立ち込めた。一転して視界が悪くなるが、移動する緋睡にとっては関係のないことだった。

ものの二、三秒で霧の中から脱し、アルフォートがどこにいるのかを確認する。

「ここだよッ！」

背後。

どうやら自分が先に霧から出たのだと理解した緋睡は、腰に提げている小太刀を抜きながら、振り返る。

振り返り際に一閃。

銀が弧を描き、カキンと固いものにぶち当たった。

アルフォートだ。

彼の頭上付近には、氷弾が計三発。

「——ッ！」

気づいた緋睡は、即座にアルフォートから飛び退いた。

「遅いよ！」

その後を三発の氷の塊が猛追した。

——霧の中で詠唱を済ませていましたか……ッ。

辛酸を嘗めたような顔になる緋睡。

即座に小太刀から弓に持ちかえ、魔力で炎の矢を生成、その後射撃する。

川の水が流れるような鮮やかな動作で一連の動作をした緋睡。

一発、二発は矢で破壊することができたが、三発目は矢が逸れてそのまま逼迫してきた。

矢で射るには、距離が近すぎる。

そう考えた緋睡は、再び小太刀を手に持ち、それで薙いだ。

爆音とともに周囲に小さくなった氷片が散らばり、それが頬や服を裂いた。

微々たる痛みに、緋睡は一瞬だけ眉を潜ませるが、すぐに切り替えて迫って来たアルフォート目掛けて斬りかかった。

一合。

迎え撃つのではなく、先手を撃った第一撃は、アルフォートによって受け止められる。

「無駄だよ。白兵戦ではぼくのほうに分があるんだからさ」

緋睡はすばやい一撃を放ったと思っていたが、どうやら彼にとってはそうではなかったようだ。

もともと彼は遠距離で撃ち合うより、近接でやりあったほうが得意なのだ。先ほどの緋睡の斬撃も、アルフォートにとっては実にぬ

るい攻撃でしかないのだ。

罅迫り合いをしていたところ、緋睡はワンステップで相手との距離を取り、そのまま先へ疾走した。

その後をアルフォートが追う。

近づいたり離れたたり、ヤマアラシのジレンマのようだ、と緋睡は思う。

同時に、この辺りで勝負を仕掛けてみるべきだ、とも思う。

このままではいつまで経っても状況は変わらない。自分が不利だという状況は。

だからここで、形勢を逆転……ないしは互角に持ち込まなければ、

——負けてしまいます……ッ。

それは断じて許されないことだ。自身の兄のことを思うとなおさらだった。

兄は、自分たちが勝つと信じて先へと進んだ。

なのよりそれは、自分が望んだことだ。

彼が自分たちと戦おうとしていたのを制止してまで。

それは、普段兄を馬鹿にしている反面、なんだかんだ言っただけのことを信用しているからだ。

そして彼も、自分のことを信じてくれている。信頼してくれているから、彼は立ち止らずに、先へと行ってくれたのだ。

信じてもらっている以上、その信用に答えなければならない。

努力をし、結果を手に入れなければならない。

——兄上に、これからもっと信用してもらえるように……。

この戦い、

——負けられませんッ。

決意をさらに確固たるものにしていく緋睡。

先ほどまで急迫してきたのは遠距離からは斬撃の衝撃波のみだったのだが、今では氷の弾丸も付随されて、さらに攻撃が荒れ狂ってきていた。

今まで矢で消滅させていたのだが、攻撃の激化に伴って緋睡は今

までの行動に回避行動を追加した。

耳の鼓膜を振動させるのは爆音と轟音。
ラジオを音量マックスにしてもこんな音は出せまい。

「どうしたんだい？ その程度じゃばくに攻撃は届かないよ！」

アルフォートの声が、音に混じって聞こえてきた。

「それはおまえとて同じでしょう！」

そう叫び、緋睡は先ほどまで敵の攻撃を落とすだけに使っていた矢を、アルフォートに一矢放った。

どさくさに紛れての一撃だったが、アルフォートは的確に捉え、それを双剣で打ち消した。

刹那、アルフォートが距離を詰めてきた。

横に降る矢の時雨しぐれを避けながら、アルフォートは近接戦闘に持ち込んできた。

とつさに小太刀に武器を変更し、アルフォートの放った斬撃が当たる寸前で制止させる。

爆音轟音が荒れていた戦場に、金属音の快音が響いた。

それも一度ではない。

何度もアルフォートは、緋睡に隙を与えまいと双剣で牙を向く。

「ほらほらあ！ もっと速く捌かないとボロ布のようになってっちゃうよあ？」

嘲り声で、実に愉快そうなアルフォート。

そんな彼に緋睡は、

「腐った人間ですね、おまえは。人を苦しめるのがそんなに愉しい

のですか？」

「うん。そりゃあもう嬉しいねえ！　咽び泣いて許しを乞う姿を見るのはもつと愉快だよ！」

銀の軌跡を幾重にもつくりながら、アルフォートは悦に浸り、言葉を連ねる。

「今の今までさあ、ぼくのこと指差して嘲笑っていた人間がさあ、ぼくがちよつと魔術で脅してやった途端に手の平返したように許しを乞うて来るんだよ？　最高に笑えないかい？」

はははははは……、と笑いながら剣撃を繰り出してくる。

「でもぼくはそんなにお人好しじゃないからさあ、許してやらなかったよ。五人くらいいたんだけどさあ、そいつらを全員殺してやったよ。ただ単に殺すんじゃないで、じわじわと、骨の髄まで相手に恐怖を感じてもらうために、腕の一本一本、脚の一本一本、そして最後に首を落としてやってねえ。ひとりをそうしている間に他のやつらが逃げないように氷で檻を造って閉じ込めてさあ、そいつらに見せながらやったんだ。本当に面白かったよ、あれはさあ」

満悦に顔を歪ませながら、ひたすらに攻撃してくる。

「きみもそうやって殺してあげるよ。たっぷりと、畏怖に顔色を染めながら死んでもらうよ」

なるほど。アルフォートがこういう人間なのか、緋睡は理解した。過去に起きた辛く凄惨な出来事が、彼をここまで歪めてしまったのだということを。

もし、彼にそんなことが起きなければ、こうして凶器を交えるこ

ともなかったはずだと、緋睡は思う。

だけど……、と同時に思った。

「それでは……おまえもその者たちと同じではないですか！」

アルフォートを虐げていた者たちとアルフォートは、何も違うな
い。

他人を傷つけることに悦を覚えているという点で、決定的に同じ
なのだ。

違うのは、力の度合いだけ。

本当に可哀そうで、それでいて堕ちた人だ。

同情はするが、それ以上はない。

「そうだね。きみの言う通りだよ。ぼくはあいつらと同じさ。同じ
者同士が衝突して、結果あいつらは力不足で死んだんだよ。いいじ
やないか。どうせ腐った人間だったんだ。他人を苦しめることに快
楽を感じているゴミ、クズ、害虫以下の存在さ。ぼくも含めてね」

緋睡は大きく後方へ跳び退いた。

アルフォートは追ってこない。先ほどいた場所で、言葉を出す。

「だからいいじゃないか。害虫が害を成すのは当然なんだからさ」

自己否定とも聞き取れる言葉。

しかしアルフォートはそんな自分の発言を気にしている様子はな
かった。相変わらず、狂気に満ちた笑みを浮かべている。

「生憎ですが、それは違いますよ。おまえは害虫以下の存在です」

キッパリと、緋睡は言った。

「害虫は、それをなさねば生きていけない生理的なものですから、やむを得ずしているだけです。おまえの行いは、別にしなくともいい嗜好的なもの。その時点で害虫より劣っていると断言しているのです」

そこにはアルフォートだけでなく、彼を虐げていた者たちも含まれているのだが、それを口にしたら同情をしていることが彼に気づかれてしまうので伏せた。

「……それじゃあ、きみのやっていることは何なんだい？」

「使命ですよ。生理的なものでも、嗜好的なものでもない、使命というものです」

緋睡は即答した。

そう、とアルフォートは頷く。心なしか、どこか影がさしているようだった。

「……そういうのを、戯言とは言わないんだろうかなあ。——ねえッ！」

再び接近してきた。

矢を数発放つが、ものの三秒ほどで双剣の攻撃範囲内に持ち込まれる。

「きみは単に自己を否定したくないからそう言っているんだろう！ そりゃそうさ！ 誰だって自分を否定したくはないからねッ！ きみの言っていることは、単に我が身可愛さのための戯言だよッ！」

叫びながらアルフォートは剣舞する。

一撃一撃に言葉を込めながら、撃ち込んでくる。
そんなアルフォートに、緋睡は吼えた。

「自己を肯定しようと否定しようと、大切なのは自らのしている行
いが善なのか悪なのかですよ！」

第8章 - 3 対峙

重い一撃が、言葉とともにやってきた。

大剣の、上段からの一撃。

見た目は実に重そうだというのに、ミントはそれを軽々と振るい、翼に振り下ろした。

翼は鞘から剣を抜き、とっさに受け止める。

重量感のある金属音が響いた。

重い。

それは単に、大剣の重量だけではなかった。

ミントが戦いの火蓋を落とすきっかけとなった言葉。それが翼の心に深く押し掛かっているのも、そう感じる原因のひとつとなっていた。

——私、翼たちと一緒に行けないんだ！

あの言葉が、重く押し掛かる。

心臓を握られているかのような胸の痛みが、翼の気持ちに拍車をかけていた。

「ミント、どうして……？」

翼は大剣を弾き、ミントと距離を取った。

「どうしてなんだ！ どうして……あいつらの……」

仲間になったのさ……。

翼のそんな思いとは裏腹に、ミントは再び大剣を振り上げ、猛然と迫って来た。

斬り下ろしを、翼は横に回避する。

ブォンと、重量を持った空気を裂く音。

さらにそこから、ミントは間髪入れずに、翼目掛けて横薙ぎを繰り出した。

それを今度は刀身で受け止めた。

刀身同士が交差した際、踏ん張りながらも衝撃で翼は地面を滑る。力に加減がない。

——まさか……本当に……？

本当に、本気で、僕を殺そうとしているのだろうか。

信じられない。

だが、力の加減の程がそれを証明しているように思えてならない。

「……どうして……」

翼はなおも問う。

「……どうして……ッ」

しつこいと思われているかもしれないけど、

「……どうして……ッ！」

それでも、問わずにはいらなかった。

「……どうしてッ……！」

翼が質疑をする間にも、ミントは得物を振るい、少年を斬り裂こうとする。

翼はそれを見切り、受け流していた。まともに受け止めていたら、大剣の重量分、向こうが破壊力で有利だからだ。

翼からは攻撃をしようとはしない。

ただ、ミントの攻撃を回避し、受け流すだけだ。

翼はミントと戦う気は、砂漠の砂欠片の一粒もなかった。てつきり攫さらわれたかと思っていたからだ。

だけど違った。

彼女は、自分自身で『ゴスペル』のもとに行つたのだ。

どうして、と何度もある。

仲間になつた以上、何か理由があるはずだ、と思うものの、ミントが口を割ろうとしない。

普段はあまり他人の事情には干渉しない翼なのだが、仲間が敵に下つたということもあり、訊かずにはいられなかった。

「ねえ、ミント！ 答えてよ！ 僕の質問に！」

ひとつひとつが非常に重いミントの攻撃を処理しながら、翼は声を出す。

すると、一瞬だが、ミントの動きがピタリと止まった。

眉を苦し気に八の字に歪ませながら。

その隙に、翼は後方に大きく跳躍し、距離を開かせた。本当は近くに寄つて話しかかったが、ミントがいつ攻撃してくるかわからないため、あらゆる事態に備えてのことだった。

翼がミントに視線をやると、彼女は、俯いていた。

「……私……みんなを騙してたんだ……」

やがて聞こえる、ミントの声。

消え入りそうな声だったが、周囲には翼たち以外に誰もいない上に無音だったので、耳を凝らさずとも聞こえた。

「国王様も、シャルも、クイーンズのみんなも……翼たちも……私は今まで、ずっと騙ってきていた……」

「……何を、騙していたの？」

翼は訊く。

「……私、もともと『ゴスペル』の人間なんだよ」

「……え？」

間の抜けた声を発する翼。

唐突な告白に、翼の思考が凍結する。

そんな翼に、ミントは要約した言葉を口にした。

「つまりは……私、もともと『ゴスペル』側の人間なんだ」

俯いているから、顔色がわからない。

だが、声が震えていた。

何かに突き動かされて……。

「……いや。人間でもないのかな、正しく言えば。造られた人間だし……」

自嘲気味に聞こえるミントの声。

「造られた人間って……」

「そのままだよ。私は……ラミエルって人を蘇生するときに、代わりに生まれた人間なんだ」

言葉を滴のように地面に落としていくミント。

翼はそんな彼女の様子を、呆然と見ていた。
信じられない。

それが翼の頭の中を支配していた。
今まで何度、そう感じたことだろう。

だが実際、その通りなのだから仕方あるまい。

ミントが『ゴスペル』の人造人間……。

そもそも、人間が人間を造り出すこと自体、翼には本当のこととは思えなかった。反面、どこかでそれを真に受けていた。

『ゴスペル』という組織の技術力。クイーンズ近辺の湖上空に浮かんでいる兵器を見れば、どれほど凄まじいものなのか想像がつく。これほどの兵器を開発できるのだから、人造人間が造られても不思議ではない。

一方認められない理由は、倫理的な考えをしたとき、それが果たして人として赦されることなのだろうか、と思えるからだ。人が機械のように、人を造り上げる。それは人としてやってはいけな^いことなのではないだろうか。

それは、命を弄^{もてあそ}ぶ行為なのではないだろうか。

そんな考えがあるため、翼は認められない反面、認めざるを得ないのだ。

その後もミントの口から明かされる。

「だけど私は、ラミエルじゃなかったから、廃棄されることが決まったんだ。そのとき、私が殺されないようにって、クイーンズに私を連れていったのが……ヴァルファムルク」

あいつが？ と翼は驚いた。

とても他人を庇うようなやつには到底思えない、と思ったからだ。

「ヴァルファムルクは私をクイーンズの離れにある湖の岸部まで連れて行って、クイーンズまで行くように、私に言ったんだ」

だけど、とミント。

「多分、私たちの後をつけていたんだと思う。私を造ったやつが、魔術で私をしとめようとした。魔術で発生した稲妻に撃たれて、私はそのまま気を失って……気がついたら、私は記憶を失っていた」

ふと、ここでミントは頭を垂れていた顔を上げた。

「それで今回のことで、私は思い出した。頭痛が頻繁にこここの起きてたのは、多分その前兆だったんだと思う。自分の生まれや、その意味を思い出した以上、私は翼たちと一緒にいけない」

と、ここまで言うときミントは、いや、と首を左右に振り、

「生まれた意味なんて、私にはないかもしれない。だって……もともと廃棄処分の身だし……」

「違うッ！」

翼は叫んだ。

それはほとんど反射的なものだった。

ミントは一瞬驚いたように目をパチクリさせていたが、すぐに眉を八の字にさせた、辛苦の表情になる。

ただその口元には、自嘲と取れるものがへばり付いていた。

「違うないよ。私は……生まれた意味なんてないんだ。望まれて生まれていないから、意味なんて……ないよ……」

言葉の最後に行くにつれて、声がぐぐもっていく。

ミントの瞳は必要以上の水分を蓄えていた。潤んでいるそれは、

悲哀と艱苦^{かんく}を切に訴えていた。

胸が締め付けられる。

ミントのそんな表情を、翼は見たくなかった。

似合わないと思った。

彼女のそんな顔は。

だから……、

「そんなことない!!」

気づけば、翼はミントの言葉を否定していた。感情という感情をすべて言葉に込めて。

ミントは首を左右に振って、否定し返した。

「そうだってことは、私自身がよくわかってるよ。だから……別に何とも思っていない」

「だったら……なんでそんなに哀しそうなのさ!」

え? とそこでミントは気づいたようだ。

自分が、涙を流していることに。

ミントから零れ落ちた雫は、白の床をポタポタと濡らす。

「……違う」

ミントは言った。

今起きていることを否^{いな}むために。

「違うよ……。これは……。この……。涙は……」

右手で大剣を持ち、左手を涙を受け止める皿としているが、その手が小刻みに揺れていた。

「なら、本当に哀しくないって言うのなら笑ってよ！ 哀しくなくて、何も思っていないくて、今の状況が満足なら、笑ってみせてよ！」

翼は想いを言葉に乗せ、声を張り上げた。

ミントは言われ、笑おうと口元をふるふると震わせるが……………そこまだった。

ミントは笑わなかった。

笑おうとすればするほど、眉が悲哀に歪んでいき、涙が落ちる速度は上がる。

笑えるわけがない。

己を否定して、平然と笑えるはずがない。

他人を否定するときと同じように、心のどこかで後ろめたさを感じるものからだ。

「……………私には……………意味が……………」

「意味ならあるじゃないか！ 僕たちの仲間だって意味が！ それに……………」

間を置き、

「僕たちには、ミントが必要なんだよ！」

翼の心からの叫びが、響き渡った。

第9章 - 1 『使者』との決着、ミントの想い

大広間は、絶えることのない剣戟音で満たされていた。

天真とゲイルは、縦横無尽に駆け回り、幾重にも影を交差させる。互いの速さはまさに風。

戦慄を覚えさせ、近づく人々を戦かすに十分な殺気と敵意と闘気を宿らせた戦風だ。

「おらおらあ！ 俺様を黄泉へ逝かせるんじゃないかねえのかよ！」

声を張り上げ、天真に罵声を飛ばすゲイル。

天真は槍を操りながら、言葉と一緒に飛んでくる槍撃を捌く。捌いて、捌いて、捌き続ける。

天真は慌てない。

一瞬でいい。

隙ができるまで、

隙をつくるまで、

天真はひたすらに、そのときを待つ。

好機を――。

「逝かせてみるよ！ それとも何だ！ 口先だけの根性なしか、おめえは！」

なじる声が鼓膜を震わせる。

しかし天真はいたって冷静だった。

せつかくここまで来たのだ。ここで相手の挑発に乗って、すべてを水泡と化す必要はどこにもない。

ここまで来た以上、切望するものはただひとつ。

――必ず……勝つッ！

勝ってみせるとも。

勝利に渴望し、手にするべく、天真はひたすらに敵の攻撃を的確に対処する。

眼光は常に爛々と輝いている。

隙を一切見逃さない、とばかりに。

「ヒヤハハハ……！ これじゃサンドバックだな！ 護ってばっかの鈍亀さんよお！」

猛り狂った嗤い声を発しながら、ゲイルは槍を舞わせる。

——まだだ……。

天真は相手の攻撃を、ひとつひとつ見極めることに専念する。

護りに完全に従っていないため、うまく処せなかった斬撃が身体を掠る。

しかし構わない。

目の前の微々たる苦痛に気を取られるより、その先にある雄大な勝利に気を取るべきだ。

——まだだ……。

天真の視界には、突きの乱撃が映っていた。

それを確実に、致命傷になるものだけを選び、受け流していく。

好機はまだだ。

「これで——」

ほんの一瞬、

相手が勝負を決めようと、

「——終わり——」

大ぶりの攻撃を、

「——だああああ——！！」

して来たとき——、

——今だッ！

天真は反撃に打って出た。

その反撃とはすなわち、決着をつけるためのもの。

ゲイルは槍を上段に大きく振り上げ、今まさに振り下ろそうとしている。

ゲイルのハルバードに備えられている斧刃が、天真の血を吸いたがっているように光で反射していた。

振り下ろされれば、身体の正中線から真っ二つだ。

——血を吸われるのは……。

天真は突きの構えを取り、

「——おまえだああああ——！！」

放った。

同時、ゲイルの斧刃が振り下ろされる。

直後、大広間に血飛沫が散った。

紅い紅い、潤滑油が——。

緋睡は寸隙^{すんげき}を狙って、アルフォートの剣撃の嵐から、バックステ
ップをして抜け出した。

その後、すかさず弓を構え、矢を乱れ撃つ。

「ならきみは、自分のやつていることが善だと言えるのか？ はつきりとそう言えるのか!？」

アルフォートは叫号し、急迫してくる矢を、障壁を展開して、すべて防いだ。

障壁に直撃した矢は跡形もなく消滅し、緋睡はまともに射る矢では無意味だと判断した。

「少なくとも、これからたくさんの人を無差別に虐殺しようとしている外道を斃すのは世の中のためだと思っていますよ」

再び矢を召喚し、矢を構える。

構えた状態で、緋睡は矢にさらなる魔力を注ぎ込み始めた。障壁を貫通するほどの威力をつけようとしているのだ。

視線をアルフォートに向けると、彼は双剣を上段に構え、魔力で顕現させた冷気を二刀にまわせていた。

おそらくは衝撃波。冷気で一気に凍て付かせてやろうという魂胆なのだろう。

本気だ、ということはアルフォートから放たれている闘気が、自分の肌をピリつかせていることでわかることだ。

——次の一撃で、決着がつく……ッ。

同時に、そんな予感を感じていた。

互いに、互いが出せるだけの全力を、次の一撃に込める。

緋睡の矢は紅蓮に真っ赤に燃え上がり、

アルフォートの双剣は蒼い絶対零度を思わせる冷気で包まれた頃、

「はああああ——!!」

喉がねじ切れんばかりに両者は気合いの咆哮をし、各々の全力を放った。

緋睡は矢として。

アルフォートは衝撃波として。

両者の中央にあった障壁など、紙当然のように破壊され、矢と衝撃波が正面衝突した。

大音響。

耳を思わず塞ぎたくなるほどの爆音と衝突音が鳴り響き、壁や床を振動させた。

両者の攻撃は中央で今もお力の押し合いを続けていた。

轟音を断せず発し続け、周囲を震わせる。

——負けません……。

兄上の期待に答えるために。

——負けません……ッ。

仲間に心配させないために。

——負けられませんッ！

この事件を解決するために。

瞬間、一条の紅い閃光が、蒼い冷気を貫いた。

第9章 - 2 『使者』との決着、ミントの想い

純白の空間に、紅のマーブル模様が追加されている。紅はどこまでも生に満ちており、死で溢れていた。今、二人の影が重なり合っている。

ひとりは、地面に白刃を振り下ろした体勢で、もうひとりは、相手の胸に凶刃を突き立てた体勢で。前者はゲイル、後者は天真だ。

天真の穂先は、ゲイルの左胸を貫通していた。人間を動かすためのエンジンがある部位だ。対するゲイルの斧刃は、天真の服を裂いただけで、地面に向かって思い切り振り下ろされていた。

「……ヒヤ……ハハ……。俺様の……負け、かよ……」

ゴフツ、とゲイルは吐血する。咳とともに吐き出された血塊は、地面を紅に染め上げる速度を上昇させた。

ゲイルは天真に視線をやる。焦点がぼんやりと定まっていないう子で。

「……おめえのような……ぬるま湯に浸かっていたやつに……」

だらしなく犬歯を見せて、苦々しく笑うゲイル。笑いは、そんなところではないものではないだろう、と思いながら、

「悦に入るために手段を選ばないおまえは、怠惰に浸かり過ぎていたようだがな」

と、言い捨てた。

「……ヒャッハ……。容赦ねえな……。おま、え……………」

その言葉を最期に、ゲイルの瞳から生気が消えた。瞳孔が開き、口を力なく開かせて。

スツと天真は、槍をゲイルから引き抜いた。

その際、一瞬勢いよく血が噴き出、服を染めるが気にしない。もとも自分の血で汚れていたのだから、今更汚れようと大差変わらないからだ。

支えをなくしたゲイルは、重力に逆らうことなく、床に伏した。彼はもう、動くことはない……。

先へ続く通路。

そこに、立っている者と、倒れている者がいた。

緋睡とアルフォート。

緋睡は息を荒くしながらも、自身の敵の姿を見る。

彼女の視線の先には、胸に風穴を開けたアルフォートの仰向けで倒れている姿があった。

「……ち……くしょ……。きみ……なん、かに……負ける……なん、て……」

途切れ途切れの台詞は、自身の敗北など認めないとばかりの嫌悪憎悪に満ちていた。

「……ぼ、くが……勝つはず……だった、のに……。ぼくの……ほうが……じつ、りよく、は……うえ……なの、に……」

絶命に近いというのに、言葉を連ねることを止めないアルフォート。それはまるで呪詛のようだ。

……否、呪詛なのだろう。

その台詞が、口調が相手に対する憎しみで充足しているのなら、それは紛れもなく、相手を呪う言詞だ。^{げんし}

そんな死に際の敵に、緋睡は言い放つ。

「これが現実です」

ただそれだけ。しかし、静めるには十分すぎるほどの言霊を持った台詞だ。

目の前のあらゆる物事が、たとえどれだけ信じ難いことだとしても、起きた以上は現実なのだ。

自分より格下の相手が、自分を負かすことも、立派な現実だ。

「……みと……ない。……ぼく、は……ぜ……たいに……みとめ……な……」

そこで言葉は途切れた。

アルフォートが事切れたのだ。

紅の絨毯の上で、ただひとり……。

自分に生まれた意味なんてない。

だから今回、翼たちに殺してもらおうと思って、戦場いくさばにいる。だがミントは、できなかった。

生への執着が、心のどこかで存在していたのだ。

だからミントは、抵抗した。攻撃という手段を用いて。

ただ、翼に死なれては困るので、ミントはかすり傷、擦り傷程度、あるいは致命傷にならないような攻撃ばかりを出していた。

しかしそれでも、力だけは本気を出していた。

翼に本気になってもらって、殺してもらうために、そうした。

だけど彼は、一度も攻撃しようとはしなかった。

しなかったどころか、彼は私にこう言った。

『僕たちには、ミントが必要なんだよ！』

……必要？

こんな私が？

今まで、騙し続けていたというのに、目の前の少年は自分のことが必要だと言ってくれている。

その前に、彼は自分にこう言ってくれた。

『意味ならあるじゃないか！ 僕たちの仲間だって意味が！』

こんな私に、彼は生きる意味を提示してくれた。

こんな……裏切り者の私に……、

「どうして……」

気づけばミントは、言葉を言っていた。

涙でぐずぐずになった声で。

情けない、と彼女は思う。

翼たちと敵になる（こうなる）ことを知った上で、自分は敵に
いるのに……。

死ぬために、敵にいっしょにいるのに……。

思えば思うほど、ミントは瞳から水を流す。

「どうして……私なんかいっしょに構うの？」

「仲間だからだよ」

至極当然だ、とばかりに翼は言ってみせた。

「それ以外に理由はないよ。だって、それ以上に大切な理由がないからね」

翼の口調は、どこまでも優しく、

「ミント。君が昔、『ゴスペル』の人間だったとしても関係ないよ。少なくとも僕はそう思っている」

思い遣りがあって、

「だってミント。君が本当に『ゴスペル』の人間だとしたら、対峙している僕のことを排除するだろうし、泣く必要なんてないのだから」

恵み深くて、

「君は泣いている。悩んで、悩んで、悩み続けて……。僕たちと『ゴスペル』の間で、君は泣いている」

温厚で、

「だけど、もう悩まなくてもいいんだよ。だって――」

温良で、

「――ミントには、僕たちがついてるんだから」

親切だ。

ガランと、右手から大剣が滑り落ちた。

肩が小刻みに揺れている。

息がひくついて、するのが辛い。

ミントは両手で、顔を覆った。

涙を止めるために。

とめどなく溢れてくる水を止めるために。

やがて身体が前のめりに崩れようとしたとき、何かが当たった。

暖かくて、どこか安心させるものに。

両の肩に、そっと何かが乗せられる。

ミントはそれを払おうとしなかった。心にあったわだかま蟠りが、浄化されていくように思えたから。

「……翼……」

自分の両肩に優しい手を乗せ、自分の涙で服を濡らさせてもらっている少年に、ミントは言った。

「ありがとう……」

感謝の言葉を。

暗く、モニターの光だけが闇を照らすここは管制室だ。
そこには二つの人影があった。――タブリスとヴァルフアムルクだ。

二人は、先ほどからモニターを見ていた。
モニターには、この兵器の内部の様子だけでなく、外の景色も映し出されており、クイーンズの様子が今どうなっているのか、しかと確認することができる。

二人はそれを使って、翼たちの戦いを観戦していた。
ふう、とタブリスは一息ついた。
ちょうど今さっき、すべての戦いが終わったところなのだ。

「まさかゲイルとアルフォートがやられちゃうとはねえ。これはちよつと誤算かなあ」

と言いながら、顎を思案するように撫でるタブリス。
ヴァルフアムルクはそんな彼には気にせず、気持ちいが先の戦いへと先行していた。

――次はわたしの番か。
先ほどまでの戦いを観戦して、ヴァルフアムルクは翼たちが、だいぶ成長していることを悟っていた。

初めて彼らと対峙したのは四月二日。そして今日は四月十四日。
約二週間程だが、それは彼らを急成長させるには十分すぎるほどの時間だったようだ。

たった二週間、されど二週間。

約二週間前までは、赤子の手を捻るように圧勝できていただろうが、どうも今回はそうはいかないようだ。

——さすが、と思うべきか。

気づけば、口元が緩んでいることに、ヴァルフアムルクは気づいた。

どうやら己の身体もそう感じているらしい。

久しぶりに骨のある相手と戦えそうな期待に、ヴァルフアムルクは静かな鼓舞を覚えていた。

「さて、残る『使者』^{アングレリオン}はキミだけだ。頼むよ」

モニターから振り向き、タブリスはヴァルフアムルクに指示を出した。

戦いに行け、と。

「御意」

それだけ答え、ヴァルフアムルクは足元に幾何学模様の描かれた円陣を展開し、その場から姿を消した。

第10章 立ちはだかる剣豪

翼とミントは、長い廊下を駆け抜け、ひとつの扉の前で突っ立っていた。

扉は先ほどのものと同様に大きく、異様な威圧感を与えてくる。しかし、翼たちがそこで踏みとどまっているのは、それが理由ではない。

扉の奥。

そこから、翼とミントは強大な力を感じ取っていた。

今までも幾度か感じたことのある、背筋が氷結してしまうような畏怖と威圧。

——…間違はなく、いる……。

先ほどの部屋からここまで全速力で走っていたので、翼もミントも息を切らしていた。なので、扉前で整えることにする。

できるだけ全快の状態で臨まなければならない。そうでなければ、まともな勝負になるかどうかとも怪しいのだから。

呼吸を整え、

「ミント、準備はいい？」

翼は、隣にいるミントに尋ねた。

ミントはコクリと首を縦に振り、

「私、もう迷わないよ。翼たちと一緒に、この騒動を解決してみせる」

決意に満ち足りた顔のミント。先ほどまでの彼女の様子が、遠い過去のものになったかのように、翼は感じた。

けど、これでいいと翼は思う。仲間に辛い表情をしてほしくな

いから。

ミントの様相に安心した翼は、表情を緊張に引き締め、大扉を軽く前に押す。

すると、前回の扉と同じように、両側にゆっくりと開き始めた。人が通れるほどに開いたのを確認すると、動き続ける大扉をよそに中へと突入した。

そこは相変わらずの大広間。

先ほどの場所と大差変わらない無味な空間が、視界に広がった。そしてその視界の一点に、彼はいた。

シルバークレーの髪、精悍さを物語っている端麗な容姿。

右目は前髪で隠れているものの、力強い意志を示すには、鷹のように鋭い目つきをした蒼い左目だけでも十分だった。

腰にはひと振りの剣が収められている鞘がさがっている。

全身からは蕭然と闘志を立ち昇らせているよう彼は、紛れもなく、

「ヴァルフアムルク……」

その人だった。

翼は目つきを研ぎ澄まされた白刃のように鋭くさせ、睨みを利かせる。

睥睨されても、ヴァルフアムルクは眉ひとつ動かさない。

無表情。しかし、重い威迫と何らかの決意を秘めたような表情をし、ヴァルフアムルクは口を開く。

「来たか」

ただそれだけ、ヴァルフアムルクは低く、抑揚のない声で告げた。次にヴァルフアムルクは、翼からミントへと視線を移す。

「……なるほど。お前はその道を選ぶのか。我らとともに歩むので

はなく」

冷徹な口調のヴァルフアムルク。

はい、とミントは肯定した。

「私は、貴方たちとは行けません。私は確かに、『ゴスペル』で造られた人間だけど、そんな私でも、受け入れてくれた人がいるから――」

言い、ミントは背負っていた大剣を構え、言葉の続きを言い放った。

「――私は、その人たちの力になりたい！」

「……そうか」

短く、ヴァルフアムルクは承諾の返事をした。どことなく口惜しそうな口調のような気がしたが、気のせいだろうと翼は思うことにする。

ヴァルフアムルクは、翼へと視線を戻し、

「お前も、仲間になる気はないのだろうか？」

「わかってて訊くのか？」

返事の代わりに、翼は鞘から刀身を抜き、構えた。

対立するという意味を込め、翼は剣先をヴァルフアムルクに向ける。

それだけで、ヴァルフアムルクには十分だった。

一度瞼を閉じ、やがて剣を抜きながら目を開ける。

そこには、冷たく静かに燃える闘志が宿っていた。

ピリピリと、首筋が焦げるような錯覚を覚え、翼は一層気を引き

締める。

ヴァルフアムルクはゆるりと剣を両手で構え、

「……行くぞ」

静かな咆哮とともに、啖呵を切った。

疾走してくる。

——速いッ！

翼も素早さには自信があるのだが、ヴァルフアムルクのそれは、少年を凌駕していた。

三十メートルほどあった距離をあっという間に詰め、ヴァルフアムルクは翼に斬りかかった。

とっさに翼は、背後に跳び退くと、もといた場所に銀の線が走った。

紙一重。

髪の毛が数本もついていけながらも、翼は反撃に出る。

刀身を下に構え、振り下ろした体勢のヴァルフアムルクを逆袈裟に斬りつける——、

「甘い」

頃には、すでに体勢を立て直しており、金属音とともに制止させられた。

すかさず退こうとするが、ヴァルフアムルクに罅迫り合いにもつていかれ、退こうにも退けなくなる。

下手に脱すればバランスが崩れ、そこを狙われてしまう。

どうする？ と考えている間にも、ヴァルフアムルクが押してきて、じりじりと踏ん張りが利かずに無理矢理後方に退かせられて行く。

壁際に追い詰められたら終わりだ、と翼も負けじと押し返そうと

する。……が、ヴァルフアムルクは顔色ひとつ変えずに押して、後ろに行かせようとする……が、

「——ッ」

ヴァルフアムルクが突然、剣を大きく振るい、翼を弾き飛ばし、その反動で後方へと退いた。

翼は体勢を大きく崩されながらも、かろうじて尻餅をつかずに済んだ。

何だ、と思うのもつかの間、ヴァルフアムルクがいた場所に円陣が出現しており、そこ目掛けて、何条にも稲妻が迸った。

詠唱魔術。

誰がしたのは確かめるまでもなかった。

——ありがとう、ミント。

心の中で謝礼し、翼は下段に得物を下げ、ヴァルフアムルク向って疾駆した。

対するヴァルフアムルクも、魔術が止んだのを確認すると、突撃する。

両者がぶつかる……寸前、ヴァルフアムルクは急に軌道を変えた。

翼の隣を通り過ぎようとするヴァルフアムルクを、翼は一閃する。だが、ヴァルフアムルクに軽く受け流され、不発に終わった。

翼はすぐに前から後ろへ振り返る。……と、ヴァルフアムルクがミントに斬りかかるうとして、ところが視界に入った。

魔術の詠唱中だったミントもそれに気づき、詠唱を中断して大剣で迎えうっていた。

その間に、翼はヴァルフアムルクに急速接近する。

走る速さは疾風。

猛る闘志は烈火の如く。

それをもって、がら空きの敵の背を斬りにかかる——、

「え!？」

刹那、ヴァルフアムルクの姿が消えた。

彼が消えたことで翼の視界に入り、攻撃の対象となるのは、

「ミントッ!」

避けて、あるいは止めて、という意味を込めて、彼女の名を叫んだ。

ミントはその選択肢の内後者を選び、味方と一度刃を交差させた。よかった、とホッとする翼。だが、

「翼ッ! 後ろッ!」

ミントが叫ぶ。

叫ぶより早く、翼は感じ取っていた。

自らの背後から漂う、鋭利な殺意を。

振り向きざまに一閃を放つと、キンッと何かに当たった音が響き、数歩退けられた。

振り向き、翼の視線が捉えるのは、先ほどまでミントと剣を交えていたヴァルフアムルクの姿だった。

——一瞬で背後に回られてた!?

それも、ついさっきまで知られないほどに気配を消して。

魔術の類ではないことは、魔力の気配でわかる。

純粹に、ヴァルフアムルクの動きが肉眼では捉えられないほどに速いのだ。もはや縮地といっても過言ではないほどに。

やがて、力の押し合いもほどほどに、ヴァルフアムルクは後ろに下がった。

彼^{ひが}我の距離が十メートル程離れたところで、ヴァルフアムルクは下がるのを止め、口を開く。

「どうした？　ここまで来たんだ。この程度の実力だとは言わせんぞ」

翼は不快に顔を顰めるが、反論できない。

——……強い……ッ。

翼は数度剣を交えて、再度認識していた。速さも力も、そして実力も、すべて向こうのほうが勝っていた。はるかに、を付けることができるほどに。

さらに翼は、仮にも戦いをこれまでに潜り抜けてきた戦士なのでわかるのだが、ヴァルフアムルクはまだ本気を出していない。

もちろん、それなりに実力を出しているものの、全開ではない。

まるで、こちらを試しているかのような力の使いようだ。

怨敵を睨みつけていると、

「……一度」

ヴァルフアムルクが言った。

「一度だけでも、わたしに傷を付けることができれば、退いてやる」

「……あまり舐めないでほしいな」

「だがわたしに、傷ひとつ付けられていないだろう」

「……それはお前も——」

身体を低くさせ、脚を縮ませ、

「同じだ！」

脚のバネを開放した。

咆哮と同時に、翼は駆け出し、ヴァルフアムルクに牙をむこうとする………が、

「甘いと、言っただけだ」

刀身と刀身がぶつかり合い、火花が散る。

見れば、ヴァルフアムルクは右手だけで自身の得物を扱っていた。そして、残る左手で拳を作り、それを翼の腹に叩き込んだ。

「——ッ！」

トラックが人を撥ねたような衝突音と一緒に、翼は宙を舞った後、地面を滑った。

「翼ッ！——よくも……ッ！」

怒声とともに、ミントが大剣で虚空を振るうと、衝撃波が発生した。

それを盾にし、ミントもヴァルフアムルクに突進した。
だが、

「無駄だ」

瞬間、前髪で隠れているはずの右目が、蒼い光を放った。
すると、ミントの衝撃波が唐突に雲散霧消し、

「なッ！？」

ミントは驚愕の声を上げた。

驚き、身が一時停止した彼女を、ヴァルフアムルクは剣を振るい、衝撃波で弾き飛ばした。

「……っ……」

ミントが地面を転がるとき、翼は数度咳を吐き、よろよろと立ち上がった。

口からは一筋の紅い線。

腹の中がぐちゃぐちゃになったえも言われない感覚を味わいながらも、翼は先ほど起きた事を把握しようと、相手に問いかけを放つ。

「……何をした……」

しかし翼は、返答など期待はしていなかった。

するわけないと、思っていたからだ。

するとヴァルフアムルクは、前髪を手で上げ、右目を翼に見せた。

瞬間、翼は驚愕する。

右目がそこにある。……が、その瞳に幾何学な文字らしきものが刻まれていたのだ。

「それは……」

「ああ。察しの通り、魔眼だ」

魔眼。

言ってしまうえばそれは、所持している者に異能の力を与える代物である。

先天的なものと後天的なものに分かれ、先天的なものは親から受け継がれたり、突然変異でできるのに対し、後天的なものは、日常生活に何らかの過度な衝撃を受けたり、あるいは今まで素質はあ

つたが開花せずに長年が過ぎ、ある日突然覚醒するといったものがある。

魔眼の能力はまちまちで、基本的に魔眼で相手を視る^みことで能力が発動する者が多いが、そうでないものも少なからず存在する。

「わたしの魔眼の能力は、衝撃波系および詠唱魔術の無効化だ。つまり、魔力を用いた飛び道具の類は一切通用しないし、詠唱魔術もほとんど無意味だと考えてもらえばいいだろう」

ほとんど、ということとは、通用するときもあるということなのだろうか。

そういえば、稲妻が落ちる詠唱魔術は避けていたな、と翼は思い出す。

もしかして、ある程度強力な詠唱魔術は無効化できないのではないのだろうか。

だが、そもそもそれほど強力な詠唱魔術は詠唱に時間がかかってしまうし、何より翼はそんな上位の詠唱魔術を扱えなかった。

衝撃波系の攻撃も、詠唱魔術も駄目となると、

——要は剣術で対処しないといけないわけか……。

思うものの、それは敵にとって一番有利な戦い方であるため、圧倒的に不利だった。

——でも、やるしかない。

それしか方法がない以上、虎穴に入る覚悟で挑むことにする。

ヴァルフアムルクは翼を睥睨していた。いつでもかかってくるがいい、とばかりの雰囲気周囲に漂わせて。

翼は隣にいるミントに視線を送る。

するとミントはすでに翼に視線を向けており、コクリと無言で頷いた。

言葉にしなくとも、これからやろうとしていることを、ミントは理解したのだと、翼は解釈した。

何の根拠もない。だが、

——僕たちには『絆』があるから……。

仲間としての絆が。

それがあるから、仲間を信じられる。

そう翼は思い、そして……、

——行くぞッ！

直後、疾走した。

手加減はなし。今持てる限りの実力を余すことなく発揮させて、目の前の敵をうち砕かんとする。

ヴァルフアムルクがタイミングを見計らい、翼が間合いに入った瞬間、下段から斬り上げた。

太刀筋が当たる寸前、翼はヴァルフアムルクの視界から姿を消す。次にヴァルフアムルクの正面から迫るのは、翼の後ろからついてきたミント。

殺傷範囲内に入れるなり、ミントは大剣を横一文字に振るった。ヴァルフアムルクはそれを真つ向から止めた。

金物がぶつかり合ったというより、岩塊同士が正面から直撃したような音が大気を揺らし、両者は飛ばされないようその場に踏みとどまったために、足元の地面が沈下した。

正面からまともに受ければ何らかの被害を被るミントの大剣での一撃を、ヴァルフアムルクは受け切った。

「はあ——ッ！」

ヴァルフアムルクの咆哮。

同時、万力でミントを強引にぶっ飛ばした。そのまま余力を利用し、ヴァルフアムルクは後方に剣を一閃した。

ギンツ、と衝突音が鳴り響いた。

ヴァルフアムルクが捉えたもの……それは翼だった。

翼は剣撃を受ける直前に、ヴァルフアムルクの背後に回り込み、

一撃を叩きこもうとしていたのだ。
しかし、それは不発に終わった。

彼は後ろを見ずとも気づいていたのだ。翼が後ろにいることにくつ、と翼はワンステップ後方に下がり、罅迫り合いを止め、再び接近して幾重にも斬撃を繰り返し出した。

だが、ヴァルフアムルクに届かない。

あらゆる斬撃はすべて受け止められ、流され、弾き飛ばされる。

そのとき、ミントがヴァルフアムルクを背後から斬りつけようと猛然と接近している姿が視界に入った。

ヴァルフアムルクのことだから、背後から敵が接近していることは理解しているはずだ。

そう思い、翼は罅迫り合いで時間稼ぎをしようとする。
だが、

「……ふん」

鼻を鳴らし、ヴァルフアムルクは力づくで翼を弾き、そして、

「はああああ……！」

剣を床に突き刺す。

刹那、翼とミントは目に見えない力で吹っ飛ばされ、両者とも地面を滑り転がる。

まるで大気圧の塊が正面衝突してきたようだ。

「く……っ。遠、当て………」

ミントが苦し気に言った。無理もない。彼女は疾風の如きスピードでヴァルフアムルクに接近していたのだから、先ほどの遠当てとの相対速度がすごいことになっていたことだろう。その分、翼の受

けたものに比べて威力が段違いになっていたのだ。

翼のほうは、弾き飛ばされていたということもあって、損傷はミントに比べればあまりない。だが、その分ヴァルフアムルクから大きく遠ざけられてしまっていた。

起き上がろうとしている翼に、ヴァルフアムルクは縮地を用いて一瞬で距離を詰め、斬りにかかる。

「——ッ！」

翼は脊髄反射的に、片膝をつけた状態で剣を前に出し、敵の攻撃を受け止めた。

「ほう……」

感嘆の声を出すヴァルフアムルク。よく受け止められたな、とばかりに。

「お前……甘い甘いって僕たちに言ってるけど……お前だって甘いよ。僕たちのこと……あまりにも見くびり過ぎてるんじゃないか？」

精一杯の強がりをもってみせる翼。

「言うのではないか。だが、そう言う台詞は、今の状況を打破してから言ってもらいたいものだな」

といい、ヴァルフアムルクは交差させている剣に力を込めてきた。徐々に押し戻されていく翼。

後ろが床のため、退こうにも退けない状況。しかし剣は間違いなく押し戻されており、このままでは自分の得物で自分の首を掻き切るようになってしまう。

何とか押し戻そうとするが、下から上へ力を働かそうするのは大変なことで、今の状況をキープさせておく程度が限界だった。ましてや自分から押し返そうなんて無理である。

「翼を放せッ！」

怒号とともに、ミントが再び背後から襲いかかる。
だが、

「甘いと言っている」

翼を解放し、ヴァルフアムルクは一閃をミントに叩き込んだ。大剣が直撃し、次の瞬間、ミントの得物が大破した。巨大な刀身は大小様々に欠片となり、ミントに驚愕を残した。

「な——！？」

震駭^{しんがい}するミントに、ヴァルフアムルクはとどめに逆袈裟に斬りつけた。

右脇から左肩にかけて、深々と傷が付けられ、血を迸らせながらミントは宙を舞う。

「ミントッ！」

ミントが力なく床に倒れると同時に、翼は脚を動かしていた。怒りが、翼を突き動かす。

次の瞬間には、ヴァルフアムルクと得物を交り合わせていた。

「よくもミントを……！！」

仲間を傷つけられたという事実から、翼は猛り、無数に斬撃を放つ。

目にも止まらぬ太刀筋を、ヴァルフアムルクは的確に捌いていく。そして、一瞬でも隙を見つけると、翼の身体に裂傷を走らせた。

「っ……」

苦悶に表情を歪ませながらも、翼は攻撃を止めない。

翼は気づいていなかった。感情に動きを任せていることで、動きが大雑把になっっていることに。

そのこともあって、ヴァルフアムルクは攻撃を捌きながらも翼に地道な一撃を見舞っているのだ。

しかしその分、ひとつひとつの振りが大きくなり、必然的に威力が増していた。

傷つき、

傷つき、

傷つきながらも、

翼は攻撃を止めることはしない。

それどころか、むしろ激化させていた。

—— 負けない。

斬撃と突き、

—— 負けないッ。

線と点を扱いながら、

—— 負けないッ！

翼はヴァルフアムルクを追い詰めていき、

「負けられないんだああああ！！」

闘志を宿した叫びとともに、翼は斬り下ろし、ヴァルフアムルクがそれを受け止める。……が、

「……む」

ヴァルフアムルクが異変に気づく。そして翼も気づいた。怨敵の刀身に、ヒビが生じていることに。

だがそれは、翼の得物も同様だった。もともと二人とも同じ型、種類の剣を扱っているため、強度が同じなのだ。魔力でそれなりに強度を上げているが、それも両者ともに同じだけ上げているようだ。そのまま翼が満身で力を込めていくと、それに応じるように亀裂が大きくなっていく。

自分の剣が折れようとしても、翼は込める力を緩める真似はしなかった。

そして、

「いっけえええええ——！！」

次の瞬間、両者の刀身が砕け散り、紅の飛沫が飛散した。ヴァルフアムルクは後方に吹っ飛ぶ……否、跳び退いた。

彼の身体には、右肩から左脇まで裂傷が刻まれており、そこから血が流れ出ていた。

だが、出血の量が少ないことから、薄皮一枚裂いた程度のような。どうやら当たる寸前に飛び退いたために、まともに受けるのを免れたようだ。

ヴァルフアムルクは傷を負ったときには眉を微々に歪ませていたが、今は再び超然とした様に戻っていた。

ヴァルフアムルクは自分につけられた傷を見、

「……ほう」

ごくわずかに、口元を緩ませた。

それは翼への称讃が宿っていた。

「見事だ、真道翼。このわたしに一撃を見舞うとはな。……だが」

と言って、ヴァルフアムルクは翼から少年の持っている剣へと視線を移動させた。

翼はそれに釣られない。自分の剣がどうなっているのか、理解しているからだ。

ヴァルフアムルクの剣は粉々に砕け散った。しかし、対する翼の剣も、刀身の中心から真つ二つに両断されていた。

「後先を、もう少し考えるべきだな」

余計な御世話だ、と翼は思った。

後先考えて今を乗り越えられなかったら、取らぬ狸の皮算用になつてしまうのだから、多少無理してでも今を何とかするべきだ、と考えた上での結果だ。

もちろん、探せば剣をお粗末にしくともいい方法があるのかもしれない。だが、そんなアイデアは生憎戦闘中の翼には思い浮かばなかったし、今でもそうだった。一挙手一投足が命のやり取りである死闘の中、手段などはつきり言って選んでられないのだ。

「これをやろう」

と言って、ヴァルフアムルクは召喚法で青い液体の入った小さなビンを取り出し、翼に投げた。

突然だったので、翼は初動に遅れたが、何とかキャッチすることができた。

「これは……」

エリクシール
「万能薬だ」

聞き、翼は驚いた。

あらゆる病気や怪我を瞬く間に治すことができる霊薬。

だが、確かそれはただの言い伝えとされており、実物は存在しないと言っ話だ。

「エリクシールって……そんな物が実際にあるわけ……」

「信じる信じないはお前の自由だ。だが、ミント・フェルトラントを助けたいと思うのなら、使うべきだろうがな」

ハッと、翼はミントへと視線を移す。

ぐったりと地に倒れ、ピクリとも動いていないものの、苦しそうに胸が上下していることから、まだ息はあるようだ。

「わたしに傷を与えた褒美として、それを受け取るがいい」

そう言い、ヴァルフアムルクは自身の傷にそつと手を当てる。すると、蒼白い光が手の平から放出され、見る見るうちに傷が塞がれた。

翼がそれを見て驚愕する中、ヴァルフアムルクは足元に魔法陣を出現させる。

「今回はお前の勝ちだ。だが、わたしをもっと楽しませるには、まだ足りんと思え」

そんな言葉を残し、ヴァルフアムルクは空間転移を用いて、その場から消え去った。

待て、と制止をかける暇すらなかったが、今はそんなことよりも、

「ミントッ！」

倒れている仲間の様子が心配だったため、翼は敵がいなくなったことを確認すると、ミントに駆け寄った。

遠目から見てもわかっていたことだが、傷は深い。左胸を裂かれて呼吸をしているのは、かろうじて心臓を傷つけられなかったということだろう。九死に一生をミントは得たわけだ。

しかし、このまま放っておけば危険であることに変わりなく、翼はヴァルフアムルクより渡された青い液体の入った小ビンを見つめる。

エリクシールということだが、あくまでそれは自称だ。実際には存在しない、伝説の霊薬なのだから。

使えばどうなるかわからなかった。そもそも、怪我をちゃんと治すのかも疑問だ。

ヴァルフアムルクが傷つけられた腹いせに、わけのわからない液体を置き土産にしたとしか、翼には考えられなかったが、その反面、本当に効果があるのかもしれないとも思っていた。

ヴァルフアムルクは確かに敵だが、彼は嘘を言うことはないような気がするためだ。

姑息な、卑怯な真似は使わない相手だと思っている。毒薬を使って殺すような真似はしないやつだろうと。

——……賭けてみよう。

このままにしておくともミントは死んでしまうのだ。ならば、可能性にかけてみるべきだ。

思い、翼は小ビンに詰まっていたコルクを引っこ抜き、液体をミントの患部にかける。

「——う……っ……」

短く悲鳴を上げるミント。

まさか毒薬だったんじゃない……、と翼は全部使い切ってから後悔の念に苛まれる。

その直後、先ほどの液体を滲み込ませたミントの深傷が光り出した。

暖かい、穏やかな淡い白光。

光に包まれ、ミントの傷が徐々に塞がっていきこうとしていた。

翼はその光景に呆然とし、次に空となった小ビンを見た。

——…まさか、本当に？

本物の、エリクシールなのだろうか？

半信半疑の翼だが、致命傷であろう傷が、目の前で徐々に、だが確実に塞がっていきこうとしている光景が、真実を露わにしていた。

——だったら、どうやってこんな物を作ることができたんだ？

無論、本物だと仮定してだ。

伝説上の薬でしかないエリクシールを、どうやって作ることができたのだろうか。

言い伝えでは、賢者の石を用いてつくることが可能だというのが、そもそも賢者の石も存在しない幻の石だ。あらゆる奇跡を実現させる伝説の石。

と、ここで、翼はあることに気づく。

——あらゆる奇跡を起こす？ それってまるで……。

ソーサリー・クリスタルに似ている。

考えてみれば、ソーサリー・クリスタル自体、いったい何であるのか不明な上、持ち主に異能の力を与える水晶だ。

そういう点で、賢者の石とソーサリー・クリスタルはすごく似ている。

だけど、本当にソーサリー・クリスタルが賢者の石で、エリクシールが作れるのか、と問われると答えられない。何せ、試したことがないのだから。

試そうにも、賢者の石を用いることでエリクシールが作れるとわかっていただけ、その工程ははっきりいって知らないのだ。

「……う……」

ふと、うめき声が聞こえ、翼は思考を巡らせるのを止めた。
気づけば、深傷が完全に消えていた。

痕もない。初めからそこには傷などなかったかのように、きれい
さっぱり消えていた。

「……ん……」

もう一度、うめき声を出し、ミントは瞼を開け、意識を覚醒させ
た。

「ミント！」

「……つば、さ……」

ぼんやりとしているようで、目が虚ろだ。

だが、すぐにはっと思いついたような表情になると、上半身を起
こし、周囲を見渡し始めた。

だが、周りに自分たちしかいないことを知ると、

「翼。ヴァルフアムルクは？」

「逃げたよ」

「逃げたって……どうして……」

と信じられないように目を見開いていたミントだが、翼の後ろを
見て、あっ、と短く声を出した。

翼の後ろには、砕け散った一振りの剣が横たわっている。
それを見て事情を察したミント。

「すごい……。翼、ヴァルフアムルクを退けたんだ」

感嘆の声を出し、ミントが翼に讃辞を呈した。
だけど翼は、そんな彼女の称揚を素直に受け取れなかった。

「すごくなんでないよ。正直、僕はやつに生かされたんだと思う」

理由はわからない。仲間になる誘いも断っているので、こう言うのもあれだが、生かしておく理由がないように思える。もしヴァルフアムルクの立場なら、放っておけば邪魔者になる可能性が極めて高い相手は、真っ先に叩こうと考えるからだ。

あるいは、

——僕なんて、あいつの障害にもならないってことなのか。
そう思うと、今はいない敵に憤りを感じずにはいられなかった。

「……翼？」

呼ばれ、翼はいつの間にか拳を握り締めていたことに気がついた。

「何でもないよ。……少なくとも、今は」

ミントは、ふぐん、と訝し気な目つきになる。こんなミントを見たのは初めてな気がした。

「それじゃあ、この戦いが終わったら、『今は何でもないこと』、
教えてね」

「え？ いや……それは……」

しまった。余計な一言を漏らしちゃったな、と後悔する。
そうしている間に、ミントが小指を出してきた。

「約束」

指切りか。

ずいぶんと懐かしいと感じた。

「……わかったよ」

観念したように言い、翼も小指を出し、ミントの小指と引っかけ、約束の印を交わした。

「ヴァルフアムルクも退いちゃったか」

翼たちとヴァルフアムルクの戦いを、タブリスはモニターで見ている。いた。

「やれやれ。残るのはボクだけになっちゃったねえ」

遣る瀬無いなあ、とばかりの口振り。

それに反して、タブリスの口は快に緩んでいた。

まさかここまでやるなんて、と憎く思う。

ようやくここまでやってきてくれる、と嬉しく思う。

前者のほうは、計画が崩されそうになっていることを不快に思っている。で。

後者のほうは、純粹に戦場に生きる戦士として。

「……フフ、愉しみだよ」
「ボクもですよ、タブリス」

唐突に聞こえた自分とは別のこえ。だが、タブリスは驚くことはなかった。

振り向くことなく、声色だけで判断し、その者を口にする。

「監視官 か。いつからいたんだい？」
「つい先ほどですよ。ヘカトンケイルが…… もとい、計画がどうなっているのか、気になりましたね」

気になったのではなく、監視を頼まれたのだろう、とタブリスは思う。監視官 と、組織内で通じている名前通りに。
ヘカトンケイルとは、この兵器の名前である。

「……キミは、知っているんじゃないのかい？ この計画の末路を」
タブリスは監視官に訊く。

「さあ、どうでしょうねえ。 まあ、知らないこともないですが」
やっぱりね、とタブリスは予測通りだとばかりに呟いた。

「なら、ボクがどうなるのかも知ってるわけだ」
「そうですよ。言って差し上げましょうか？」
「いや。いいさ、別に。未来は予測できないものがやって来るから未来なのだし。知っちゃったら未来じゃないし、何より面白くない」

タブリスは足元に魔法陣を展開させる。空間転移を実行するために。

そして、翼たちが映っているのとは別のモニターへと視線を移す。そこには棒状のゲージと、パーセンテージが表示されており、八十パーセントを超えようとしていた。

時刻は、五時半を回っていた。

クイーンズにやってきたのは零時なので、あれから五時間以上経っていることになる。

エネルギーチャージには八時間も時間が必要なのだが、トールハンマーに比べれば短いほうだ。

あれは十二時間、半日もかけないと一発分には満たないのだから。もう少しだ。

もう少しで計画が完了する。

後は……邪魔者を消せばいい。

「タブリス」

視界が白の光で満たされようとする中、
監視官 がタブリスを
呼び、

「気をつけてくださいね」

視界が光で満たされていたせいで、タブリスには彼の表情は見えなかった。

永遠とも思える回廊を疾走するのは、翼とミントだ。

白の景色が流れ行き、翼たちは前進する。

そして、次に会うだろう相手は誰か、考えていたが、おおその見当はつけていた。

セミロングの藍色の髪。

病的なまでに白い肌。

そして、その肌と同じように服装は白で統一されている少年。

「翼、見えてきたよ！」

ミントが先にある障害物を見て、叫んだ。

障害物とはこの場合、大扉を指していた。

金属のような強固さを持ち得ていない、縁取りをするように装飾がなされた木製の大扉。しかし、大扉だけあって、近づけば近づくほど、その大きさに圧倒されるものを感じてしまう。

その扉目掛けて、翼たちは突撃した。

扉に突進し、大扉は無理矢理両側に解放された。

見慣れた大広間の中に身を投じた翼たちは、すぐに彼の者を視界におさめた。

「よく来たね。真道翼君、それにミント・フェルトラント君」

貼り付けただけのような笑顔が、翼たちを迎えた。

どうして自分の名前を知っているのだろうか、とやや訝しく思う

翼だったが、おそらく『使者』アングェリオンのやつらに聞いたのだろう、と予測

する。ミントの名を知っているのは、一時とはいえ、仲間になっていたからだろう。

「タブリス」

翼は、彼の少年の名を口にする。

「やっぱり、最後はお前だったか」

「へえ、意外とは思われていないんだね」

残念だなあ、とタブリスは肩を落とす。どうにもワザとらしくしているようではない。まるで顔だけでなく、身体全体を見えない仮面で覆い隠しているようだ。

「キミがここに来た理由はわかってるよ。ヘカトンケイルを無力化するためだろう？」

「ヘカトンケイル……それが兵器こゝろの名前か」

そうさ、とタブリスは肯定する。

「トールハンマーを改良、強化した兵器だね。もともとあの兵器はチャージに一二時間もかかるという欠陥があったからね、トールハンマーを完成させた後、すぐにヘカトンケイルの開発に取り掛かっていたんだ」

「……トールハンマーを改良、強化？」

どういうことだ、と翼は思う。

トールハンマーは確か、クイーンズの兵器のはずだ。その名前がどうして、タブリスの口から出てくる？

理解できない翼は、助け舟を求め、ミントへと向くが、彼女も自分と同じらしい。キョトンとし、何が何だかわからない様子で敵を見つめている。

「……ああ、なるほど。キミたちは知らないのか」

翼とミントの様子を見て、タブリスはそのようなことを言った。

「まあ、何も知らないのも可哀想だから、教えてあげるよ。——トールハンマーはね、もともと『ゴスペル』の所有物なのさ」

なッ、と翼とミントは喫驚の声を上げた。

二人の様子を見て、愉快そうに、フフ……、とタブリスは笑みを漏らした。

「驚くのも無理はないよ。トールハンマーがクイーンズに渡ったのはずつと昔の話なんだからね。たぶん、今の国王様はそのことを知らないんじゃないのかなあ？」

確かに、国王は一度もトールハンマーを起動させ、発射した姿を見たことがないと言っていたところから、その可能性は高そうだ。

「でも……だとしたら、どうしてそんなものがクイーンズに……」
「さあね。これ以上は言わないよ。必要なところは伝えたしね。だから——」

と逆接を入れ、

「——ボクたちの仲間になるのなら、教えてあげてもいいよ？」
「断る。いい加減にしつこいよ」

断固とした意志を持って、翼は拒否した。

「そうか……。残念だよ。せつかく、あいつも喜ぶだろうと思ってたのに」

あいつ？ いったいそれが誰を指しているのか気になったものの、今はそれよりも果たさねばならないことがある。

翼は鞘から得物を抜き、ミントもそれに釣られて大剣を両手で構えた。

二人の得物は、先ほどのヴァルフアムルク戦で壊されたので、刃が途中から無くなっているのだが、翼とミントが各々の武器に魔力を注入すると、まるでタケノコが生えるように刀身が伸び、原形を取り戻した。魔力を物質化、硬化させることでなせる業で、ある程度熟練を積んできている者ならとっさに扱うことができる。

己の武器を生成すると、翼は確認を行う。

「タブリス。一応訊かせてもらう。退く気はないか？」
「ないね」

タブリスは即断即決した。そして虚空から杖を取り出す。
先端に、蒼く丸い球体が埋め込まれた、古臭い使い込まれていそうな雰囲気を醸し出している杖を。

「キミたちがその気なら仕方ない。その邪魔をするというのなら……」

蒼い球体が光り出した。

膨大な魔力がそこに凝縮されているのを知り、翼たちは攻撃に備える。

そして、

「——容赦はしないよ！」

刹那、球体から幾重もの雷撃が迸った。

紫電の鞭が翼たちに喰らいつかんとする。

それが戦闘開始の合図だと理解した翼とミントは、互いに左右に飛び退くことで凶雷の直撃を免れた。

そのまま二人は、前方にいる敵へと猛進する。

彼我の距離、目測五十メートル。

魔力で肉体強化を施している翼たちにとって、時間にして三秒と必要しない距離だ。

二人はその速さを持って、タブリスを間合いに入れ、

「はあああああ！」

斬撃。

前後から同時に放たれるそれは、タブリスを確実に捉えようとしていた。

「……フ」

嗤い。タブリスのものだ。

相手を嘲って放つそれとともに、異変は起きた。

鋼鉄にぶつかったような音を立てて、翼たちの攻撃が空中で停止した。

「な——ッ！」

障壁。

それも、非常に強力なものだということがわかる。翼とミントの二人同時の攻撃を受けても、ヒビひとつ付けることを許さなかった。翼はさらに力を込め、障壁を破壊しようとするものの、痕ひとつ

付こうとしない。

《地上を裁く紫電よ。我に仇なすものを打ち砕け》

障壁を必死に破壊しようとしているところ、タブリスが詠唱を始めた。

まずい、と直感した翼は、ミントと一緒にタイミングでとっさにタブリスから離れた。

《——サンダーボルト——！》

直後、タブリスが詠唱魔術を発動させると、翼の足元に魔法陣が出現した。

半径十メートルほどの円陣。

すかさずその場から離れようとするが、魔術の効果が現れるほうが早く、そこに数多の稲妻が降り注いだ。

「ぐああああ——！！」

翼はその渦中で、絶叫する。

全身が中から焼き尽くされるような、表面を無数の針で刺されているような激痛。

「翼ッ！」

仲間が苦痛の叫びを聞き、ミントは瞬時にタブリスへ特攻していた。仇討ちとばかりに。

「はああああ——！！」

壮気の一声とともに繰り出されるミントの渾身の一撃。再び鋼を打ち打ったような空気の振動が鳴り響く。

「足りないよ。全くな」

不敵な笑みをミントにし、タブリスは手の平を向けた。束の間、ドンッ、とトラックで撥ねられたような衝突音がし、ミントが大きく吹っ飛んだ。

「ミン……ト……ッ！」

苦悶に歯を噛み締めながら、翼は仲間の名を口にした。

……が、それ以上は身体が動かず、その場で膝をついた状態を保つのが手一杯だった。

先ほどの雷が今もなお身体を駆け巡っており、まともに動くこと自体、困難となっていた。

「どうしたのなかあ？　ここまで来た割には、ずいぶんと弱い気がするんだけど。やっぱりヴァルフアムルクと戦ったのが響いているのかな？」

翼たちを最悪の状況へと導こうとしている要因として、それが挙げられる。

ヴァルフアムルク戦で消費した体力や精神力は、この場所にたどり着くまでの時間では回復できなかったのだ。

全力を出そうにも、そう容易に出せない。

「ボクとしては戦いが楽だから別に構わないんだけどね。……だけど、物足りないと感じているのも事実なんだ」

まるでもつと抗ってくれ、とばかりのタブリス。

挑発の言葉に、翼は辛酸を嘗めたような顔色になる。

全力が出せれば、もつと渉り合うことができるといつの……、
と思いのもの、それは負け犬のする思考だった。

こうであつたら自分は絶対に有利になつていた。あるいは勝つて
いた。——そんな仮定は、所詮仮定の中だけであつて、現実ではな
いのだ。

「もつとボクを愉ませてよ。メインイベントまでまだ時間がある
んだからさ。その暇な時間を、もう少しスパイスに富んだものにし
てよ」

メインイベント。

それが『大いなる災い』を指していることは言つまでもない。

「……くっ……」

やらせるか、と翼は思う。

無意味に、無秩序に、たくさんの人を殺すなんて……。

「やら……せるかああ——！」

己の身体に鞭打ち、翼は突き動く。

身体が悲鳴を上げる。

筋肉と骨が軋みを立てる。

しかし、心だけは悲鳴を上げること、軋みを立てることもな
かった。

今、翼を動かすのは屈指の心、鋼の気持ち。

目には見えぬ、だが、確実に在るものを魂の潤滑油とし、翼はタ
ブリスに剣撃を見舞う。

一撃だけでは済まない。

二撃、三撃……と、動ける限り力を放出する。

そんな翼の必死な様子に、障壁越しのタブリスはフフ、と一笑し、

「それでいいのさ。……だけど、ボクを傷つけるにはまだ足りないみたいだ」

杖につけられた水晶玉が発光する。

瞬刻、翼は鞭のように伸びてきた雷に弾き飛ばされた。

先ほどの雷と相俟^{あいま}って、翼は地面に伏したまま、ときおり微々に痙攣させるも、動けなり、魔力でできていた刀身も消え去ってしまった。

動けるまでに回復するには時間が必要だが、生憎とタブリスはそれを許さない。

タブリスは杖を高々と掲げ、再び球体を発光させる。翼に回復させる時間を与えないために。

だが、

「……ん？」

タブリスはとっさに攻撃の矛先を翼から変更した。——ミントだ。ミントは口元に血を滴らせながらも、猛然とタブリスに牙を向こうとしていた。

そこに放たれるタブリスの雷撃。

ミントはすかさず横軸に逸れた。大剣で払えば、わずかなりともダメージを負うからだ。

伏しながらも、翼は顔を上げ、ミントの猛功を眺めていた。

斬、突、打、薙、撥……ありとあらゆる攻撃をもって、ミントはタブリスの障壁を破壊しようとしていた。

ときにはタブリスの背後から、

ときにはタブリスの脇から、
ときにはタブリスの前方から攻撃を放つが、届くことはない。
徐々にミントの顔色にも、疲労が出始める。ヴァルフアムルクからのエリクシールを使ったのだが、どうやら体力までは回復させないらしい。あくまで傷や病を治癒するだけのものなのだろう。
そこをタブリスが、隙を狙って杖を振るい、ミントを弾き飛ばした。

さらに追い打ちとして雷を放つと、ミントは避けることも受け止めることもできずに直撃し、地を転がった。

魔力で造られていた刀身は、ミントが動かなくなると同時に、蜃気楼だったかのように消える。

「さて、もう終わりかな？ 二人とも動けないみたいだし」

なにを……、と翼は全身に力を込めるが、身体はそれに答えようとはしなかった。

体力が限界なのだ。

「それじゃあ、少々名残惜しいけど……さようなら」

死の宣告。

タブリスは水晶玉に魔力を再び凝縮し始める。次で確実に仕留める気なのか、チャージの時間が今までより長い。

くそつ、と翼は歯を食いしばる。

こんなところで負けるわけにもいかない、という気持ちがある。勝って、『ゴスペル』がやろうとしていることを阻止しなければならぬ、という気持ちもある。

だが、身体が動かないのではどうしようもなかった。

——万事……窮す、か……。

翼は無念を噛み締めながら、瞳を閉じた。

凶功で斃^きされる姿を見るのは、あまりにも堪えられないからだ。
頼りにされ、
信頼され、

その果てに、すべてを裏切る結果になってしまうことが、翼にとって実に堅忍し難いことだった。

視界が、闇に染まる。

これから未来永劫つき合わねばならないであろう、無限の漆黒…

…。
死を、覚悟した――。

「諦めるのはまだ早いぞッ！ 翼！ ミント！」

幻聴か、先輩の声がしたな、と翼は思った。

瞬時、大気圧の爆発が、鼓膜を響かせた。

ガスタンクが爆発したかと思われるような轟音に、翼はつい目を開けた。

視界に入るは、タブリスと対峙する二人の少女。

紅味がかった長髪をリボンひとつで束ねている巫女装束の少女と、漆黒のロングヘアーが自然と二つに分けられている少女だ。

「……緋睡、それに先輩も……」

どうしてこんなところにいるんだろう、と翼は目の前の事実を理解できないでいた。死ぬ覚悟を固めようとしていた最中だったので、その思いはなおさらだ。

「どうやら間にあったようですね」

間一髪、とばかりの口調の緋睡。

「……本当に、緋睡と先輩なの……？」

「何を寝ぼけた事を言っている。……ああ、今まさに寝ようとしていたのか。なら仕方がないな」

「仕方がなくありません。もう少し言葉を選んでもらいたいものですね」

「……巫女よ。鏡を見たことはあるか？」

「洗顔の際に常に見てますが……何か？」

「いや、別に」

と、天真はここで緋睡との会話を終わらせ、翼に振り向いた。

「あの……あの二人は？」

「安心しろ。ゲイルとアルフォートはおれたちが始末した。後は……」

言い、天真は視線を翼からタブリスへと向けた。

そう。残りは、タブリスを斃すか退かせるかすれば、自分たちの勝ちなのだ。

わかっている。

わかっているが、身体が動かない。重力で全身を地面に固定されているように、倒れている上から漬物石を全身まんべんなく乗せられているかと錯覚するほどに、疲労で身体が重たくなっているのだ。

——少しでも……。

少しでも、回復すれば戦えるのに……。

「翼」

ふと、敵から視線を逸らさないようにしながら、天真は倒れている少年の名を呼び、

「任せるぞ！」

瞬刻、天真はタブリスに向けて得物を振り被りながら、俊足した。

槍使いの少女は、自分たちの敵に突功し、手始めに振り被りからの一撃を見舞った。

タブリスに凶刃が直撃する——直前、ギンツと何かにぶつかつたような音が響いたかと思うと、ハルバードの斧刃が宙で停止していた。

——……なるほど。これに挺子こしぎ摺っていたのだな。確かに強固だと、天真は直感した。

先ほどの疾走の勢いとともに繰り出された一撃を受けても傷ひとつついていないのだから。ならば、と次に天真はとつさに斬撃から突きへと攻撃を転化させた。

雨のような天真の突撃。

それが見えない障壁に当たる毎に、金属音が幾重にも鳴り響く。それに続くように、別の方向から緋睡の矢が乱れ飛ぶ。

天真を射抜かないように、的確にタブリスのみを狙い撃っているのはすごいとしかいいようがない。

二人で放たれる攻撃は、さしずめ絨毯爆撃の如く。

だが、一向に進展は見られない。障壁には相変わらずかすり傷ひとつ付くことがなく、おまけに時折、天真たちに雷撃が見舞われる。雷が掠れ、身が焦げるような感覚を味わいながらも、天真と緋睡は決して攻撃を止めることはしない。

彼女たちには、タブリスに止めを刺そうとする気はなかった。自分たちはただ、盾になっているだけ。

仲間のひとりを連れ戻し、ここまで活路を開いた少年のために。

ただ、盾は盾なりに、敵に一矢を報いようと猛功する。

すべては少年に少しでも負担を掛けないために。

すべてはこの戦いに勝つために。

すべては生きてここから脱するために。

諦めない。

諦められない。

諦めることは許されない。

断固として。

確固として。

——負けられないッ！

強い想いは、その瞬間、障壁に傷を付けた。

二人が戦っている姿があり、それを翼は見ていた。

天真の任せるぞ、の言葉。それは、とどめの一発を任せるぞ、という意味が込められていることを、翼は理解していた。

だから、そうしようと思う。

折れた剣の柄を片手に強く握りしめ、翼は身体を起こそうと奮起する。

全身が我^が鳴り、節々がギシギシと軋む実感があつた。

堪え難い、気を抜けば喉奥から呻き声と一緒に何かが出てきそうなほどの気持ち悪さが襲うが、構わない。

崩れるわけにはいかない。

落ちるわけにはいかない。

立たなければならぬのだ。

すべてを終わらせるために。

地に着いた両膝に力を込め、ゆっくりと身体を起こそうとする。

鼓膜を震わせるのは、幾重もの金属音、爆音、稲妻音。

はつきりいつて、聞いていてあまり愉快な気持ちにはなれない音だ。

そんな不快音とも、もうじき別れることができる。

人を阿鼻叫喚に支配する、こんな戦いとも。

翼は立ち上がった。

脚が心許無くふらついているが、今の翼の状態を考えると上出来だった。

《——荒れ……狂え……》

そして、詠^{うた}い始める。

《——無情なる、……》

敵を討つための戦歌を。

《——白、銀……よ……》

だが、もともと砂上の楼閣も同然の翼は、

《——……》

ガクンと足が崩れようとする。

視界が湾曲する。脳が回転しているかのようだ。

——このままじゃ……。

魔術を発動できない。

倒れて気を失ってしまったらすべてが終わってしまう。

嫌な汗が、流れ出てくる。

身体が鉛になったかのように重く感じ、支えられなくなっていつとしてい

——……後……もう少し、なのに……。

早く詠唱の続きを言わなければキャンセルされてしまう。

そうなればまた最初からやり直しになり、そうなった場合、絶望的だった。

何せ、今の翼には、二度試せるほどに体力、精神力は残っていないのだから。

——この一発で決めないと……。

強い想いとは裏腹に、翼の身体からは力が抜けていこうとしていた。

視界が徐々に端から黒に染められていき、見える景色は目まぐるしい。

しかし……、

——……決め、……ない、と……。

身体が、崩れ落ち——、
やがて視界が、黒に満たされた——、

寸前、身体がガシッと、後ろから誰かに支えられた。

——え？

崩れないように、腹部に手を回して、誰かが支えてくれている。
緋睡と天真は、今タブリスと戦ってくれている。自分に決定打を放たせるために、時間稼ぎとして。

「……翼……」

声がした。

今にも落ちそうで、崩れてしまいそうな、儚い声。遙か彼方から聞こえてきているような、遠き声。

翼は、誰が支えてくれているのかわかった。

自分と同じ、体力精神力ともに限界であろう金髪のツインテール

をした少女が、後ろにいるということが。

——ミント……。

ありがとう、と想う。

限界のはずなのに、意識を保つだけで精一杯だろうに、彼女は自分のことを支えてくれている。

——おかげで僕は……、

《——……撃ち、砕け——》

——大丈夫になったよ。

《——我が敵をッ！——》

翼は唱え、刀身を生成し、得物を振り被る。

剣の先端には蒼白い、魔力の塊が現れており、それが冷気を収集していた。

やがて冷気で満たされると、翼は握り締める柄に一層力を込める。

己の敵を討つために。

災いを霧消させるために。

この戦いを終結させるために。

翼は、

《——グラシアル・ブリザード！——》

剣を振るった。

同時、先端に凝縮されていた冷気が込められた魔力が爆発し、敵を強襲する。

天真は翼の猛りの声を聞き、急遽攻撃を中断し、タブリスから大きく離れた。

直後、タブリスは見た。

雹^{ひょう}と雪と暴風が、螺旋を描きながら三位一体となって自分に猛追してくるのを。

障壁では防げない。傷が入った不可視の壁では、到底持ち堪えるだけの強度などありはしない。

——しま……ッ！

タブリスのそんな思いは、碎ける障壁とともに、猛る氷雪の中に散っていった。

第12章 - 1 空を断つ希望の光

荒れ狂う氷雪は、タブリスを噛み砕きながら、反対側の壁にぶち当たった。

衝撃はヘカトンケイルを大きく揺らし、攻撃が当たった周囲の壁は崩落する。

滝のように瀑布する壁、壁、壁……。

瓦礫は崩落音を轟かせながら、多量の土色の埃を散乱させ、空気を乱していたが、やがてピタリと崩落が止まり、周囲が静謐に包まれた。

翼一行は戦いの疲れで、肩で息をしながら、瓦礫の山へ視線を注いでいた。

しかし、いくら待てども瓦礫が動くことはない。そこにはもう、命の息吹はないとばかりに。

「……勝った、のか……？」

静けさを破るように、天真が言葉を漏らした。今まで溜めていたものが自然に出てきたような口振りだ。

「……勝ったんだ……僕たち、が……」

と、天真の疑問を肯定した直後、翼はその場に倒れ込んだ。先ほどこらずと支えてくれていたミントと一緒に。

翼もミントも、身心ともに極限だったため、緊張の糸が切れた瞬間に、身体が崩れてしまった。

幸いというべきか、意識はまだ眠っていない。

「翼、ミントッ！」

突然倒れた二人に、天真と緋睡が駆け寄り、翼は天真に、ミントは緋睡に身体を支えられる。

「……先輩、やったんですね。僕たち……」

「ああ。さすがは我が親愛なる後輩、真道翼だ」

「……まあ、今回ばかりは褒めて差し上げますよ、兄上」

素直な天真と、素直でない緋睡。

しかし二人とも称賛してくれていることは確かだったので、翼は内心、欣幸きんこうを感じていた。

「それとミントも、……ありがとう。あるとき、支えてくれて……」

と、ミントに視線をやると、彼女は瞼を閉じて、項垂れていた。四肢をだらりとしているものの、息をしているようなので気を失っているだけのようだ。

「限界だったのだろうな」

と、天真は呟く。それに呼応するように緋睡も頷く。

翼もミントと同様に相当の疲労を蓄えているのだが、口に出さなかった。

今はそれよりも、やらなければならないことがある。

翼は突入した側とは反対のほうへ視線をやると、そこには巨大な扉が口を閉じて待っていた。

「みんな……早く、先に行こう……」

「先に行くのは別に構わないが……おまえは大丈夫なのか？」

と天真。

翼の疲労は、表面に出るほどに膨大に溜まっており、傍目から見てもだいたい無理をしているように映っていた。

「大丈夫……大丈夫だよ……」

「……顔を蒼くして言っても説得力がありませんよ、兄上」

見るに見かねて、緋睡が指摘する。

「でも、早く行ってこれを……ヘカトンケイルを止めないと……」

そう。早く止めないと、国ひとつを軽々と粉碎するであろう鉄槌がクイーンズに下^{くだ}されるのだ。

それを阻止するためにクイーンズの国王と協力して、そしてここまで来たというのに、発射されたらここまでやってきたことがすべて水泡と化してしまう。

「……なら、おれと巫女が先に行って調べてくるってことでいいだろう？ おれたちはおまえたち程に疲弊しているわけではないからな」

「でも……先輩、大丈夫……ですか？」

息も切れ切れに、翼は訊く。

「大丈夫だ。なあ、巫女」

「はい。……後、天真。巫女はやめて下さいといつも申しているでしょう」

「却下だ」

天真は、緋睡の頼みを軽く流し、翼に向き直ると、

「そういうわけだから、おまえはここで休んでいる。わかったな」

言われるものの、翼は内心まだ渋っていた。

万が一、先に敵がまだ残っていた場合、果たして自分より大丈夫とはいえ、疲弊している二人で対処できるか心配だったのだ。

だけどその反面、もしそんな状況に陥ったとき、疲労困憊の状態である自分は、はっきり言って足手まといでしかないだろう、ということも把握していた。

「……うん。それじゃ……お願いします。先輩、緋睡」

悩んだ末、翼は二人に後を任せることにする。足手まといになるかもしれないという考慮からだった。

だが、

「そんなことしなくとも結構ですよ、皆さん」

唐突に、少年の声が大広間全体に響いた。

脊髓反射と思わせるほどの速さで、ミントを除いた三人の表情が険しいものになる。

天真と緋睡は各々の武器を構えるが、翼は片膝を着いた状態で、険阻に周囲に睨みを利かせるのが精一杯だった。

すると、何もなかったところに魔法陣が突如として描かれ、そこに光が人の形に凝縮され始めた。

三人はその様子を眺めるしかない。下手に手出しすると何が起きるかわからないという畏怖をもっていたからだ。

じっと眺めることしばらくし、魔法陣が消え、光も治まった。

光が落ち着き、そこから現れたのは少年だった。

セミショートの金髪。中性的だが、かろうじて男と認識できる端麗な容姿。

タブリスが着ていたのと同じような白を基調にした軍服のような服を着ているその少年は、

「初めまして、というべきですねえ」

現れるなり、慇懃に一礼した。

しかしそこには、どことなく相手を馬鹿にしているような節があり、慇懃にして無礼であった。

「ボクはラグエル。『ゴスペル』の 監視官 を勤めさせてもらっている者です」

翼たちの、殺伐とした雰囲気など無視して、己の自己紹介を手短に済ませる 監視官 ラグエル。

ピリピリとした空気が、大広間を支配する。僅かなことで、すぐに切れてしまいそうなほどに張り詰めていた。

しかしラグエルは、

「ご安心を。ボクは別にキミたちと争うためにここに来ただけではないですからねえ。武器を収めて頂いても結構ですよ？」

穏やかであり、どこか不敬な口調でラグエルは言うが、天真と緋睡は当然のように武器をしまおうとはしなかった。噴火直前の活火山のような雰囲気も相変わらずである。

「ボクは今回、キミたちに挨拶をしに来ただけですよ。ボクたちと対等に渡り合える者として、ね」

「顔見せはしたんだ。挨拶はもう十分だろう」

冷やかに言い放つ天真。

その瞳は、静かな闘志で燃えていた。

「果たしてそれで本当にいいのですかねえ。訊きたいことがあれば、挨拶代わりにひとつだけ教えてあげると、ボクは言っているのですよ?」

意地悪く笑みをつくるラグエル。

要するに今回のラグエルの挨拶は、情報提供のことを指しているらしい。

ラグエルの言っていることが本当かどうか疑わしかったが、当たって砕けるの精神で、翼は詰問した。

「……どうして、こんなことをしたのさ」

こんなこと——それは当然、クイーンズをヘカトンケイルで木端微塵にしようと企んだことを指していた。

「そうですね。理由は二つありますね。——ひとつは、ヘカトンケイルの試用運転。これは試作機ですから、どれほどのものか、確認する必要があったのですよ。……まあ、扱う者がいなくなつた今、ただの空を浮遊するガラクタと成り果ててしまったわけですがね」

次に、二つ目は、とラグエルは前置きし、

「この国への天誅って言ったところですかねえ」
「天誅?」

訝しく思う翼。詳しく問いただそうと口を開こうとすると、

「おっと。これ以上は答えませんよ。質問はひとつだけと、あらかじめ宣言しましたしね」

ラグエルが拒否の意思を示した。

当然、翼がそれで退こうとする意思が芽生えるわけもなく、そのことに物を言おうとする……そのとき、ラグエルはパチンと指を鳴らした。

あまりに自然に行いに思えたので、一行は何も咎める気にならなかったが、その直後、突如として足元に魔法陣が出現した。

「——ッ！？」

完全に意表を突かれた翼たち。

抜け出そうにも既に魔法陣は効果を発動しており、身体が光のヴェールに包まれ始める。

「空間転移！」

天真が叫んだ。しかしもう遅い。

焦る翼たちをよそに、ラグエルは変わらぬ口調で、

「さて、それとこれはボクからキミたちへの賞賛です。まあ、受け取ってくださいよ」

「待ッ——」

抗議の声も虚しく、翼たちは光の粒子となって、強引にその場から退場させられた。

「……さてと、ボクも仕事をすることにしましょう」

ひとりとなった空間で、ラグエルはそう呟いた。

第12章 - 2 空を断つ希望の光

ガルディオスは城から空中要塞を眺めていた。

時刻はもうじきで午前八時になるうとしている。太陽はすっかり昇っており、陽を振り撒いていた。

しかし、ガルディオスの心は晴れやしない。クイーンズ付近に浮遊している、得体のしれない物を消滅させるまでは、決して。

「トールハンマーのエネルギーチャージ、あと三分ほどで完了します」

トールハンマーの整備をしている兵士から、そのような報告が入った。

「そうか。もう少しだな」

後三分。

それで、全てが終わる。

幸か不幸か、どちらに転ぶかはわからない。成功すれば言うことなしだが、失敗すれば死んでも死にきれない気持ちでいっばいになりながら身を滅ぼすことになることだろう。

湖の岸部には、翼たちが帰還したとき、念話で報告させるためにシャルロットを待機させていた。危険だが、クイーンズが滅びるようなことになれば、どこにいても一緒だからという理由で、シャルロットは自ら進んで行ったのだ。

岸辺にいる自身の右腕からの報告は、未だにない。ということは、潜入班は今もなおあの兵器の中ということだ。

このままだと同士もろともあの兵器を破壊することになってしまふ……それはガルディオスとしては、何としても避けたかった。

無理を覚悟で、ガルディオスは翼たちに今回の件を手伝ってほしいと頼み、彼らはそれを引き受けてくれた。

本当は引き受けたくなかっただろうにな、とガルディオスは思う。同時に、無茶させているな、とも思う。

だからこそ、浮遊兵器もろとも翼たちを木端微塵に吹き飛ばすような真似はしたくなかった。……否、させない。

翼たちが出てくるその時まで、ガルディオスはツールハンマーの発射を許可する気はなかった。

もしかしたら死んでいるかもしれない、という考えも頭の隅にチラつくが、ガルディオスはそんな思考に傾こうとはしなかった。

——あいつらは生きている。

根拠はないが、そんな予感がした。

生きて、絶対に帰ってくる、と。

『……さま……』

「……ん？」

ふと、頭の中に何か流れ込んできた。

突然だったので、うまく聞き取れなかったが、

『王様、聞こえますか？』

今度は確かに、そう聞こえた。

頭の中に直接振動してくるその声の主は、

『シャルか？』

紛れもなくシャルロットのものだった。

気持ちが急^せくのを押し止め、ガルディオスは報告を聞く。

『翼君たちが戻って来ました』

「——ッ！ 本当か！？」

驚きに、ガルディオスは思うだけでなく、つい口から言葉を漏らしてしまい、周囲から怪訝な視線を浴びせられた。……が、ガルディオスは気にしない。

シャルロットは、はい、と返事をした後、

『ですので、発射の準備が出来次第、お願いします』

恭しくシャルロットは言い、そこで念話は途切れた。

「……感謝するぞ」

吉報を送ってきたシャルロットと、無事戻って来た翼たちに、ガルディオスは謝した。

後は、トールハンマーで敵の切り札を撃ち砕くだけ。

「王様。エネルギーチャージ、充填完了しました」

ちょうどそのとき、兵士がそのように通知してきた。

そうか、とガルディオスは承知の返事をし、はるか遠方にある『大いなる災い』を振り撒こうとしている物体を見据える。

「決めないとな」

無意識にガルディオスは、口元に笑みを表した。決意に溢れた、そんな笑いを。

現在の時刻は、午前八時ちょうど。
その時をもって、ガルディオスは、

「トールハンマー、——発射!!」

指示を出した。

指示を出した瞬間、トールハンマーの砲口に白光が凝縮されていく。

膨大な魔力の収縮が、そこで起きていた。

魔力の密度が爆発的に上がっていき、やがて砲口に吸い込まれた

……刹那、大気を轟かし、魔力が爆裂した。

耳を劈かんばかりの爆音を発し、トールハンマーの口から驚異的な魔力の塊が光線となってヘカトンケイルに突攻する。

空を断つ勢いで、トールハンマーより放たれた一条の光は空を光速で走り——空を浮く異物を穿った。

それは一瞬の所業。

ヘカトンケイルは紙で造られていたかのように軽々とその身に風穴を造ったかと思うと、そこから連鎖的に爆音を轟かせ始めた。

射抜く光はヘカトンケイルに当たるや否や、やがて継続的に響く轟音ごと、その巨体を光に包み——次の瞬間、太陽の光に負けないほどの閃光と爆裂音を放出した。

まもなく、光と音が止むと、空を蹂躪していたヘカトンケイルの巨体はなくなっていた。まるで、初めからそこには何もなかったかのように。

空から地上にヘカトンケイルの瓦礫が降ることもない。——全部、トールハンマーの一撃が雲散霧消させたのだ。

湖の岸部。

そこには、翼一行とシャルロットの姿があった。

ミントは困憊こんばいのために相変わらず気を失っているものの、その他の者は、ヘカトンケイルが消尽するところを見ていた。

『大いなる災い』の元凶が消散する様は、激闘を繰り広げた翼たちにとってはあまりにもあつけないものであつたし、同時に相応しい末路だとも感じていた。あんなものは初めから存在していなかったんだ、と思わせてくれるような呆気なさだ。

誰だって、あんなものが存在していたなんて思いたくないだろう。国ひとつを消尽可能な兵器なんて、ないほうがずっとマシだ。

「……終わりましたね」

緋睡が、異物が消えた空を仰ぎながら言った。

「ああ。まったくな」

それに賛同する天真。

そんな仲間の姿を見て、翼もようやくその実感を得ることができた。

——終わったんだ。

やっと、と言うには短い期間で、

もう、と言うには余りにも色々あつた。

色々な出来事があつて、その果てに行き着いた、終着点。

翼は遣り遂げられたという達成感が、身体の底から湧き立ち、体の隅々、指の先まで満たされるような感覚を得ていた。

「御苦労様です、皆さん」

翼たちに、感謝の労いの言葉をかけるシャルロット。

「本当に、どれだけ感謝しても足りない気持ちでいっぱいです」
「気にすることではない。おれたちが決めてしたことなんだから。
なあ？ 巫女」

「そうですね。後、巫女は止めなさい」
「翼も、そうだろう？」

緋睡も不満を問答無用で無視し、天真は翼にも同意を求める。

「……………うん……………」

翼は頷いた。

冷や汗を流し、顔を青白くさせ、息もからがらといった面持ちで。
どうした？ と天真が声をかける間もない。
直後、翼は豪快に地面に倒れ込んだ。

エピソード 前編

夜。

天に恒星が遍あまねき、淡い月明かりが下界を照らす時間、城には活気が溢あふれていた。

城の一階にあるダンスホール。

そこには今、たくさんの人が集まっていた。

理由はただひとつ。『大いなる災い』を消し去ってくれた翼一行に感謝を込めて、祝賀会を開いているためだ。

城は開放され、民間人が出入りしている。民間人も参加可能な祝賀会のため、街中は祭り状態だ。夜だというのに昼間いんしんのように殷賑となっていた。

一応、城の門には見張りの兵士が配置されているものの、いるだけであり、ときおり兵士は暇そうに欠伸をしながら交代の時間を待っていた。

ダンスホールには、音楽が流されており、音に合わせて人々が社交ダンスを踊ったりしているが、そうでないものは端でご馳走を食べながらその様を見物していた。

ミントは適度にテーブルに並べられている食事をつまんで食べながら、社交ダンスを観覧していたのだが、そのダンスの踊っている中に天真がいたのが目に入った。

社交ダンスというからには当然相手がいるわけなのだが、相手は男性ではなく女性である緋睡だった。

今まで陰鬱気味な時間が続いていたせいか、天真は盛り上がりるところまで盛り上がりたいたいと考えているらしく、手短にいた緋睡を強引に引き連れてダンスを踊っていた。

高揚しているせいか、曲のリズムに合っておらず、テンポが実に速い。

「天真ッ。わたくしはその……こういうことは不慣れなので放してください！」

「はあ——はっはっはっはっはっ！——今のおれは百パーセント勇気で満たされているので誰にも止められんぞ！」
「意味がわかりませんよ！」

天真と緋睡が踊る様を、見学者たちは失笑するか、あるいは見なかったことにするか、はたまたリアクションに困るものまで実に様々な面持ちで観覧していた。

そんなアップテンポで踊る二人を、ミントは遠くから見守る。
…主に緋睡を。

——緋睡も大変だね……。

苦笑いを浮かべながら、つい同情してしまうミント。同時に、天真のテンションに完全に着いていける人はおそらくいないだろうなとも目の前の光景を見て思ってしまう。着いていこうとするだけで精一杯だろう。

——本当、あの人に着いている翼と緋睡はすごいよ。

と思ったとき、彼の姿がどこにも見当たらないことに気づいた。パーティーが始まったときには確かにいたのを、ミントは憶えていた。

——自室かなあ？

気になり、ミントは天真と緋睡が舞踏ならぬ武闘を繰り広げ始めたのを背に、ダンスホールから抜け出した。
ちょうど、彼に伝えたいことがあったのだ。

自室のベランダで、翼は夜風に当たっていた。

何気なく俯瞰して見える、建物の明かりや街路灯が淡い温かな光を発し、街を照らすクイーンズの景色は実に幻想的だ。

パーティーが開かれているということもあり、いつもよりたくさんの人々が夜の街を行き交っている姿が見える。

——…平和になったなあ。

見下ろすと広がる光景に、翼はそんな感想が頭に浮かんだ。

そう、平和だ。ヘカトンケイルが突如として現れ、空を我儘顔で陣取っていたときのような騒々しさがなくなっていることから、そのことがわかる。

国ひとつの存命がかかっていたということもあって、平和を取り戻すことは決して楽ではなかった。

最終決戦に挑むまでに、数多の城に仕えていた兵士が犠牲にもなったし、翼たちも、実際死ぬような目に遭った。

犠牲や危機を積み上げた果てに、自分たちは平和を掴み取った……そのことを、翼は胸に刻む。犠牲のもとの平和であることを、翼は忘れてはいけないことだと認識した上での行いだった。

翼はヘカトンケイルが消滅したのを眺めた直後に、疲労困憊でぶっ倒れた。

その後目を覚まし、緋睡と交代で看病をしていたらしい天真にどれくらいの間自分は眠っていたことを訊くと、どうやら丸一日眠っていたらしい。——つまり今日は、ヘカトンケイルが消滅したその翌日に当たる。

そのため、夜にパーティーをすることを翼が知ったのは今朝であった。

そして目が覚め、頭の中がはつきりとクリアになったときを見計らって、翼はガルディオスの自室を訪問したのだ。

翼はそのときのことを思い出す——。

国王——ガルディオスの自室は城の六階にあった。

翼は入り組んだ通路を進み、目的の部屋の扉前に佇んでいた。

これから自分のしようとしていることを、実行するか否か悩んでいるのだ。

翼が敢行しようとしていること……それはすなわち、質問だ。

翼はどうしても、いくつか聞きたいことがあったのだ。

『大いなる災い』は去った。

平和も取り戻せた。

しかしそれでも気になることが、心の中で蟠^{わだかま}っていた。

それは一種の好奇心から来たものかもしれないが、しかしそれでも、当事者として訊く権利があると考えていた。

——……よし。

腹を決め、翼は扉をノックした。

「入れよ」

あっさり許可が下りた。

こちらはノックをしただけで、名乗っていないというのに。

不用心すぎるんじゃないのかな、と思いつつ、翼は失礼します、と断りを入れながら扉を開けた。

部屋の雰囲気は、言ってしまうえば翼たちが使っている個室を、少し豪華にした程度の部屋だった。

てつきり王様の部屋だから、広くて豪華絢爛な装飾が成されていると思っていたばかりに、翼は内心驚いていた。

その部屋の中心に、テーブルセットが設置されており、そこに、

「よお、翼か」

ガルディオスが座っていた。
その傍らには彼の補佐であるシャルロットが立っており、翼に謹直に一礼した。

「まあ入って座れよ。扉前で突っ立ってねえでよ」

手招きするガルディオス。

言われるがままに翼は室内に入り、シャルロットが椅子のひとつを引いたので、そこに着席した。

その後、ガルディオスがシャルロットに翼の分の紅茶を用意するように促し、やがて翼の前にそれが置かれた。

「……んで、翼。何かオレに用があるんだろ？ 話してみるよ」

とても国王たる者とは思えない言葉遣いをするガルディオス。
しかしその口調の一端には、上に立つ者独特の威厳が込められていた。まがりなりにも国ひとつを統治しているだけはある。

今更ながらそのことに気づいた翼は、若干ガルディオスに気押されながらも、開口した。

「……実は、王様に訊きたいことがありまして……」

訊きたいこと。

そう言われガルディオスは、わずかな間を置いた後、

「ミントのことか？」

ずばりと、言い当ててきた。

おそらく、ガルディオスも大方予期していたのだらう。翼がそれ
を聞き糺^{ただ}そうとしていたことを。

翼は無言で、視線のみで答えてくれますよね、と言っていた。

「……訊くということは、わかってんだろ？ ミントが、クイーンズの人間じゃないってこと」

はい、と翼は肯定した。

あの戦い。

ヘカトンケイル内部で対峙したときに、そのことを本人の口から聞いたから間違いなかった。

「……王様は、知ってたんですか？ ミントが、『ゴスペル』で造られた人間だってことを」

翼はやや躊躇いがちに、それを問うた。

人造人間。

今、戦いが終わって冷静になって考えても、やはり信じられない。翼の持っている現実では、どうにも測り切れない次元の話のように感じられるからだ。

ガルディオスは紅茶を服し、

「ああ。……と言っても、昨日、本人から聞いて初めて知ったんだがな。それまでは知らなかったよ」

昨日……ということは、自分が気を失っている間だ。

その間にミントは、王様に自身のことを打ち明けたのだろう。

「王様は、信じているんですか？」

「どうだろうな。正直、人造人間なんてあり得ねえと思ってるんだが……本人が言っただからそうじゃねえのか？ ミントのやつが嘘をついてねえことくらいはわかるからな。なんだかんだ言っつて、長

い付き合いだから」

その口振りから、翼はひとつ、確信したことがあった。この王様は、ミントのことを信憑している、ということ。

口振りや、放たれた言葉からして、ミントのことを『ゴスペル』のスパイだった、というような疑いはかけていないということが、自ずと呑み込むことができた。

「おまえはどうなんだ？ 翼よお」

「え？」

「だから、おまえはミントのこと、信じられねえのか？」

心の中を見透かされていた。普段の様や口調からは想像がつかないほどに。ガルディオスの眼差しが、試すようなそれに改まっていることから、明証できる。

「もちろん、信じていますよ。色々紆余曲折ありましたけど、ミントは戻ってきてくれましたし、それが彼女なりの僕たちへの償いなんだと、考えていますし……………いや、償いつて言い方は、おかしいかもしれませんが……………」

と、ゴニョゴニョと長く口述する翼に、

「あゝ、わかったわかった。おまえの言いたいことはだいたいわかるから、それ以上言うな」

とガルディオスは手をパタパタとさせて黙らせた。

「まあなんだ。ミントのやつには、これからも変わらずにオレんとこで働いてもらうさ。本人にもそう言ったし、この件はもういいだ

る？」

最後にそう締め括り、ガルディオスは紅茶で一服した。それに釣られて、翼も温くなっている紅茶を啜った。

「んで、訊きたいことはそれだけか？」

確認してくるガルディオス。

実はもうひとつ質疑があった。

それはタブリスが明かしたことなのだが、それが果たして事実なのか否か、翼はどうしても訊きたかった。

「……あの、ツールハンマーが『ゴスペル』のものだってことは、知っているんですか？」

「……ああ、そのことが」

頷きながら、ガルディオスは、紅茶を飲み干して空のコップをシャルロットに突き出した。紅茶を垂れる、ということなのだろう。

その証拠にシャルロットは、ガルディオスからコップを受け取ると、紅茶を作り始めたのだが、それは身近に市販されている使い捨ての紅茶パックでだ。

経費削減なのだろうか、それとも単なるシャルロットの嫌がらせなのか、いずれにせよ翼にはわからない。

シャルロットが紅茶を垂れている間に、ガルディオスは開口し、語り始めた。

「オレもよくわからんというのが本音だ。生憎とオレは昨日、ミントに聞いて初めて知った身でな、おまけにツールハンマーはオレが生まれる前からあった代物だから、あれについて話せることは……まあ、ないな。ただ——」

ただ？ と翼は反芻^{はんすう}した。

「——トールハンマーは、オレから数えて先々代の国王の時代からあったとか」

どうやら嘘を付いている様子はない。

それにタブリスも確か、だいぶ昔にクイーンズに残された、というようなことを言っていたことを、翼は憶えていた。そのだいぶ昔とは、先々代の国王の時代のことを指している可能性が高い。

とここで、そういえば、と翼は思い出す。

タブリスを斃した後に現れた自らを 監視官 と称するラグエルが、『大いなる災い』を起こした理由を、天誅を下すため、というようなことを言っていたことを。

だとすると、考えられるのは、

「昔から、クイーンズと『ゴスペル』は敵対関係だった、ということでしょうか？ それで、『ゴスペル』から奪ったトールハンマーを、クイーンズが保管していた、とか」

「可能性はあるな。だが、もうひとつ考えらる予測があるぞ」

一息の間を持って、ガルディオスは言った。

「——クイーンズが『ゴスペル』の仲間だったという予測がな」

エピソード 後編

確かに、そういうことも考えられるんだな、と夜風に肌を撫でられながら翼は思った。

もつとも、真実は過去に戻ってみたいとわからないわけで、その手段がない以上、翼にはどうにもならなかった。

昔の王様が日記みたいなものに記録してくれていればいいのに、とつくづく思う。

だがそれでも、ひとつだけ確信していることはあった。

——『ゴスペル』は、必ずまた何か仕掛けてくる。

それがいつ、どこで起きるのかわからないが、『ゴスペル』がまだ存続している以上、それは確定事項とも言えた。

そのとき、再び自分たちの前に立ちはだかる可能性だつてゼロではない。ましてや今回、連中の目的は阻止されたのだ。危険な芽を抜きとらんと、襲撃を掛けてくることは十分に考えられることだ。

——そのとき、僕は今回のように勝てるだろうか。

先の見えぬ不安が、翼に押し掛かる。

「翼」

突然、背後から声をかけられたので、翼は肩をビクつかせ、とっさに顧みた。

「ミントかあ。驚かさないでよ」

背後にいたのが彼女だと知って、翼はホッと胸を撫で下ろす。考えてみれば、声だけでも判別できるはずだが、突然だったため気分が動転していたのだ。

「驚かすつもりはなかったよ。ちゃんとノックもしたし、翼が勝手に魂消^{たまげ}てたんでしょ」

「……まあ、それはそうだけど……」

事実のため、翼はぐうの音も出ない。そもそも、ノックしていたことにすら気づいていなかった。

どうやら自分でも気づかないうちに、深く考え込んでいたようである。

「何してたの？」

「いや……別に、外を眺めていただけだよ。魔来町では拝めない風景だから」

下手に考えを悟られなくなかったので、適当なことを言う翼。

適当とはいっても、実際その通りのことなので、別段不自然な台詞ではない。

魔来町を上空から見たとしても、今翼の視界に広がっているような幻想的と言える光景は、ありはしない。ネオンの光も綺麗といえは綺麗だが、クイーンズの夜の光景は、その綺麗さとは別のものがある。

ミントは翼の言葉に釣られ、翼の隣まで来て、外の景色を眺める。

「綺麗だよね」

うん、と翼はミントの簡潔とした感想に相槌を打った。

「だけど……違うでしょ、翼」

「へ？」

「へ、じゃなくて。翼、さっきまで何か考えていたよね？」

図星をつかれ、翼は目を丸くさせた。

「やっぱり、そうなんだね」

「……どうして、わかったの？」

「だって翼。けっこう顔に出てるよ。さっきもカマかけたただけなのに、目を丸くさせたし。それにその話題、前にもあったような気がするし」

言われ、翼はふつ、と失笑を漏らし、今度から気をつけないといけないなあ、という気持ちを持った。

「それで、何を悩んでたの？ 翼」

尋ねてくるが、翼は表情がやや無になり、だんまりとした。

クイーンズを瞳に映しているものの、思考を巡らせているために入っていないも同然だった。

言おうか言うまいか、翼は考える。

下手な心配を他人に極力かけたくない性格をしている翼にとって、自身の悩み事は身の中から出てくる天敵と言えた。

悩み事を口走って、他人も一緒に悩ませることが、何より嫌なのだ。

お人好しが度を過ぎているためなのだが、翼本人はそれに気づいていない。

「……言えないの？」

「いや……その……」

曖昧な返事を翼はくぐもらせる。

そんな少年の様子を、ミントは見ていた。
やがて、

「私、翼に感謝してるんだよ。君が私を連れ戻してくれたこと」

そんな言葉を、ミントは口から出した。

翼はキョトンとし、そんな少女を見つめていたが、

「当然のことをしただけだよ。仲間を奪われて、黙ってはいられないから」

翼は心から言葉通りに思っていたため、口調も不自然なものにならなかった。

それを、ううん、とミントは首を左右に振り、

「それでも、私は翼に感謝してる。……今だから言えるんだけど私、あのとき翼に殺してもらおうと思ってたんだ」

少女は、あのときの自身の心情を語った。

翼は驚きながらも、続くミントの言葉に耳を貸した。

「嫌だったんだ。自分が『ゴスペル』の一員だったと知って、国王様やシャル、それに翼たちを騙していたと思ったのが。だからせめて、死ぬときは翼たちの誰かに殺してもらおうと思ったの」

「……僕には……いや、僕たちには、ミントを殺すことなんてできないよ」

「仲間だから、でしょ？」

うん、と翼は否定しなかったが、実のところ、仲間のみならず敵も、できることならば殺したくなかった。

命を奪う所業は、良い気がしない。さらにいえば、他人を傷つけることも嫌いなのだが、そうしなければ翼が身を置いている世界で

は生きていけないのだ。

相手を斃たおさなければ、自分が斃たおされる。

世俗から離れた裏の世界とはすなわち、それが暗黙のルールとな
っている場所なのだ。

だからというわけではないが、翼は世俗で生活している間は、塩
梅にあらゆる物事をなそうとしていた。

—— いったいどっちが僕の本心なんだろう。

ときどき、そんな疑問が内から浮上してくる。

人を傷つけるのが自分なのか。

人を擁護するのが自分なのか。

翼としては無論、後者で在りたかった。

そしてミントは、

「それでも、私は嬉しかったよ」

後者としての翼を、讃えていた。心の底から、それしかないよう
に思っているかのような語気が込められていた。

「翼が助けてくれなかったら、説得してくれなかったら、私は今頃、
ここにはいなかった。あの兵器と一緒に、消滅することを選んでい
たと思う」

羅列される言葉。

その一言一言に、心が込められているようだった。

「だから今度は、私が翼を助けたいんだ。翼が、私のことを助けて
くれたように」

一息。

「だから翼。悩んでいることがあつたら言つて。力になれるかどうかはわからないけど、それでも私は、翼の力になりたいんだ」

心中からそう思っているのだろう。

ミントから放たれた言葉には、何の翳りもなかった。

やがて、ミントはハツとした後、恥ずかしそうに頬をやや紅に染める。

「……厚かましい、かな？」

「え？ いやいやッ、そんなことないよッ」

冗談じゃない、とばかりに翼は否定した。

ミントは心配して言葉をかけてくれていたのに、それを厚かまし
いと振り払ったら最低である。翼は当然、そのようなことを思っ
ていなかった。

「……それじゃあ、訊いてくれる、かな？」

やがて覚悟を決め、翼は言った。

返ってくるのは、うん、という許諾だ。

そのことに翼は感謝の念を覚えながら、ミントに今後の心配事を
打ち明けた。

毒を吐く行為だ、と翼は感じ、ミントに申し訳がなかった。

今まで悩み事は他人に漏洩ろうえいしようとはしなかった性質なので、な
おさらだった。

しかしミントは真摯しんしだった。

不快に思う表情をせず、翼の煩わづい事を真剣な面持ちで聞いていた。
しかし、すべてを話し終えると、翼はミントの顔付きが変わって
いたことに気づいた。
不快。

あるいは、ある種の苛立ちとも見て取れる見得だった。

——やっぱり、毒を吐いたのは駄目だったのかなあ。

と思う翼だが、毒を吐いていいよ、と言ったのはミントであることを思い出し、見当違いだと考えなおす。

「……ミント、どうして怒ってるの？」

「……翼が気づいてないから」

気づいてない？

何にだろうか。

「翼は、『ゴスペル』の襲撃があつたとき、次も今回のように解決できるか、ということで悩んでいるんでしょ？」

冷めた目付きのミントに、翼は圧倒されながらも、うん、と肯定した。

返事に、ミントは、本当にわからないの？ といった面容をしてくるが、翼は心当たりがないため、首を傾げるしかない。

いつまでも答えがわからない模様の翼に、ミントは言った。

「だから、仲間がいるんじゃない。互いに互いを支え合い、協力し合う仲間が」

陳述され、翼はハツとした。

まったく、どうしてそんなことに、今まで気づかなかったのだろう。

自身の悩みの愚かさに、翼は恥ずかしいとすら感じた。

仲間は支え合うためにいる。

仲間は協力し合うためにいる。

そんな当たり前で、そして大切なことを翼は気づけていなかった。

全く、普段から仲間仲間と馬鹿のひとつ覚えのように口走っているのに、肝心のことにてんで悟ることができていなかった。

自分の馬鹿さ加減に、翼はついとばかりに失笑する。

そして、そのことを気づかせてくれた少女に、

「ありがとう、ミント」

謝辞をした。

「わかってくれたらいいよ。……だけど、翼らしいと言ったらそうなのかもしれないね」

「……？ どういうこと？」

いまいちピンと来ない翼に、ミントは答える。

「だって翼、優しいから。仲間うちでも迷惑かけないように振舞ってそうだもん」

まだ会って間もないからわからないけどね、とミントは後に付け加え、ついでに愛想笑いをした。

「……それって、褒めてるの？」

「うーん……どうだろう。不器用なような、器用なような……。翼と出会ってまだ間もないから、正直よくわからないよ。天真や緋睡に聞けばわかるんじゃないかな？」

じゃあ止めておこう、と翼は即決した。

あの二人にそんな質問をすれば、答えるついでに自分の欠点を羅列していくに決まっている。

天真は翼のことがからかうのが好きで、緋睡は兄を卑下するのが

日常化している。

遠慮がないというか、容赦がないというか……。少しは持て囃し^{はや}てくれたっていいんじゃないのだろうか。

「私は、そんなところは翼の長所だと思ってるよ。周りに迷惑をかけたがらない、かけようとしないところは大切だと思うし……。それに……私は……」

ミントはふと翼から視線を逸らした。
俯き加減に顔を逸らし、そして、

「……き……」

蚊の鳴くような声で、何かを呟いた。

翼には、それが何なのかわからなかったし、しゃべったのかどうかも判別がついていなかったたので、

「何か言った？ ミント」

「ううん。なんでもないよ」

焦ったように顔を上げ、ミントは首を左右に振る。

ミントの顔が上気したように紅くなっていたが、翼はただ首を捻るのみ。

「何か悩み事があったら聞くけど？」

「ううん。本当になんでもないから！」

あまりに押しを強かったので、翼は頭の中に疑問符を浮かべながらも引くことにした。
ただ、

「ミント」

呼ばれ、ミントはなに？ と訊いた。

彼女に、これだけは言いたかったので、翼は言った。

「これからもよろしく頼むよ」

言い、翼はミントに右手を差し伸べた。

それが何を意味しているのか、ミントはすぐにわかったらしく、

「私こそ、仲間にしてくれてありがとう」

彼が差し伸べてきた手を、握った。

握手。

互いに互いを認め、共に歩むための行為だ。

握手を交えながら、翼は思う。

これから何とかなるだろう、と。

これから、仲間とともに歩んでいける、と。

どこまでも、歩み続けることができる気がする。

前に進もうと思えば、どこまでも――。

仰ぐ空には、清澄な月の白光が讃えていた。

第一部 あとがき

まずはお礼を。

この度は「神奇世界のシンフォニア」を読んでくださって、本当にありがとうございます。

本作品は、昔連載させていた小説の物語やキャラクター設定を変更して、加筆編集したのですが……どうだったでしょうか？一度完結させた作品を手直しするのは今回が初めてでしたので、実のところかなり気にしています。改悪になっていなかったらいいんですけど……。

それと、一話一話が長くなったり短くなったりとバラツキがあるようになってしまってます。できるだけ文字数を統一しようとして努力したのですが……ごらんの有様です。

……さて、話は変わりますが、一通り読んで下さった方は、どうにも消化不良気味に感じているかもしれません。実際、消化しきれない伏線がまだけっこうな数あります。

というのも、実はまだ、話は続くことになっているからです。いや、はや、長くてすいません。

本来なら、間髪入れずに話を書くべきなのですが………すいません。まだ書き終わっていないんです。

一応の話の流れは決めているのですが、色々あってプロット作成止まりの状態です。

おそらく、この話の続きは早く冬休みシーズン頃。遅ければ……いつになるのやら、といった感じが現状です。

一応、これでも小説家志望なので、新人賞用の小説も書きあげているため、どうしても執筆速度が遅くなっています。昔は3つくらいは余裕で同時進行させて連載できていたのですが………フツ、歳ですねえ。

ともあれ、できるだけ早く連載再開させる予定ですので、これま

ではとりあえずの完結とさせていただきます。

それでは皆さん。

また連載再開する時に、お会いできたら幸いです。

2009年9月30日

「神奇世界のシンフォニア」第一部

完結

第一部 あとがき（後書き）

なお続きは、完結を解いてから、この小説の後に書くつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7282h/>

神奇世界のシンフォニア

2010年10月14日20時05分発行